
自分と竜と仮想世界

狐白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分と竜と仮想世界

【Nコード】

N5134Q

【作者名】

狐白

【あらすじ】

「この物語はある青年が竜と異世界を旅するはな『まあ要するに異世界転生ファンタジーというやつだな』夏、うっさいから少し黙ってる。・・・二人はある目的のために異世界を旅するのだがその『俺の親友と俺の目的は「あーーーーー」で「いーーーーー」なのだ』全部言い切った的な表情のところ悪いが、三途の川に永住してみたくないか？『遠慮するぞ』

そんな二人が仲間と共にある目的のために異世界を旅する、そんな

話。

◇◇第2章ヒロイン編無事終了しました！◇◇

第1話 青年の不幸による竜の為の前奏曲（プレリュード）（前書き）

はじめまして、狐白です。

初投稿で至らぬ点も多数あると思いますが、どうか最後までおつき

あい下さい m () m

第1話 青年の不幸による竜の為の前奏曲（プレリュード）

『異世界に飛ばされる。』

よくあるファンタジー物語のよくある展開。ストーリー
パターン

ある世界のある国で、ある主人公は自分が居た世界とは違うある世界で勇者として召喚された。そして旅の途中で仲間を増やしていき最終的にはある魔王を倒す。その後、勇者として主人公を召喚した国のあるお姫様と結婚してその後も平和で幸せな時間が永遠に続きましたとさ。めでたしめでたし。

最後にたどり着くまでに色々なことがあったのだろうが、最後はどの話もハッピーエンドで終わっている場合が多い。誤解しないで欲しいのだが別にハッピーエンドが良くない、バッドエンドにしろ、と否定をしているわけではない。

ただ、いつ頃からだろうか。

俺が、『勇者として召喚されて魔王を倒してお姫様と仲良く暮らしましためでたしめでたし』という話をハッピーエンドだとは思わなくなってしまったのは。



髪を撫でるように吹く薄黄緑色の微風^{そよかぜ}。全てを許しているような
気さえする漆黒の美しい夜空に、見守るように光る銀色の三日月。
優しく地面を覆っている若草色の草原。いつもより心なしかおいし
く感じるひんやりとした透明な空気。そして背中に伝わってきて生
暖かく鼓動を感じる赤い壁。

先ほどまで死んだように眠っていた青年が目を覚まして、順に感じ
たことだった。彼はまだ寝惚けているのか、片手で寝癖がつきまく
っているぼさぼさの黒髪を押さえつけて、見ているだけで眠くなっ
てきそうなほど眠そうな黒い瞳は虚空を彷徨っている。そしてその
数秒後、急に目を見開いて何かに弾かれたかのようにバツと立ち上
がり、何かを確認するように自分の体に一度視線を移してからまた
虚空を見つめてぼそっと呟いた。

「・・・俺、生きてる、のか？」

青年は少し俯いて何かを考えてから、左の胸上、ちょうど心臓があ
る辺りに利き手である左手を置いた。その状態で数十秒いた後、ほ
っとしたような、気の抜けたような表情でため息をつき、彼は夜空
を仰ぐ。しかし首が痛くなったのかたった数秒で視界を正面に戻し、
よっこらしょっと柔らかな草の上に腰を下ろそうとしやがんだとき
だった。

得体の知れない声が聞こえたのは。

「ガアッ、ガオッガオッ、ガオオオオオオッ！！！」

しかも真後ろからだった。

あまりの音量に鼓膜が震えているのが分かる。後ろからものすごい威圧がかかっているのも分かる。そして後ろから吹いている生暖かい風が、何故か生臭く感じた。

青年は後ろを振り返らずにしゃがんだ膝をバネにして地面を蹴り、一気に走り出す。

「絶対やばい何かが後ろにいる……。振り向くな、振り向くな俺ッ！そのまま走り続けるんだ」

なにやら独り言を呟きながら振り返りたい衝動をなんとか抑えつつ、ふと一番最初目が覚めたときに感じたことを思い出した。

『髪を撫でるように吹く薄黄緑色の微風^{そよかぜ}。全てを許しているような気さえする漆黒の美しい夜空に、見守るように光る銀色の三日月。優しく地面を覆っている若草色の草原。いつもより心なしかおいしく感じるひんやりとした透明な空気。そして背中に伝わってきて生暖かく鼓動を感じる赤い壁。』

生暖かく感じる赤い壁。

「生暖かく感じてる時点で何かおかしいことに何故気がつかない！？俺の馬鹿野郎ッ！！」

自分を罵倒しながらも懸命に全速力で走り続ける青年。しかし如何

せん、彼の服装は全速力で走りやすいようにできていなかった。白いシャツの上に薄い黒のブレザーを羽織り、下はそれと同じ色のスラックス。紺色と水色のストライプのネクタイを窮屈そうに締めて、学生靴であるローファーを履いている、所謂制服姿なのだから。普段履き慣れているスニーカーなら良かったものの今日は青年が通っている高校の始業式だったのだ。大事な式の時にはネクタイをきちんと締めてローファーで学校に登校しなくてはいけないという校則が存在しているため、彼は律儀に今日だけネクタイをきちんと少しきつめに締めて歩きづらいローファーを履いて登校してきたのである。

「くそ・・・走りづらい。なんで今日に限って・・・ッ」
「ガオオオオオオオオオオオオオッ！！！」

って・・・ま・・・ば、・・・き、て

その時、すごい風圧を真上から受けて青年の体はその場から5m近く吹き飛ばされる。吹き飛ばされて意識を失う直前に視界を掠めたのは自分の真上上空に浮かんでいる10mくらいある真っ赤な竜だった。

「・・・俺はまた、弾き飛ばされて、死ぬ、のかよ・・・」

理不尽だ。

そう呟いた青年は、夜の外気にさらされて凍るように冷たくなっている草の上で意識をあっけなく手放した。

赤い。

赤。血のような赤。林檎のような赤。薔薇のような赤。クレヨンの赤。色鉛筆の赤。どの色とも似つかない、赤。真つ赤な赫。そう、例えるなら・・・そう。炎のような、あか紅。

「
・
・
・
・
・
・
・
赤は、嫌いだ」

「その言葉には同意しかねるな。赤は素晴らしいじゃないか。美しい薔薇のようで、馨しい林檎のような赤。赤こそ俺のカラーなのだっ！っ！」

「.....あんな誰？」

ばやける視界について反射的に目を側めたくなるような赤が映り一氣に目を覚ました青年は、自分の隣で赤の素晴らしさについて熱弁している青年にたった一言そう呟いて一瞥してから体を起こそうとする。しかし吹き飛ばされたときの衝撃の影響が大きかったのか目眩が彼を襲い、またすぐ後ろにばたと倒れてしまった。

そんな彼の様子を炎のように赤い瞳で見、青年はパチパチいつている焚き火を木の枝を持って弄りながら口を開く。

「まだ起きないほうがいいと思うぞ。軽い脳震盪だと思われるのだが、後数時間はそうしてゆっくりしていたほうがいい」

焚き火の赤よりも美しく鮮明な赤色の髪を持つ彼はそう言ふと、一瞬手元を止めて少しおどけたようにウィンクをしてまた焚き火弄りに戻る。座っているからよくは分らないが、多分身長はものすご

く高いに違いない。自分が大体175？辺りのはずで、こうやって下から見上げると軽く20cmは差があるように見える。そんなことを考えて寝転がっている青年は即座にその焚き火弄りをしている青年に対して興味をなくし、眼前に広がる夜空に視線を向けた。いつもより星がとても綺麗に見える気がして、気のせいかと目を一瞬閉じてまた開く。しかし視界いっぱい広がる夜空はやはりとても綺麗で、気のせいではないのかもしれないと青年は思った。

そして、気づいてしまった。

青年は目眩が襲ってくるのも無視して無理やり体を起こし、自分の周りを見回す。しかし彼が視界に入って欲しかった物は何一つ入ることはなかった。唯そこにあるのは何処まで続いているのか分からないほど広大な草原と星が綺麗な漆黒の夜空、そして一番彼の中で許容できなかったのは、目の前に座って焚き火を弄っている青年の髪、そして目の色だった。

赤。それは彼の知っている世界では生まれることのない、純粹な、赤。

「……………やっぱり赤は、嫌いだ」

「どうしたんだ？夜^{よる}。つい先程まだゆっくり寝ていたほうが良い、と言ったばかりだろう。何度も同じことを言わせるな」

「……………」

赤髪の彼は焚き火弄りの手を再度止めて、自分が注意したことに対して全く無反応である黒髪の青年のほうに呆れたような視線を投げる。口は尖がり、眉根は寄っていて少なくとも機嫌が良さそうには見えない。

「むう・・・さては夜。俺の言うこと最初から全く聞く気がないんだな。無反応は戴けないな。少しは反応してくれないとお兄さん泣いちゃうぞ☆」

「・・・・・・・・」

片目ウィンクで泣真似＋語尾に☆。

何処のホストだそれ。というアクションをしても反応しない。普段の状態の彼ならそれはもう凄まじい突っ込みを入れたのだろうが今現在、その青年は軽い放心状態に陥っていた。最初彼が目覚ましたときの比じゃないくらい目は虚ろで焦点が定まっていなかった。

そして本当に小さい、消えてしまいうるような声で、ポツンと言葉を零した。

「・・・此処、何処？」

まるで幼い子供が何処か知らない場所で、迷子になってしまったときののような表情で彼は呟く。

そしてそれを無言で見ていた赤髪の青年は、先程までとは似つかない真剣な顔を彼の方に向けてはつきり通るような澄み切った声で彼の質問に答えた。

「異世界、ヴェルトシリア。」

その答えに反応して黒髪の青年は彼のほうに虚ろな目を向ける。

そして赤髪の青年は、今度は真剣な表情を崩して苦笑をしながら彼の漆黒の瞳を見つめ、もう一度繰り返した。

「此処は異世界なのだよ、夜。俺たちの居た地球とは全く異なる別世界。ヴェルトシリアという名の仮想世界なのだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・は？」

待ったをかける黒髪の青年。先程とは違って虚ろな瞳には光が宿り、雰囲気がとても和んだような、落ち着いたように感じる。おそらくこれが普段の彼なのだろう。

そして、彼はやっと気づいたのだった。

「ってかさ、何であんた髪染めてんの？」

目の前の赤髪青年が、自分の親友であることに。

「フッ、美しいだろう。この輝きなび靡く髪に麗しき紅あか、完璧だ。」

「自分で靡くとか言うなよ。それこそ完璧に死語だろ。」

「むう・・・。まあよい。それより夜。お前やっと正氣に戻ったのだな。」

赤髪の青年がほっとしたような表情でまた焚き火弄りを始めた。心なしか彼の口元が緩んでいるように見える。

黒髪の青年ははっと今気がついたかのように、焚き火弄りをしている親友の紅蓮の瞳を見つめた数秒後、自嘲気味に苦笑して無意識に足元にある草に視線を向けて優しく撫でた。

「・・・まあな。」

「それにしても、夜よ。俺はがっかりしたぞ。」

きょとんとして草から視線をはずす。その視線の先には、怒り半分で悲しみが半分といった複雑な表情でいる親友がいた。なにやらご立腹のご様子ようだ。滅多なことでは怒らない彼が怒るとは一体何があったのだろうか、と黒髪の青年は眉を顰めて首を捻る。

「俺はお前が生きていたと分かって嬉しくて嬉しくてしょうがなかったんだ。それなのに・・・それなのにお前は・・・俺を一目見るなり逃げ出したのだぞっ!!」

「待て待て待てッ!!それは一体何のことだ?夏^{なつ}よ。俺はあんたが何を言っているのかさっぱり分らないんだが。それとそれっていつの話をしているんだ?」

「俺の感覚が合っていれば約二時間前の話だ。俺はお前のことを心配していたのに・・・しかもあんな必死な形相十全速力で走らなくとも・・・それだから力加減を間違えて危うく吹き飛ばしてしまふところだったのだからな」

二時間前・・・

黒髪の青年はそれ以上首は曲がらないのではないかというところまで首を捻って思い出そうとするが、いまいち時間の感覚が掴めずにいたので思い出すのには無理があると分かり考えるのを止めようとしたときだった。

「待てよ・・・二時間前、というかだ。俺が意識を飛ばす前、たしか赤いドラゴンみたいなヤツに追いかけられていた記憶が・・・」

スツと黒髪の青年は目の前にいる親友の見慣れたはずの容姿に目を通す。

以前は脱色して金髪だった髪は赤色に染められていて、その前髪からのぞく切れ長の瞳もそれと同じ色、つまり赤である。カラコン、所謂カラーコンタクトでもつけているのだろうか。背も少し前に見たときは確か自分と同じくらいだったはずなのに、頭ひとつ分くらい差が生まれている。こればかりは何故短時間でそんなにも身長が伸びたのか分からない。

とにかく色々と不自然なのだ。彼は。

そして意識を落とす直前に見たあの忘れられない、今でも鮮明に思
い出す赤。その赤とどうしても目の前の親友の髪と瞳の色が被っ
てしまうのだ。

『赤。血のような赤。林檎のような赤。薔薇のような赤。クレヨン
の赤。色鉛筆の赤。どの色とも似つかない、赤。真っ赤な赫。そう、
例えるなら・・・そう。炎のような、紅。^{あか}』

「・・・まさか“あの竜が俺なのだ!!”とか言わないよな？」

「あの竜が俺なのだ!!」

「言わないよな？って聞いた直後に言うな!というか冗談はほどほ
どにしとけよ夏。」

「冗談ではない。あの竜は俺自身。見ただろう、あの赤い、光り輝
く美しい鱗を!」

そして次の瞬間、瞬きをした後には先程まで目の前にいた親友は姿
を消し、その場所には見上げなければ顔が見えないほど大きな赤い
竜が佇んでいた。先程、親友が言っていた鱗、という単語を思い出
して鱗に意識を集中させて見てみると、その鱗は一枚一枚がまるで
繊細なガラス細工で作られたかのような輝きを放っている。

そして赤い竜は顔を青年に近づけて、大きく裂けている口を開いて
白い牙を覗かせながら口端を持ち上げた。おそらく笑っているのだ
ろう。

『これで嫌でも信じる事が出来るだろう。どうだ、すごい強そ
うだろう!』

普通に聞けば、ガオオオオオオオオオオという声を揚げているよう
にしか聞こえないが、頭の中にはきちんと彼の言いたいことが伝わ
ってきている。どういう原理なのかは分からないが便利なものだ、
と青年は苦笑して竜の顔に片手を乗せた。

「ああ。すっごい強そうだな。たださ、あんた人間じゃなかったのか？少なくとも今まで一緒にいたときには俺はお前が人間じゃないときなんて見たことなかったんだがな。」

生暖かい。手から伝わる温かさは本物だろう。少なくともこの竜は今ここで生きてる。しかし、何かとてつもなく嫌な予感が胸を過ぎるのを、それと同時にこの竜、という存在を認めた辺りから何か違和感があることに気づいた。

じゃあこいつ、一体何なんだ？

『そうだな。一回今までに起きたことをお互いに整理していく必要があるようだな。因みにその質問については整理し終えた後に話すと約束する。』

そう言って、竜は一瞬白く光るとぽつと赤い欠片が彼方此方に飛び散って元の人間の姿に戻り、焚き火の傍に腰を下ろす。そうして枝を手にとって焚き火を弄り、火が少ないな、と呟いたかと思うとマジシャンのように口からボツと火を吹いて枝に火をつけ、勢いよく燃え出した枝をその焚き火に放り投げた。

それを多少驚きつつ眺めて、黒髪の青年は何か嫌なことでも思い出すかのように一瞬苦い表情をしてからゆっくりと瞼を閉じる。

「さて、何処から整理していけばいいのかが、あの事件が起こる日の朝から少しずつ思い出していると思うのだが。」

「ああ。そうだな。・・・たしかあの日の朝は・・・

水玉フリフリエプロンだ」

「は？」

赤髪の青年の間拔けた声が広い草原に響き渡った。

第1話 終わり

第2話 フリフリフリルの水色水玉エプロンによる狂凶家族の為の追複曲（カ）

この話は主人公による青年の回想です。

第2話 フリフリフリルの水色水玉エプロンによる狂凶家族の為の追複曲（カ）

俺の名前は、氷鉋 夜【ヒガノ ヨル】。

先ずこれだけ先に言っておくが、決してこれが普通だと思わないで欲しい。

俺の家族構成は、ニューハーフ父（♂）と男装趣味持ちの母（♀）、変態（♂）、ドM猫（♀）一匹に俺、の計4人と一匹で構成されている。もう一度言っておくが、これを普通だと思わないで欲しい。彼らの異常さは追々説明させてもらおう。というか嫌でも知ることになると思うから心配しないで聞いていて欲しい。

俺の家の朝は比較的早い。

AM 4・30

「お兄ちゃんっ！！朝だよー！早く起きて？そんじやないとボクはお兄ちゃんにあんなことやこんなことを・・・」

「おはよう響！今日は早起きだな、随分。いつもより30分程早すぎる気がするんだが・・・」

俺の部屋は二階の一番奥にある。そこで死人よろしくぐっすり寝ていた俺を起こしたのは、腰までの長さがある美しいブロンドヘアーをツインテールにして、フリフリがついた水色で水玉模様のエプロンをつけている美少女だった。その少女は何をしようとしていたのだろうか、顔が後数センチで俺の鼻先にくっつく、というところで止まっていた。気のせいか少女の顔はほんのり赤く染まっていて・

「って何する気だこの変態野郎ッ！！さっさとベットから降りやが

れ!!」

「ええ、ここはそのまま見詰め合うところじゃないの？もうしようがないなあ・・・お兄ちゃんは照れ屋さんなんだから？」

と言つて、唇を尖らせながらもベットから降りた少女。・・・いや、正確に言えばこいつは少女ではない。背も大体160cmという小柄さ、そしてぱっちりとした碧眼の瞳と金髪を合わせ見れば誰もが振り向く可憐な美少女なのだろう。が、だ。よく思い出してもらいたい。俺が最初に言った言葉を。

この家に普通はない、ということ。

「でね、いつもより早く起こした理由なんだけど、今日学校で家庭科実習があるんだけどね。そこでどのエプロン着ていけばいいかなって思つて。ね、お兄ちゃんどう思う？この水玉エプロンもいいと思うんだけどね、こっちのピンクリボンがついたエプロンもすっごいかわいいと思うんだ!!」

一体何処から出したんだ!？という数のエプロンを俺の部屋にどんどん並べていく。そこに並べられたエプロンはどれを取っても少女趣味溢れんばかりのデザインで、正直なところ俺はどうでも良かった。というかだ。

「お前は男だから家庭科実習しないで木工大工だろうがああああああああああああああつ!!」

こいつ、男です。ついでに言えば俺の弟です。こいつこそ真の変態、THE変態の名を欲しいままにする男、名を氷匏 響【ヒガノ キョウ】という。残念ながら血はつながっている、正真正銘の弟、らしい。本当に残念だが。

因みにこうなってしまったのは勿論両親の、方向が絶対間違えている教育方針の賜物だ。何せ父親がニューハーフなんていう珍しい人種を幼い頃から両親を見て、『将来の夢はお父さんみたいになることです！』と言いながら育った弟がこうなってしまったのは自然の摂理ともいえなくはない。

「もう、お兄ちゃんは乙女心が分かってないんだから。お兄ちゃんも少しはお父さんを見習えばいいのに・・・」

真顔で空恐ろしいことをさらっと言わないでほしい。

「（見習ってたまるかッ）・・・それより響、もうそろそろ下に降りて朝食づくり始まらないと間に合わないと思うんだが。」

「あ、そうだね。じゃあボクは先に行ってるからお兄ちゃんも着替えて早く来てね。あ、それともボクに着替え手伝って欲しいっていうなら喜んで「早く行けこの変態」」

もう、お兄ちゃんッたら照れ屋さん？、とかなんとか呟きながら大量のエプロンを抱えて俺の部屋から出てトン、トン、トン、と階段を降りていく音が廊下に響いているのが聞こえた。一気に体が脱力してベットにばふっと仰向けに倒れこむ。そうしていること数十秒、気合を入れなおしてベットから降り、顔を洗うために洗面所にのろのろと向かった。

「お、良い匂い。フレンチトーストか？」

「うん。結構うまく出来たかも♪」

「よし、じゃあ俺はコンソメスープでも作るかな。」

1階に下りてくるととても香ばしくて甘い匂いが鼻腔をくすぐり、これがすぐにフレンチトーストの匂いだと分かった。フレンチトーストは響が一番最初に覚えた料理であり、十八番なのだ。もう既にフレンチトーストは出来上がっていて、響はサラダに取り掛かっていたので俺は自然とスープを作ることになった。気が利く響は水を鍋に沸かしておいてくれたので、おかげであまり時間がかからないで作ることが出来そうだ。

「あ、お兄ちゃん、エプロンつけないとだめだよ！ボクの（フリフリフィルの）エプロンあるから貸してあげ「自分のがあるから大丈夫だ。」」

あのエプロンだけは絶対につけたくない。

それに俺には毎日愛用している紺色のエプロンがあるのだ。態々そんな乙女チックなエプロンを借りるなんてもっての他。

「最近お兄ちゃんってボクに冷たいよね。」

「響が必要以上に俺にからんでくるだけだろうがッ」

響はそんなことを言っているが、俺からしてみれば実の弟がいくらかわいい美少女の皮を被っているからといって、それは結局ところ“弟”以外の何者でもないのにいちいち欲情してられるかってかんじなのだ。それに毎日毎日そんなことをされていたら人間慣れてくるものだろう。俺はこんなことに慣れたくはないが。

「よし、サラダ出来たと。お兄ちゃん、ボクがスープ作っておく

からマザーとお父さん起こしてきてよ。」

「あゝ、しょうがないな。分かった。」

今日は俺が両親を起こしにいく当番だった。当番じゃ仕方がない、とあまり気乗りしないが1階にある寝室に向う。すると、両親の寝室のドアの前に眠そうなうちの黒猫が居座っているのが見えた。くわあと欠伸をしてこちらに顔をくりつと向けるその仕草は破壊力抜群だ。

因みにこの猫の名前だが、『黒猫』だ。そのまんま。黒い猫だから黒猫。だが、うちの家族は俺を除いて“クロ”と呼んでいる。家族の言い分からすると長いし呼びづらい、らしい。

「にゃあ。」

とこととことと、と小さくてぽてっとした黒い毛に覆われた四肢をつかってこちらに近寄ってくるその姿はとても愛くるしい。だが、だ。彼女は俺を寝室へと行かせたくはないように巧みにしなやかな体を使って邪魔をしてくる。左足を出そうとすれば、その左足が下りてくるだろう場所に、右足を出せば右足が下ろされるだろう場所にその小柄な体をはさみ入れるのだ。まるで踏んで欲しいかのよう。

「にゃあ、にゃあゝ」

そして涙目をこちらに向けて懇願するような甘い声を出す。ここで踏んでしまえば黒猫は喜んでまた調子に乗る、と分かっているの俺は断腸の思いで彼女に、

「お願いだからどいて。」

と優しく諭す。だが、彼女はここを動かない。あることをしない限り彼女はここから一步も動いてくれないのだ。俺はいつもこれが嫌で当番を響に押し付けていたりしていたのだが……。しょうがない。

俺は表情をスッと消し、底冷えするような声十足元にいる黒猫を見下すような冷たい瞳を向けてこう言い放った。

「どけ。」

すると、黒猫は酔ったようにふらつき始めてパタッと倒れて動かなくなる。そしてとても気持ちよさそうな顔で、「にゃあああ」と鳴いてひげをびくびくさせた。

この黒猫、実は超が100個つくくらいのドM。この猫が懐くのは上手にいじめてくれる飼い主だけ。いじめてくれるのがすごく嬉しい、いじめてもらうのが至高の幸せ。いじめてくれるまで此処を退かない。三度の飯よりいじめてくれ。それがうちの飼い猫、スーパーウルトラDXドM『黒猫』なのだ。

「……はあ。またやってしまった。」

いくら黒猫が超ハイパーウルトラドMとはいえ、きつく言うのは少々心苦しい。たとえ相手がそれを嬉しがっても、だ。

と、いつまでも此処に留まっているわけにはいけないので、黒猫を踏まないようにそおっと跨ぎ、両親がいる寝室のドアへと向かう。向かう、といっても先程の場所からは約三步ほどの距離しかないのだが。そうしてドアノブに手を掛けて開こうとしたときにドアの反対側から、両親はもう起床しているのか話し声が聞こえてきた。

『どう、みっちゃん。気持ち良い?』

『うん・・・いい。あ、そこ・・・上手ねまー君。』

『そんなに褒められたら、もっとかわいがってあげたくなるじゃないか。』

『んっ・・・やだ、すごく、激しい、よ、まー君・・・。ああつ、もう、だめえ』つて朝から何やってるんだうちの変態両親どもはあああああああああああッ！！』

勢い余ってつい叫んで、ドアを蹴破ってしまった。とても後悔したのは言うまでも無い。

「何って、私はただまー君にマッサージしてもらってただけだよ？」

「俺はただみっちゃんにマッサージをしていただけだが？」

そこには美しい黒髪を肩甲骨辺りまで伸ばして、神秘的な雰囲気を醸し出している少女と、金髪碧眼の見目麗しい青年とが仲良くベツトに座っていて、きよんとした表情でこちらを見ていた。

言わずもがな、父と母だ。

「やだなあ、夜は。なにかいやらしいことでも考えてたの？」

「しょうがない。息子だってお年頃だ。そういう趣味の十個や二十個もっているのだろう」持ってねえよっ！しかも多すぎだろうっ」

因みにだが、美しい黒髪をお持ちの少女が父、天使のような容姿の金髪碧眼青年は母だ。

みっちゃんこと氷鉋 美智留【ヒガノ ミチル】（一応生物学上♂ということになっている）。職業はニューハーフカフェ“魔女の薔薇（ローズ オブ ウィッチ）”の店長だ。うちから徒歩二分という近場のカフェで人気ナンバーワンウェイトレス兼店長として大ご活躍中だとか。36歳にはとてもじゃないが見えない童顔＋女顔＋触れれば壊れてしまいそうな細い線の体は何処から見ても可憐な少

女にしか見えない。白い肌は陶磁器を思い出させ、儚く微笑むその姿はまるで深窓の令嬢のようだ。俺としては出来れば母として慕いたかった。

そして、まー君こと氷鮑 マリア（一応生物学上は♀である）。彼女はれっきとした外国人だ。職業はある会社の社長の秘書、だとかそうじゃないとか……。いまいちはっきりしていない。ただ帰りがいつも午前零時を廻るので大変な仕事、というのだけははっきりしている。スツと通っている鼻筋に整った顔、全てを見通せそうな青い瞳は彼女をまた男らしくするのに一役買っていたりする。残念なことに（彼女自身はどう思っているかは謎）胸は全くない。驚くほど平らだ。平行線、地平線、水平線。外国人の女性は日本人女性より発育が良いと前テレビで見たような気がしたのだから嘘だったのだろうか、と今でも甚だ疑問に思っていたりする。

「・・・はあ、取りあえず朝食出来たから着替えて早く来てください。」

「分かった。よし、じゃあ俺と一緒に着替えるか。」

「もう、まー君ったら・・・」

―ボタンツ。

「にゃあ。」

「・・・はあ。」

もう誰でもいいからうちの家族、どうにかしてくれ。



A M 6 .. 0 0

「では、行ってくるぞ。みっちゃん、他の男にほいほいついていくなよ。」

「そんなことするはずない。だって、私はまー君一筋だから?」

先ず最初に母が家を出る。今日は黒いスーツに黒いサングラスで格好よくまとめている。そして聞いているこっちが恥ずかしくなってくるようなやりとりを毎朝飽きずに同じ時間同じ場所毎回違う台詞で行う。正直いい加減にしてほしい。毎回毎回痒くなるような気障ったらしい台詞を並べていくうちの母には呆れを通り越してある種の尊敬を覚える。

そうして母は颯爽として玄関から出て行った。

「さて、私もそろそろ着替えて用意始めようかな」

「ボク達も用意しないとね」

「ああ、そうだな」

AM 6…45

「じゃあ行ってくるね。夜、響ちゃん、いつも言ってると思うけど鍵の閉め忘れには気をつけてね。」

いや寧ろあんたがそこら辺の変態に襲われないかのほうが心配だよ。二番目に父が出勤する。俺たちは分かっているよ、と頷くと父は安心したのか、じゃあいつてきま

すと微笑んでドアを閉めた。時々、いや本当に時たまだが父が男じゃないように思えてきて変な気分になったりする。

「お兄ちゃん、変な顔してどうしたの？」

「・・・いや、なんでもない。」

ようは気持ちの持ちようなのだ。そう自分に言い聞かせてリビングに戻っていった。

AM 7…45

ーピッ

「テレビ消したか？」

「うん。火も確認したし窓も大丈夫だよ。」

キッチンの方からツインテールを解きながら歩いてくる弟。勿論、弟の制服はスカートではなくスラックスだ。きちんと外と内の区別はつけているみたいだ。まあ、万が一弟がワンピース姿で外に出たとしても男だと見抜くヤツはなかなかないだろうから大丈夫だと

は思うが。

長い髪は邪魔になるのでポニーテールにしてまとめている。響にとって髪型は一種のスイッチみたいなのであって、ツインテールのときは変態美少女、ポニーテールのときは爽やか美少年、と性格や雰囲気を変えているのだ。今までこうして一緒に暮らしているがどうやって変えているのか未だに謎だ。雰囲気までぱっと変わるのだからまったく不思議ではない。

「よし、じゃあ行こうか兄さん。」

「ん、了解。行くぞ、黒猫」

名前を呼ぶとにゃあ、と可愛らしい声を上げてリビングからやってくる黒い猫。昼間は誰も家にいないので家の中に閉じ込めていくわけにもいかず外に放している。俺が帰ってくる時間にいつも家のドアの前にいるのを見ると、待っていてくれたようで癒されたりする。

「にゃあ。」

「響、頼む。俺はもう嫌だ・・・」

「はあ、兄さんはもうしょうがないな。ひとつ貸しだよ・・・さっさと外に出ろよこの雌豚。お前をうちの中で飼ってやってるのだけでもあるがたかと思うんだな。」（※注 響です）

「にゃ、にゃああああ?」

バタッ

「行こう、兄さん」

「さんきゅ、響。」

このサディストぶりには何か根本的なものを感じずにはられない。

黒猫を一発でノックアウトさせた当の本人は何事も無かったかのよう
に爽やか笑顔をこちらに向けていた。これがあいつが言っていた
ギャップ萌えというやつなのだろうか。

と、まあそんなこんなで俺の忙しい朝は終わりを迎える。すごい濃
度の朝であつたと思うがこれがうちの普通の朝だ。もっとも俺はこれ
を普通だとは思えないが。これを普通だと思えたならその感覚はも
う普通じゃなくなっている。

しかしこれからもっと普通じゃないことに自分が巻き込まれること
を、神でも預言者でもない俺は勿論知る由もなかった。

第

2話 終わり

第3話 日常の破壊による異世界の為の交声曲（カンタータ）

焚き火の飛び火が爆ぜてパチツと音を立てた。辺りは真っ暗で焚き火の周辺2mより先は何も見えない闇はそこに潜む何かを連想させる。

「朝はたしかこんなかんじだったな。というか今思ってたんだが朝から振り返る必要性、全くないんじゃないか？」

焚き火を挟んだ対角線上に居る親友に夜はそう問う。すると赤い髪の青年はふっ、と笑ってこう付け足した。

「甘いぞ夜。甘甘超激甘なのだ。俺は唯お前の妹・・・もとい弟のことを聞きたかったただけなのだ！」

「一篇三途の川、拝んでみたくない？」「遠慮させてもらうぞ。」

笑顔で三途の川、所謂天国へのご案内を申し出た夜だったが赤髪の青年が真顔で返答したので、それ以上何を言っても同じ問答を繰り返すだけだと分かっている夜は一瞬不貞腐れた表情を露にしてからすぐ普段の何を考えているか分からないような表情に戻った。そんな彼を横目でにやつきながら見ている赤髪の青年は、まるでそんな彼の反応が面白くて態とそうのように返答したように思える。

「まあ、いいか。で、もう面倒臭くなってきたから一気に場面を昼休み直前にまでも持っていていいっても良いか？あの、・・・事件が起こる直前まで」

夜の表情が暗くなるのが分かる。彼が親友を見る瞳は暗く、何かに怯えているように思えた。そしてそれに同調するように赤い髪の青

年の表情も険しくなる。そうして口を開いた。

「うむ。・・・そうだな。あの昼休みさえなければ、俺たちは・・・」



チツ、チツ、チツ、チツ、カチツ・・・キンコーンカーンコーン・

「終了だっ。後ろのものがテストを回収して来い。・・・」
よし、全部集まったな。日直、号令頼む。」

「起立、礼。」

クラスの日直のやつが号令をかけるや否やそれを合図に教室が一気に騒がしくなる。勿論テストが終わった直後に話すことといったらやはり出来具合の確認だろう。うちの高校は始業式を行った直後、すぐにテストが始まる。あまりに鬼畜な所業だと大半の生徒は嘆いていたが（この中に夜も含まれている）、これがこの学校のしきた

りみたいなのだから仕方がない。休み明けのテストの散々さといったらない。夜も例年通りあまり出来なかったのか、テストが終わると同時に机に伏せて物寂しそうな背中をさらけ出していた。やっと午前中のテストが終わった、と喜んで急いで駆け出して購買に向かう者、鞆から弁当を取り出して、またはコンビニで買ってきたパンなどを机に出して食べはじめる者、ご飯を食べずに次のテストの教科の復習をしている者と各それぞれ好きなことをしだす。そんな中、前に挙げたどの者にも当てはまらない行動をする者達も当然いる。

「夜、屋上に食べにいくのではないか。」

「は、なんでまた屋上なんかに行くんだよ。面倒だし、そこ危ないから入るなって鍵かかってるだろ。」

机の上で突っ伏して寝ていた夜を起こしたのは、癖がある金髪の持ち主で深い茶色の瞳の青年だった。体格はすらっとしていてどちらかといえば体育会系だろうと予想がつくような健康的な色の肌で、といってもそこまで黒いわけでもなく可もなく不可もなく、というところだろうか。そんな彼は人懐っこい笑みを浮かべて夜の動かない体を何の容赦もなく机から引き剥がしている最中であった。

「やめろよ夏・・・俺は眠いんだ、落ち込んでるんだ。少しは寝かせてくれ・・・」

夏、と呼ばれた青年の本名は泉原 夏葉【イズハラ ナツハ】という。本人は名前が女子みたいだと言って本名では呼ぶな、と周りにふれ回っている。余程名前が気に入らないのだろう。そのためかこいつの本名を知るものは極僅かにしか存在しておらず、基本的には泉原 夏で通っている。

「そんなことを言っていたら昼飯を奢るといふ話はなしに」「行きま
す、是非行かせてください（棒読み）」

「棒読みなのが気になるどころだが、まあいいだろう。さ、行くぞ
夜」

「へいへい」

食べ物に目がない夜は、テストの出来が悪くて落ち込んでいたこと
を綺麗さっぱり忘れ、こうして簡単に親友の策略によって手の内に
収まり昼食を買うために購買へ向かうのだった。

「あ、因みに今日の帰りにあのカフェのウルトラDXパーフェクト
パフェ奢ってくれな。あれなかなか高くて手が出なかったんだよな・
・」「って俺が奢るって言ったのは昼飯だけだぞっ」

ところ変わって屋上。あの後、購買に遅れていった二人は残り物の
コッペパンと飲み物を購入し、屋上へ来た。つい先ほどまで夜の手
にはコッペパン2本と炭酸水、夏葉の手にはコッペパン3本とコー
ラがあったのだが今現在、それらは地に無造作に放り投げられてい
る。

「で、夏、何か言うことは？」

「な、何をだ？」

「例えば俺に謝るとか謝るとか、さ」

「最初からひとつしか選択肢がないではないか」

今現在、二人は絶体絶命の大ピンチの状態に陥っていた。夜は背中

をフェンスにつけてもう後がなく、夏葉も同じように屋上の入り口であるドアに近い場所で壁に背中を預けている。そして彼らの目の前には10人近くの不良たち。

何故このような事態になってしまっているのか。

夜たち二人は屋上に繋がっている階段を上がり、屋上の扉の鍵が何かの工具で壊された形跡のある扉を、錆付いた音を立てて思いっきり開いた。するとそこには10人程の不良に囲まれてかつあげされている、顔が今にも泣きそうな表情になっている青年と目がバチツと合ってしまう。そしてその青年の視線に気がついた不良たちが二人にターゲットをロックオンしたその瞬間、何処に隠れていたのかすごい俊敏力で、泣きそうになっていた青年は二人の間を走り抜けて逃げていってしまったのだ。そうして完全に不良の注意はこちらに向き、今に至る。

「もう後がないぜ？ さっさと財布出せよ。そうすれば手は出さないでおいてもいいぜ？ それとも殴られてボロボロになってからの方が良いのか、あん？」

5対1はいくらなんでも卑怯すぎるだろ、と心の中で呟いた夜は視界の端に映っている親友が無事なことを確認して、目の前にいる不良たちを思いっきり睨んだ。すると右のほうから拳が飛んできてこめかみにぶち当たったのを理解したときには、殴られた勢いでフェンスに体を強くぶつけていた。

「夜！！大丈夫かっ！？」

一瞬意識が飛びそうになるものの、親友の声が頭の中に響いてなんとか意識を繋ぎ止めることが出来た。しかし余程強く殴られたのか頭がぐらぐらして立ち上がれる状態ではないのに、無理やり頭を掴まれ立たされフェンスにすごい勢いで押し付けられる。

「お前も友達の心配してる場合か？ いい加減財布出さねえとお前も同じようになるんだぜ？」

「ふん、お前らごときにやられる俺ではないのだ。夜、今助けるからもう少しだけ我慢していてくれ」

壁に背中を預けていた夏葉はそう呟くと、いきなり目の前の不良の鳩尾に向かって拳を突き出した。一瞬で意識を失う不良。急に彼が動き出したのに驚き、不良たちは一気に彼に襲い掛かったが、僅かにもかからないうちに5人全員あつという間に倒されてしまった。

「な、なんだこいつ・・・。」

「お前らごときに名乗る必要性は全くない。早く夜を離してもらおうか」

夏葉が低い声音で不良たちを圧倒していく。すると、不良たちも力量の差が分かったのかあきらめて屋上から逃げ去るように出て行った。ただそのとき、夜は不良の一人に腹いせか、ぐいっと左肩をフェンスに食い込ませるように押された。

「っ！！？」

そして夏葉が不良と入れ違いになるようにこちらに歩いてこようとしたときだった。屋上に不協和音が鳴り響いたのは。

ーギイイ、ピキ、ビキビキッ

「え？」

元々この高校は古く、所々傷んでいる節はあった。しかしそれが今、

牙を剥く。錆付いたフェンスの金具は酷く傷んでいて、人ひとり支えることも出来ないくらい腐敗していたのだ。それでも今まで何もこれといった事故が起きていなかったのは、奇跡的につい最近まで屋上の扉の鍵が壊されることがなかったからなのだろう。

夜の体重に耐え切れなくなったフェンスは無慈悲にも重力に逆らうことなく、一先足に5階の高さから下の地面にすごい音を立てて落下していった。そしてそれに付随するように夜の体も空中に投げ出される。まるで糸の切れた人形マリオネットのように。

夜は自分に何が起こっているのか理解出来ずに、唯感覚的に落ちていくことだけを感じ取っていた。一瞬親友の叫ぶ悲痛な声が聞こえたような気がしたが、それは幻聴だったのかもしれない。そう思つて夜は目の前に広がる真っ青な空を虚ろな瞳に映した瞬間に声に表せないような激痛と衝撃が体中を巡った。

「――ッ!!?」

痛みに耐えるように歯を食いしばる夜だったがその苦しみは一瞬で終わる。視界は真っ青な空から真っ赤に、そして黒に侵食され、そこで意識はぷつぷつりと途絶えた。

後に残ったのは、未開封のコップパンと新品同様の炭酸水。まだ触れば生暖かく感じる血と、手足が本来なら有り得ない方向に折れ曲がっていて力なくコンクリートにうつ伏せに横たわっている氷鎧夜の、既に事切れた満身創痍の身体だけだった。



「・・・で、次に目が覚めたら此処にいて、何処かのドラゴンさんに追いかけられた挙句に吹き飛ばされて失神。そして今に至る、と何か言い訳とかあるなら聞くが？」

「あれは見るなり逃げ出して俺のピュアなハートを傷つけたお前が悪い。」

「誰がどう聞いてどう考えてもあんたの方が断然悪いっての！！」

こうして改めて回想してみると、あの時吹き飛ばされて意識を失ったのは間違いなくこいつの所為じゃないか、と今になってやっと気づいた夜は一応笑顔で謝罪を催促したが、夏葉の言葉、所謂“俺は悪くない！”の一言で夜のポーカーフェイスが一瞬にして木っ端微塵に吹き飛ぶ。

意図的にそうしたのは分からないが、夏葉のその巫山戯た台詞によって、重く暗い雰囲気が最初からなかったかのように何処かに飛んでいってしまった。夏葉なりの気遣いだったのかもしれない。それに気がついた夜は彼の悪戯な笑みに驚き呆れて、緊張でがちがちになっていた顔の力を抜いて苦笑した。これでは夏葉を責めることは出来なくなってしまったな、という意味も込めて。

「で、お前が落ちた後だったのだが、あの後実は屋上から俺も落下したのだ。」

「・・・は？」

一瞬耳を疑いたくなるような冗談を言われたような気がしたのは気のせいだったのだろうか、と夜はつい素っ頓狂な声を上げてしまった。

「待て待てっ。あんた、今なんて言った？今、落ちたって言わなかったか？」

嘘であって欲しい、という希望も込めて聞き返したのだったがその希望は粉々に砕け散る。夏葉は何事もなかったかのように、そして自分自身にも言い聞かせるようにもう一度同じことを繰り返した。

「うむ。言ったぞ。俺はお前が落ちた後、お前の腕を掴もうとして走り寄ったんだがな、バランスを崩してしまっただけ。勢い余って一緒に落ちてしまったのだ。」

「はぁ!？」

再度素っ頓狂な声を上げたのは決して驚いたから、だけではなかった。夜の顔は驚きと、そして若干の苛立ちが混ざった困惑の表情が浮かんでいた。

「あんた・・・なんでそんなこと、したんだよ・・・？」

「そんなこと、とは一体何のことだ？」

「俺を助けようとして屋上から落ちたことに決まってるだろ!？なんでそんな、無駄なことしたんだって聞いてんだ!」

声の大きさは普段より小さいのに何故かすごい威圧を感じるような声音で言い、夏葉を睨む。これを見て夏葉はこれは本気で怒っている夜だ、と分かり居心地が悪そうに顔を顰めた。一度怒ってしまうとなかなか機嫌が直らないのを知っている夏葉は内心舌を巻く。夏葉は伊達に夜の親友を何年間もやっていない。

「俺は唯親友を助けようとしただけなのだが、何かいけなかったのか？親友が落ちようとしているのを見たらお前でも迷わず助けようとしていたのではないか？」

もし夏葉が正論を言ったとしても、夜はこうなってしまうては絶対それが正しくても認めないし引かない。あー言えばこー返す、こー言えばあー返すの繰り返しになってしまうのがオチなのだ。だから夏葉が折れるしかない。しかし今日という今日は夏葉も引く気はなかった。親友を助けて死んでしまったのは間違いだと思わないし、況してやそれが無駄なこととも思っていない。結果的にはこうして二人して生きているのだ。たとえそれが異世界であっても生きていることには変わらない。結果が良ければそれで良い。そう思ったのだ。

しかし夜はそうは思わないらしい。いつも通り言い返してきた。

「俺だってそうなれば迷わずあんたを助ける。だがそれは実際起きなかった。実際は、俺が落ちた。だからあんたまで落ちる必要性は何処にもなかったんだ。あんたは自分の命を無駄にしたんだ。こんな、俺の所為で……。」

「……お「あんたまで死ぬ必要は、なかったんだ……。これじゃあまるで……。」

“俺があんたを殺したみたいじゃないか？”

その台詞が夜の口から出ることはなかった。そして、“お前の所為じゃない”という言葉葉を言いかけた夏葉の口から出ることもなかった。

夜は夏葉から目を逸らし、腰元で風に揺られている草をじっと見つめる。

（実際俺が屋上から落ちなければこんなことにはならなかったんだ。
・・・俺が、もっと必死に不良達に抵抗していれば、あの時屋上の
扉の鍵が壊れていることを不思議に思って入らなければ、昼を誘わ
れたときにあのまま寝ていれば、・・・・俺がこいつと、会
っていなければ・・・）

考えれば考えるほど嫌な方向にしか思考がついていかない。そして、
ふと屋上から落ちて意識を失った後のことを今になって突然思い出
した。まるで先ほどまで全く覚えていなかったのに、だ。ついさっ
きまで忘れていたので夏葉には話していないが、実はこの世界に来
る前に夜は“神様”という名前の少年に会ったのを思い出す。その
少年はとても無機質な瞳で、無機質な声で、無機質な表情である頼
みごと、いや命令をしてきたのだった。



白。

今の視界を言葉で表そうとしたらその一文字で事足りるだろう。何処を見回しても白しかないのだから。序でに言えば夜はこの変な白い空間のせいで平衡感覚を失って軽く吐き気のようなものを感じていた。簡単に言うのと、

「き、気持ち悪い・・・。」

のだ。夜は今にも吐きたい衝動を抑えるために気休めでしかないが、両手で口を押さ目をぎゅっと閉じる。そうしていること数十秒、不思議なことに吐き気がスウツとなくなったのに気がつき、不思議に思ってた夜は閉じていた瞳を開いた。

(・・・さっきまでもう本当に吐きそうだったのに、何でだ?)

と首を傾げていると、白しかなかったこの視界に白以外の色がこの視界を染め上げた。端的に言えば目の前に少年が一人宙に浮いていた。漫画やアニメ、ゲームなどの世界でしか見たことのない艶のある黄緑色の髪に輝ける金色の瞳。服装はこの空間の真反対の色、つまり黒に統一されている。何かこだわりか何かがあるのだろうか。

「もう気持ち悪くないでしょ？ボクが君の魂に干渉して平衡感覚を今だけなくしてあげているんだからさ。感謝してよね？」

最初、この声が耳に入った瞬間悪寒が背中を駆け巡った。この少年は危険だ、と第六感がそう告げているように感じて夜は警戒するようにその少年から少しだけ距離をとる。すると少年は無機質な笑顔を浮かべながら右手と左手を上げてお手上げポーズをした。

「感謝する前に逃げられるとは、もしかしてボク嫌われてる？この

空間は基本的何かと自由だからもつと力を抜いてリラックスしたほうがいいと思うよ？」

「あ、ああ。」

言葉使いはまだ幼い子供のような口調だが、至って声は表情と同じ無機質で全く心がこもっていないように思えた。少年の金色に輝く瞳は薄暗くて、その瞳には何も映していないのではないかとこちらを見つめてくる彼の瞳を見つめ返す。

「心の声が響いてこない。君はすごい素直な性格なんだね。さて、社交辞令はここまでにしてそろそろ本題に入ろうかな。あ、因みにボクのことは“神様”とでも呼んでね。」

「神、様？あんたは一体・・・」

「質問は一切受け付けないよ。いいね。じゃあ時間もないことだし、手短に説明するね。今から君には異世界に行ってもらおうと思っているんだ。」

今何かを言ってもおそらくこの感じだと無視されるだろうと踏んで、敢えて夜は何も言わず、何も考えずに相手の話を聞くことにした。そのほうが効率が良いだろうし少年に逆らうつもりは毛頭なかった。夜は基本的に面倒くさいことは嫌いなのだ。だから相手がすべてお膳立てをしてくれると言うのなら態々自分から動く必要性はない。此処で唯相手の話を聞いていれば良いだけなのだ。だったが。次の彼の台詞にそうしても黙っていられなくなってしまった。

「うん、いい心がけだね。でね、君にはその異世界を破壊して欲しいんだ。」

「世界を、破壊する？」

「破壊、といってもその世界の人類を滅ぼすとかそういうのじゃな

くて、ただその世界を壊してくれればいいんだよ。とっても簡単なことでしょ？それに君にとってもいいことだと思うよ？君がもしこの世界を壊すことが出来たら、君と一緒にこの世界に来てしまった彼を元の世界に返してあげる。勿論君も、ね。君はあの地球という世界では死んだことになっているけどそれもなくしてあげる。だから、ね。頑張って世界を壊してきて。」

少年は無機質な笑顔でそう夜に告げると、彼は何もない空間から一本の長い剣を創り出して夜に差し出した。その長剣はおそろしく長くてゆうにその少年の身長を越している。美しい銀色の刀身は絶えず水のように煌き、鈍く輝く黒い柄にはあり得ないほど長い白い布が巻きつけられていた。その白い布の余っている部分はこういう原理か知らないが宙に浮いている。どうやら鞘はないようだ。夜はその剣を手取る。

「これは世界を滅ぼす剣杖。^{レヴァテイン}君にあげる。きっと役に立つはずだよ。じゃあ、君。頑張つて。ボクは君が世界を破壊してくれるのを心待ちにしているからね。あ、因みに時間制限つきだから。それまでに世界を壊せなかったら君も、君の友達もそこで終わる。・・・ふふ、大丈夫。君なら必ず世界を壊せるはずだから心配しないで。君にしか破壊できないんだからさ。じゃあ時間制限の100年後に、また会おうね。」

少年は笑う。

その無機質な瞳に無機質な表情、無機質な声は夜の目に耳によく焼きついて忘れることは出来ずにいた。今すぐにでも忘れたいのに忘れられない。少年は最後まで夜を“君”と呼び、夜の存在を最初からその場にいないかのように扱っているその姿はまるで・・・

夜はそんな少年から視線を離すことはなかった。そして少年が夜の

頭に片手を翳すと徐々に視界がゆらゆらと歪み始めて、ふとも簡単に意識を失ってしまう。最後に夜が霞む視界の中で見たのは、作り笑顔をなくした少年の無の表情だった。

話 終わり

第3

第4話 魔物の襲撃による牙の為の即興曲（アンプロンプチュ）

「バカバカバカバカ夏の馬鹿野郎おおおおおおおおおッ
！！！！俺を置いていくなあっ！殺す気かっ！？」

『夜もそろそろ戦いに慣れないといけない、と俺は思うのだ。だからそれくらいの雑魚ぐらい瞬殺してくれても一向に構わないのだがな』

「あんたは竜で俺は人ッ！！そこんどこ間違えてないか！？俺は炎なんて口から吐けないんだがっ！？」

『むう・・・俺をまるで人外のように言うのはやめて欲しいのだが』
「やめて欲しかったらまずその前に俺を助けるッ！！」

夜は今現在、絶賛猛ダッシュ中だ。もうそれは死に物狂いで爆走中だ。そして彼の真上を悠々と飛んでいる真っ赤な竜。勿論夏葉である。そして夜の約5メートル後を奇妙な唸り声を上げて追ってきている黒い影が5つ。それらはこの異世界には当たり前のよう存在しているものであった。

『ふむ、それは無理な相談だと言っているだろう。夜、そんな逃げ回っているから相手も追っかけてくるのだ』

「逃げなかったら食われるだろうがっ」

『まあ、それもそうか。だが逃げていては一向にその追いかけてこは終わらないぞ』

夏葉は眼下でそれらから必死に逃げ回っている親友を面白そうに眺めていた。そしてそれを恨めしそうに睨む夜。だが夏葉の言うことはもつともであった。一度背を向ければそれらに弱いとみなされ襲い掛かれる。

夜を追い掛け回しているのは、体調が約2メートルくらいあるだろうと推測される狼たちの群れだった。唯、普通の狼と違って何処か狂気を帯びているような雰囲気かとわりついている。牙は口からはみ出ていてあれに咬まれたら間違いなく腕は簡単に引き千切られることだろう。夜はそれを頭の中でリアルに再現してしまい、吐きそうになりながらも必死で逃げていた。

何故こうなったのか。時は先程の夜の回想後にまでさかのぼる。



あの少年のことを思い出しているとふいにあの時の吐き気が胸をかき乱し始めたので、夜は思考を無理やり中断する。

「夜、大丈夫か？なんか変な顔になっているのだが・・・」

「なあ、そうやっていつもいつもシリアスぶち壊すのやめないか？絶対態とやってるだろ！？」

何のことだ、とばかりに肩で返事をして明後日のほうへ顔を向ける

夏葉。夜は深いため息をついてもういい、と疲労感たつぷりに呟いた。

「そういえば、何であんたが竜になってるのかまだ聞いてないんだが・・・」

夜はふと思い出したように顔を上げる。その表情が普段どおりだったのを夏葉は内心安心しながら頷いて座り直した。地面に座っていたので尻が痛くなったのだ。それを見てほぼ無意識に夜も座りなす。

「そういえばまだだったのだな。ふむ、何から話せばいい、というか実のところ俺もよく分かっていなくてあまり話せることはないのだ。」

それでもいい、という風に話を促すように首を傾げた夜。

「屋上から落ちて死ぬ間際に誰だか分からない声が頭の中に響いてきてこう言ったんだ。“人間のまま何も守れずに死ぬか、竜になってお前の大切なものを守る為に生きるか”と。そして気づいたときには選択していて、気がついたら此処に居たのだ。そのとき意識が朦朧としていてあまり覚えていないのだが俺は後者を選んだのだろう。今此処に存在しているのだから。そして目の前に倒れているお前を見つけたのだ。幸いこの異世界の一般的な常識については頭の中に入っているようだからな。安心しろ、夜。」

その声って少年のような声音だった？とは聞けなかった。いや、聞きたくなかったのかもしれない。夜はまたふいにあの少年のことを思い出して軽い目眩を覚えるが、なんとか我慢することが出来る程度のものだったので、夏葉に気がつかれた事はなかったようで安心

した。

「そっか。でも俺にはこの世界の知識なんてないんだが、まあそこは夏に任せるか。」

「ふむ、大船に乗ったつもりで頼ってくれてかまわないぞ。」

「そりゃ頼りがいがあるな。・・・ところで、夏よ。なんでまたあんな竜に戻ってんだ？」

気がつけば前の前にいた親友が見上げるほどの大きな竜になっていたのには驚いた。しかし態々変体した理由が分からず首を傾げる。すると夏葉は血も涙もないことをさりと云った。

『早速だが、この世界では当たり前に存在している魔物、というものがこちらの匂いを嗅ぎ付けてやってきたようだ。夜よ、この際だから戦い方を身に付けるといいぞ。これからくる魔物5匹と戦って自分で戦い方を習得するのだ』

「は？」

ーアオオオオオオンッ

ぞわっと背筋が凍りつき、悪寒を感じる。第六感が逃げろ、と告げていたときにはもう既に夜の目の前には5匹の獰猛な狼が襲い掛かってきていた。

で、冒頭に戻る。

（これはマジで洒落にならねって！！下手すれば俺、死ぬ・・・？考えるな、頑張れ、俺！！・・・って）

「この靴は走りずらいっての！！」

踵の部分がパカパカいっているのにはもう慣れたがやはりローファ―は走りずらかった。これが普段履きなれているスニーカーだったらどうにかなったのかもしれないが、実際今履いているのは合成革で作られている今年で2年目のローファ―なのだ。

そしてとうとう追いかけっこをしているうちに夜は狼に追いつかれてしまい、間隔を3メートルくらい空けて綺麗に丸く囲まれてしまった。すごく連携が取れているのは狩りに慣れているからなのだろう。しかし宙に浮いて高みの見物をしている夏葉はただ見ているだけだった。

「・・・これ真面目にやばい。って思ってるのは俺だけか夏！？」

『いや、全然大丈夫だぞ夜。そいつらは雑魚中の雑魚なのだ』

「じゃあ俺はその雑魚よりもっと下の雑魚ってことかいっ！！」

―グルルルルルルッ

はっと視線を魔物のほうに向けると同時に目の前の一匹がいきなり牙を剥いてきた。それを声の出ない悲鳴を上げながらも必死に避ける。そして真後ろからも飛び掛られるが間一髪でしゃがみ込みこれも避けることに成功したのもつかの間、左側にいた狼がフェイントをかけて夜の注意を引き付け、その隙に右側の狼が鋭い爪を振り上げ夜の左肩に当たりブシュッと血が吹き出る。

「・・・っ！」

夜がその怪我に氣をとられるのを狙ってここぞとばかりに狼は一斉に夜に襲い掛かった。夜はぎゅっと反射的に目を瞑ってしまう。が、いつまで経っても痛みは襲ってこなかった。

「・・・。。」

『おい、夜っ！大丈夫か！？』

目をそっと開いてみると、夜の目の前には丸焦げになった狼5匹分の灰が草原に散らばっていた。冷たい風が強く吹きその灰は煽られて散らばり何処かに飛ばされていく。それをボーっと少しの間眺めていると急に肩の怪我の痛みが夜を襲い、その痛みには耐え切れなくなった夜は地に膝をつけて倒れるようにその場に座り込んだ。

（・・・痛い。けどあの時の痛みに比べたら、どうってことない、
んだろうな・・・こんな痛みは。）

そう、あの屋上から落ちたときに比べたらこの痛みなんていうのは蚊に刺されたようなものだ。夜はそう思い込むことによって痛みを紛らわせようと思ったが現実そう簡単にいくことはなく、痛みは熱を持ち始めてどんどん増すばかりだった。

と眼前が赤い光に包まれたかと思うと人型になった夏葉がこちらに駆け寄ってくる。

「ふむ、思ったより深いな。俺が治癒魔術を使えば良かったのだから・・・。取りあえず止血して消毒してから包帯で応急処置だけしておこう。・・・すまない。」

夏葉は心底すまなそうな表情を一瞬だけ見せて謝ると、身に付けて

いた小さな鞆から救急セットを取り出して処置をし始める。夜は肩を動かす痛みに耐えながら制服とワイシャツを脱ぎながら、

「大丈夫、だ。気にするなよ？」

と言って引き攣る頬を無理やり動かして笑う。ひどくぎこちない笑い方だったのを夏葉は見て笑い返すことは到底出来なかったが少し気が楽になった気がしないでもなかった。

「・・・終わったぞ。取りあえず今日はここで野宿して、ここから一番近い街だと・・・ラグータリアだな。明日はそこに向かって出発するつもりだ。早くても半日ほど歩きっぱなしになるから出来るだけ今日はゆっくり休むのだぞ、夜」

服を着ながら夏葉の言葉を聞いて素直に頷く夜。心なしか顔色が悪いように見える。先程血を出しすぎた所為だろうか。兎に角夜が素直に頷いてくれたのは助かった、と夏葉は内心で呟いて息を吐いた。流石に夏葉の鞆の中に毛布などが入っているわけもなく、寝るといっても焚き火の周りにただ寝転がるだけなのだが余程疲れたのか、夜は寝転がってすぐ寝息を立ててぐっすりと寝てしまった。そんな彼を一瞥してから夏葉は寝ずの番をする為に頬を叩いて気合を入れる。そして夜空に輝く星を見上げてため息をついた。



気がついたら朝になっていた。

夜はまだ重たい瞼を無理やり開いて体をゆっくりと起こす。その時一瞬右肩から貫くような鋭い痛みが体中を駆け巡って、つい小さく声を漏らしてしまった。空は未だ薄暗く肌寒さを薄らと感じる。

するとふと視界に眩しい赤が入りそちらへ目を向けるとその赤の持ち主とばっちり目が合う。

「おはよう。」

「おはよう。随分早起きなのだな。もう少し眠っていてもいいのだが・・・」

「・・・いや、大丈夫だ。それよりなるべく早めに出発して飯食いたいな。腹減った・・・」

「そう言うと思っていたのだ。夜は人の3倍は食うからな。では出発するか」

苦笑した夏葉はそう言って立ち上がると慣れた手つきで鞆を身につけ、埃を掃う様に服を軽く叩いた。夜もそれに習うようにして立ち上がり、夏葉の斜め後ろを定位置に目的地に向かうため歩き出した。怪我は右肩にあるのであまり右腕を動かさなければ痛みはないようだ。夏葉の応急処置が良かったのだろう。

(それにこの血がこびりついて気持ち悪い服をどうにかしたいしな)
少しでも肩を動かすとパリパリとこびりついて乾いた血が割れて少しずつ落ちていく。正直すごく気持ち悪い。

夜はふとそう心の中で呟きながら首を縦に振った。

「そういえば夏、竜って人間と同じものを食べるのか？それとも」
「食料は人間だ・・・って？馬鹿言わないでくれ。今は竜だが俺は元人間なのだぞ？人間と同じものを食べるに決まっているだろう。まあ人間だって食料にしようと思えば出来るがな。まあ安心しろ夜お前だけはどんなに腹が減っていても食わないから。骨ばってまづそうだしな」

「その最後の一言は余計だ夏。頼むよほんとに。一回死んだ身だがまだまだ人生謳歌したりないからな」

よくあるRPGの中に出てくる竜は敵として出てくるのがほとんどだったので、夜は興味本位で聞いてみたところやはりそのようだった。というか本来なら竜はこんなところに居たりしないのだろう。きつと山奥とかに身を隠しているはずだ。今まで読んできた本とかやったゲームの通りだったらの話だが、そういうことを考えていると此処はやっぱり異世界なんだな、と再認識せざるを得なくなる。夜は妙な表情を一瞬浮かべた後すぐ元に戻して、話している夏葉の後姿を視界に入れた。

「お前は十分人生謳歌しているのだ。夜にはかわいいかわいい妹、基弟がいるではないか。そして可憐で美しい父親がいるではないか。」

(ここに母親が居たら間違はなくお前の首はなくなっているぞ、夏

葉・・・。）

「あんたさ。・・・まあいいか。趣味は人それぞれだしな。唯その趣味は頼むから俺に押し付けなくてくれな」

「ふむ。夜、お前何か勘違いをしているのではないか？俺はただあのカフェがお気に入りなだけなのだ。別に毎日毎日かわいい子猫ちゃん達を見に行くためにカフェに通っているわけではないのだぞ」

「心の中の言葉がまる聞こえだバカ夏」

だがたしかにあの二人（うちの変態弟と性別詐称詐欺の父）には固定的なファンが結構な数いるのはたしかだ。時々手伝いに来いと嫌でも連れて行かれウェイターをやらされるときがあるのだが、それはあのカフェが夜が手伝いに行かなくてはならないほど繁盛している証拠なのだろう。客はほとんど父目当てか弟目当てのみ。それで料理も旨いのだから言うことがない。そして何を隠そうとこの目の前にいる親友、基夏葉も父と弟の固定ファンの1人なのだ。

「にしてもあの変態達がよくもまあ・・・。」

「むう。お前は常にあの二人の近くにいたからありがたさを全く感じていないのだ！！あれは全人類の宝、そして夢なのだぞ！」

「あゝはいはい。妙に熱のこもった演説ありがとうございますー（棒読み）」

「いつかお前にもあの二人の尊さを分かせてやるから覚悟しておくのだな」

分かりたくもないので覚悟はしたくない。

夜はそっと心の中で呟く。

そうして二人はふざけながらも足は着実に次の目的地へ向かっているのだった。

「なあ、ふと思ったんだがこの方向で本当に合っているのか？」

夜が頬を引き攣らせながら右斜め前にいる親友に問う。因みに歩き出してから約11時間経ったときだった。

「合っているのだ。ほら、もうそこに町が見えているではないか。」

夏葉は何を言っているのだ？という風に怪訝な表情を浮かべて、前方にある大きな町を指差した。たしかにそこには大きな町がある。これが目的地のラグータリアであるかどうかはともかくだ。

では何故夜は頬を引き攣らせて、目の前に視線を集中させているのか。

「兄ちゃんたち、痛い目にあいなくてはさっさと金目の物よこしな。」

「今なら勘弁してやってもいいぜ？」

二人の目の前に、5人の盗賊と思われる人物たちが立っているからであった。全体的に中年で男性。その中に1人だけ少年が混じっている。服は本当に盗賊なのか？って疑問を持ちたくなるほど小奇麗な服を纏っていて、そして不思議なことに武器を持っているのは1人だけ。それも短剣一本だった。

何かが不自然。しかし夜はそのことに気がつくことはなかった。な

にせ今の状況を乗り越えることを考えることで頭がいっぱいなのだから。

「なあ、夏。今なら間に合う。引き返そう。ここがその目的地かどうかはともかく俺は盗賊のアジトになんて行きたくない。それに俺がそんなところで生き残れる確率はゼロに等しいと思うんだが」

何かと理由をつければ夏葉も頷いてくれるだろう。そう思っていた夜の思惑は次の夏葉の台詞によって見事に外れたのだと知ることになる。

「・・・はあ。こうなったらちゃっちゃとこの雑魚ども片付けて飯を食べに行くのだ。」

「ってちよつと待てい！！まあ確かに早く飯に行くのは賛成だがなんで雑魚とか言って挑発してんの！？ 最初からあんた戦う気満々だったんだろッ。」

「うむ。流石夜だ。よく分かっている。俺はこういう連中が1番嫌いなのだ。」

「誰もあんたの好き嫌いなんで聞いてねえよ！！っていうかもう構えてるし・・・。あーくそっ。俺は後ろで隠れてるからなっ」

言うが早い。夜はその場から100mぐらいまで猛スピードで走って離れた。あんなに体を動かして傷は痛くないのだろうか？そう夏葉は首を傾げて逃げ出す親友を視線で追った。

あんなに早く足を動かしてでも戦線離脱したい理由が彼にはあった。

実は夜の手足は小刻みに震えていてその場で立っているだけでもつらいのだ。理由は分からない。全く見当もつかない。ただ相手を敵だと認識しだした辺りから体が小刻みに震えだしたのは覚えている。夜は顔を顰めて何もない草原を見つめる。

（・・・俺、もしかして怖い、のか？手足の震えが止まらない。一体どうしたっていうんだ・・・？今まで不良にからまれたってこんなことはなかった、はずなのに・・・）

夜は自分の体を見下ろしてそう呟き、その考えを振り払うように首を2、3回振って視線を夏葉と盗賊たちに向けた。

するともう既に残り人数が3人になっているのが遠くからでも分かった。夏葉に接近して短剣を振っている男と、その後方でただ突っ立っているだけの二人の盗賊。そしてその間にうつ伏せで倒れている少年と仰向けに倒れている中年が一人。夜が少し目を離れた隙に二人もどうやってダウンさせたのか、夜は少しだけ気になった。

「うわっ！！なんだこいつ！？もしかしてすげえやばい奴に声かけちまったのか？おい、デューロツ、センネルッ！」

「分かってる！静かなる水の底の主よ、我に今力を与えん。範囲回復術^{ヒール}！！」

「荒ぶる炎。その手に宿す。飛んでゆけ！！火の矢^{ファイヤーアロー}！！」

後方に立っている、デューロ、センネルと呼ばれた盗賊たちは何処に隠し持っていたのか分厚い本を出してページを捲り、何か呪文のようなものを唱えた。すると最初に唱えたデューロの本から水色の光が零れだしてそこら一帯に広がり、既に夏葉にダウンさせられて地に伏せている二人の盗賊たちを包み込み始め、僅か10秒辺りで意識を取り戻し立ち上がる。そしてセンネルと呼ばれた男の手からはその名のとおりの火の矢が3本飛んできた。

しかしそれを何事もなかったかのように右に体を傾けて軽く避ける夏葉。その避けた姿勢から一気に膝のばねを利用して飛び出し一瞬でその魔術を唱えた二人の目の前まで移動し、容赦なく鳩尾に拳をめり込ませ気絶させた。

「デューロツ、センネルツ！！ちっ、おい、二人担いで逃げるぞ！！」

「へい！兄貴、了解でやんす！行くぞッ、ハークッ！！」

魔法使いらしき二人が気絶させられると勝ち目はないと思ったのか、短剣を振るっていた盗賊は夏葉から距離を取り、先ほど回復して意識を取り戻した二人に撤退を命じた。

5人の中で最年少だと思われる少年はハークと呼ばれているらしい。その少年は暗い表情を顔に貼り付けて夏葉を一瞬睨み付けると、仲間を担いで町に向かって走り出した二人に返事をして仲間の後を駆け足で追っていった。

どうやら夏葉は逃げるものは追わないらしい。目の前から盗賊たちがいなくなるとふうつとため息をついて夜の方に体を向けて手招きをする。すると夜は彼ら盗賊たちの気配が綺麗に消えるまでその場に居て、確認するように彼方此方を挙動不審にキョロキョロと見回してから夏葉の方へゆっくり歩いてきた。

「夜、もう敵はいない。だからそんな挙動不審にされるとこっちが落ち着かないのだが・・・」

「悪い。なんかな・・・」

「？」

歯切れ悪そうに夜が顔を顰めるのを見て、内心で首を捻ったが今は何も話してくれないだろうと分かっているので聞き出すのを諦め、

取りあえず飯のことに意識を向けることにした。正直なところ、もう背中と腹がくっつきそうなのだ。いや、もしかしたらくっついていいるのかもしれない。
取りあえず今は飯だ。

「よし。では行くか、夜。まずは飯を食べて、それからお前の怪我を治しに行こう」

「それ普通逆だろ！？あんたはこの血まみれの服が目の前にある状態で飯をおいしく感じられるのか？」

「空腹は最大の調味料。」

「こびりついた血が調味料になるか！！っていうかそれ本気でおっしやってやがる？夏。一遍土の下の世界、体感してみたくないか？
「全力で遠慮するぞ」

どうやら夏葉は本気で飯を先にとるようだ。夜が満面の笑みになった辺りからもう既に夏葉は町に向かってダッシュしていた。何かを予感していたのだろうか。

「おいっ！待てバカ夏！！怪我人を置いていく気か貴様！！」

「はっはっは。お兄さんは夜の為を思って厳しく指導しているだけだぞ☆そんなつれないこと言ったらお兄さんショックで死んじゃうぞ」「今すぐ死んじやってくれ」

夜の情け容赦ない一言を聞いても、夏葉は笑い飛ばすだけで反省も何もせずに町へ走っていく。

後で思い返してみればあの夏葉の走るスピードは常人のそれとは明らかに違った。速すぎるのだ。しかしそれに気がつくのはもう少し先のことであることを夜は知らない。そしてその夜自身も常人のスピードを優に超えていたのだがそれにも当分気づかないまま過ごす

ことになる。

こうして二人は無事に目的地、ラグータリアにたどり着いた。

第4話 終わり

第5話 銀色の風によるぬいぐるみの為の小夜曲（セレナーデ）

白身魚のムニエルに、芋がのっている野菜サラダ、ポトフっぽいスープ、拳サイズのパン5個、鶏肉が分からないが何かの肉の唐揚げ、紫色の魚の鱗が見え隠れしていてなんとなく食欲を下げてくれるパイ、スクランブルエッグ（何の卵かは不明）、手のひらサイズで洋ナシのような形でりんごのように赤い果物が3つほど、フルーツ（かもしれない何か）がのっているタルト。

以上が今日の夜が食したメニューだ。

因みにメニューは多少異なるが夏葉もこれと同じかそれ以上の量を平気で平らげている。夏葉曰く、竜になってから普通の食事の量では足りなくなったとか。

「・・・以上になります。お会計は全部でちょうど銀貨1枚、若しくは銅貨100枚いただきます。」

「おい、夏。腹空きすぎてお金とか全く考えていなかったのだが、俺たち一文無しじゃなかったか？さっきの盗賊から金巻き上げておけば良かったか・・・（小声）」

「意外と腹黒いんだな。まあ心配するな。金ならこの鞆の中に入っている。」

ぼそっと呟くように腹黒さを垣間見る発言をした夜を一瞥し鞆の中から銀貨一枚を取り出して、ウェイトレスの女性の手をそっと握るように渡した。勿論輝く笑顔も忘れない。

「／／／／・・・あ、たしかに銀貨1枚頂きました。ありがとうございます。またお越し下さい！」

顔を真っ赤にした彼女は気がついたように客が帰るときに決まってしまう言葉を発した後、夏葉がこの店を出て行くまでボーっと見つめていた。

―ガチャッ

「あんた、その無意味な振る舞い、どうにかなんないのか？ 毎回毎回何処かの店に行く度にやってんだからな」

「うむ。もしかしてやきも「焼いてません」素直になれ、夜。・・・だが残念ながら俺のオアシスはあの二人だけなのだっ」

言わずもがな、あの二人とは夜の弟と父のことだ。

夜は適当にはいい、と返事をして目をキラキラさせている親友から一歩離れる。一度スイッチが入るとなかなかこちらに戻ってこないのだ。夜は深いため息をついて、ふらふらと何処に向かっているのか分からない足取りで歩いている夏葉のあとを少し距離を開けてついていった。

（・・・にしても魔術もこの異世界に存在しているとは、な。）

実はあの後、食事か治療か、どちらを優先するべきかで、町のすぐ入ったところにあった噴水のある広場で子供よろしくもめていた時だった。

「夏ッ、たしかに腹が減っているのも分かるが先ずは常識的に考え

てこっち優先だろ!？」

「分かっているなら飯を先にするべきなのだ!!」

「だゝかゝらゝ俺はこの気持ちの悪いまま飯は食いたくないの!!」

「じゃあ食わなければいいのではないか? 夜は俺がゆっくりと食事をしているときに目の前に座って調味料の役でもしていればいいのだ!」

「何で俺がそんなことを、って待て。あの血が調味料になるって話冗談じゃなかったのか!？」

という具合に言い争っていた。常識的に考えてみれば怪我人の処置が先のはずなのに、二人の意見が食い違っって一致することはなかった。

そんな喧騒を広げている二人の周りには自然と人が集まって、その中から1人の女性がカツカツとブーツの音を鳴らして二人の間に入っていた。腰まであるブロンドのしなやかな髪はまるで金色の光が舞っているかのように錯覚さえするほどの美しさを持っていた。そしてその金髪を映えさせている膝まである丈の真っ白の白衣に真っ赤なブーツ。その表情は怒りで真っ赤に染まっていた。そして、彼女の両手はぐーの形で言い争いをしていた二人の頭にすごい勢いで振り下ろされる。

ーガンッ

「ッ!?!？」

「当たったらきつと痛かっただろう。一体何のようなのだ?」

夏葉は殴られるのを分かっていたかのように片手で彼女の拳を押さえつけて免れたが、夜の場合は綺麗に頭にその拳が吸い込まれていた。その衝撃は女の人の力とは思えないぐらい強く、直撃した夜

は頭を抱えるようにして声にならない悲鳴を上げながらその場にしゃがみこんだ。夏葉は女性の手を押し戻して、強い眼光で睨み付ける。普段の夏葉なら睨み付けたりしないのだろうか、このとき彼女はこの女から鋭い殺気を感じ取っていたのだ。しかしこの睨みも止めざるを得なくなる。女の強い視線に耐え切れなくなったのだ。

あの視線で人が殺せる。

よく小説などに出てくるフレーズ。夏葉はこの言葉の意味を初めて理解できた気がした。

「何をやっているんだお前ら！！食事と怪我人の治療だったら後者のほうが先に決まっているだろうが！！そのまま放っておいたら大変なことになっているかもしれないんだ！！・・・怪我人はこっちの黒髪の方だな？」

耳を劈かれるような声音で一気に喋られ呆然としている夏葉を通り越して、しゃがみこんでいる夜の方へ颯爽と歩いていき立ち膝をして、引き裂かれて血がこびりついている服の上にそっと片手を置いて透き通るような青い瞳をスッと閉じ、魔術の詠唱を始めた。

「麗しき透明なる水の王者よ。この者の傷を癒せ、癒しの光！」
キュア

彼女の片手が薄水色の光に包まれて数秒後、夜の肩にまでその光は浸食していき数十秒でその光は消えていった。女性は目を開き夜の肩を少しの間ジッと見つめた後立ち上がり、地面についてしまった白衣の裾の部分の埃を払う。

「これでもう大丈夫なはずだ。見た感じだと魔物の爪に引っ搔かれたのだろうか？」

「どうして分かったんだ？包帯が巻いてあって傷が見えることはないのに。」

「ふふ、それは秘密だ。とにかく、次怪我をしたときは甘く見てはいけない。傷口から菌が入る可能性だってあるんだからな。今回はウルフのようだが、特にバットの爪には気をつけるんだな。」

先ほどまであんなに怒っていた表情は何処へ行ったのか、彼女は夜の質問に対して微笑をすると、怪我に対しての注意点をいくつか並べて去っていった。それと同時に二人の周りに集まっていた町の人たちもぞろぞろと自分の持ち場へ戻っていく。

町の人たちはあの女性を見てあまり驚いていなかった。いつものことか、という風に苦笑しながら見守っていたように感じる。おそらく彼女はこの町の医者か、少なくとも長い間この町にいる人なのだろう。

夜は頭をさすりながらゆっくり立ち上がり、夏葉のいたずらが成功した時のような笑みを浮かべている姿を見て苦笑した。

「まさかあんたの策が成功するなんてな。おかげで助かったが……あの女の人に少し悪い気がしなくもないな」

「惚れたのか？あの女はやめたほうがいいと思うんだが……」

「あほか。」

「照れなくてもいいぞ夜。……ふむ、それに御代はあの拳で十分ではないか。怪我也治ったことだしゆっくりと食事が出るだろう？さて、どの店に行こうか……」

あの広場で言い争っていたのは二人とも本気ではなかった。

実を言うと町に入ってみたのはいいいものの、怪我を治そうにも医者の場所が分からなかった。夏葉の頭にこの世界の常識が入っているとはいえ、いくらなんでも特定の町の医者の場所なんて知っている

わけもなく。そんなわけで二人は町の住人に医者 of 居場所を尋ね回った。が、どの町の人に聞いても、どの人も言うことは大体同じなのだ。

「この町に医者はたしかにいるが何処にいるかまでは分からない。」

この町の住民、今までよく生き残っていたな、と夜はこのとき心の中で思った。

で、じゃあどうすりゃいいのよ？と考え付いたのが、医者自ら来てもらう！（By 夏）、というもの。どうすればこちらの居場所を教えることが出来るのか、ここで夜がぼそっと「俺らが騒いでいれば自然と人目が集まってくるんじゃないか？」と呟いたのを夏葉が拾い、主に夏葉が作戦を立て、実行したところ奇跡的に成功した。ただ夜はこの策が成功したことに釈然としない何かを感じたが、

「ま、成功したんだからいいか。」

と軽く流した。

「で、夏。今実際何処に向かっているんだ？」

「ふむ、夜のその服をどうにかしないといけないと思って服屋を探しているんだが・・・」

一応向かう先は決まっていたらしい。

「そうだな。この服装、はっきり言って浮いてる。というかだ。」

夏、あんたの服装が最初会ったときから気になっていたんだが、なんで制服じゃないんだ？」

そう、密かに気になっていたのが夏葉の服装だった。夜はこの世界に来る直前と同じ格好をしているのにもかかわらず、何故か夏葉の服装は制服ではなかったのだ。改めて彼の服装を観察してみると、全体的に赤銅色の軽鎧を纏っていて腕にはそれと同じ色のガントレットを装着、靴も同様、赤銅色のブーツを履いていた。何処を見ても赤銅色。はつきりいつて眩しい。しかし夏葉曰くこれにはきちんとした理由があるらしい。そうして夏葉は右手の人差し指を立てて口を開く。

「甘いぞ夜。甘甘甘超激甘なのだッ。まだまだ思考が足りないぞ☆俺は竜になると体の大きさが何倍にも膨れ上がる。そして俺は竜になる度に毎回新しい服を買わなくてはいけなくなるだろう？ そんなのは面倒以外のなんでもない。そこで考えたのが、俺の美しい鱗で作りに出したこのアーマーなのだ。これならもとも体の一部なのだから気にする必要はまったくくない。竜になったときは鱗の一部として、人間の形的时候はアーマーとして活用できる、という優れものなのだ！」

「成程。その鎧はあんたを犯罪一步手前で留めてくれるアイテムだったんだな。」

「さりげなく俺のキャラを崩壊させるようなことをさらっと言わないでほしいのだが。」

そんなことを言い合っているうちに街道の右の方にそれらしき店が沢山並んでいるのを目にする。二人の足は自然とそちらの方へ向いていた。

「いらっしやいませ！ 何をお探しですか？」

沢山店が並んでいる中で、他とは違う雰囲気醸し出している店が1番端にあった。店の中は色んな布で作られたぬいぐるみが山ほど置いてあり、その種類は犬、猫、ウサギと多種だったが1番目に付いたのはくまのぬいぐるみだった。二人は相談することもなく何も言わずとも両者一致でその少しファンシーさ漂う店へと足を踏み入れる。そこで二人を出迎えてくれたのは、青白い顔をした30歳代の女性だった。その女性は弱弱しく微笑んで、細い銀色の髪を癖なのか手櫛を通してしている。いかにも触れれば壊れてしまいそうな、だがまた夜の父とは違った弱弱しい儚さを漂わせて、使い古された紺色のエプロンをかけながらこちらに問いかけた。

「連れの服を全体的に仕立ててもらいたいのだが。」

「こちらの黒髪の方ですね。かしこまりました。寸法だけ測らせてもらいますね。……はい、終わりました。何か色とか形など指定があったら承りますが？」

寸法を測る、といってもメジャーで測るわけではなく先ほど怪我を治してもらった女性のように夜を数秒凝視するだけで終わった。これも魔術の一種なのだろうか。夜はそんなことを考えてボーっとしていると、誰かに肩を叩かれているのに気がついてそちらに視線を向ける。

「色とか形で指定がないか、らしいのだが。」

「あー、別に何でもいいんだが……じゃあ黒と白、それから水色を必ず入れてください。形などはおまかせします。」

黒と白と水色。これは今着ている制服に使われている主な色だ。この色合いを結構気に入っていたらしく、それが理由で夜はこの3色を選んだようだ。

「分かりました。では明日、取りにいらして下さい。」

どうやら後払いらしい。二人は軽く挨拶をするとこの店を後にした。

「あの店の女性、異常に顔色が悪かったような気がするんだが、どう思う？」

店から離れてまた街道を歩き出す二人。夜は先ほどの店主のことがどうしても気になって夏葉に聞いてみることにした。すると夏葉は首を捻って怪訝そうな顔をする。

「ふむ。俺は別にそうは思わなかったが……。まあたしかに青白かったのはたしかだがな。夜がそう言うのなら何かあるのかもしれないな。」

「それどういう意味だ？」

「そのままの意味だが？まあ取りあえず今日はもう日が暮れてきたから宿を取って休むとするか」

夏葉はそう言ってまた宿を探す為に歩き出す。特別夏葉はあの女性について何も感じなかったようだ。何がこんなにも引かかっているのかは分からない。しかし夜はどうしてもあの女性が気になってしまっただけの弱弱しく微笑む表情が、銀髪が頭から焼きついて離れることはなかった。



「で、考え事をしているうちに夏葉とはぐれた、と。」

洒落にならない。

夜は愕然としてその場にボーッと突っ立っていた。もう日は既に暮れてしまつて辺りは薄暗くなっている。そしてそれに比例するように街道は混み始めてもと来た道を戻るといふ選択肢もなくなつてしまふ。あまり人混みが好きではない夜は基本的そういう場所へは行かないので対処法が分からず、ただ人混みに流されていくしかなかったのだ。

そして流されて流されてやつと人が少ない場所に出ることが出来たのはそれから約30分後だった。そして今に至る。

目の前には小さい公園があった。公園、といつても遊具は錆び付いたブランコと砂場だけ。鬼ごっこをするにしてもこの広さじゃ狭くてすぐ鬼につかまってしまうだろう。もう既に日が暮れてしまった為か公園には誰もいなかった。

人波に吞まれて体力を思った以上に消耗した夜は公園の真ん中にあるブランコまで歩いていって、ふうーと息を吐いてからブランコに座りゆつくりと漕ぎ始める。

—きい、きい、きい

漕ぐ度に響く金具の擦れる音を聞くのは小学生以来だろうか、と夜は欠伸をしながらブランコを漕ぎ続けた。遠くから聞こえるはずの喧騒はこの公園が遮断してくれているように全く聞こえず静かで、1人でボーっとしたい時にはいい場所だなぁ、と呟いてふと公園の入り口に目を向けたときだった。

そこには10歳くらいの小さな少女が等身大はあるんじゃないかというくまのぬいぐるみとウサギのぬいぐるみを抱いてそこに立っていた。髪は夜空に流れる天の川のような銀髪で腰まであるその髪を薄ピンク色のリボンで軽くとめている。服もリボンに合わせたような薄いピンクでドレスの裾が短いような服を着ている。そしてその夜空のような深い青の瞳にはブランコを濃いでいる夜をたしかに映していた。しかし何も喋ることもなくただそこに立ってこちらを見つめてくるだけだった。

（何も言わないが、もしかしてブランコに乗りたいのかもしれないな。あのお年頃じゃ恥ずかしくて言いにくいんだろう）

そう思った夜はブランコの勢いを利用して軽く飛びスタツと地に着地すると、こちらを見ているだけで何も言わない少女に手招きをする。すると少女は無表情のままこちらにゆっくりと歩いてきて夜まであと1mというところでピタツと動きを止めた。

「……………」

何も言わない少女に夜は微笑みながらしゃがんで視線を合わせて口を開いた。

「ブランコに乗りたいのか？」

すると少女は人形のようにこくと首を縦に動かす。ブランコはあいている。でも少女はブランコのところに行こうとせずに夜に興味があるのか、先ほどからずっと目を逸らすことなく夜を見つめていた。そんな少女を見ていた夜は首を少し傾げ、少女に手を伸ばす。

「じゃあ俺と一緒に乗るか？」

言った後に少し後悔した。これじゃあまるで夏みたいでないかと。しかし結果的には良かったのか、少女は一瞬首を傾げてからまた首を縦に振る。そうして恐る恐る夜の手に小さなかわいらしい手を乗せた。その手はまるで氷のように冷えていて、とてもじゃないが本当に人形のように思えてくる。しかし夜は首を軽く振ってその思考を払い、怖がらせないように微笑みながら彼女を抱き上げ、ブランコの上に座って漕ぎ始めた。思った以上に少女が軽く、体全体が氷のように冷たいことに驚きながらも夜は少女がずり落ちないように片手で少女の体を優しく押さえつけながらゆらゆらとブランコを揺らす。

そしてふと空を見上げてみればもう空には星が輝いていて月が顔を出していることに気がつく。そういえばこの少女の親は心配してないのだろうか？こんな夜遅くまで外で遊んでいたら親が心配するのが当たり前。そのことについて聞こうと夜が口を開きかけたときだった。

「ティオ！！勝手にこんな遅くに外に出て行ったら兄貴が心配するだろ！……ってお前はたしかあのときの！！」

走ってきたように息を乱しながらも大声を出せることに驚きながら、夜はこの公園の静寂を一気に壊した張本人に胡乱な目を向けた。驚いたことにその張本人とは、町の手前で会った中年盗賊たちの中にただ1人いた少年、ハークだった。

「はは、また会ったな。」

「会ったな、じゃねえよ！あたかも知り合いみたいに気安く話しかけるな！それよりも早くティオを返せ！！この臆病野郎！」^{チキン}

「ぐはっ・・・あんた、俺の1番気になっていることをそう易々と当てやがって・・・」

実はあの時逃げたことを気にしているらしい。そして自分のことを臆病野郎だと認めているらしかった。それをサクッと突いてきた少年は何か才能を感じずにはいられない。

その少年はこげ茶色の少し長めの前髪を邪魔そうに片手で退けながら、今にも飛び掛ってきそうな気迫で夜を睨み付ける。しかし夜は別に敵対しなくてはいいけないわけではないのでその少年の視線から目を離すと、

「はいはい、お姫様はお返しますよ王子様。はい、どうぞー」

と棒読みで言うのと軽々しく少女を抱き上げて入り口まで歩いていき、少年の目の前に壊れ物のようにそっと下ろした。

「なっ／＼／＼／おれは王子様じゃねえし！しかもお前なんなんだよ！勝手にひとんちの庭に入ってきて！ばれれば兄貴に殺されるぞ。」

少年は余程王子と呼ばれたことが恥ずかしかったのか顔を真っ赤にして抗議したが、夜はそれを軽く流した。どちらかといえば夜はその後の台詞の方が気になり、つい聞き返してしてしまう。

「・・・兄貴？」

「この庭の持ち主、そしてティオの兄貴だよ。いいか、金輪際ここ

には絶対近づくなよ！今日のことは、秘密にしといてやる・・・
ティオと遊んでくれて、その・・・あ、ありがとな！」

最後の言葉は小さすぎて夜の耳に届かなかったが、ティオの手を引きながら顔を真っ赤にして走り去る少年を、悪い奴だとはどうしても思えなかった。

「・・・あいつ、案外いい奴なのかな。」

（・・・でもどうしてそんな少年が盗賊の真似事なんてしていたんだ？どう見てもあいつは盗賊に向いていないのは素人の俺でも分かることなのに・・・）

夜はそれから夏葉に見つけてもらえるまでの2時間あまり、考え事をしながらブランコに座りゆらゆらと漕いでいるうちに眠くなりそこで寝てしまったのだった。

第5話 終わり

第6話 夢の中による寂しい声の為の小奏鳴曲（ソナチネ）（前書き）

遅くなってすみません m
（ m
ではどうぞ ^^

第6話 夢の中による寂しい声の為の小奏鳴曲（ソナチネ）

「だってしょうがないだろ？好きで迷ったわけじゃねえし。」

夜が盛大な欠伸をしながらボソツと言いつつ、視線はボーっとして、何処を見ているのか分からない。そしてその顔にはうんざりとした表情を浮かべていた。

「此処が知っている土地だったらそれでいいが、もし俺が見つけれなかったらどうするつもりだったの？夜よ。」

「どうするったって、あそこで朝になるまで寝てたんじゃないか？」

「はぁ……。お前を怒ろうとした俺が超バカだったのだ。次から外に出るときは首を縄できつく、窒息するくらいに絞めて引きずり回すことにするか。」

「俺を殺すこと前提かよッ！」

「ちよっとしたお兄さんのお茶目な冗談だ☆」

夏葉は何処から出したのかその両手には薄茶色の縄が握られていて、どう考えても今の台詞を冗談だとは思えない。夜はそんな鬼畜じみた行動をとる親友から素早く距離をとって壁際に背中をつけ、身の安全をいち早く確保する。

「冗談だと言っているんだが……。まあそこまで嫌なら次からは同じ事を繰り返さなければいいだけなのだ。」

「はいはい。それより流石にもう夜遅いんだし寝かせてくれ。」

誰の所為で遅くなったと思っているんだ、と夏葉は言いたくなかったが今何を言っても筒抜け状態だと分かっている夏葉は心の内に留めてそうだな、と呟いた。するとその葛藤が顔に出ていたのか、夜は

そんな夏葉を見て少し眉を顰めた後に、

「あー・・・今日は悪かったな。次から気をつける。」

と夏葉に聞こえるか聞こえないかの音量で呟く。それが聞こえたのか夏葉は肩をすくめ、一瞬笑ってから部屋の入り口から見て左側にあるベットに横になってランタンの明かりを消し、夜は右側のベットに寝転がって目を閉じた。



！・・・お願い・・・く、はや・・・私を・・・よ・・・で・・・

（何、だ・・・この声は・・・誰だ？）

！！
ねがい・・・はやく、早く私を召喚して下さいっ

「・・・だか・・・ら、誰なんだって聞いてるんだろうがああああッ
！！・・・はっ。」

「これからお前のことをミスター目覚ましと呼んでやろう。ありが
たくなるのだ、夜よ。」

気がつけば上半身を起こして利き手である左手を、何かを掴もうと
していたかのように前に伸ばしていた。そして額に青筋を浮かべな
がらやけに低い声音で皮肉る夏葉。もろに怒ってますオーラが彼の
周りを覆っていた。どうやら大声を出した所為で起こしてしまった
らしい。

「あー・・・悪い。今のはなかったことにしてもう一度寝てくれ。
・・・俺ちよつと外に出て空気吸ってくるわ」

そんな夏葉を見て夜は本当に悪いと思ったらしく素直に謝り、何か
考え事をしているのか、煮え切らない表情をしながら心ここにあら
ず状態で部屋から出て行く。そんな夜を目を側めて見つめる夏葉も
何かを思ったのか意味深な表情を浮かべて、部屋から出て行く夜を
目で追ったが、それだけで決して追いかけようとはしなかった。夏
葉なりに何かを考えたのかもしれない。

「・・・・・・・・。」

ふと窓に視線をやると窓の外はまだ薄暗く、明るくなるまでにはま
だ時間がかかりそうである。すっかり目が覚めてしまった夏葉はベ
ットから起き上がりその部屋にひとつしかない木造の椅子に座って、
今日の行動計画を考え始めたのだった。

今二人が泊まっている宿は老舗感が漂う木造の建物で、夜はこの宿を結構気に入っていた。何故かこの宿にしていると精神的に落ち着くのだ。以前住んでいた自分の家と同じものを感じているからなのか。夜が泊まっている部屋は二階にあり、階段から右に見て数えて3つ目の部屋である。部屋から出て廊下の壁にある窓の外はまだ薄暗く、下の階からも物音ひとつ聞こえてくることはなかった。それなので夜は足音を立てないようにそっと木造にギシギシなる廊下を歩いて階段を下り、1階にある食堂を通って外に出た。この異世界に季節があるのかは分からないが、今いるところは日本という春みたいな気候でとても気持ちが良いのだが、流石に朝は冷えるのか地味に寒さを感じる。特に肌が剥き出しになっている部分、右肩の部分が冷える。そこをほぼ無意識に片手で押さえつけながら夜はふうっとため息について周りを見回した。そしてふと首を傾げて独り言を呟く。

「・・・なんでさっき、俺急に飛び起きたんだ？」

（たしか起きる直前までなんか夢見てた気がするんだが・・・どんな夢だったんだ？ いや、そもそもなんで俺大声出したんだ？ 何か大事なものを見た気が・・・。駄目だ、思い出せない。）

「・・・はあ。」

魚の骨が喉に刺さっているような不快感が渦巻く。しかしいくら考えてみても思い出すことは出来ずに暫く暗い表情をしていたが、ふいに鳥の鳴き声が聞こえてきて我に返り表情を元に戻すと宿の中に戻っていった。

“ お願いです……。早く気がついて……。 ”

「……。？何か聞こえたような……。まあいいか。」



「よし、朝食も食べたし、今日はどうするんだ？」
「ふむ。そのことでなんだが、夜にも少しこの世界について知っておいてもらいたいのだ。」

朝食後。二人は宿屋の借りている部屋で夏葉は椅子に、夜はベツトに腰掛けて今後の予定について話し合っていた。

「ああ、そうだな。ある程度は知識として持っていたほうがいいよ

な。じゃあ夏先生、ご指導よろしくお願いしまーす」

夜が笑いながらふざけて生徒の真似事をする、夏葉もそれにのって眼鏡をかけているふりをしながら、うむ、いいだろう、と少し高圧的な態度に変えて返事をする。一応モデルは学校の担任らしい。夏葉は鞆から使い古されたように見えるボロボロの紙をテーブルの上に広げて、得意顔で人差し指をその紙の中心にトスツと立てた。

「では先ず簡単に地理を確認するのだ。俺たちが今居るところは・・・」

夏葉の指がスーッと右斜め下に滑っていき、この紙の中心に描いてある一番大きな丸のその下にある中くらいの丸の上で止まる。そこにはエストゥア大陸と書いてある。

「このエストゥア大陸。そしてその大陸の南に位置するのがこのラグータリアの町なのだが、ここは南の大陸の中央都市サントウルに続く道程にある町だから人通りが多いのだ。」

「ふうん。だから夜になっても人が減るどころか増えてたのか。」

「うむ。そしてこの大陸を治めているのがアグリキュル国の王であるテュール国王。この国は農業が盛んなことで有名なのだ。中央に近づくにつれて畑が多くなってくるのが嫌でも分かると思うぞ。そして・・・」

指がまた紙の上を滑って中央に位置している一番大きな丸の上で止まる。

「このセントロン大陸。この大陸は見て分かるとおりこの世界で一番大きい大陸だ。主に三つの国によって治められていて、ひとつはこの大陸の上、つまり北に位置する国、ノルテ帝国が治めている。」

実質上この国がこの大陸半分以上の領土を所持していて権力はこの国が一番強いと言われている。二つ目が下左半分を領地としているエステイリア神聖国。この国は宗教の影響が濃すぎて色々やばいことを裏で行っている、と最近あまりいい話を聞かない。出来れば近づきたくない国だな。そして最後に下右半分を治めている港国スイーマール。ここは貿易が盛んで物を揃えるならここで全て揃ってしまうといわれているのだが、取引されているのは表だけではないよ。うなのだ。ここも要注意だな。」

一気に中央の大陸について説明されてしまったが、正直頭が混乱している夜は声に出して整理してみることにした。

「えーっと、中央大陸は3つの国に分かれてて一大勢力がノルテ帝国、そこで次がエステイリア神聖国。そして港国スイーマール・・・だよな？」

「流石なのだ。記憶力だけが取り柄の夜が記憶力まで失くしたならもう何も残らないからな。」

「はいはい。分かりましたよー。んで？」

夜が適当に夏葉のからかいを流しながら続きを促す。まだ夏葉の指が指していない丸が2つあるのだ。それらは中央大陸の南側と北側に位置している。

「なにか流された感があるが、まあいいだろう。で、この中央大陸の下にある小さな大陸だがこれはズーデン大陸といって、ここには主に亜人が住んでいる。所謂エルフやドワーフといった人種だな。この大陸は沢山の集落が集まって成り立っているらしく国という単位は存在しないらしい。」

「亜人か・・・。ちょっと会ってみたい気はするな。」

「まあ暇が出来たら行ってみようではないか。そして最後にこの北

端にある大陸だが、この大陸には魔物が異常繁殖しているらしくて今のところ未開拓。噂では魔王が住んでいるのではないか、と言われているらしいが、真実は闇の中なのだ。」

「へえ。で、この大陸の名前が、「ノルデン。ノルデン大陸。」

夜の言葉を遮るようにして言葉を続ける夏葉。

「これで一応地理の簡単な説明は終わりなのだが、理解したか？」

「・・・まあとりあえずは、大丈夫だと言っておく。」

怪しい返事をする夜だが、まあ大丈夫だろうと夏葉はテーブルの上に置かれていた簡易地図を八つ折に畳んで鞆にしまい、地理の講義はもうこれで終わりだと夜に告げた。そして今度はその鞆から何も書かれてない紙とペンを取り出してテーブルの上に置く。

「で、次はお前の戦い方について、なのだ。これから旅をするにあたって魔物と戦う場面には何百回と遭遇するだろうと予想されるのだが、その時俺一人で戦うのが難しくなることがあると思うのだ。そこで、夜には後方支援、つまり魔術を覚えて援護して欲しいのだ。」

ビシッと人差し指を夜に向ける夏葉。（注意 良い子も悪い子も人を指さしてはいけません）

しかし夜はふと思い出していた。実はこの町に着くまで約半日歩いていたにもかかわらず、一匹たりとも魔物とエンカウントしていなかったのだ。

「因みにここに到着するまで魔物に遭遇しなかったのは俺が牽制していたからなのだが、それを毎回やると流石に疲れる。今回は夜が怪我をしていたからそのようにしていただけなのだ。」

「?牽制って?」

「俺は魔物の頂点に君臨するといわれている古代火竜の子孫なのだぞ。そこらにいる魔物なんて雑魚中の雑魚。それくらい出来なくては竜の名が廃るのだ。」

エンシェントファイヤードラゴン

つまり大抵の雑魚だったら避けることが可能、ということらしい。正確には夏葉が殺気を飛ばして牽制している間だけだがそれでも十分だ。意外にも夏葉が転生した体は能力が色々と優れているようだ。そこで夜はまたもやふと思った。

(あれ?俺って人間、に転生したんだよな・・・?)

夏葉みたいに髪や瞳の色が変わっていなければ、今まで特に身体能力的に変わったこともない。尻尾が生えているわけでもなければ耳が尖っていることもない。

(これはやっぱり何処からどう見ても人間以外考えられないよな?)

とにかく人間ならば特に心配することはない。そう思うことにして夏葉の話に耳を傾けることに専念することにした。そうしないといつまでも同じことを考えてしまいそうだったから。

「で、魔術だが基本的に魔術を使う際は何か要となるものを持っていく必要がある。たとえば、町の外であった盗賊が魔術を唱えるときに持っていた本。それから一般的には杖とかが多いのだ。稀にその要がなくても魔術を使える人がいるがそれは魔力が異常に多いやつだけが出来る荒業だと言っておこう。」

夏葉はペンを手に取り何か関係図のようなものを書いていく。そこにはよくRPGなどに出てきそうな設定の属性関係図が書かれてい

く。

「・・・よし。先ず属性は大きく分けて4つ。元素属性というのだが、火、水、風、土。そしてその派生属性が炎、氷、雷、木。そして古代属性が光と闇。合計10の属性が存在している。そして最後にどの属性にも属さない“無”。これは一般的によく使われているのだが、そうだな・・・たとえば昨日服屋に行って寸法を測ったときにメジャーを使わなかったのだが、それも無属性魔術の一種なのだ。他にも重いものを持ち上げるときなどに使われることが多いな。」

ようやくあの時、服屋で思った疑問を解決することが出来た。やはりあれは夜の予想通り魔術だったようだ。この分だと無属性といっても色々な種類の魔術がありそうだ。夜は少しだけ今まで感じたことのない興味を覚える。

「たしかに多くの人が使える魔術は元素属性魔術と無属性魔術に限られてくるのだが、実際無属性魔術を極めたら軽く古代属性魔術をも抜く威力の魔術らしい。まあこれは置いて、今はとりあえず基礎だけ覚えてくれればいいのだ。」

「分かった。でも基礎っていつてもなあ・・・。どうすれば魔術って使えるんだ？」

「知らんのだ。」

「そうなんだよ。知らないんだ。・・・って知らないだって!？」

夜が怪訝な顔をして素っ頓狂な声を上げながら夏葉の顔を凝視する。すると何が得意なのか知らないが、いかにも俺が知るはずないだろうといった得意げな表情でこちらを見つめ返すものだから、あ、これは本気で知らないんだな、と悟る夜。

「もしやりかたを知っていたら、魔術なんて便利なもの使っていない方がおかしいのだ。」

「そんな自信満々な顔して言うなッ！大体あんた口から火吹いてたんじゃない……」

「あれは竜だったら誰でも出来る。しかも俺は火竜だから火くらいは自由に操れるのが当たり前なのだ。」

また地味に自分を売りに来ているところがいらつと来るが、夜はその感情を抑えて盛大にため息をつき眉を顰めた。

「つまり、自力で習得しろ。そうゆうことなんだろう？」

「うむ。物分りが早くて助かる。取りあえずこの町には色々と整理するために3日間居るつもりだからその間に何でもいいから魔術を習得してくれると助かるのだ。」

（こいつ笑顔でさらりと難問言いやがった！！）

3日で習得。何か手がかりがあれば可能になってくるかもしれないが、全くとっていいほど分からない。とりあえず先程の話からすると“要”というものが要になってくるわけなのだがそれも何処で手に入るのか、どういう形のも物が優れているのか、属性とかで使用するものは限られてくるのか、などと言いつつ出したらきりがなくらい疑問が多すぎる。せめて何か取っ掛かりでもあれば……。

考え込むようにして俯く夜の周りにはもやもやと黒い物が渦巻いている。これはそのままにしておいた方が良さそうだと判断した夏葉は苦笑してから、鞆の中を探り始める。この鞆はシオルダー式になっていて、大きさは大きすぎず小さすぎず持ち運ぶのに最適なサイズになっている。実はこの鞆は夏葉がこの世界に転生したときからあったもので、中には最低限の必要なものが入っていた。具体的に

挙げると、早速役立つ救急セット、先程まで使っていたこの世界の簡易地図、ペン、白い紙、金（金貨1枚、銀貨5枚、銅貨50枚、木貨50枚）と、その他諸々。

因みにこの世界共通のこの貨幣だが、金貨1枚は銀貨100枚と、銀貨1枚は銅貨100枚と、銅貨1枚は木貨100枚と同じ価値がある。木貨は日本円でいう1円だと思ってくれればいい。つまり、木貨1枚は1円、銅貨1枚は100円、銀貨1枚は1万円、金貨1枚は100万円に換算することが出来る。この世界では基本的物価は日本に比べれば市場が没落するんじゃないかというほど安く、大体銅貨が3枚あればおいしいご飯一食分を手に入れることが出来る。ついでにこの宿の値段だが一泊銅貨5枚で朝夜の食事がつく。というわけだから当分は金の心配をしなくて良さそうだと、夏葉は息を吐きながら今現在の所持金を数えていた。

すると先程まで俯いてもややオーラを大量生産していた夜が、唐突に口を開く。

「・・・なあ夏。俺さ、ここらにある店とか見て回りたいんだがちよつと出てきていいか？魔術を使うには要ってやつが必要なんだろう？それを買う買わないはともかく一度見ておきたくてな。」

「少なくとも此処ですつと考え込んでいるよりは効率的かもしれない。うむ、だったら俺も行こう。お前を一人で歩かせるわけにはいかないのだ。」

「あんたは俺の保護者かッ」

夜の鋭いツツコミが入るが、唇を上吊り上げるだけで訂正する気は全くといって良いほどなさそうだ。

夏葉は鞆に数えていた貨幣が入っている巾着をしまい金具を留めてシオルダーを肩にかけ、もう外に出る準備が整ったようだ。椅子から立ち上がり服のしわを直すようにアーマーを軽く叩く。そうしてドアのほうに歩き出すが、何かを確認したいのか一度止まって夜の

ほうを向く。

「とりあえずお前の服を取りに行ってから、他の店を回るつもりなんだが・・・」

「あー別に何でもいい。とりあえず外に出ただけだからさ」

そんな夏葉に生返事を返す。まだ何かを考えているようだったが夏葉は特にそれに触れることなく、二人はこの部屋を後にした。

「・・・気づいてくれない。私は、要らないのかな・・・」

鈴を転がしたような、寂しそうな声がその部屋に響いた。

6話 終わり

第

第7話 突風の盗賊による少女の為の遁走曲（フーガ）（前書き）

この話はハーク視点から始まります。

第7話 突風の盗賊による少女の為の遁走曲（フーガ）

「ハーク。」

地を這うような声音でハークのことを呼ぶのは、目の前で気持ちよさそうに寝ているティオを膝の上に乗せている兄貴、つまりティオの兄だった。髪はティオと同じ銀色で、もみあげだけが不自然に長い髪形をしている。剣呑な光を宿す碧い瞳はティオに向いたままだ。そしてハーク曰く、彼のシスコンぶりは度が過ぎすぎているらしい。

「はい。何ですか？」

「お前、もう残り少ない魔石をティオに持たせて外に内緒で出したらしいな。何故そんなことをした？」

それ故にティオのことになると半端じゃないくらいに激怒する。表情はいたって冷静だがよく見ると彼の額には青筋が浮き出ているのが見える。これは完璧に怒ってる。ハークはそう思って内心で舌打ちをした。

因みに魔石とは、魔力が石に蓄積された物の事を指す。魔石は普通の道端に落ちている石とは違って、蓄積されている属性によって色が変わり、蓄積されている量が多いほど宝石のように輝く石となる。それは人為的に作られるものもあれば自然に出来るものもあり、人為的なものより自然的なものの方が希少価値があり蓄積された魔力の質が良いので高値で取引される場合がある。主に宝石店などで売られている場合がほとんどだが稀に市場とかで安売りされているものもある。つまりピンきりというわけだ。

「お前はティオが病気なのを知っているはずだろう？もしティオの

体の中にある魔力が抜けきってしまったら死んでしまうんだ!!」
「…………すみません、でした。」

ハークは頭を下げ、素直に謝る。ハークは彼女が先天性の病気に罹っているのは前々から知っていた。しかし先日、彼女と偶々この屋敷の廊下で出くわしたとき、彼女が外に出たいと呟いているのを聞いたのだ。それでハークはこっそりと倉庫にある残り少ない魔石を持ち出して彼女に渡し、ティオの兄に確認することなく外に連れ出したのだ。もし仮に確認なんてしたものなら出入り口という出入り口を厳重封鎖されて、外に一步も出られない状況になってしまうおそれがあったのだ。というか必ずそうだっただろう。あのシスコンぶりを甘く見てはいけない。

「…………まあいい。お前のことだから良かれと思ってやったことなのだろう。今回だけは見逃してやる。」

と思っていたハークだったのだが、何故か今回はすんなりと引き下がったので驚いて御礼を言うのも忘れて、ティオの兄の顔を穴が開くように見つめる。その碧い瞳はいつの間にかハークの方に向いていて、口は三日月形に歪められている。ハークはその笑みが不気味で背筋に悪寒を感じてブルツと震える。そしてその勘は見事に当たった。

「今さっき市場に無属性の魔石が出回っているという情報を掴んだ。それもとて希少価値が高いクリスタル並みの輝きを持っているという。それをとって来い。これはいつもと同じだが手段は一切問わない。取りあえず手に入れてくればいい。分かったな。」

無属性の魔石。しかも上質のものときた。普通、元素属性で上質の魔石の値段は約銀貨50枚は軽く越える。派生属性はそれの0.5

倍、古代属性は2倍の値段だ。それなのに今まで無属性を極められた人の数は片手で足りるといわれているのに、その無属性の魔石が市場に出回ったとしたらおそらく金貨50枚は軽く越えるだろう。何せ上質な無属性魔石の出現率は生きている間に見れるか見られないかというところなのだ。国の王が欲しがって買ったっておかしくはないくらいだ。

（・・・そんなものをどうやって手に入れろと？流石にこれは唯単に盗むだけじゃいけないよなあ・・・ふう。無理難題押し付けてくれたな。）

でもやらなければきつと目の前にいるシスコン野郎は激怒してもう二度とティオに会わせてもらえなくなるかもしれない。そう思うと断ることなんて出来なかった。

「・・・はい。」

「なら早く行け。時間は刻々と迫っているのだからな・・・。」

一瞬悲しそうな表情を見せたような気がしたが気の所為だったのかもしれない。ハークは何かを思いつめたような顔をしているティオの兄の顔を一瞥してから、素早くその部屋を出た。

―ボタンッ

（・・・今回ばかりは、失敗するわけにはいかない。あの感じだと、もうティオは・・・）

「・・・よし。行くか。」

嫌な考えを振り払って気合を入れるために頬を軽く叩き、何かを決

意するかのように窓の外真っ青な空を見つめた。

「ティオ……。お願いだ。独りにしないでくれ……。」

ハークが出て行った後。

ティオの小さな頭を優しく、大事なものを触るように撫でる。その指先は微かに震えていたが、当の本人は態と気がつかないふりをしていた。

「……。もう、時間がない……。ティオ……。」

銀色の髪がサラッと肩の上から零れ落ちた。



時は遡って1時間前。

「こんにちはー。服出来てますか？」

「あ、いらっしやいませ。勿論出来上がっておりますよ。どうぞ中に入って試着してみてください。」

あの妙にファンシーな服屋に夜の服を取りに来た二人。出迎えてくれたのは勿論美しい銀髪の青白い女性だ。今日はベージュのエプロンをつけている。心なしかこの間より少しだけ元気そうに夜は見えた。

「ん？」

「どうしたのだ、夜？試着しないでいいのか？」

「あ、ああ。じゃあ試着させてもらいます。」

夜はそう返事をして彼女と店の中に入っていく。すると少しして女性だけ帰ってくる。

「で、御代はいくらなのだ？」

「あ、御代はお客様が気に入って下さったら銀貨1枚もらうことになってます。」

「ふむ。じゃあもし気に入らなかったらどうするのだ？」

夏葉が少し意地悪なことを聞くが、女性はにっこりと微笑んでこう言った。

「気に入ってくださいさなければそれはタダで差し上げます。私は仕事に見合った御代しかもらわないことにしているのです。よければ貴方にもなにか仕立てましょうか？」

「ククツ・・・遠慮しておこう。間違えて気に入ってしまったら御代を払わなければいけなくなるからな」

夏葉は彼女の返答が気に入ったらしく、それに見合った返事をする。すると彼女は困ったような笑顔で、ありがとうございます。でも少し残念です、と茶目っ気たっぷりに返した。

とそこへ試着を終えた夜が店の奥から出てくるのが見える。両手には先程まで着ていた制服とローファーがあった。

「試着終わったが、どうだ？」

「どうだってお前は怎なのだ？」

夏葉は苦笑して答えを促す。すると夜は、自分の服装を一度見回してから口を開いた。

「あー、うんまあ、良い、かもな。なんかすごい軽いし動きやすそうだ。色もきちんと使ってあるし俺は何もいうことないが？」

「だそうだ。たしか御代は銀貨1枚だったな？」

夏葉は鞆から銀貨1枚を出して彼女の手を握るようにして渡した。

彼女は少しだけ顔を赤くしてやわらかい笑顔でお礼を言う。しかし彼女が顔を赤らめたのは夏葉だけが原因というわけではなさそうだ。彼女にとって、自分が仕立てた服を気に入ってもらえるというのはとても嬉しいことであつたから。

そんな彼女を微笑みながら眺めていた夜は、彼女の美しく輝く銀髪に目を奪われる。そして夜は怪訝そうに顔を歪めた。この銀髪を何

処かで見た気がしたのだ。そしてこの店の所々にあるぬいぐるみも。思い出せそうで思い出せないことをもどかしく感じながら、彼女の銀髪から目が離せなかった。するとそれに気がついた彼女がこちらを向いて首を傾げたのに気がついて、夜はハッと気がついたかのように視界を彼女から外した。

「あ、あの。」

すると彼女は彼らを呼び止めるように小さく声を発す。するとそれに気がついた夜は再度視界に彼女を入れて、軽く首を傾げた。

「どうしました？」

「あ、その貴方が持っているその服、良かったら私が直しておきましようか？ 迷惑でなければ、ですが・・・あつ、勿論タダで、です。」

女性は顔を真っ赤にして挙動不審に目を彼方此方に忙しく動かしている。そのとてもかわいらしい仕草は彼女を若々しく見せるのに一役買っていた。そんな彼女を夜はきょとんとして一瞬見つめてから、微笑んで制服とワイシャツを彼女に差し出した。それを彼女は優しく包み込むように受け取る。

「じゃあよろしくお願いします。また明日、取りに来ますね。」

「は、はい！ またいらして下さい！」

彼女は温かい笑みを浮かべて夜に頭を軽く下げた。そのやり取りが終わったのを見計らって夏葉が絶妙なタイミングで声をかける。

「じゃあ、行くか。」

「あ、ああ。そうだな。では、ありがとうございました。この服は

死ぬまで大切にします。」

「ふふっ。そこまでして下さるなんて嬉しいです。こちらこそありがとうございました。あ、もし良かったらここからひとつ好きなぬいぐるみ持っていて下さい。」

「夜。どれにするか好きなのを選んでいいぞ。俺は別にいいからな」

「は？それじゃあまるで俺が欲しがってるみたいじゃねえかッ！」

「欲しくないんだったら帰」よし、じゃあこの黒い猫のぬいぐるみ、いいですか？」

欲しかったらしい。

実は可愛いものには目がない夜。しかも飼っていたペットの黒猫に激似していたのだ。欲しくならぬはずがなかった。夏葉がにやついた笑みを見せているのを無視して、彼女からぬいぐるみを受け取り満ち足りた表情でこの店を後にした。

「ふむ。それにしても彼女のセンスの良さには目を見張るものがあるのだ。夜に雰囲気かびったりあっている。」

夏葉が心底感心したように夜の服装に目を向ける。

全体的に薄い黒の生地で作られているフード付きのコートは、裾や袖の部分に白い幾何学的な模様が刺繍されていて、腰には長い水色の布が巻かれている。中には体にぴったりフィットするタイプの布で作られた動きやすい長袖の黒いTシャツに、下は所々に黒いワンポイントが入っている灰色のパンツで、靴は黒と白の革生地に水色の皮ひもで結ばれて作られたブーツだ。見た感じだと夜の飄々とした雰囲気かびったりと合っている。まあ今は手に黒い猫のぬいぐるみが握られていてなにか違和感を感じるが。

「ふーん。まああの店は良かったよな。（ぬいぐるみくれたし。）それより今から何処の店に行くつもりなんだ？」

夜は持つのが面倒になったのか左肩にぬいぐるみを乗せて、夏葉に問う。その格好は、何かアンバランスだ。全体的に黒くて遠くから見れば多分飄々とした格好いい感じに見えるのだろうが、近づいて見てみると、それをファンシーな、おかしな格好に肩にくたつと乗っている黒猫のぬいぐるみがさせているのが分かる。そのおかしさに気がついていいのかいないのか、夜は特に気にしている風もないようだ。夏葉は微妙な顔をしながらそれに答えた。

「ふ、ふむ。実は店に行くのではなくて、市場を見て回ろうかと思っ
っているのだ。市場だと普通の店に売り出されていない掘り出し物
がある可能性があるのだ。」

「ああ。そんならそれでいいんじゃない。」

「うむ。で、一回宿に戻ってそのぬいぐるみ、置いてくるか？」

「あー・・・別にいい。面倒くさいし、このまま市場に向かってく
れてかまわない。それよりこのローファーとかをその鞆に入れてく
れないか？」

どうやらこのまま人が沢山行き来している場所に行く気らしい。夜
の考えが時々、いやいつも分からなくなる。そう心の中で呟いてか
らこっさりため息をついて夜から靴とスラックスを受け取り鞆の中
にしまい込むと、市場に向かって歩き出す夏葉だった。

「あー、ご主人様格好いい・・・です？って言っている場合じゃあ
りませんでした・・・。ご主人様、早く思い出してくださいよーっ
！！」

「よしっ!! やれやれえ!そこだっ!」

「いけっ!頑張れッ」

「おおっ!あの男立ち上がったぞ!!そのまま殴れっ!」



市場は何か起きているのか、ものすごい喧騒に包まれていた。人だかりが何かを囲むようにして出来ている。

「？一体何が起きてんだ？」

「この感じからするとおそらく誰かはた迷惑な奴らが喧嘩でもしているんじゃないか？」

結論から言うと夏葉の予想は当たっている。その人だかりの中心では中年くらいの男性二人が殴りあいの喧嘩を繰り広げていたのだ。しかもその周りの人たちは止めるどころか応援しながら白熱状態にあった。これでは誰にも止められそうにない。

夏葉は全く興味が無いのか全く見ようとしませんが、夜は肩にぬいぐるみに乗せたまま背伸びをしてどうにかして見たいと頑張っていた。それを見た夏葉は、当分夜がここから動くことはないだろうと踏んで苦笑した後、夏葉も視線を真ん中で喧嘩している二人に目を向けた。

準備は整った。市場は今や白熱した闘技場状態。誰も品物を見ていない。

（あの二人が協力してくれて良かったぜ。取りあえず魔石は、つとよし。まだ買われてない。ついてるな。）

ハークが立てた作戦に協力してくれているのはギリとブラウだ。ギリは夜たちを襲ったときに短剣を持っていた男で、ブラウはそのとき一緒に撤退した仲間だ。彼らには市場でなんらか目を引くよ

うなことをやってくれればいい、と言っただけだったのだが結果的には上々だった。ハークは今誰もこちらを見ていないことを確認して露天に出ている無属性の魔石に手を伸ばす。

（よしっ！これで今日のミッションは終了だ。誰にも見られてないし、このままずらかれば問題な・・・）

問題なく終わるはずだった。が、それは甘かった。

「よっ、ハーク。また会ったな。」

ビクッと肩を震わして後ろを恐る恐る振り返る。そこには先日見知ったばかりの、珍しい黒髪黒目の青年が何故か知らないが肩にかわいらしい黒猫のぬいぐるみをのせて、左手を上げていた。ただ彼の表情からはハークが盗みを働いている場面を見たかどうか読み取ることが出来なかった。ハーク本人は知らず知らずのうちに声をかけられてのが夜であって良かったとほっと息をついてから彼に怒鳴った。

すると夜は彼が小さい音量で、でもすごい迫力で怒鳴るのを予想していたように素早く両手を耳元につける。

「ってまたお前かああああッ！！なんでそう都合が悪いときに出てくるかなー・・・。ああっ、もうこうなったらお前にも責任とってもらうために来てもらうからなッ！ウィンディー！俺らを何処か人の気配がないところまで飛ばしてくれ！！あ、因みに地上にな。」

一瞬風が笑った気がした。ハークが魔術の呪文らしきものを唱え終えるとフワッと風が彼らの周りに優しく巻きつく。そして次の瞬間には黒い猫のぬいぐるみを残してもうそこには誰もいなかった。

―ドスッ

「いてっ。」

「よっ、と。うん、まあここまでくれば大丈夫だよな。って大丈夫か、お前？」

気がついたら地に格好悪く尻餅をついていた夜。ハークはこうなることを分かっていたように綺麗に着地していた。そして周りを見回して安全を確認してから眼下で尻餅をついている夜を見つけて、何とも形容しがたいような妙な表情を浮かべてから夜に片手を差し出す。夜はありがと、と礼を短く言って手を借り立ち上がった。そして周りを見回して、顔を顰めた。

「此処、何処だ？」

「多分ラグータリアから約2キロぐらい離れたところ、だと思う。」

自信なさそうに明後日のほうを向きながら言うハークに、夜は半眼で軽く睨む。するとハークは慌てたように言い直した。

「だ、大丈夫だって。すぐおれの魔術で戻れるから！！」

「ふーん。ま、別にすぐ戻らなくなったっていいけど。」

「だよなー。実はさ、おれさっきの魔術でほとんど魔力使っちゃっってもう一度転移する魔力は残ってないんだ。」

「はい！？」

「ごめんって！！大丈夫だって。2キロぐらいだったら余裕で日が暮れる前に町に帰れるからさ。」

ハークがあまりにも自信満々に言うので、夜は渋々納得するしかなかった。どっちにしろ今すぐには町に帰れないのだから。それに。

（こいつから魔術について色々と聞けるかもしれないな。）

この少年から魔術について聞けると思えば安いものだ。夜はそう思っていたので、特に早く町に帰っても帰らなくても良かったのだ。むしろゆっくり帰っていったほうが聞ける時間が増えるというわけだ。

「あ、因みに魔物が来たら前衛は頼むからな、お前「無理です。」

が、そう簡単に物事は進まないものである。夜はすっかり魔物について忘れていたのをハークが言った言葉で思い出す。そして自らの保身のために即答した。それはもう素早く。

「はあ！？何でだよ！お前、少しは戦えるんだろ！！」「だから無理だったの。」

今度はきっぱりと笑顔つきで。

ハークの顔が徐々に引き攣ってくるのが嫌でも分かる。そして上目目線でポツリと呟いた。

「マジですか？」

「マジです。」

「・・・・・・はあ。もういい。魔物が来たら安全なことに逃げて。ここら辺の魔物だったら一人でも楽勝だからさ。」

夜が真面目な顔で返答するものだから、本気だと悟ったらしい。ハ

ークはもう既に疲れ果てたような表情を浮かべて、深いため息をつく。が、結局魔物は引き受けてくれるらしい。やはり根はいい奴なのかもしれない。夜は軽く笑いながら、

「ありがとな。」

と言って、ハークの頭をポンと軽く叩いた。するとみるみるうちに顔を赤くして、ふんっ、と鼻を鳴らすと照れ隠しのためか先に歩き出してしまった。意外に照れ屋のようだ。そういえばあの公園のときも、王子様と茶化していたら顔を真っ赤にしていたのは記憶に新しい。そしてそれを苦笑しながら追いかける夜。しかしこの時、夜はまだ大きな事件に巻き込まれていることを知る由もなかった。

話 終わり

第7

第8話 不運の薄暗い空による少年の為の回旋曲（ロンド）（前書き）

話が急展開します^^

第8話 不運の薄暗い空による少年の為の回旋曲（ロンド）

「風よ、掻っ切れ！風ウインドファンクの牙！！」

不可視の風で作られた狼が3匹の魔物に襲い掛かる。その魔物は狼の牙に引き裂かれるように、一瞬で手のひら大の肉片に変えられた。飛び散った血と肉がその青い草原を赤く染め、それを少し離れたところから見ていた夜はこれで何回目だろうという吐き気を必死に押さえ込んでいた。それを、魔物を毎回そのようにして倒している張本人、ハークはそんな夜を不思議に思っただけで眺めていた。

「よしっ、と。って、またかッ！？本当に大丈夫？ヨル。」

「あ、ああ……。うっ……。」

「いや、全然大丈夫じゃないっしょ！！ほんとにしっかりしろよ。ほら、立てる？」

「うう……。悪いな……。」

素直にハークの手を借りて立ち上がる夜。その眉を顰めた顔は真っ青で、正直生きている人には見えないくらい血色が悪いように見える。夜は立ち上がった際、視界の端に血まみれの肉片を入れてしまい再び吐き気が襲ってきたので両手でバツと口元を押さえた。それを困った表情で、でも心なしか興味があるような表情で、夜の背中をさすってやる。

「……。ふう。もう大丈夫だ。ありがとな、ハーク。」

「あ、うん。気にするな。よし、行こう、夜。」

そして二人はまた歩き出す。

因みに今回で魔物に遭った数はちょうど2桁を越えた。魔物に遭遇

する度に夜は吐き気を覚えては、ハークが魔物と戦っている間遠くに離れて俯き、吐き気を抑えていたのだった。あのグロさはとてもじゃないが言葉では表現できない。あれを見て正気でいられるだけでまだマシなのだ。

夜は歩いていて吐き気が薄れてきたのが分かった、ハークに魔術について聞いてみることにした。実は、ハークは要というものを使っていないのだ。それに気がついた夜は、先ずそのことについて質問することにした。

「ところでハーク、あんだ魔術を使うときに要ってものを使っていないのか？」

するとハークは首を縦に振る。

「おれは普通の人と比較すると魔力があるほうだから、要を使わなくても魔術を使うことが出来るんだよ。因みにおれが今使える属性は風のみ。無属性も持つてるといえば持つてるけど、これはあまりに微弱すぎて使えるうちに入らないからな。ま、無属性を本当に使える人なんてそんなにいないけどね。」

「へえ。」

夜が感心したように頷いていると、ハークは不思議そうな表情で振り向く。

「へえって・・・ヨルも魔術くらい使えるんだろ？」

「使えてたら逃げてない「ですよね。」

遠い目をして夜の言葉に被せるように呟いた。ハークは改めて夜の格好を見回してから心の中で首を捻って考える。

（・・・ヨルって一体何者なんだ？武器も要も持っていない人なんて自殺志願者か余程力に自身のある奴、若しくは気違いぐらいしかやらないことなのになさ。フードつきコート着てるから魔術師かと思っただけ、中には比較的動きやすそうな服着てるし・・・。取りあえず本当に戦えないってことだけだな、今分かってるのは・・・。）

魔物の血肉が飛び散る。これを見て吐き気を覚える奴なんて今まで見たことも聞いたこともなかったハークの目には、夜はとても不思議な存在に映っていた。この世界ではこのようなことは日常茶飯事に起きているのに対して、こういうことに全く免疫がついていないのは一体どうしてなのか。

今も隣で顔を真っ青にしてそっぽを向いて吐き気と必死に戦っている彼を眺めて、ハークは苦笑しながらもそんな彼を嫌ってはいないようであった。

「で、悪いんだが俺に魔術を教えてくださいませんか？」

突然、全く悪く思ってたなさに口元を緩ませながら聞いてくる夜。そしてへっ？と素っ頓狂な声を上げて一瞬動きを止めてから、我に返ったようにまた歩き出すハーク。

「魔術教えろって・・・お前何歳児だよっ！？ 無属性魔術くらい使えるんだろ？」

どうやら先程動きを一瞬止めたのは、驚いたからだっただけらしい。

「無属性魔術、使えないし。ってか魔術自体、俺使ったことないんだ。」

「はあ！？」

「あ、いや。はあ！？ってそんなあからさまに驚かれてもさ。真実

だし……。」

夜は困ったように眉を顰めて、ハークの驚いた顔に視線を移す。するとハークは深いため息をつく、諦めたような口調で言った。

「はぁ……。もういいや、おれが疑ってたのが馬鹿みたいじゃん……。よし、じゃあ次魔物に遭遇したときは一緒に戦ってみる？身近で見れば何かわかるかもしれないし。」

「いや、全力で遠慮する。」

「いや、全力で頑張る！くらい言おうよ？おれも出来るだけ魔物をヨルのところに行かせないようにするからさ。」

両手に力を込めて顔を輝かせるハーク。

実は普段は人に頼ってばかりで人に頼られたことがないと思っていたハークは、夜に頼られたことが正直すごく嬉しかったのだ。それが嬉しすぎて顔に出してしまったのに気がついた彼は、顔を真っ赤にした後にその顔を隠すように正面に向き直る。

そんなハークを面白く思いながら、夜はありがとな、と軽く笑った。

「でさ、要って選ぶときに何か気をつけなくてはいけないこととかあんのか？」

例えば、こう属性によって要の形が変わってくる、とかさ、と聞きたいことを具体的に分かりやすくする為に例を付け足す。

「うーん……。そうだなあ。杖とか選ぶんなら杖の先についている魔力強化の為の宝石の種類は気をつけた方がいいかもしれない。宝石によって得意属性が変わってくるんだ。具体的に言うと、水晶はクリスタル無属性の象徴だし、藍玉は水、アクアマリン柘榴石は火という風にそれぞれ種類によって属性が異なってくるんだ。だからなるべく自分の属性に

合ったものを買ったほうがいいね。」

ハークの話だと他にも、電気石トルマリンは雷、紅玉ルビーは炎、月長石ムーンストーンは光、等など沢山あるらしい。彼曰く、こんなの全部覚えてなくても店で教えてもらえるからいい、らしいが。因みに要の形の種類は限定できるものではなく、それは指輪だったりピアスだったり人それぞれで全く違うものになってくる。その人によって使いやすいものを要としていただけあって、その人にとって何が要になるのかは実際に要を持って使ってみないと分からないらしい。因みに専門店以外の店などで売っている量産型は誰にでも使えるようになっていているらしいが、やはり自分にじっくりくる物の方が使い勝手は勿論、威力も格段に上がるらしい。

「まあ、自分に合う要ってそう簡単に見つかるものじゃないから、今から地道に探していったほうがいいかもね。あ、因みにおれは要使ってないけど、それは自分に合ったものがまだ見つからないからなんだ。市場とかでいっつも見て回ってんだけどなあ……。」

肩を上下して、全然駄目、と苦笑する。

（……だとすると先ずは要探しから始めないといけないか。面倒だなー。取りあえず、最初は量産型のやつでいい……

！駄目です！そんなのだからだめだめ！！だって貴方にはわたしがッ！！

「!？」

足を止め急に漆黒の瞳を見開いて、周りを見回し始める夜。そんな彼を見てハークは頭上に疑問符を3つほど浮かべて問う。

「・・・何やってんの？」

「・・・さあ。まあいつか。」

ひとりで納得して歩き出す夜を不思議に思いながら、ハークは置いていかれていることに気がついて急いで後を追った。



「・・・ふむ。どうやらあいつは俺に縄で首を絞められて引きずり

回されたいらしいな。」

その頃、夏葉は片手に黒い猫のぬいぐるみを持ちながら市場で夜を探し回っていた。

なにやらひとりで黒い発言をもらしては、右手にあるぬいぐるみを握りつぶし歩いているその姿は、とてもじゃないがあまりに迫力がありすぎて小さな子供には見せられない。

夏葉は基本的にあまり怒らない。しかし同じ事を2回繰り返すようなバカを怒らないでいられるほど温厚でもなかった。

（町の外に出ることは間違えてもないだろうな。だとするとやはりこの町の中で探すしかないのだ。・・・しかし。）

どうもこの今手元にあるぬいぐるみを落としていったことが気がかりではない。しかもあの時いた場所と全く同じところに落ちていた、というのも引かかる。

（・・・というか落としていったものがぬいぐるみ。ってあいつは子供か!!）

普段は飄々とした雰囲気でもどちらかといえばクールなのだろうが、時々こういう子供っぽい面も見せる。本人はいたって真面目なのだろうが、意外と天然なところもある。そんな夜と出会ってから思えば毎日が退屈することは全くといっていいほどなかった。今もこうして厄介事を持ち込んできてくれて、退屈なんてしてられない状況に、夜がそうさせている。

（俺があいつの呼びかけに応えて此処に来たのは、間違いなんかじゃない。もしあいつが、それを否定したとしても、俺は・・・）

こんなことを考えている場合ではなかった。

夏葉は頬を軽く叩いて、気合を入れなおして周りに気を配りながら市場を、時間軽減する為に建物の屋根の上を人間離れした脚力で飛ぶように闊歩していった。

その探している親友が町の外にいることも知らずに。

「へ、へっくしょんっ。」

「風邪？」

「うーん、風邪ではないと思うんだけど……っておい前っ！
」

夜とハークの眼前には、4匹のアヒルみたいな魔物が姿を現す。ハーク曰く、ジャンクダックという魔物で、以前ハークが相手をしていたウルフよりも弱い雑魚モンスターらしい。名前の由来も初めてこの魔物に遭遇した人がそのあまりの雑魚っぷりに驚いてこういう名前を付けた、という逸話も残っているほどに雑魚中の雑魚らしいのだが……。

「ってヨル！！なんでおれの後ろに隠れてんの！？さっき一緒に戦うって言ってたじゃん！！」

魔物が眼前にいと分かった夜の行動は恐ろしく早かった。何せその魔物が視界に入るか入らないかの時点でもう既にハークの後ろに

さり気なく移動していたのだから。
そして今の気持ちを一言。

「無理。」

言葉が無駄に羅列するより心が伝わる一言だった。

「……はあ。もう分かったよ！そこに居て！すぐ終わらせるから。」

ハークは先ほどの一言により何も言えなくなってしまい、微妙な雰囲気漂わせながら魔物が居るほうへ自ら向かっていった。

ハークがある程度離れた位置に行ったことを確認すると、夜は体が急に震えだすのを感じた。

（……また、か。さっきから魔物に遭う度に体の震えがひどくなってる気が。たしかハークと初めて会ったときも同じだった。・・何で目の前に敵がいると体が震えるんだ・・？別に怖くもなるともないってのに。）

そして先ほど気がついたのだが、特に右肩の震えが大きい。夜はその震えを無理やり止めようと、片手を肩に乗せて押さえつける。すると、数十秒もしないうちにハークが魔物を倒して戻ってきた。どうやらあの魔物は本当に雑魚中の雑魚だったらしい。そして勿論その魔物の成れの果ての姿があるだろうと推測されるハークが来た方向には、目を向けないようにしている。

「あんな雑魚も倒せないなんてさ、ヨル今までどうやって生きてきたんだ？この町に住んでるってわけでもなさそうだし、冒険者かなんかなんだろ？」

「まあ、そうなるな。というかだ、ハーク。」

体よく話を逸らした夜は、上に広がっている空を一瞬眺めてから視線をハークに戻し、彼を半眼で軽く睨んだ。

「あんた確か日が暮れる前に町に着くって言ってなかったか？」

「うん？ ああ、まあ言ったけど・・・。」

「どう見てももう少しで太陽が沈みそうなんだが、これって日が暮れるって言わないのか？」

「あ、あははははは。・・・2キロどころじゃなかったみたいだね。「何か言うことは？」ごめんなさいッ！！」

乾いた笑い声を上げたと思ったら、夜の冷めた視線を受けてハークは勢いよく素直に謝った。意外と素直なようだ。いや、夜が発しているオーラが黒くて身の危険を感じたため、素早く謝っただけなのだろうか。

「ま、別に気にしてないけどさ。（あー、弄るの面白いな。）・・・それよりさ。そもそもなんであんたは俺をここまで連れてきたんだ？」

この時、空気が凍った。

今ハークが1番触れてほしくなかった話がこれだった。何故夜と一緒にここまで連れてきたのか。それは無属性魔石を盗んだのを見られてしまった可能性があったから。しかし、彼をここまで連れてきて一体どうするつもりだったのか。

“殺すつもりだった？ 証拠隠蔽のために？”

ハークは目の前で、何を考えているかどうか分からない表情の彼から一瞬目を逸らしてしまう。

「……………どうかしたか？ハーク。」

「あ、ううん。別に大丈夫だよ。気にしないでさ、早く行こう！」

思わず足を止めてしまっていたのに気がついたハークはそう誤魔化すとまた足を動かしだす。しかし頭の中はぐるぐると嫌な思考で埋まっっていて、気持ちはどんどん重くなる一方だった。

（……………そうだよ。早くこれを届けないとティオが手遅れになるかもしれない……………。そうならおれは……………。魔力も歩いているうちに結構回復してきた。おれひとりくらいだったならなんとか町まで転移できる。……………そう、こいつを、こいつを殺しておれだけ転移すればいい。雑魚中の雑魚モンスターも倒せないやつだし、こいつを殺すくらい……………別に……………別に簡単……………）

「本当に大丈夫か？もしかして戦いっぱなしで疲れてんのか？……………悪いな、俺が戦えればよかったんだが……………休憩するか？思い返せばここまで一回も休憩してないし。」

いいも知れない罪悪感がこの身を襲ったのは、彼が優しくしてきたからだろうか。

ハークは一瞬泣きそうな表情になる。が、また前を向いて歩いたまま口を開いた。

「だ、大丈夫。多分もう少しで町が見えてくるはずだからさ。」
「……………そっか。じゃあ頑張ろうぜ。」

夜はそう軽く笑う。

何故だかわからないが、そんな彼の行動にいらついている自分がいることを分かって、ハークはまた俯く。

（何で何も言わないんだよ……。これじゃあ、殺せない……。もう殺せない。こいつを殺すことなんて、出来ない！）

せめてハークを夜が問い詰めていたら、盗んだのを見たとはつきり言ってくれば、こんな悩まないで今頃はもうこの魔石を届けていたのかもしれない。でももし、自分が人殺しをすれば、きつとそれを知ったらティオは悲しむし、多分怒る。自分の命と引き換えにもらった命なんて嬉しくない、と。ティオの命と引き換えになるのなら何でもやる……。つもりだった。だから今までも魔力がこもった品を持っている人を襲って盗む、なんていう盗賊みたいなことをやっていたし、商人を騙して盗った品物も沢山ある。それが意味のなかったことなんて思わないし、不必要なことだとも思わない。でも……

と、その時だった。

「お、町が見えてきた。はあ、なんとかとっぷり夜になる前に着いたな……。」

薄暗い青が空を覆った頃、二人は町にたどり着いた。町は人で賑わっていて、普段どおりの町がそこにはあった。広場にはお馴染みの噴水があり、その周りに露天を広げて商売を始めた者もいる。ハークにとってこの町自体が自分の家みたいなものだったので、町にいたときには思わず力が抜けて脱力してしまった。そしてその隣でも同じく脱力している夜もある。どうやら彼なりに魔物がいる、ということに氣にしていたらしく、力を込めすぎていたようであった。

夜はたまらず近くにあったベンチに腰をかけた。

「ふう。もう一時はどうなるかと思ったが、ハークのおかげで助かった。感謝してる。」

感謝なんてしなくてもいい、という言葉が口から出かかったがなんとか心のうちにおさめて、ハークは顔を真っ赤にしながらどういたしまして、と小さく呟いた。

「・・・もう大丈夫っぽいかな・・・。」

「？」

「いや、なんでもない。それよりハーク、何かやることがあったんじゃないかったのか？」

夜がハークを急かすように聞くと、彼は思い出したかのようにそわそわとし始めて軽く挨拶をしてから走って帰っていった。

「あ、うん、そうだった。じゃあ、ヨル、今日はけっこう楽しかったぜ！じゃーなー！！！」

「おー、またなー。」

ハークが見えなくなるまで手を振る。見えなくなったので手を下げて空を見上げながら、夜はため息をついて呟いた。

「さて、と・・・夏葉、何処にいるんだ？」

まだまだ夜は長い。



「・・・？」

（なんで屋敷がこんなに静かなんだ？人の気配もしない・・・。）

ティオの兄がいつもいる部屋に足向けながら、ハークは何か違和感を覚えた。そしてそれと同時に嫌な予感が胸をよぎる。無意識のうち、早足から駆け足に変わり、長い長い廊下を駆け抜ける。ティオの兄のいる部屋はこの屋敷の一番奥にあるのだ。

―タッタッタツ・・・

走っていたのでいつもより早く部屋に着く。そしてハークはドアをノックして、

「兄貴、ただいま戻りました。開けますよ？」

と言ってガチャツとドアを手前に引いた。するとそこには、血まみれになって倒れているギリたちと、その輪の中心にはティオをかばって何かと戦っているティオの兄がいた。彼も床に倒れているギリの比じゃないくらい血まみれになっていて満身創痍であるの是一目で分かる。

―グルルルルルルルルツ

「ハークッ！！ティオを連れて逃げろ！！ボクが立っていられるうちに、早く！！」

「なっ！！一体何がどうなって・・・。」

その何かとは、体長が5m以上ある大きなライオンに鷲の羽根と羊のような角、そして馬のような四肢を持つ、合成獣キメラという自然に生まれることない魔物の亜種だった。それは口から涎を滴らせてまるで獲物を狙うかのようにこちらの様子を伺っている。

「ボーっとしてるんじゃない！早くティオを！！」

鬼気迫る表情で懇願するように言われたハークは何も言えずに、兄貴の後ろに隠れて顔を真っ青にしているティオの手を握ると急いでこの部屋から逃げ出した。普段は見せない彼のその顔を見て、ハーク

クは何かを悟ったのかもしれない。

ティオは相変わらず何も喋らない。ただ顔を真っ青にして、虚ろな瞳にハークを映しているだけだった。

「・・・・・・・・。」

されるがままの人形のようにハークに引っ張られていくティオの瞳から、知らず知らずのうちに涙が流れ落ちていたのをハークも、そしてティオ本人も知ることはなかった。

ただ無情に流れていく時間とともに、その涙も彼女の頬を滑り落ちて、屋敷の廊下に敷いてある赤い絨毯の上に染み込んでいくだけだった。

第8話 終わり

第9話 黒銀の彼女によるマスターの為の奏鳴曲（ソナタ）（前書き）

遅くなりました；

9話です。

第9話 黒銀の彼女によるマスターの為の奏鳴曲（ソナタ）

ティオは生まれたときから魔力が全くなかった。

魔力は生命の塊ともいわれる、この世界の生物の全てにおいて必要不可欠な要素といえる。もし体の中の魔力が全てなくなってしまったとしたら、その生き物の魂はもう既にこの世界には存在していない。つまり、魔力が全くない体は屍も同然なのだ。

彼女は特異体質の持ち主で、彼女の体は魔力を受け入れることが出来ずに体の外に魔力を放出してしまう、というものだった。そしてさらに厄介なのが、普通は体の中で魔力が生成されるはずなのに、その生成自体が行われていなかったことであつた。

何が彼女をそのような体にしてしまったのかは未だに分からない。

生まれる前からそうなる運命だったのか、はたまた神のちよつとした気まぐれか。

その所為で彼女は母親の体から切り離された瞬間から、魔力の供給源がなくなりその小さな体から魔力を大量放出し始めた。母親の腹の中では魔力を放出することが出来なかったのだ。その為、何ヶ月もの間溜まりに溜まった魔力が溢れ出し、彼女は目を大きく見開いて痙攣し始めた。しかしその異変に気がついた助産師にはどうすることも出来なかった。しかしそこへある医者我突然現れる。その医者名は、サリア・サルビア。彼女は美しい金髪を靡かせて、彼女の前に言葉のとおり突如現れたのだ。そしてティオの心臓の真上に片手を優しく乗せて、ある呪文を唱える。すると痙攣がピタツと止まり、彼女は静かに目を閉じて寝息を立て始めたのだった。そしてその医者は言った。『彼女の体は無属性の魔力しか受け付けず、し

かも一生彼女は魔力を放出し続ける。今痙攣していたのは彼女の母親の属性が水だったから拒絶反応が起きたのだ。今まで彼女が生きていたのが不思議なくらいだ。』と。しかしこの体質を治す手立ては今のところ見つかっていなかった。医者は続ける。『私が彼女に施したのは、魔力の放出を最低限に抑える術式を組み込んだだけ。彼女の体には魔力を生成する働きがないので、定期的に魔石でも何でもいいから無属性の魔力を与え続けなければならない。』

そして彼女は一命を取り留めた。

しかし彼女はそんな境遇の為か感情を表に出すということをしなくなり、それを心配した母親は虚弱になり家事もろくに出来なくなってしまう。そしてそれを心配したティオの兄は母親を他の家に住ませて療養させた。

そしてそれ以来妹の保護者として生きる決心をした兄は、自分の出来る限りの時間を妹ひとりの為に割いていった。そしてその信念は正しい方向とは少し違う斜め上に伸びていき、彼は妹なしでは生きられないようになっていた。そしてまた妹も兄なしでは生きられなくなってしまう。兄には妹が、妹には兄が生きるうえで必要不可欠なものとなっていたのだ。

それから9年経った今現在でも彼らはお互いに縛りつけたまま日々を過ごしていた。



「取りあえず、宿に戻ってみようとしてみたはいいものの・・・。」

（なんでこう人通りが多い！？）

日は暮れて夜。

以前も身をもって体験したからよく覚えている。この町が夜になると人通りが増えることを。だからといってそれを避ける術は学んだわけでもないのです。結果的に言えば行きたいところ、つまり宿に行き着けないのであった。そして何処にたどり着いたかという、またあの公園、ティオと初めて会った公園だった。やはりここは以前と同じくとても静かで、息がつける場所といったら宿の自分の部屋以外では此処しかなかった。

夜は背伸びをして、公園の中にあるブランコに座ろうとしてそこに足を向ける。そこにはティオとハークが立ち尽くしていた。ティオは相変わらず虚ろな瞳を何処か分らない虚空に彷徨わせていて、彼女の手には以前は持っていただろうぬいぐるみはなく、服の裾には何か赤黒いものが付着していた。そしてハークは様子がおかしく、

先ほど別れてから1時間ほどしか経っていないはずなのに彼の表情は暗く、混乱しているようだった。

「ハーク？」

物音ひとつ立たない静寂な公園に、波紋が広がるように夜の声が響く。やっと夜が此処にいることに気がついたのか、ハークは暗い瞳を彼に向けて呟いた。

「・・・・・・・・ヨル？」

「・・・・・・・・。」

ティオは相変わらず喋らないが、その虚ろな瞳はハークが呟いたことで夜がこの場にいることに気がついたのか、その瞳に彼を映す。その瞳からは絶えず涙が流れていて、その涙は止まることはなかった。

「・・・・・・・・何か、あったのか？」

数秒間、沈黙がこの場を支配したが、何かを決意したような顔をしてハークは固く結んでいた口を重く開いた。

「屋敷が、誰かに襲われたんだ。何が狙いで襲ってきたのかは分からない。それを兄貴がたったひとりで食い止めてるんだ！！ヨルに言っても仕方がないことなのかもしれないけど、お願いだ！兄貴を助けてくれッ！！」

バツと頭を下げて懇願するように叫ぶ。

実際のところ、夜は戦う術を今のところ持っていない。その現場に行ったところで足手まといに、寧ろ邪魔になりかねない。自分の身

もろくに守れないのだから。それでも夜はひとつも考える素振りも見せずに、軽く笑って言った。

「じゃあ、行こうぜ。」

「うん、分かってるよ？ ヨルが行ったってどうにもならないことぐらいさ！ だけど・・・ってええ！？・・・今行くって言った？」

思わず頭を上げて夜の顔を見つめてしまう。彼の表情を読み取ってもあまりに軽く決めてしまった彼の真意が見えることはなかったが。

「行くって言ったけど、もしかして今日耳日曜？」

「ば、バカにすんなよ！ 本当ならお、お前なんかに助けを求めるはずじゃなかったんだからな！！ それにティオ！ お前いつの間にヨルの膝の上に乗っちゃってんだよ！ 兄貴にしか懐かなかったのに・・・」
「いや、なんか彼女が疲れてそうだったからさ。で、彼女、一緒に連れてくのか？」

いつの間にか膝の上に落ち着いていたティオがずり落ちないように優しく片手で押さえながら、夜は疑問に思っていたことを聞く。夜はティオがビクッと一瞬体を硬直させたことを知りながらも、声をかけることはしなかった。

「うん。ここにひとり置いておくのが1番危ないし、いざとなったらおれが守るから！」

「王子様はかっこいいな！。お姫様は王子様に守られるのが一番だもんな？」

「・・・・・・・・。」

ティオにそう聞くと、彼女は何を言っているのか分からないように首を傾げて夜の顔を見上げる。そしてハークはというといわずもが

な、彼は顔を真っ赤にして硬直していた。どうも王子様ネタに弱いらしい。そんなハークを面白いと思いつながら、夜はこれからどうすればいいかを頭の片隅で考えていた。

事実、自分は戦闘になつたらてんで役に立たない。魔術が使える使えないの問題以前に、敵を前にすると体が震えだしてとてもじゃないが立っているのも精一杯なのだ。そんな自分がどのように行動すればいいのか、頭を使って考える必要がある。そんなしなければ行っても邪魔な存在になるだけだ。

（夏がいればどうにかなったかもしれないが、居ない奴のことを考えてもしょうがない。今は取りあえず自分に出来ることからやっていくしかないな。）

「ほら、いつまでも悶えてないでさっさと行くぞ？俺は場所分らないんだから」

「誰の所為で・・・はあ。じゃあ飛ぶからな。3人は少しきついかもしれないけどなんとかする・・・。ウィンディー、いつも通り頼む！俺たちを屋敷の入り口まで飛ばしてくれ！！」

飄々としている夜に文句を言おうと口を尖らせたハークだったが、今はそんなことをしている場合ではないと気がついて嫌々自粛すると、懐から直径約2cmくらいの緑色に輝く石、風属性魔石を取り出すと風属性魔術の詠唱を始める。そして風が3人を包み込むと一瞬浮遊感を感じ、気がつけば目の前に大きな屋敷が威圧感を撒き散らすようにあった。夜は今まで見たことのない大きさの屋敷だったので驚きを隠せずに目を大きく見開いて感嘆をもらす。

背後には押しても引いてもビクともしなそうなどにかい古風な門が建てられている。今その門は何十もの鎖にぐるぐる巻かれてどうやっても開きそうにない。

「何呆けてんだよ！早く着いてきて。」

ハークの焦ったような声で我に返ると夜は、ああと生返事を返してティオの手を引いて走っているハークの後を小走りで追っていた。廊下には赤い絨毯が敷かれていて何か荘厳なものを感じずにはいられない。そして光を取り入れるように作られている大きな窓は走っている3人を鏡のように映し出していて気味が悪い、と何故か夜はふと思った。

そして3人は何事もなく一番奥の部屋にたどり着く。夜は此処に来るまでに何もなかったことが逆に気になって落ち着かなかった。このドアを開いてはいけない、と第六感がそう告げていたのを夜は態と無視しながら、部屋に入っていく二人のあとを追う。そして部屋の中の惨状を見て、夜は体を、表情を硬直させた。

そこには、この町に来る前に見た盗賊たちが血まみれになって地に伏せているのが、そして異形の形をした獣が銀髪の青年のわき腹をちょうど噛み切っているところが黒い瞳に映りこむと、同時に体の力が全て抜けてしまったかのように一気に脱力して、立ち続ける為には近くにあった壁に背中を預けるしかなかった。

「兄貴ッ！！ヨル、ティオを頼む！」

「待て！ハーク！！」

夜が止めるのも聞かずにハークはそう叫ぶと、目の前に倒れている仲間たちが見えているのに臆することもなく銀髪の青年と魔物がいる近くまで行き、無詠唱で風の魔術を唱えて魔物の気を自分に逸らす。すると魔物は口に銜えて今にもかみ殺そうとしていた青年をドサッと無造作に投げ捨てて、ハークに狙いを定めた。

―グルルルルルル

ティオは魔物が怖いのか、それとも自分の兄の見るも無残な姿をしているのが耐えられなかったのか、しゃがんでティオを抱っこしている夜の肩に顔を押し付けて、声を殺して静かに泣いていた。そんなティオを慰める言葉もかけることが出来ずに、ただ夜はそこにいるだけで何もできない自分を恨めしく思っ苦しそうに顔を歪める。するとティオは何を思ったのか、急に顔を上げて夜の腕の中から無理やり離れると、無我夢中で地に顔をつけている兄の元へ走り寄ろうとした。そしてあまり強くティオのことを押さえつけていなかった夜は不覚にもそれを許してしまったのだ。

「ティオ！？ 危ないからこっちに来ちゃだめだ！！」

それに気がついたハークは魔物と戦っているにもかかわらず、つい視線を外してティオに意識を向けてしまう。そしてそれを獰猛な魔物が見逃すはずがなかった。その一瞬で、馬の、大地を速く駆ける事の出来る筋力が発達している足でハークを思いっきり蹴り飛ばした。

「うぐッ！！」

ボクッと嫌な響きの音がその場に響く。そしてその逞しい足で蹴り飛ばされたハークはボールのように跳ねて、壁に体を打ち付けられるとその痛みに耐え切れなかったのか意識を失ってしまった。

「！！」

「ハーク！！ ティオ！ こっちに戻ってこい！！」

ティオの顔が強張る。夜は彼女の足が地に根を張ってしまったようにそこから一步も動かない、いや動けないことに気がついて舌打ちすると、震える足に無理やり力を込めて駆け出す。すると駆けけたそ

の張本人は、自分が一瞬でティオのいる場所まで動けたことに驚愕し、自分の足を見つめて思わず眩いた。

「!!なんだ、この異常な速さは・・・?と、ティオ!大丈夫か!」

今は無駄なことを考えている時間はないと自分の異変については後回しにすると、夜は顔を青くして立ち尽くしているティオに声をかけて無事を確認する。そして本人の承諾を得ずに軽く抱き上げると、また一瞬でティオの兄が倒れているところにまで移動してティオをおろし、震える足で魔物に向かい合った。

その魔物は口からはみ出るように生えている牙から唾液を滴らせて、まるで目の前に居る獲物がおいしいかどうか見定めているように、縦に割れている血走った瞳孔を夜に這わせる。その瞳と目が合った瞬間、夜は軽い吐き気のようなものを覚え、震える体を必死に押さえ込んで相手の目を睨み返す。そしてとうとう痺れを切らした魔物は一気に夜に飛びかかった。しかしまるで分かっていたかのようにそれを素早く右に飛んで避ける。これは戦闘を体験したことのない夜であっても避けることは容易だった。何故なら単純に自分が居る位置に飛び掛ってくるのが分かっていたから。

(といってもだ。次の攻撃がどう来るか分かったもんじゃない。・・後ろにはティオたちがいるからそっちに逃げるわけにもいかないし、だからといって俺が攻撃する術もない。しかもだ。)

「俺、丸腰じゃねえか!!」

今頃気がついたのか。

ハークが気を失っていなかったのなら迷わずこう突っ込んでいただろう。

敵を目の前にして丸腰なことに気がつく夜は、もうどうしようもないバカだとしか言いようがなかった。これでは相手の攻撃を避けるだけで、攻撃することも防御することも出来ない。はっきりいってジリ貧だ。武器がなくとも戦える人種はいるがあいにく彼はそのタイプではない。そして闇雲に戦って勝てる相手でもないのだ。魔物の頭が思ったより良いのか、それとも単純に力が強いだけなのか、目の前の現状を見ただけでは戦闘経験の浅い夜には読み取れない。今彼にあるのは異常に早く駆けることができる足と、思考する頭しかない。しかし相手が考える時間を与えてくれるはずもなく、結局駆使するのは足だけになってしまいうさだ。魔物の攻撃を避けることで精一杯なのだから。

（とにかくティオたちのほうに向かわせては駄目だ。・・・あー、くそっ！一体どうすりゃいいんだ！！）

そう考えて焦ったのがいけなかったのか、夜の判断がほんの一瞬遅れて魔物の強靱な羽根に左腕が掠ってしまい、刃物で切り裂かれたようにそこから鮮血が綺麗に飛び散る。

「ッ！！」

またそれが夜の判断を鈍らせる。このとき夜は、以前に狼に襲われて肩を引き裂かれたことを思い出し顔を強張らせた。

そして気がつけば目の前に魔物の唾液と誰のか分からない血で濡れた牙があった。一瞬息が止まった気がした。いや、それは気の所為ではなかったのかもしれない。そして夜は、ああまた俺死ぬのかな、と呟いて今から来るだろう痛みに備える為か漆黒の目をそっと閉じようとした。しかしその時、ふと視界に泣きながら怯えて兄に抱きついているティオと意識を失っているハークが、諦めかけた瞳に映し出される。

（・・・俺がここで死んだら次はティオが狙われるんじゃないか？
というかき、何で俺こんなところに来て、死にそうになってんだ？俺
の目的は、まだ達成されていない。達成されるまで、俺はこんなと
ころで死ぬわけにはいかないだろ？俺は目的を達成するまで死なな
い、いや死ねないッ！）

諦めかけた瞳にまた生氣が戻り始めて、夜は自分を噛み砕こうとす
る牙を素手で止めた。一瞬魔物と力が平行したように思えた夜だっ
たが、そう簡単にはいかない。所詮人間と魔物の力は比べ物になら
ないくらいの差があるのだ。

血の生臭いにおいが強いが、今はそんなことを気にしている場合で
はない。今にも閉じられそうな魔物の口を押さえつけるのは至難の
業であった。口を閉じる力と開く力だったら閉じる力のほうが強い。
今夜が魔物に抵抗していられるのは奇跡に近いのだ。言ってしまう
ば、夜が不利な状況にあるのは全く変わっていない。

（くっ・・・相手の力が強すぎる・・・。これじゃ、俺が食われる
のも時間の問題。どうする・・・!?）

その時だった。頭の中に鈴を転がすような声が響いてきたのは。

―私を呼んで下さいご主人様！！

（誰だ！？・・・って）

「誰だか知らんが気を逸らさせないでくれ！！」

ついその声が聞こえてきたことに驚いて一瞬力を抜いてしまい、も
う少して牙が自分の頭に刺さってしまう、という寸でのところで必

死に止める。

―はうつ・・・いい？じゃなかった、です。ご主人様、早く私を呼んでください！！ご主人様が死んでしまいます！！

今一瞬間き逃せないようなフレーズを聞いたような気がしたが、必死な夜にはそれに突っ込む暇すらなく簡潔に言い返すことしか出来なかった。そして焦っている所為か普段よりこころなしか言葉使いが荒々しくなっていることに本人は気がつかなかった。

「だからあんた誰だっの！！名前を言ってくれ！！」

―ごめんなさい。私からは制約の為に名乗ることができないんです。でもご主人様は知っているはずです！思い出してください！！この世界に来る前に、私は貴方と会っています。私は貴方の、ご主人様の剣です！！

その瞬間、夜は知らず知らずのうちに彼女の名前を呟いた。

「・・・レーヴァ、ティン？」

《私は世界を滅ぼす剣杖、レーヴァティン。・・・やっと呼んでくれた・・・ご主人様！！私の最初の役目は貴方の力を解放することです。さあ、私を、剣杖を握ってください！》

そして気がつけば目の前にいた魔物は壁に叩きつけられていて、夜の手に黒銀に輝く剣杖が最初から存在していたかのように収まっていた。重さを全く感じることもない剣杖は、周りに侵食するように黒くぼんやりと光っている。それに巻きついている白い布は絹のようになめらかでそこにあるものを全て吸い込んでしまいそうなほ

ど真っ白だった。

《あ、ご主人様、気をつけてください。私がご主人様以外の物に触れますと、マナレベルに分解されますから。」「そーゆーことは先に言えッ!」

となるとこの白い布はそれを防止するためにあるのか、と夜は納得して、体を起こしてきている魔物に注意を向ける。先程この剣杖に当たったのか、左羽根の部分が綺麗に無くなっていて、魔物はそれに気がついたように怒りの咆哮を上げる。そしてその怒りの切っ先をあるうことか背中を無防備にさらけ出して兄の体を揺すっているティオのほうへ向けたのだ。彼女がこの中で一番弱い、と野生的なカンがそう魔物に告げたのかもしれない。

(?! まずいッ! ティオに的を変えたのか!?)

「ティオ!!」

「・・・ッ!?!」

何故か感覚的に魔物がティオに的を絞ったのが分かり、夜はその俊足で魔物の目の前に一瞬で移動すると、一閃。何も考えずに剣杖を思いっきり振るった。しかし第三者が見れば、彼の瞳が魔物を斬った時に何も映していなかったのを知ることが出来たのかもしれない。剣杖が魔物を真っ二つにする。そしてその切れ目からは血が吹き出ることもなく、マナと呼ばれる魔力の塊となってその光に侵食されるように跡形もなく霧散したのだった。

ーカランッ

それと同時に夜は手に持っていた剣杖を床に落とす。そして何があ

ったのか分からない、とでもいうふうに首を傾げた。

「・・・あれ？もう、終わった、のか？」

《はい。ご主人様はちゃんと合成獣キメラをその手で倒しました。そして無事、力の解放も終えました。おめでとうございます、ご主人様！》

レーヴァテインは夜の質問に答えて、自分のことのように嬉しがる。そしてそれを聞いた瞬間、夜は何かを呟いて、レーヴァテインに被さるように倒れこみ、魔物を倒したことで気を緩めたのか意識を失った。

《・・・ご主人様。本当に、おめでとうございます。これで貴方はもう　　なんですから。・・・もう戻ることは、出来ない、ですよ？ご主人様？》

唯一彼女を声を聞くことが出来る夜は意識を失っていて、誰も彼女の悲しそうな、そして残酷な言葉を聞くことはなかった。



「・・・ふむ。で、何か遺言があったら聞いておくが？」

「貴様に話すことなど、何もない。・・・しかし驚きだな。まさか
エンシェントドラゴン
古代竜が人間と一緒に行動しているとはな。・・・まあいい。合成
獣を試す、という私の任務は終わったことだしな。この怖い竜に殺
されてしまう前にさっさと退散しよう。」

夜たちが合成獣^{キメラ}と戦闘している屋敷の屋根の上で、無表情をしている
赤髪の青年と腰まである黒髪を持ち、そしてその黒髪に合わせる
様に真っ黒なマントを羽織っている青年が対峙していた。その黒髪
の青年は始終ずっと笑みを浮かべていて、彼の銀色の瞳は狂気の光
を宿している。

夏葉は夜を探しているときに突然感じた、物凄い魔力の威圧を感じ
る方へと足を向けたところ、この屋敷にたどり着き、そしてそこに
この黒髪の青年が居たのを発見したのだ。そしてその青年は水属性
魔術である水鏡という魔術で、合成獣^{キメラ}と戦っている夜たちを観察し
ているところであった。夏葉はそこに映し出された夜を発見して、

今現在に至る。

「ああ、そういえばあの黒髪の青年、なかなか見所があるな。・・・
くく、心配するな。今は手出しはしない。・・・今は、な。」

夜が青年の話に出てきたことに対して、夏葉は無表情を崩して冷たい瞳を彼に向けた。しかし青年は軽く笑って、普通の人なら気絶してしまうだろう殺意を軽くあしらうと、詠唱もなしにその場から消えて見せた。

「・・・・・・・・。」

夏葉は紅い瞳を側ませて、何かを考える素振りをした後にふうつと火の粉を口から吹いた。

第9話 終わり

第10話 黒の羽根による青年の為の変奏曲（バリエーション）（前書き）

遅くなってしまうって申し訳ありません；；
第10話、更新です。

第10話 黒の羽根による青年の為の変奏曲（バリエーション）

「ハーク。」

「な、何だよ？いきなり改まってさ。」

「俺に今日一日で魔術を使えるように特訓してくれないか？」

顔の前で両手を合わせて、ハークの目をじーっと見つめながらお願いをする夜。その表情は至って真面目で、ハークはそんな彼を見て断るに断れない状況に追い込まれていた。まだこの時点では断る余地はあった。はずだった。シスコン野郎が現れるその時まで。

「別に無理にとは言わない。ただ俺が知ってる奴で魔術を使えるのがあんたしかいないからさ。」

「……。（おれしか、いない……）」

あんたしかない。

この言葉に多少なりとも感動を覚えたハークだったが、実際のところ、ハークはどうやって魔術を使っているのか詳しくは知らない。ただ感覚的に使っているだけであって、こうするからこんな魔術が使える、なんてことは知らないで勿論教えることもできない。ここで安請け合ひしても良いものなのか。でも頼りたい。結論が出る数秒間、心の中でものすごい葛藤が起きていたのは本人のみが知る。

「教えてやりたいのは山々なんだけど……」そうだよ。ハーク。ヨルさんはティオの命の恩人なんだからそれぐらいしてあげればいいじゃないか。何を迷ってるんだ？」

「よっ。脇腹の怪我はもう大丈夫なのか？クルー。」

「もう平気だよ。心配してくれてありがとうヨルさん。」

颯爽と銀色のもみ上げを揺らしながら、後ろにティオを引き連れてやってきたのはティオの兄、クルスリア（クルーは愛称）だった。一瞬見ただけでは男女の区別がつかない中性的な顔立ちをしているのが自分でも分かっているのか、女のような扱いをするとすぐに怒る、らしい。（ハーク体験談）

「ティオも元気か？」

夜が微笑んでティオと目線を合わせるようにして屈むと、彼女は肯定するようにニコツと笑う。その隣で彼女の笑顔にど真ん中を打ち抜かれているクルスリアは危うく鼻血が出そうになったのかポケットから出したティッシュで鼻を押さえて悶えていた。ティオの笑顔を見ただけで鼻血が出ていたら血がそのうち足りなくなって貧血でも起こすんじゃないか？と夜が本気で考えていたのは余談。

「で、頼めるのか？」

「・・・はあ。分かった。もうこうなったら意地だ！」

「さんきゅーな。じゃ、早速何処か広い場所にでも行って教えてくれ。ハーク先生」

「（おれが先生・・・）よしっ！じゃああの公園に行こう。いいですよね？兄貴」

“先生”という甘美な響きに感動を覚えて目をきらきらと輝かせながら、俄然やる気を出したハークがクルスリアに公園使用の確認を取るや否や、ヨルの腕を引っ張って屋敷の外に出て行った。

「・・・サリア先生、なんでそんなところに隠れてるんですか。ヨルさんにきちんと挨拶して欲しかったのに・・・。」

二人が屋敷から出て行った直後、それを見計らっていたかのように近くの部屋から出てきて姿を現した女性がいた。腰まであるブロードのしなやかな髪はまるで金色の光が舞っているかのように錯覚さえするほどの美しさを持っている。そしてその金髪を映えさせている膝まである丈の真っ白の白衣に真っ赤なブーツ。この女性こそがティオに抑制魔術を刻んだ医者、サリア・サルビアであった。

「いや実はな、そのヨルってやつと私は面識があるんだが、その初対面のときの印象付けに失敗した、というかな。……つい殴ってしまったんだ／＼／＼／」

「つい、というかそれはつきり言って、今生きてるヨルさん、すごいですよ？先生の拳を食らったら最期、頭が西瓜のようにグシャッとつぶれるんですから。「今此処でそれを証明してみたくなった。」絶対に洒落にならないからやめてください。」

即答するクルスリアの顔は真顔だ。そして自分の後ろに庇う様にティオを隠す。それを見て、冗談だ、と笑って軽く流すつもりだったサリアは微妙な表情をして何も言えずに、違う話に変えるしかなかった。

「そ、そういえば脇腹の調子はどうだ？まだ安静にしていると言っただけなんだが。」

「もう大丈夫ですよ。サリア先生の腕は確かなんですから。それより今日はティオの調子を見にいらっしゃったんですね？」

クルスリアが聞くと、サリアは縦に頷き肯定を示す。

「そうだったな。じゃあこの部屋、借りるぞ？」

「ええ。というかボクも一緒に入りますけどね。……これだけ

らシスコン変態は。」

「何か言いました？言ってませんよね？シスコン変態なんてこと言
ってませんよね？」

「・・・すまん。いや、ごめんなさい。」

「ま、いいですけど。じゃあティオ、行こうか。」

無表情で迫り聞いてくる（勿論ティオには見えない位置で）ものだ
から、つい謝ってしまった。サリアは部屋に入っていく二人を見つ
つ、心の中でそう呟きため息をつきながら部屋に入っていた。



時は遡ってラグータリア滞在三日目の朝。

目を覚まして気がつくと、夜はベッドに横たわっていた。

「……………此処何処だ？」

「此処は宿屋の俺たちが泊まっている部屋、だが？」

ひとりポツンと呟いた素朴な疑問に答えてくれたのは、恐ろしいほどに不機嫌オーラを撒き散らしている夜の親友こと夏葉であった。彼は反対側にあるベッドの上に膝を組んで座っていて、ベッドの下には無造作に黒い猫のぬいぐるみが打ち捨てられていた。こころなしか薄汚れている感が否めない。しかしまだ寝惚けている所為かそこにぬいぐるみが打ち捨てられていることに夜は気がつかない。

「…………宿？」

寝癖たっぷりの頭を掻きながら寝惚け眼を親友に向けて問い返す。

「うむ。」

一瞬の沈黙。それから夜は、何かを思い出したかのように勢いよく上半身を起こして、体の上にかけられていたタオルを跳ね飛ばす。そして眉を顰め、片手を眉間に置きながら何があったのか思い出そうとして独り言を呟く。

「…………俺、助かったのか？ いや、というかあの魔物は一体…………ハークたちは無事…………なのか？ ってか何で俺あの魔物と戦ってたんだ…………？」

「ふむ。聞きたいことは沢山あるのだが、まあ今はお前の中でも整理が出来てなさそうだから後にする。それより、ひとつだけどうしても聞きたいところがあるのだが、なんであの市場で喧嘩を見物して

いたときにこのぬいぐるみを落として急にあの場から消えたのだ？」

足元に置いてあった黒い猫のぬいぐるみを夜が見える位置まで持ち上げる。すると考え事をしていた夜は顔を上げて夏葉のほうに目を向ける。そして小さく、あ、と声を漏らして気まずそうな表情を一瞬间浮かべた後、すいっと視線を逸らした。実は夜、ぬいぐるみがなくなっていたことに全く気がついていなかったのだ。

「あー・・・悪かったな。」

「・・・まあいいのだ。取りあえず無事とはいえないものものこうして此処にいるんだからな。」

夜が本当に悪いと思っているような表情を浮かべて謝るのを見て、怒るに怒れなくなってしまった夏葉は妙に力を込めて掴んでいたぬいぐるみを一瞬眺めた後、優しく夜のほうに放り投げた。

「あ、さんきゅ。」

（やっぱこのぬいぐるみ、黒猫に似てるよな・・・まあいいけど。）

ぽふぽふ、とぬいぐるみの頭を撫でて可愛さを堪能した後、定位置の肩に乗せる。あ、やっぱそこに乗せるのか！？と夏葉が心の中で突っ込んだのを夜は知らない。

「そういえば、今日って宿泊三日目、だよな？」

「うむ、明日の早朝にこの町を出るつもりなのだ。で、今日の予定だが先ずこの後飯を食った後、お前の制服を取りに行こうかと思うんだがそれでいいか？」

「ああ。別にいいけど・・・その後はお互いに別行動にしないか？」

夏葉が顔に疑問を浮かべる。そして何か面白いことでも思いついたのか口端を持ち上げた。

「お前が此処にきちんと帰ってこれるというのならいいが？」

「あんたの中で俺は永遠のお子様かッ」

肯定するように頷いたわけではないが、否定する気は全くないらしい。夏葉は意地の悪い笑みを浮かべたままベッドから降りると、

「ふむ、そろそろ朝食を食べにいくとするか。」

と話を逸らすとさっさと部屋の中から出て行ってしまった。

夜はふうーっと息を吐いて夏葉に続いて行こうかとベッドから降りようとしたときだった。

「……………なんかすっごい体がだるい。」

体全体的にだるさを感じたのだ。夜は首を傾げて何でこんなにだるいのか考えてみるが、何も思い浮かぶことはなかった。そして背中
の肩甲骨あたりにも違和感を感じたが、取りあえず飯が先だと、

「まあいいか。」

といつも通り軽く流して済まし、部屋から出て行った。

その夜が寝ていたベッドの上に、黒い羽が舞っていたのにも気がつかずに。



「あ、いらっしやいませ。お待ちしていましたよ」

宿の食堂で朝食を食べ終わった後、二人は早速あのファンシー感漂う服屋に向かう。そこで出迎えてくれたのは勿論あの銀髪の線が細い女性だ。女性は二人を見るや否や顔を綻ばせて、微笑みながら夜に制服を手渡しする。

「ありがとうございます。とても助かりました」

「ふふ、どういたしまして。そのぬいぐるみも気に入ってくれているようでとても嬉しいです」

彼女が頭を少し動かすと銀色の髪が肩からさらりと流れ落ちる。それとなく銀色が目に入った夜は、またその銀色に見覚えを感じ、内

心首を傾げた。そしてこの店に所狭しと並べられているぬいぐるみの数々。それらに思い当たる人物が頭を過ぎる。

「……ティオ？」

ふとティオのことが頭に浮かび、つい彼女の名前をボソツと呟いてしまう。すると呟いたのが聞こえたのか目の前の女性の目が見開かれ、夜の肩を掴んで叫ぶように言った。

「もしかして貴方、ティオを知っているんですか!？」

急に彼女が迫ってきたので夜は驚きながらも、首を縦に振って肯定する。

「……取り乱してすみません。あの、ティオは元気ですか？」

「はい。とてもかわいらしい少女ですよ。……でもしかしてティオの……」

「はい、ティオの母親です。」

あっさりと肯定する彼女。

思えば今まで何回か思い当たった節はあった。ティオが持っていたあのうさぎとくまのぬいぐるみはこの店に置いてある物と全く同じであることや、流れるような銀色の髪、それによく見れば顔立ちも似ていることが分かる。

「でも良かったです。ティオが元気だと分かって」

彼女はほっと息をついて安心したように片手を胸の上に置く。そして弱い笑みを浮かべた。

夜は何故親子が別々に住んでいるのか甚だ疑問に思ったが、彼女の

弱弱しい笑みを浮かべて眉をハの字にしているのを見てしまうと、それを聞くことは出来なかった。

「良かったらまたいらしてください。そして、出来ればティオの様子を聞かせて下さい。・・・私はあの屋敷に行くことは出来ませんから。」

「分かりました。では。」

寂しそうな雰囲気を漂わせている彼女は、とても儚く壊れてしまいそう。この店にひとりで大丈夫なのか心配になって、俯いて何かを考えている風な表情を浮かべていた夜は、夏葉に行くぞ、と言われて気がついたように顔を上げる。そして彼女に微笑んで挨拶をし、心の中にしこりが残ったまま店を後にした。

「・・・何を考えているかは知らないが、いくら考えたって解決しない事だってあるぞ。」

「それくらい知ってるって。・・・じゃ、俺こっちだから。」

夏葉が向かっている方向と全く反対方向を指差す夜。

「日が暮れるまでには宿屋に戻ることが前提なのだ。あと、銀貨一枚渡しておく。多分それくらいあれば要が買えるだろう。」

「分かってる。きちんと帰ってくるって。」

銀貨を一枚渡される。それを失くさないように上着の内ポケットに入れてから、夜は屋敷のある方へ向かっていった。

(そういえばまだ要買ってなかったよな……。って俺まだ魔術何も習得してねえ!!)

これはまずい。

先ほど夏葉と別れる前に渡された銀貨の重さが増えた気さえる夜は、取りあえず屋敷に向かい、今度こそきちんとハークに魔術を教えてもらわなくてはいけない、と決心する。今日一日しか猶予がないと分かっているので、急いで屋敷に向かった。のだが。

(……。場所は確かこっちであってる、んだよな……。?)

いまいち場所の感覚が掴めない夜だった。とそこへ救世主が現れる。

「あれ？ヨル!？」

こげ茶色の髪に黄緑色の瞳を持つ少年、ハークが大きな紙袋を持ってそこに立っていた。その紙袋の口からは今にも落ちてきそうなりんご(かもしれない何か)が乗っかっている。どうやら買い物の帰りのようだった。

「お、良い所に。というかもう体は平気なのか？」

「いやそれこっちの台詞だし！おれが目を覚ましたときにはもういなかったから心配したんだ！！もしかして魔物に食べられたのかと・・・・」

「俺ってそんなに軟弱に見えるのか？」「いや寧ろ最弱？」

的を得ている発言に、言うに言い返せなかった。

今の発言は相当本人には堪えたらしく、場の空気が一気に重くなっ

た。

ふて腐れて暗い影が出来てるヨルを見て、流石に言い過ぎたと思ったのかハークは、

「じよ、冗談だって！本気にするなよ」

と棒読みで頬を引き攣りながら笑う。

「そ、それよりヨルさ、今暇？良かったら屋敷に来てほしいんだ。兄貴が助けてくれた礼を言いたいんだってさ。」

「実は俺も今から屋敷に行こうとしてたんだ。」

「じゃ、ちようどいいじゃん。じゃあ飛ぶよ？ウィンディー！」

ーフワッ

風が二人の周りに優しく巻きつく。そのときに、夜は目を大きく見開いた。

（・・・ん？なんかハークの後ろに半透明の美しい女の人が・・・

／／／／／

ハークが魔術を詠唱しているときに、ハークの後ろに緑色の髪を持った美しい女性が浮かび上がり、その女性と一瞬目が合う。すると女性は夜に優しく微笑んだ。そして転移すると同時に霧散して消えてしまった。神秘的な雰囲気漂う女性だった。

「ヨル？おーい、聞こえてる？」

先ほどの女性に見とれてぼーっとしていた夜を引き戻したのは、ハークの声だった。

「あ、ああ。」

「はあ、すっかりしてよ。今から兄貴に会いに行くんだから。この荷物、置いてくるからここで待ってて。」

そう言うのとハークはまた転移して何処かに行ってしまう。そして屋敷の外にひとりポツンと取り残された夜は、またふと感じた体のだるさに首を傾げて門に寄りかかった。

（・・・さっきの女の人、まさか幽霊、じゃないよな。）

意外に考えることは子供じみている。

そんなことを考えているうちに、屋敷のドアが開いて中からハークが出てきた。

「よし、入っていいって。」

「ああ。」

どうやらティオの兄からお許しをもらってきたらしい。夜はハークの後に続いて屋敷の中に入っていた。以前はあまりゆっくりと見れる場合ではなかったので、夜は改めて屋敷の中を見回した。今歩いている廊下の天井には小さなシャンデリアがあり、それが日の光に反射して絨毯に映りとても綺麗だ。そして少し歩くごとに部屋のドアがあり、奥に行くまでに数えてみたところ約20もの部屋があった。一体何に使っているのだろうか。

トントン

「兄貴、連れてきましたよ。」

「入って」

そんなことを考えているうちに奥までたどり着いたらしい。ハークがノックをすると比較的高い声が聞こえてくる。そして中には膝の上にティオを乗せて椅子に座っている銀髪の青年が待っていた。青いカーディガンの下に白いワイシャツを着ていて、下は黒いズボンをはいている。中性的な顔立ちをしていて一瞬女性に見えてしまったほどだ。

夜は彼を視界に入れると一瞬怪訝そうな表情を浮かべたが、すぐにもとの表情に戻す。

「初めまして、ヨルさん。ボクの名前はクルスリア。君はボク達の命の恩人だからクルーって呼んでくれてかまわないよ。」

「命の恩人って・・・まあいいか。」

「取りあえずその椅子に座って。ハークも。」

クルスリアに言われて夜はクルスリアの真反対に、ハークはその脇に座る。

「本当にボク達を助けてくれてありがとう。兄としてお礼を言うよ。」

（・・・兄、ねえ。）

何か“兄”という単語に違和感を覚えたのか夜は、内心呟く。

「これから何か困ったことがあったらいつでも訪ねてくるといいよ。歓迎するから。」

「そっか。ありがとな。そういえばわき腹の怪我はもう大丈夫なのか？」

「それに関しては今医者を此処に呼んだから、もうそろそろ来ると

思う。あ、別にゆっくりしていてもらってかまわないからね。ボクとティオは席を外すから、ハーク、紅茶なんか注いであげて」

どうやらまだ怪我の治療は済んでいないらしい。魔物に噛み切られそうになったのだ。今此処で平気で話していられるのが不思議でしようがない。

クルスリアはティオを引き連れて部屋を出て行った。それを見計らって夜はハークに疑問に思っていたことを聞く。

「なあ、あの人さ、本当にティオの兄貴なのか？」

「そうに決まってるじゃん。何でいきなりそんなこと聞くんだよ？」

ハークは夜の質問の意図が掴めずに、怪訝な顔をするものの、夜はならいいんだ、とこれ以上は何も聞いてこなかった。一体彼が何を聞きたかったのか、ハークには全く分からず気になって気になって仕方がなかった。

別に髪の色が全く違う、というわけでもなく顔が全く違うわけでもない。ちゃんと二人は似ている。兄妹と違ってなんら遜色はないように思える。それなのに何故夜は変な質問をしたのだろうか。

「それよりさ、ハーク。」

ハークの頭の中で先ほどの内容がぐるぐると回っているときだった。夜が妙に真剣な顔つきでハークに声をかけたのは。

「な、何だよ？ いきなり改まってさ。」

「俺に今日一日で魔術を使えるように特訓してくれないか？」

そして冒頭に戻る。

10話 終わり

第

第11話 旅立ちの朝による青年たちの為の行進曲（マーチ）（前書き）

大変遅くなってしまいました；；

テストも終わったので、また元のペースに戻していけたら良いな、
と思います。

第11話更新です。

第11話 旅立ちの朝による青年たちの為の行進曲（マーチ）

夜の腕をぐいぐいひっぱりながら公園に向かっているハークの顔はやる気で満ちていた。もう直視できないくらいにキラキラしている。

「あ、あのさ、ハーク。」

「ん？何？」

そんな少年にもものすごく言いにくそうに、困った表情を浮かべながら夜は口を開いた。

「やる気満々のところ悪いんだが、俺まだ要を持ってないんだ。」

要を持っていなければ魔術を使えないわけではない。が、それは極一部の者だけであって、その一部に含まれているハークはそのことに気がつかなかったのだ。

ハークはそのことに少し反省しながら歩みを止めて振り返り、成り行きで夜の腕を放す。

「ごめん、気がつかなかったよ。じゃあさ、今から店に行って取りあえず量産型の要でも買いに行こうよ。量産型の要なら大体何処の魔法具の店にでも売ってると思うから、取りあえず此処から1番近いところは・・・こっちかな。着いてきて、ヨル」

「ああ。態々悪いな。」

「別に悪くないよ。それよりさ、ヨルって何で今更魔術を習う気になったの？」

ハークは以前から疑問に思っていたことを思い切って聞いてみるこ

とにした。

実は夜くらいの歳になってから魔術を習いだすのは珍しい。大体の人は10歳くらいまでには自立するための自分の進むべき道を定める。その為魔術を習い始めるのは一般的に10歳前後からとされているのだ。その習い方は人それぞれでこれといって決めることは出来ないが、学校に通うのが一般的とされる。他にも親に習ったり、独学で学ぶ者も少なくない。

「まあ、そうだな……。1番の要因は、自分の身を自分で守れるようにするため、か？」

自信なさ気に眉を寄せながら言うそんな夜を見て、ハークはため息をつく。

「おれに聞かないでよ。……。なーんか釈然としないけど、まあいいや。それより、ほら、ここが魔法具を売っている店だよ。」

話をしているうちにその魔法具を売っているという店に着いたらしい。外見から見ても、想像していたような魔女の家！みたいな雰囲気はこれっぽっちも出ていなかった。少し残念だ、と夜は微妙に落胆した表情を浮かべる。魔法具を売っているような店なら、こう古めかしくて蜘蛛の巣が天井に張ってあるような、よくRPGなどに出てくる古風な店だと夜は思っていたのだ。実際見てみれば全くその真反対の小奇麗な店。ここではRPGの常識が通用しないところも多く存在しているらしい。

二人は、ベルが鳴るドアを押して中に入り、要を売っている場所へ向かう。店には他の客が2、3人いたので、お店の人はいらっしやいませ、と声をかけるだけで、忙しそうに客の対応をしている。ハークは店に入ると、要がある場所を既に把握しているようで、す

いすいと目的のところまで進んでいった。何回かこの店に来たことがあるのだろうか。

「あ、あったあった。これだよ、ヨル。量産型の要の形は、基本的にこの本型と杖型の2種類なんだ。因みにこれくらいのものだったら比較的安価だから銅貨50枚くらいで買えるよ」

（確か銀貨は銅貨100枚分、だったよな？それなら金は足りるな）

「で、この形はどっちを買えばいいんだ？」

少し心配していた値段の問題だったが、杞憂だったようだ。夜は内心一息ついて目の前の棚に大量に並べてある要に目を向ける。そこには直径30cmくらいの木の棒と、辞書みたいに分厚いハードカバーの本が並んでいた。どうやらどちらも値段は同じのようだ。

「それは別にどっちでもいいと思うけど。」

「ふーん・・・じゃあ杖でいいか。こっちのほうが持ちやすそうだしな。」

見た感じだと木で作られたような色合いをしている。これを見ていると元の世界で大ヒットした眼鏡をかけていて額に特徴的な傷がある少年が主人公の某ファンタジー超大作を思い出す、と夜は苦笑を浮かべながら杖を手を取ったときだった。

ーパンツ

「!？」

「何だ!？」

杖が夜の手に触れた途端、鋭い音を立てて杖が黄緑色に光ると、突然光る粒子になって霧散してしまったのだ。今何が起こったのか分からずに固まっていた夜だったが、とても聞き覚えのある鈴を転がしたような頭の中に響いてきて我に返った。

《ご主人様！！放置プレイかと思って黙って見ていましたが、これではあんまりです！！そんな無機質な表情をしている杖のほうが私よりいいんですか！？》

「って声大きすぎだッ！！頭が割れるっての！」

頭を軽く片手で押さえつけながら叫ぶ夜。するとレーヴァテインは、はっと気がついたかのように慌てて、

《ご、ごめんなさいっ。で、でも、でもでもでも！ご主人様を他の要にとられるのはいやです！！ご主人様の要は私だけです！》

謝ると聞いているこっちが恥ずかしくなるようなことを平気で口走った。しかし普段から恥ずかしい台詞を平気で言う人たち（母親や夏葉、その他諸々）が夜の周りにいる為聞きなれているのか、特に顔を赤らめることもなく、はいはいと聞き流す。

（・・・ってことは要、買わなくて良かったのか。すっかりこいつのこと忘れてたよなあ・・・。）

夜はひとりでそう納得して頷いていると、今にも泣きそうな声音が頭に響く。

《わ、忘れてたんですか！？ひどいですご主人様！！私は片時もご主人様のお傍から離れることなくずっといたのに・・・ふえ》

そして少しの沈黙の後、嗚咽が聞こえてきて夜はぎよっとし焦りだす。流石にこれくらいで泣かれるとは思っていなかったのだ。

《ひっく・・・やっぱり、私は要らなかったんですか・・・？ご主人様・・・》

（・・・悪かった。忘れていたのは俺が悪い。・・・ごめんな？レン）

夜が彼女を宥めるようにそう言った瞬間、嗚咽がぴたと、先ほどまで泣いていたのがウソのように止まる。そして何かを確認するようにレーヴァテインは小さく呟いた。

《・・・レン？》

（あ、ああ。レーヴァテインだと長くて呼びづらいからな。・・・もしかして嫌なのか？）

《いえ！いやじゃないですっ！すごく、すごく嬉しいです・・・ご主人様、ありがとうございます！これから私のことはレンと呼んでください！！》

何をそんなに喜んでいいのか、夜は疑問に思いつつも泣き止んでくれたことにほっとして内心ため息をついているときだ。ものすごい視線を感じたのは。

そして気がついた。

今までののは脳内でのやり取りであって、夜とレーヴァテイン以外が

聞くことは出来ないことに。

ハーク、そして先ほどの音を聞いて駆けつけてきた店員、そしてそこにいた客が、ひとりで何やら喚いて百面相をしている夜にそれぞれ好奇心の視線、蔑む様な視線、そして一番向けられたら精神的につらい、妙に生暖かい視線を送ってきていたのだ。

夜の表情が一瞬凍った。

(・・・レン、この話はまた後で。)

《はい、ご主人様！私はご主人様の傍にずっといますから何か御用があれば声をおかけ下さい》

とりあえず彼女とのやり取りを一旦中断し、はぁ、とため息を吐く。そうしてから、まるで他人のように蚊帳の外で見ているハークに「ここから出るぞ」と目配せをする。そして不思議そうな表情を浮かべている店員らしき人に釣銭は要らない、といって銀貨一枚を渡すと、何事もなかったかのように堂々と店の真ん中を歩いてこの店を出た。少し遅れて不審な動きをしながらハークも出てくるのを見て、夜は思いつきり盛大に息を吐くと体の力を抜いて建物に寄りかかった。

「ヨル、一体急にどうしたんだよ？さっきのあれって手品？」

ハークがキラキラと顔を輝かしながら、興味津々で早速聞いてきた。どうやら流石に先程の空気の中では、夜に聞くに聞けない状況だったのをハークは分かっていたので、ずっと我慢していたようだ。

「手品なんて出来ないっての。それより、なんか俺もう要を持っていたみたいなんだ。だから量産型は買わなくて大丈夫だ。悪いな、

態々ここまで連れてきてもらったってのに」

夜が苦笑する。そして体よく話を逸らされてしまったことに気がついたハークは、小さく口を尖らせながら別に、と呟くとまたもと来た道を戻り始めたのだった。

（あー、レン。いるか？）

《はい、何ですか？》

（さっき俺が杖に触ったときに光る粒子に分解されたのってあんたの仕業か？）

実は先程杖が粒子になって消えてしまったのと同じような現象を、夜はつい最近見たのを覚えていた。それは昨日、夜が剣杖を振るったときに合成獣キメラに起こった現象と似通っていたのだ。

するとレーヴァテインは全く躊躇う素振りも見せずにあっさりと、

《はい、私がやりました。あの杖をマナレベルに分解したんです。》

と暴露した。彼女の声音を聞くに全く自分が悪いことをしたと思っ
ていなさそうだ。

（やっぱそうか。それってレンの特技みたいなものなのか？）

《そうですね。特技、というかこれは私が生まれたときからある性質、とでも言いましょうか。私は世界を滅ぼす剣杖ですからね。・
・あ、それから言い忘れていたんですが、ご主人様、これから魔術を習いに行くんですよね？》

(ああ、そうだが?)

いきなり何を聞くのかと夜は首を傾げる。すると彼女はとてもぶっ飛んだことをさらし、といいのけたのだ。

《ご主人様は魔術を習ったところで、普通の魔術は一切使えないと思いますよ?》

(……は?)

一瞬夜の動きが止まったが、ハークがそれに気がつかずに進んでいくので、すぐ我に返りまた動き出す。そして思わず素っ頓狂な声を上げて聞き返してしまう。しかし彼女は無慈悲にも、顔があったら笑顔なんじゃないか? という雰囲気の声で先程より詳しくもう一度繰り返した。

《ですから、ご主人様は元素魔術、派生魔術、古代魔術が一切使えないんです。何せご主人様は属性をひとつもお持ちでないのです。ですから魔術を習う必要はないと思ったんですが……あまりにご主人様が楽しみにしていたのでなかなか言うことが出来なくて……》

(……てことはだ。ファンタジーの最大要素ともいえる魔術を使えないのか俺は!?)

《はい。あ、でも落ち込まないでください! ご主人様は何の属性も持っていないといいましたが、無属性魔術は使うことが出来ますから!》

無属性魔術はたしか誰にでも使うことが出来る魔術であって、その

実用性は広く、しかし極めることが出来るのはほんの一握りの人だけだというのは夏葉が説明してくれていたのを覚えている。しかし、聞いている限りだと無属性魔術の用途といったら物を持ち上げたり、あの服屋の女性や怪我を治してくれた医者が使っていたようなものしか思いつかない。これらはどう考えても戦闘に向いているとはお世辞にも言えたものではない。

（・・・どうせそんなことだろうとは思ってたけどな。思ってたんだからなっ！ぐすっ・・・）

《ご、ご主人様、泣かないで下さい！それに無属性といってもご主人様の場合は特別なんです。》

（?どういうことだ?）

先程まで泣きまねをしていた夜だったが、彼女の台詞に疑問を覚えて夜は問う。

《無属性には、またそれぞれ人によって特徴が異なってくるんです。物を持ち上げることが出来る人は“浮遊”、調べるのが得意な人は“検索”、など等今挙げたのはほんの一部ですが、このような特徴が見られるのですが、ご主人様の場合、特徴自体が“無”なのです。つまりご主人様はその特徴に縛られることなく、様々な無属性魔術を使うことが出来る、ということなんです。ですから、以前ご主人様の足が一時的に速くなったのは、ご主人様が無意識に使われていた筋力強化の類の無属性魔術だったわけです。》

（・・・なるほどな）

どうやら知らず知らずのうちに夜は魔術をもう既に使っていたよう

だ。

《因みにですが、私で斬ってマナレベルに分解されたものは無生物、生物に限らず再構築して召喚することが出来ますよ。これも無属性魔術の一種です。》

（そう考えてみると、無属性魔術って意外と便利、なのか。）

《はい。とっても便利ですよ。ご主人様にとっては建物ひとつ浮かしたり、相手の思考を読んだりすることを、息をするのと同じくらい簡単に出来るはずですよ？そういうふうには、ご主人様は魂を再構築されてるんですから。》

レーヴァテインがそう言った瞬間、急に肩甲骨の辺りがじわじわと痛み出す。一瞬、痛みが襲ってきたことに驚いたがすぐに引いていったので、特に気にすることもなかった。レーヴァテインが、急に夜が黙ったことに対してどうかしましたか？と心配そうに聞いてきたが、別に大丈夫だと言って夜は笑って流したのだった。

「……ル、ヨル！聞いてる？公園に着いたよ。」

気がつけばハークが目の前について、公園に着いたことを知らせてくれていた。レーヴァテインと話していたので、全く外に気を配っていなかったのによくここまで歩いてこれたもんだ、と夜はひとりで感心していた。

本当なら此処でハークに魔術を習う予定だったが、先程の会話で、その必要がなくなってしまったのだ。教えてくれる気満々のハークにそのことをいえる気がしない、と夜は歯切れ悪そうに言い出す。

「あ、ああ。で、着いたところ悪いんだが、やっぱ俺用事があったのを思い出してな。もう行かないと間に合わないんだ。」

目に見えてハークが落胆してしまったのが分かる。それを見て夜は、悪いことをしたな、と眉を寄せて、

「ごめんな。」

と謝った。するとハークは、本当に残念そうな表情を浮かべて苦笑しながら「いいんだ、大丈夫だよ!」と言って気にしてないふうを装ったが、夜の目には平気な顔を無理して作っているように映った。

「じゃあ、な。今日は色々ありがとな。」

「う、うん。じゃあまたね!!」というか明日また此処に来てよ。そうすれば教えてあげられるからさ。」

良いことを思いついたように顔を輝かせるハーク。だが、それとは全く反対の、苦い顔をして夜は肩に乗せてあるぬいぐるみを弄りながら、気まずそうに言った。

「あー・・・明日は無理だな。」

「じゃあ明後日は?」

「明後日も無理だな。」

「じゃあ明々後日でいいじゃん。」

「明々後日も無理だ。」

見る見るうちに不機嫌そうに口を尖らせて、じゃあ何時がいいんだよ!?!と夜を睨みつける。ハークは初めて自分に頼ってくれた夜にどうしても魔術を教えてあげたかったのだ。しかしその肝心の相手は、提案した日を尽く、無理だと跳ね除けていく。不機嫌にならない

いほうがおかしかった。そしてふと思った。

もしかしたら自分じゃ頼りないと思われているんじゃないか、と。

その所為か感情が先走って、ハーク自身が驚くほど大きな声を出して夜に向かって悲しそうに叫んだ。

「本当はヨルは俺なんかに教えて欲しくないんだろ！」

「違う。」

「違うくない！だってヨルはさっきから、無理だ無理だって……。たしかにおれはまだ子供だし上手く教えてあげられないかもしれないけど、頑張って教えるから！だからさ！」

「だから違うんだって。」

ハークの声を遮る夜の静かな声が公園に響いた。そして続ける。

「そういうふうにしたから無理だといったわけじゃない。明日の朝にこの町を出る。だから明日も、明後日も明々後日もその後も、無理なんだ。」

ハークは何も言わなかった。そんな彼を見て、苦笑した夜はハークの頭にぽんっと手を置く。

「だから、ごめんな。」

「……………」

黙っているハークの頭を数回軽く叩いた後、夜は公園を後にした。後に残されたハークは、暫くの間ずっとそこに突っ立っているだけだったが、急に俯いていた顔を上げたかと思うと、何かを決意したような瞳を輝かせて屋敷に向かっていった。

「・・・さて、と。そろそろ行くぞ、夜。」
「ああ。というかさ、何処に向かうつもりなんだ？」

早朝。二人の青年が宿から出て行った。ひとりは夜空を思わせる黒い髪を持つ青年。もうひとりは真紅の髪を持つ青年。二人は町のは



ずれに向かって話しながら歩いている。

「うむ。そのことなんだが、取りあえず中央都市に向かおうと考えているのだが、それでいいか？」

「ああ、別に何処だって構わないし。でも中央都市だったら色々面白いものが見れそうだな。」

「きっと色々な物が集まっているはずなのだ。お前が気に入るような本とかも沢山あると思うぞ。」

ははっ、そりゃ楽しみだ、と夜は笑いながら空を見上げた。空は朝だというのに薄暗い雲に覆われていて、今にも雨が降ってきそうだ。今の季節、天候が変わりやすいので傘を持っていたほうが良い、と宿屋の女将さんが言っていたのを思い出し傘を買っておけば良かった、と思ったが今の時間ではまだ早すぎて店は開いていない。

「まあ、いざとなれば走ればいいか。」

「うむ。あの速さなら何処か雨宿りできるところまでどうにかしてたどり着けるだろう。」

いざとなれば、を考えているあたり、この二人はあまり雨を深刻に考えていないようだ。しかし実際、長時間雨の中にいれば体力はじわじわと削り取られ、風邪をひきやすくなりいいことはひとつもない。その辺りは一度体験してみないと分からないものなのだろう。

「そういえば、夜。魔術のほうはどうなのだ？」

夏葉がふと思いついたように聞いてくる。

「あー、多分大丈夫・・・なのか？」

「俺に聞かず自分の心に聞いてみるのだ。」

（レン、大丈夫なのか？）

《ぼっちりです！ご主人様》

レーヴァテインに聞いてみたところ、大丈夫なそうだ。ここまで自信満々に言っているので大丈夫なのだろう。きっと。

そう思うことにして夜は、大丈夫だ！と親指を立てて自信満々に言い切る。そんな彼の、一体何処からその自信は来るのだろうかというほど自信に満ち溢れた雰囲気を見て、安心したのか満足そうに夏葉はうむ、と頷いた。

と、そのときだった。

二人は後ろに気配を感じて振り返る。するとそこには見知った顔の少年が居たのだった。

「・・・ハーク？」

夜が彼の名前を呟くと同時に、ハークは急に頭を下げた。

「おれも、・・・おれも一緒に連れてって下さい！」

「・・・はい！？」

夜は今聞き間違ったんじゃないかと、耳を掴んで引き伸ばすと聞き返す。しかし内容は全く変わらず、聞き間違いではなかったようであった。

「おれも一緒に旅に行きたいんだ！お願いだ！連れてってくれ！！」
「・・・ぼーいずびーあんびしゃす。」

「「は？」」

急に夏葉がわけの分からない言葉を発したもんだから、夜とハークの声が綺麗に重なる。すると、また夏葉は繰り返した。

「ぼーいずびーあんびしやす。知らないのか夜よ。“少年よ、大志を抱け”という言葉を！」

「いや知ってるけど、それが？」

妙に発音が稚拙で、とてもじゃないが彼の英語は聞き取れない。しかしかろうじて夜が、夏葉が発音している英語を聞き取れたのは、やはり親友故に、なのだろうか。しかしハークにとっては、何語しゃべってんだろこの変な奴、という本音しか湧いてこなかった。

「いいじゃないか、夜よ。“少年よ、大志を抱け”なのだ。その少年、着いてきてもいいぞ。」

しかしこの台詞によって、ハークの頭の中で夏葉に貼られていた“変な奴”のレッテルは剥がされた。ハークは顔を輝かせて無邪気な笑みを浮かべながら、ありがとうございます！と喜んでいた。それを微笑ましく見ていた夜だったが、はたっと気がついて夏葉に詰め寄る。

「っていいんかい！？こんなに簡単に決めて！」

「少なくとも道中、お前の事故死する確率は減ると思うぞ。「そうですねー」

しかし夏葉に容赦なく真実を突きつけられた夜はこれ以上は何も言えずに、明後日の方向に顔を向けて不機嫌そうに目を側めていた。そんな夜の視界に、嬉しそうに口を緩ませているハークが入ってきて、

「ヨル。これでいつでも教えてあげられるよ。これからよろしくね。」

と楽しそうに言うハークを見て、夜は苦笑する。しかしすぐに微笑みに変わって、ハークの頭に手を置いた。

「・・・ああ、よろしくな。ハーク」

11話 終わり

第

第11話 旅立ちの朝による青年たちの為の行進曲（マーチ）（後書き）

これで第1章は終了です。

ここまで読んでくださった方、どうもありがとうございます m（

） m

これからどうかよろしくお願いします。

美しく輝く金色の日差しが風に煽られる草原を優しく照らしている、ある日の昼下がりに。

「とうかさ、ハーク。何であんたら盗賊まがいのこと、やってたんだっけ？」

金色の光を全て吸い込んでしまいそうな暗闇色の髪を持つ青年は、髪と同じ漆黒の眠そうな瞳を、一緒に昼食の用意を手伝ってくれている少年に向ける。するとそのハークと呼ばれた少年は、日の光に反射して綺麗なオレンジ色に見える焦げ茶色の髪を揺らしながら、その質問に答えた。

「盗賊がすることといったら金目の物を盗む、ぐらいしか思いつかないんだろうけど、おれたちはその他に狙っていたものがあつたんだよ。それが、魔力が込められた宝物。」

「ふむ。それは所謂“魔具”というもののなのだろう。」

ハークの言葉に相槌を打ったのは、昼食をせっせと作っている二人の脇で優雅に草原の上に寝転がっている、真紅の髪を持つ青年だった。青年は全く手伝おうという素振りも見せずに、二人が作っているのを眺めている。それを忌々しそうに睨んでいる黒髪の青年は、不機嫌そうに目を側めて手元にある鍋をがしゃがしゃとかき回していた。

「うん。一般的にはそう呼ばれてる。で、その多数ある魔具の中でも、その物に込められている魔力が無属性のものだけを狙ってた。」

「・・・ってヨル！！鍋の中身がこぼれるって！！」

「大丈夫、心配すんな。あんたと俺の分はしっかり確保してある」
俺の分は何処^{いづこ}へ！？」

冷たい笑みを浮かべたヨルと呼ばれた黒髪の青年は、親友の突っ込みを無視して鍋をかき回し続ける。そして会話が止まっていることに気がついて、話の続きを促す。

「ハーク、話を続けて？」

「う、うん。」

何か得体の知れない威圧を感じたハークは、ほとんど反射的に返事をする。

「で、ティオの体質についてヨルには話した、よな。じゃあナツさんに簡単に説明するけど、ティオの体は無属性の魔力しか受け付けず、尚且つ体の機能に魔力を自己回復する能力が欠けてるんだ。だからティオのことを生かすためにはどうしても大量の無属性魔力が必要になってくる。だからおれたちは、あーするしかなかったんだ。」

ハークがナイフでパンを切る音が一瞬この場を支配する。その沈黙を破ったのは、ヨルの欠伸だった。

「・・・ふぁ・・・あ・・・。で、その話の流れからいくと、その・・・魔力、だっけ？それってすごい高価だったりするののか？」

「とっても。魔力一個で一ヶ月遊んで暮らせるくらいには。」

「ちなみにだが、ほとんど現存している最高位魔力は国が確保してしまっている。最高位魔力は、それひとつで天候が変えられる、とか大地を割ることが出来る、とかそういう危険な能力を持つ物のこ

となのだ。一般人が持っている魔具というのは、ただその物に魔力が宿っているってだけっていうのがほとんどなのだがな。」

ナツ、と呼ばれた、真紅の瞳を閉じている青年はそう補足する。

その脇で、料理を作っているヨルとハークは皿を出してポトフもどきを盛り付けし、先程ハークが切っていたパンをその脇に添えている。どうやらそれが今日の三人の昼食のようだ。

「ほら、出来たぞバカ夏。さっさと食べ。」

「うむ、ご苦労だったな夜よ。「殴っていいデスカ？」スープが冷めてしまってもったいないだろう。いただきます。」

「ほら、ヨル。せっかく作ったのに本当に冷めちゃうって」

今すぐ殴りたい気持ちを洩々抑えて、夜はいただきます、と目を瞑ってからまた開きスプーンにすくったスープに口をつける。ハークも目を瞑ってからスープを飲む。すると驚いたように目を見開いて、ヨルの顔を見つめた。

「ってこれすごくおいしい……。ヨル、実は料理上手？」

「こいつの作った料理で確実に全人類落とせるのだ。」

自分の事のように胸を張って自慢している親友に若干いらつきを覚える夜であったが、一応褒めてくれているのであろうと思い、殴りたい気持ちを自粛した。

「全人類落とせるとか、それすごい大げさだろ？……で、さっきの話に戻すが、ハークってティオの家に住んでるのか？」

「……。まあ、そういうことになる、かな。」

歯切れ悪そうに言うハークに疑問を覚えた夜だったが、根掘り葉掘

り聞くことはしなかった。そのことに安心したのか、ハークは小さく吐息を漏らしてパンに手を伸ばす。すると、次はパンを食べ終わった夏葉が二枚目のパンを千切りながら質問する。

「ふむ。もうひとつ気になったことがあったのだが、あの時俺たちを襲ってきたお前を含めた五人は皆もとから盗賊だった、ってわけじゃないのだな？」

パンが口に入っている所為か、声には出さずに首を縦に振って肯定する。数秒後、少し無理やりパンを飲み込んだような形でスープを飲み下す。

「名前言ってもわかんないだろうから詳しくは言わないけど、おれを含めた五人は盗みに手を染める前はあの町で手に職もって働いてたんだ。ティオが生まれる前までは、ね。・・・ゴクッ・・・ふう。おいしかった」

「そりゃよかったな。」

どうやらこちらの世界では、いただきます、ごちそうさま、は言わないようだ。ただ食べる前に少し目を瞑ってお祈りするだけらしい。ハークは食べ終わった後、目を数秒間閉じてから皿を片付け始める。夏葉も流石にこれ以上任せては夜がマジギレすると踏んだのか、きちんと自分で皿を拭いていた。夜は二人より一足先に食べ終わっていたため、もう既に鞆に皿を入れて鍋などを片付けている。

「・・・ふう。じゃ、日が暮れないうちに到着するためにも、そろそろ行くか。」

「うむ。そうだな。なるべく野宿するのは避けたいところなのだ。」

ちょうど夜が調理器具を全て片付け終わったので、三人はその場か

ら出発することにした。

因みにだが、此処に来るまでに魔物にはジャンクダック一匹のみにしか会っていない。その魔物はハークの腕一振りで肉塊に化けてしまつて、今頃他の生き物の餌にでもなっていることだろう。そのとき夜はというと、恒例通り二人、ハークと夏葉の後ろに素早く回つて隠れていたのは言わずもがな。雑魚は雑魚でもやはり魔物は怖いらしい。そして文句を言おうにも本人は至って真面目な表情をしているものだから、二人はそんな彼を怒るに怒れないのだった。

焚き火を足で踏んで消す。ジュツという音と草木が焦げた匂いがし、灰色の煙が暗い暗雲立ち込める空に上っていく。

道を知っている夏葉を先頭にして、三人は中央都市に向かって再度出発したのであった。



「ティオ、もしかしてハークを探しているの？」

「……………」

「そっか。ハークはね、ティオの病気の治療法を見つけるためにヨルさんと旅に出たんだよ。だからしばらくハークとは会えないよ。」
「？」

可愛らしく首を傾げる少女。少女は長い銀髪をポニーテールにしてピンク色のリボンで結わえてある。彼女の腕の中にはうさぎとくまのぬいぐるみがあった。

そして少女の仕草を見て鼻血を噴出しそうになっている、一見したら女性に見える顔立ちをしている青年。その青年も少女と同じ銀髪で、顔立ちがそっくりである。青年は少女の頭を優しく撫でながら、

「きっとそのうちまた帰ってくるよ。ハークはうちの家族も同然なんだから。」

と言って微笑む。と、そこへドアをノックする音が聞こえてきた。青年は、表情を引き締めると「入って」と返事をする。するとドアの向こうから入ってきたのは、痩せ型の中年男だった。

「センネルか。どうしたの？」

「ああ、あの合成獣キメラのことなんだがもう少し調べるのに時間がかかりそうだ。すまない。もう少しだけ時間をくれ。」

男は頭を下げて青年に謝る。

「別に謝らなくてもいいのに……。分かった。でも出来るだけ早く調べてくれるといいんだけど……。」

「助かる。では時間がもったいないからもう行く。」

男はそう言うと、素早く身を翻して部屋から出て行ってしまった。青年は一気にため息をつく、此処にティオがいることを思い出して慌てて笑顔になる。

「……………」

少女はそんな青年を見て、一瞬さびしそうな表情をした後に青年の胸に頭を預けるようにして寄りかかり、欠伸をすると同時にゆっくりと目を閉じていった。先程まで全く眠くなさそうだったのに死んだように眠ってしまった少女を壊れ物のように優しく抱き上げて、青年は彼女をベットに横たわらせ毛布をかける。気のせいかな、彼女の顔が青白く見えた。

（……………。取りあえずはハークがとってきてくれた魔石でなんとかなるかもしれない。……。けど……………。）

いつまでもつか分からない。

青年は妹の世話をする為に此処を離れることが出来ない。青年自ら治療法を探すことも、魔石を見つけることも、金を稼ぐことも。青年は妹から離れることなんて死んでもいやだし、彼女は青年にずっと傍にして欲しかった。実際、彼らの願望どおりになっている。

それでも彼らが救われることはない。

彼女の体が治るまで、二人は永遠に此処に縛られ続ける。それでも、彼らの周りには彼らのことを大切に思ってくれている仲間がいる。仲間がいるから、二人は此処まで生きてこられたのかもしれない。今も仲間で家族同然である、ひとりの少年が少女の為に何処にあるのか手がかりすら掴めていない治療法を探しに行ってくれている。

青年の望みは、彼がその方法を出来るだけ早く見つけてくれること。

青年は息を吐く。それからベットに横たわっている少女に優しい目を向けたが、死んだように眠っている彼女が反応することはなかった。ただ彼女は静かに息をしていた。



この世界の何処かにある、ある大きな城の中で、ある一人の少年とある一人の青年が話していた。少年の方は闇に紛れていて、どういう容姿をしているか分からないが、青年の方は漆黒の長い髪を腰まで下ろしていて、その銀色の瞳には狂気の色を映していた。その青年はとても楽しそうに、台座に座っている少年に話す。

「会ってきたが、なかなか面白そうだな。」

少年は彼の言葉を聞いて、嬉しそうに笑った。

「ふふ、でしょ？ ちょっかいは出してもいいけど、でも、苛めちゃだめだよ？ 戦ってもいいけど、怪我はさせないでね？ 話してもいいけど、触っちゃ駄目だからね？ “彼”は僕のなんだから」

笑っているのに、その表情は何処か歪で底知れぬ恐怖を感じさせる笑いだった。青年はそんな歪な笑い方をする少年を見ても、恐怖に取り込まれることはなく、青年はおかしそうに、ああ、と返事をする。青年の反応に満足したのか、少年はそれ以上何も言わずに、ただ微笑んでいるだけだった。

「何をそんなに楽しそうにお話していらっしゃるんですか？」

そのとき、そこへ何処から現れたのだろうか、気がつけば炎のように揺らめく髪を足元まで流している美しい美女が二人に声をかける。

肌は日に焼けたように黒く、しかしその肌の色を誇りに思っているように比較的露出が高い服を着ていた。靴は履いておらず、裸足のままでひたひたと台座の近くまで静かに歩いてくるその姿は踊り子を想像する。しかしその金色の瞳は縦に割れていて、どうみても人間のそれとは違っていた。

「ああ、ミリイーナ、おはよう。」

「おはようございます、陛下。」

ミリイーナと呼ばれた女性は、尖った耳についている金色のピアスを弄りながら優雅に挨拶を返す。それに、見惚れるような笑みを浮かべて楽しそうに少年は言った。

「うん。“彼”のことを話していたんだよ。そういえば、そっちは順調？」

「ええ。順調に研究は進んでいますよ。リシイーナが頑張っています。・・・そうですか、アシュテカは“彼”に会ったんですね。ふふ、これからが楽しみですわ。それではそろそろリシイーナに紅茶を持っていかなくてはいけないので、失礼します。」

「うん。リシイーナに頑張って、って言っというて。」

「はい。分かりました。」

ミリイーナは音を立てずに静かにこの台座の間から去っていった。

「さて、アシュテカもそろそろ仕事に戻って。早くこの仕事を終わらせないと僕は“彼”に会えないんだから。」

「ああ。じゃあ行ってくる。」

「土産は“彼”のことについてね。」

「了解だ。」

そう言うのアシユテカは黒い髪を靡かせて、背中から黒い大きな翼を出したかと思うと一瞬でその場から消えた。後に残された少年はいつまでも笑みを浮かべ、窓に映る紫色の月と漆黒の夜空をただ一心に見つめていた。

A
n
s
w
e
r

E
N
D

銀色少女の奏でた曲による答えの為の間奏曲（インテルメッツォ）& 1 t ; ? &

次から第2章が始まります。

やっどヒロインが登場してくる章に突入しますへへ

第12話 唐突の出会いによる白うさぎの為の戯曲（ドラマ）（前書き）

いよいよ第2章始動です！

第12話 唐突の出会いによる白うさぎの為の戯曲（ドラマ）

「空いてる部屋がない？」

「うむ。どうやら明後日から豊作を祝う“農国祭”が三日間この中央都市で行われるらしいのだ。その影響でどうやら何処の宿も観光客で埋まっているらしい。」

日は暮れてしまったものの何事もなく無事アグリキュル国の都市であるサントウルにたどり着き、先に宿を確保してしまおうという話になり宿に向かった三人であったが、二日後にある農国祭の為に宿は何処も観光客で埋め尽くされていて、なかなか宿泊場所を決められないでいた。

夜にいたっては退屈すぎて、宿屋のロビーにある椅子に座って欠伸をしている始末だ。夏葉も宿屋巡りで疲れたのか、夜の向かい側にある椅子に座って小さく息を吐いている。

「・・・ふぁ・・・あ・・・眠い・・・。夏、此処で寝てもいいか？」

「うむ。少年が帰ってきたら起こしてやろう。」

「さんきゅ。」

相当眠かったのだろう。夜は言うが早い、ものの数秒のうちに寝息を立て始めたのだった。するとそれとほぼ同時に、ハークが宿屋に帰ってくる。

「ただいま・・・ってヨル寝てるし。起こしましょうか？」

何故か夏葉には敬語を使うハークだが、誰も突っ込まないのでそのままであった。まだ出会って間もない所為か、若しくは第一印象が

最悪だったのか（第4話参照）。おそらく後者の方だろうと夏葉は考えているが、特に敬語に関しては気にしていないようだ。

「いや、まだいいだろう。で、少年よ。何処か宿は見つけられたのか？」

ハークは鞆から一枚の紙を出し、それを夏葉に渡した。くしゃくしゃに折れ曲がってはいるものの辛うじて文字は読めそうだ。

「・・・闘技場ペアの部参加申込書・・・？」

「明後日からある農国祭ですが、その折に一緒に武闘大会も開かれるそうで、武闘大会参加者は特別に闘技場に泊まれるらしいんです。で、個人戦の部の申込書をもらおうと闘技場に行ってみたんですが、どうやら昨日で個人戦の部は締め切ってしまったみたいで。ペアの部だったら飛び入り参加も大丈夫らしいです。」

ふむ、と頷いて紙を見つめる夏葉。それから目の前で幸せそうに寝ている夜に目を向ける。ハークもそれに習って夜に視線を向け、お互いに顔を見合わせた。

「・・・・・・・・俺たちで出るしかないな。」

「・・・・・・・・ですね。」

（（こいつが武闘大会になんて絶対出るわけがない。））

見事に二人の本音が一致していた。

此処に来るまで、魔物に遭う度に逃げ出そうとしていた夜だ。あの雑魚魔物ですら二人の後ろに隠れていたのに、武闘大会なんていう人対人の戦闘なんてもっての他。

何故そこまでして戦闘を避けているのか、二人には皆目検討もつか

なかった。そのことをそれとなく聞き出そうとはしているのだが、夜はその会話になると巧みに質問をかわして上手く他の会話にすり替えられてしまうのだ。

ハークは合成獣^{キメラ}と遭遇したときに、夜の戦いを途中で気絶してしまった為に全く見ていない。しかし次に目を覚ましたときにはあの場に合成獣^{キメラ}も夜もいなかったのだ。一体あの時何が起こっていたのか、未だに謎のままである。

「取りあえず善は急げ。とっとと登録してこようではないか。」

夏葉は立ち上がって首を左右に曲げばきぼきと音を鳴らす。相当疲れているようだ。それを苦笑いを浮かべながら見ていたハークは、返事をしてから夜を起こしにかかった。

「ヨル、今から闘技場行くから起きて！」

「・・・俺此处で待ってるから行ってこいよ・・・ぐう・・・」

しかし起こされている本人は全く行く気がないようだ。眠そうな目をゆっくり開いて、独り言のように呟いてからまた寝てしまう。

「ヨル！！」

「それ以上はやめておいといたほうがいい。少年よ。」

無理やりにでも起こそうと夜の体を揺らして奮闘しているハークだったが、それを夏葉は止めさせる。その表情は真っ青で何かを恐怖しているような顔だった。それを見てハークは一瞬動きを止め、好奇心に負けて恐る恐る聞いてしまう。

「あの、一体何が・・・」

「こいつを無理やり起こしてはいかんだ。起こしたら・・・起こ

したら四分の三殺しに遭うぞ!! 夜は無理やり起こされると性格が超ハイパーウルトラDになるのだ・・・」

「・・・どうす？」

「とにかくある人物を除いて、夜を無理やり起こせる奴はこの世に存在しないのだ。分かったか、少年よ。」

「は、はい！」

途中から夏葉が何を言っているのか分かっていないハークであったが、あまりにも夏葉が必死な表情で何かを伝えようと訴えてくるものだから、その勢いに流されてつい気合の入った返事をしてしまったハークであった。とにかく今分かったことは、ある人を除いて夜を無理やり起こすことは出来ない、ということだった。

以上のやり取りで、申し込みは夏葉とハークで行く、という選択肢しかないことが分かり、二人はぐしゃぐしゃに折れ曲がっている紙を持って、闘技場に向かっていった。幸いこの宿からは徒歩で二十分はかからない。

「それにしてもやっぱり中央都市は賑わいが町とは違いますね。」
「うむ。俺も初めてだが、ここまで賑やかだとは思ってもしなかった。」

宿から一歩外に出れば、前夜祭と言わんばかりに沢山の人が飲めや歌えやの大騒ぎ状態であった。もうこの勢いでいつでも祭りをやっているような雰囲気さえ漂っている。大人は酒の飲み比べ、子供は食べ歩きながら楽しそうに踊っている様子は、都市に来たんだな、という気持ちに二人をさせるのだった。



二人が闘技場に着いた頃、目が覚めた夜は盛大な欠伸と伸びを同時にしたあと、ふと呟いた。

「・・・あれ？あの二人、何処行っただ？」

ふと窓の外に目をやると外はもう真っ暗であったが、沢山の街灯に照らされた下で沢山の人たちが歌って踊っているのを見て首を傾げる。数分間そのままぼーっとしてから、自分の要であるレーヴァテインに声をかけた。

（・・・レン、いるか？）

《はいっ！何ですかご主人様？》

とても久しぶりに声を聞いたような気がした夜だったが、実際そんなに時間は経っていない。しかしレーヴアティンがあまりにも嬉しそうに返事をするのを聞いて、夜は内心笑いながら外に視線を向けた。

（夏とハークが何処に行ったか知ってるか？）

すると少しの沈黙の後、申し訳なさそうな雰囲気の声で謝った後、ぶっちゃけるように一気に叫んだ。

《・・・あの、すみません！実は・・・実はご主人様の寝顔を眺めていて全く話聞いてませんでしたッ！！》

「・・・・・・・・。」

一瞬思考が停止する夜。

それから急に顔を真っ赤にして片手で顔を覆い、声にならない叫びを必死に外に出さないように抑えていた。そんな夜を見て、レーヴアティンはうっとりとした声で呟く。

《ああ？・・・悶えるご主人様も素敵です・・・／／／／》

これを聞いて夜ははっと今気がついたように顔を固まらせた。そしてふと思った。

・・・もしかしてこいつ、変態なんじゃないか。

と。

思えばそういう節は何度か思い当たらないことはない。たしか初めてレーヴァテインの名を呼んだ時だって、人が死に物狂いで必死に牙を押さえていたのに、何か不謹慎なことを言われたような気がする。(第9話参照)そして今の言葉。

(いやいやいや。まだそうと決めるのは早い。もう少し様子を見てから……ってちょっと待て。)

たしかあの時(第11話のとき)も……

回想開始↓

《ご主人様!! 放置プレイかと思って黙って見ていましたが、これではあんまりです!! そんな無機質な表情をしている杖のほうが私よりいいんですか!?!》

↓回想終了

なんてこと言っていたような。

(っつか放置プレイってなんだよ!?)

《……ご主人様? 急に黙ってどうかしましたか?》

心配をしてくれているのか声をかけてくるレーヴァテイン。それで我に返った夜は、内心慌てているもののポーカーフェイスで、

(別になんでもない。大丈夫だ)

と冷静に返事をしたのだった。そして何を思ったのか、すくつと立ち上がって伸びをしたかと思うと宿屋の外に出る。外は喧騒に包まれていて、夜は耳障りだと思ったのか人が居ないほうへとどんどん歩いていく。それを不思議に思ってレーヴァテインは聞く。

《ご主人様、あのお二方を待っていらっしゃったんじゃないんですか？》

（なんか暇だし、外に出てみたくなったからつい。大丈夫だって、少し空気吸ったらまた宿屋に戻るって。）

《私は別にすぐ戻らなくてもいいんですけどね・・・ご主人様と二人つきり・・・だし／／／／》

（ん？なんか言ったか？）

《い、いえ！！何も言ってないですっ！》

（ふうん？まあいいけど・・・）

素っ頓狂な声で言うレーヴァテインがおかしくて、夜は内心笑いながら空を見上げる。都会だというのに此処の空は綺麗だ、と呟いた。

《ご主人様って空が好きですよ？いつも暇になると空を見上げていますね》

（まあ、好きか嫌いかで言えば好き、かな。なんていえばいいか分からないんだが、なんか空を見上げると気分が良くなるというか・・・まあそんなかんじか？）

言いにくそうに眉を顰めるが、最後はそんな坎じで済ましてしま
う夜。しかしそんな坎じが伝わったのか、彼女はふふっ、と優し
く笑って、顔が見えたらきつと綺麗な笑顔なんだろうな、と想像出
来るくらい綺麗な声だった。彼女の顔が見れることなら見てみたい。
ふとそう思っただけ笑ったときだった。

ーガシッ

「お、お願いですっ！助けて下さいッ！！」
「はい！？」

いきなり腰に腕を回されたかと思って驚いて背後に視線を向けると、
白ウサギのきぐるみを着た女だか男だか分からない生物がそこにい
た。うさぎ、といってしまったが白い毛に赤い目。どうみても地球
で言ううさぎにしか見えない。

「っとうさぎっ！？」

「うさぎじゃありませんっ人間です！！取りあえず誰でもいいから
私を助けて下さい！！」

「誰でもいいってそんな横暴な・・・ってか誰でも良いんだったら
何故よりによって俺なんだ！？」

「そこにいたのが貴方だったからです！！」

どうやら声からして女性のようだ。しかしどうしてまたこんなこと
になっているのやら。うさぎに後ろから掴まれている姿を誰か第三
者にでも見られたら、珍妙な図が出来上がってしまう。

とにかくこの女性は相当焦っているようで、誰でも良かった為にそ
こら辺にいた夜を選んだようだ。人通りの少ないところにいた夜の
運が悪かったのか、はたまた偶然だったのか。

（・・・というかだ。）

「痛い！！痛いって！！！どんだけ強い力で掴んでんだっ！？分かったから取りあえず放せって！腰が折れる！いやほんと比喩表現じゃなくて本気で！！」

「あっ、すみません！！」

やっと力を入れすぎていることに気がついたのか、女性は慌てて謝ると腰から手を離してくれる。悪気があったわけではないようなので、怒ることは出来なかったが、取りあえず状況把握が先だと夜は彼女に聞く。

「で、どんな奴があんたを追っかけてきてんだ？」

「完全武装の男が十人で「よし逃げよう」ええっ！？ってちよつと

／／／／

最初から逃げることを前提に考えていた夜は、言うが早いうさぎのきぐるみを着ている女性を軽々とお姫様抱っこをすると、人が見ていないのを確認してから彼女が驚いて変な声を出すのも構わずにひょいっと屋根の上に飛び乗った。

「ひゃっ！！」

ーダンッ

比較的鈍い音がして無事屋根の上に降りた夜は、うさぎの着ぐるみを着た女性をゆっくり下ろす。すると女性は腰が抜けたのか、降ろされた瞬間にその場にへなへなと力なく座り込むのだった。それから数秒経った後に、彼女は何かを叫ぼうとしたが夜に素早く口を押さえつけられて、もう片方の開いている手の人差し指を立てて静か

にするように促した。それにコクンと縦に頷いたのを見て、夜はそっと彼女の口から手を離す。それから屋根の下を隠れて見下ろしていると、鎧のガチャガチャ鳴る音が聞こえてきて、数人の男の声も聞こえてくる。

（・・・あいつらがさっき言ってた奴らか・・・。）

《ご主人様、どうして逃げたんですか？ご主人様なら十人くらい全然平気だと思っうんですけど・・・》

（いや全然平気じゃないって。寧ろやばすぎる。俺には戦闘は向かないんだって。）

この夜の言葉に首を傾げるように、本気で疑問に思っているような口調でレーヴァテインは質問する。

《何故そこまでしていつも戦闘を避けようとしているんです？無属性魔術で戦う方はそれこそ無限にありますのに・・・厚かましいとは思いますがご主人様に足りないのは経験です。経験が足りないと思わぬところで身を危険に晒します！》

（・・・ああ。分かってる。それは分かってるんだが・・・）

齒切れ悪そうに苦笑しながら頭を掻く。が、これ以上この会話が続くのを防ぐように夜はレーヴァテインとの話を打ち切り、後ろで三角座りしているうさぎに視線を向けた。

「・・・行った、けど。」

「あ、はいっ。」

「じゃあ降りるか。」

「は、はいっ。ってまたですかっ!?／／／／」

「文句言わない。」

「うう・・・はい。」

お姫様抱っこを恥ずかしがっているのか、それとも先ほどの浮遊感が嫌だったのか、彼女は項垂れながら顔を赤くし大人しく夜の腕の中に収まり、ウサギの耳を両手で強く押さつけていた。一体何の為に耳を押さえつけているのだろうか、と疑問に思いながら夜は屋根の上から飛び降りた。先ほどと違って下が地面だった所為か、降りたときにタンツという軽い音がする。

「はいお疲れ様でした。」

うさぎを地に下ろして一息つく。

「あ、あの、ありがとうございました!」

彼女はそう言って頭に被っているウサギの頭をスポツと取る。ウサギの頭が取れるという妙に怖い図であったが、その頭の下に隠れていたのは怖さも何処かに吹き飛ぶほどのとんだ美少女であった。肩まである蜂蜜色のふんわりとした髪の毛を耳の横で青いリボンで結んでいて、晴れ渡った空のように澄んだぱっちりとした青い瞳。着ぐるみを被っていた所為か息を少し乱して、雪のような白い頬をほんのりと赤く染めている。

（・・・ってなんか・・・すごいかわいい、んだけど／／／／）

気がつけば夜はほけーっと彼女を見つめていた。

「・・・あの?」

少女はかわいく首を傾げて呆気にとられている夜の顔を覗き込む。それに気がついた夜はぱっと視線を逸らして、なんでもないと呟いて彼女から少し距離を取る。

「あ、じゃあ俺もう行くから。気をつけてな。」

「ちょ、ちよっと待って下さいっ!!」

「え?」

—ガシッ

「いやだから痛いって!!」

「はっ・・・すみません!!」

腕をものすごい馬鹿力で掴まれた夜は、振り返って少女に痛さを訴える。すると少女は顔を真っ赤にして腕をぱっと放した。どうやら彼女の馬鹿力は無意識のうちに出血しているようであった。そして、少女は夜の真正面に改めて向き合って、驚くようなことを言ったのだ。

「私と武闘大会に出ただけませんか!？」

「はぁ・・・ってはい!？」

思わず頷いてしまうところだった夜はなんとか踏みとどまり、言われたことをもう一度頭の中で繰り返してからやっと理解できたように、ズサーっと少女からまたさらに距離を取る。それから挙動不審に周りを見回してから、人がいる方を確認するとそこから逃げ出そうとした。

「ごめんなっ、俺そういうの無理だから他あたってくれ!!じゃ!

「！」

しかしそれを少女の馬鹿力は許さなかった。

―ガシッ

「待ってください！！」

「わ、分かった！分かったから放してくれ！！痛い痛い、痛いっ！！」

「嫌です！！頷いてくれるまで放しません！！」
「・・・・・・・・。」

―ぎゅう・・・メキメキメキッ

「ってまってまって！！ギブギブッ！！分かった！分かったって！！出る！出る出る！！」

「あ、ありがとうございます！！」

やっと放してもらえた夜は、彼女のふんわりとした微笑みを見る暇もなく自分の腕に損傷はないかを確認していた。相当音を上げていたようだが、どうやら腕は無事だったようでほんと安心した表情をして胸をなでおろす。そうしてから、不機嫌な顔を露にして夜は目の前にいる少女に目を向けた。

「そ、そんな責めるような目を向けなくて下さいっ！」

「自業自得。・・・はあ、まあ引き受けたもんはしょうがないからやるけどさ。」

その言葉に目を輝かせて少女は眩しい笑みを浮かべた。

「自己紹介がまだでしたね。私はフェリスと申します。よろしくお願ひします！」

その笑顔に内心ドキッとしながらも夜も自己紹介をする。

「俺は夜。武闘大会に出るのはいいけど、俺は前線にはでないからな。」

「その点は心配しないで下さい。私が出ますから大丈夫ですよ。というか、私支援は出来ないんです。」

外見から言えば、治癒魔術とかが使えるような風貌をしているのに支援は出来ない、とフェリスは言う。やはり人は見た目によらないんだな、と夜は改めて思った。

「じゃあ今日はもう遅いので、明日、また此処に正午、待ち合わせしましょう。よろしかったら昼食も一緒にしましょう？では！あ、因みに来なかったら怒りますからね！ヨルさん。」

「はいはい。」

夜が適当に返事をするのでフェリスは怒ったときのように頬を少し膨らませてから微笑んで、態々人が少ないほうへ走って行ってしまった。彼女が去ってしまった後も、夜はしばらくそこに突っ立っていたが、急いで宿屋に戻らないといけないことに気がついて慌ててもと来た道に戻りだしたのだった。

不思議な出会いをした夜とフェリス。

この夜、運命は動き出した。

第12話 終わり

第13話 白の猫による魚の為の諧謔曲（スケルツォ）（前書き）

ユニークアクセス数が1000を超えました！

ここまで読んで下さった方々に感謝です^^

まだまだ未熟ですがこれからよろしくお願いします！！

第13話 白の猫による魚の為の諧謔曲（スケルツォ）

昨夜、夜が宿屋に急いで戻って見たところ、二人が帰ってきたのは夜が宿屋に戻ってきた数分後。その為夜が夏葉に説教をくらうことはなかった。ハークと夏葉のおかげで宿泊場所を確保できた三人は、闘技場に向かいその建物に隣接している宿に着き、疲れていた三人はすぐに寝付いてしまったのであった。

朝。

「さて、皆が起きたところで現状把握を試みたいと思うのだが。」

朝開口一番、夏葉が口にしたのはこの台詞だった。

まだ寝ぼけている夜と、比較的朝には強いハークはこの言葉に首を傾げる。何故朝っぱらからそんなことをしようとしているのか検討がつかなかったからだ。しかし夏葉の表情は真面目で、どう見てもふざけているようには見えない。それどころかとても深刻な顔をしていた。

「今まではなんとかやってこれたが、そろそろ金が底をつきそうなのだ。」

貨幣が入っている巾着を鞆から出して、その袋をバツとひっくり返す。するとそこから出てきたのは、金貨が一枚と銀貨が二枚、銅貨が五枚、木貨が十枚であった。日本円で換算すると102万510

円である。その何処が、“金が底をつきそう”なのか夜には全く分からなかった。まだ後100万以上手持ちにあるのだ。

しかしハークは理解できたようで、暗い表情を浮かべていた。

「ふむ。金貨は普通の店ではあまり使われていないのだ。金貨をも使ったとしてもお釣りがなくて困らせてしまう。だから、実質上使える金は銀貨二枚と銅貨五枚、それから木貨十枚なのだ。」

夜が理解できないのを分かっていた夏葉は、金貨を人差し指で押さえて軽く弾き、使えるのはこれ、というふうに金貨以外の貨幣を人差し指で丸を描いて囲む。

「何処かで崩せればいいんだけど……。多分武器屋とかだったら大丈夫かもしれない。」

「そうだな。武闘大会に出るついでに武器も買っておいた方がいいだろう。それから、大会上位に残ると賞金が手に入るらしいから、今回は宿泊場所の為だけではなく、今後のことを考えて賞金狙いでいいのではないか。」

昨夜、闘技場に申し込みに行った二人は受付の人に簡単に説明をしてもらったのだ。それを簡単に説明すれば、

？ 相手が気絶、場外または降参すれば勝利

？ 武器の種類は問わず（但し薬品の使用は認められていない）

？ 各部位入賞者5位までは賞金がもらえる。その他豪華特典付き

？ 大会出場者には闘技場に隣接している宿屋を提供される（食事は朝夜のみ）

？ 相手を殺してしまった時点で失格

等等など。他にもいくつか説明があったような気がしたが、全てを覚

えていたわけではないようなので夏葉は基本的なルールだけを夜に説明した。この説明からいくと、武器はかなり大事になってくる。素手対武器持ちでは武器持ちの方が有利になる可能性がかなり高い。

ということ、三人は朝食を食べ終えた後、武器屋に向かうことになった。

「・・・ふむ。今思い返せば夜は丸腰だったのだな。」

「ああ、だから戦闘のときになるとヨルは逃げ出してたんだ。」

妙に納得した表情で夏葉とハークは武器屋に着いた途端呟いた。

二人にはまだレーヴァテインのことを話していない夜は、それを聞いて煮え切らないような返事をする。

もし、夏葉にレーヴァテインのことを話すとすると、必然的に今自分が此処に居る目的も話さなくてはいけなくなる。多分、夏葉はこの目的のことを知らない。そう感覚的に夜は感じていた。夏葉がこの目的のことを知っていたなら、ハークが着いてくることを了承しなかったはずだし、その目的に向かってならアクションを起こすはずだ。夏葉は基本、そういうことをきちんと考えて行動しているのは、親友である夜だからこそよく分かっている。だから、

だからこそ話すことは出来ない。

《どうしました？ご主人様。お二方はもう武器屋の中に入っています

ましたよ?》

(・・・ああ、分かってる。ありがとな。)

《い、いえいえ／＼／＼そんなこと朝飯前です!》

少々上ずった声で、もしレンの姿が見えていたら胸を思いっきり張っているんだろうな、と夜は微笑しながら武器屋の中へ入っていた。

何を基準にしてこの武器屋を選んだのか、夜にはわからなかったが今度こそRPGによく出てくる古臭い感じの店だったので、顔には出さないが内心少し興奮しながら周りを見回す。すると物珍しそうに周りを見回している夜が気になったのか、カウンターにいた顎に髭を生やしたおじさんがこちらにサンダルをカタカタ鳴らして歩いてくる。

「いらっしやい。もしかして武器屋に来るのは初めてか?」

頭に深緑のバンダナっぽい布を巻いて、元は綺麗な白だったのだろう薄汚れたTシャツに、ラフな緑のズボンを穿いている。優しそうな、でも芯が強い感じの人で夜はこのおじさんに少しばかり好感を持てた。

「ああ。おじさんがこの武器全部作ったのか?」

「まさか。中にはたしかに昔鍛冶屋をやっていたときに俺が作ったものもあるが、ほとんどは大量受注して他のところから買ったものさ。」

こじんまりとした店の中に並んでいるのは、多種類の武器。剣、弓、鈍器、杖、ハンマー、ナックル、盾など。この世界では機械とい

うものがない所為か、数も大量というわけではなく、各種類約五つずつ置いてあった。またその五つの中でも同じ形の物はひとつとしてなく、人の手で作られた温かみを感じることが出来る。

「此処に來たからには武器を買いに來たんだろう？もし良かったら見繕ってやるが。」

おそらく好意から言ってくれたのだろう。夜としては結構嬉しかったりしたのだが、それをレーヴァテインが許してくれるとは到底思えなかった。きっとまた夜が武器を手にとった瞬間にマナレベルに分解されるに違いない。

「あ、だ、大丈夫だ。俺じゃなくてあの二人が用で來たから。」

そして夜のその推測は正しい。もし夜が武器を手にとって見ていたら、間違いなくその武器はこの世から消えていたことだろう。

《ご主人様は他の武器やつなんていらねえですよ？必要ありませんよね？だって私がいるんですから！ね？ご主人様？》

（も、勿論だ。レンがいるから大丈夫だ）

《・・・ご主人様／＼／／》

恍惚とした声音で言うレーヴァテインを一瞬、怖いと感じてしまった夜だった。

「そうか。ならしょうがないな。好きなだけ見ていってくれ。手にとって見てくれても平気だから。それでもし気に入ったら買っていってくれな？」

「あ、あはははは・・・ありがとうございます」

乾いた笑みを浮かべて軽く頭を下げると、明後日の方向を向いて顔を真っ青にする。店主はそう言って下手くそなウイंकをして笑うと、武器を見て悩んでいる夏葉とハークの方へアドバイスをしに行った。そして背中から妙な威圧を常に感じるようになってしまった夜は、

(・・・ここにいたら気が休めない!!)

と心の中で叫び、武器を選んでいる二人に外で待っている、と声をかけて武器屋の外に出たのだった。外は昨日と違って快晴で、心地よい風が空を見上げた夜の髪を揺らしていく。

「ああー・・・やっぱ和むなー・・・。」

目を気持ちよさそうに側めて快晴の空を見つめていた夜だったが、レーヴァテインの声で我に返る。

《今日は本当にいい天気ですね。日向ごっこしたら気持ちよさそうですね》

(そうだなー。日向ごっこなら出来れば草原でいたいな・・・。)

ぼーっと空を眺めていたが、武器屋から出てきた二人が視界に入っていたのでそちらに視線を向けた。夏葉の手には見るからに重そうな鉄のナックルと直径が30cmくらいの短剣が二本、ハークの腰には短剣が一本ベルトに挿してある。

「それで殴られたら痛そうだな。」

「ふむ。試してみるか?」「その言葉そのまま返す。」

ちょっとした冗談なのにつれないな☆、と口を少し尖らせて夏葉はつまらなそうにナックルを鞆に仕舞い込んだ。そして短剣を二つ夜に差し出した。

「?なんだよこれ」

「お前のだ。長剣は重くて使えないだろうから、誰でも使えそうな短剣にしておいたのだ。持っておいて損はないと思うぞ。」

夜の頬がひくつと引き攣る。

もしここでこの短剣を受け取ってしまったら・・・

ケース?短剣を受け取った場合

ーパンツ

《ご主人様? いらないですよね? 私だけが貴方の武器なんですから・・・うふふふふふ》

「おい夜、今一体何をやったのだ?」

「ヨル! それってあのときとおんなじだよな!? 一体どうなってるんだ?」

「「説明しろ!!! 早くッ!!!」」

(・・・これはまずい。非常にまずい! だが・・・)

ケース?短剣を受けとらない場合

「武器はどうしても必要になってくる。何でそんなに嫌がるのだ?」

「そうだよ！それに今まで武器がなかったから逃げ出してたんでしょ？そんだったら武器が手元にあったほうが安心じゃん。もしかして何か他に理由があるのか？」

「ふむ。夜、親友に隠し事はなしだぞ。何を隠しているのだ？」

「「説明しろ！！早くッ！！」」

（どっちにしろ結末は同じじゃねえか！！くそっ・・・一体どうすれば・・・）

1人で百面相をしている夜を夏葉とハークは訝しげに見る。しかし思考に没頭している夜はそれに気がつくことなく、俯き顔を真っ青にして1人でなにやらぶつぶつと呟いていた。そして、夜はふと思いついた。

（レン？）

《何ですか？》

そしてレーヴァテインを呼ぶと、何言っただというような恥ずかしい台詞を、あまりに考えすぎて頭がおかしくなってしまったのか、夜はすらすらと並べ始めたのだった。

（俺にとってレンは1番だし、レンがいないと俺は何も出来ない。レンがいれば俺は他の武器なんて要らないし、要も必要ないんだ。）

《ご、ご主人様・・・／／／／》

（だからたとえ俺が他の武器に触ったりしても別にそれはただの武器であって、俺の本当の武器はレンだけなんだ。レンが、レンだけが俺の大事で大切な、本当の意味での要なんだ。レン以外は興味な

いし、レンだけが俺の傍にいてくれればいい。」

もう自分で何を言っているのか分からない状況に追い込まれてしまった夜の口は止まらない。目は据わっていて、とてもじゃないが今の状況を本人が自覚してしまったら恥ずかしさで死んでしまうだろう。しかし、それとは反対に、この台詞を言われているレーヴァテインは感動の涙を流して恍惚の表情を浮かべている。

（だからレン、俺だけを見てくれ。俺ももうあんたしか目に入らない。レン・・・だから俺が武器を手にとったとしても気にするな。レンはレンのままが1番いいんだから。な？）

《はいっ？ご主人様／＼／／》

「・・・夜？どうしたのだ？」

夏葉が怪訝な表情を浮かべて夜に声をかける。すると夜は一瞬で我に返り、今までのことを綺麗さっぱり脳の彼方へ追いやると、何事もなかったかのように微笑を浮かべて短剣を受け取った。どうやら夜は記憶の隠蔽を選んだようだ。短剣を受け取った途端、瞳が光を宿し、

「はっ・・・俺は一体いままで何を・・・」

と手元にある二本の短剣を見つめ、疑問を浮かべて呟いていた。

「さて、武器を買って金も細かくなったのだから、昼食でも食べに行くとするか。」

夏葉はジャラジャラと音がする、以前より重くなった巾着を持ち上

げる。どうやら金貨が崩れて銀貨になったようだ。因みに、先ほどの武器全て合わせて30万だそうだ。それが安いのか高いのか分からないが、取り合えずこれでしばらくは大丈夫そうで安心した、と夜は息を吐く。

「そうですね！何処か安くてうまいところがあると良いですけど・・。」

「うむ。とりあえずここら辺を模索してみるのだ。」

そして夜は昨日約束をしていたことを、昼食という言葉によって思い出した。昨夜、あの白いうさぎの着ぐるみを着ていた少女と出会って、成り行きで助けてしまい、成り行きで武闘大会に出ることになってしまった。いや、あれは成り行きではなく、どちらかといえば少女の馬鹿力に脅された感が否めない。

昨日腕を思いっきり捕まれたことを思い出し、無意識のうちに片腕を押さえてしまう。それほど痛かったのだろう。

「ちよいと前のお二方。俺少し用事があるから昼食は別々ってことでいいか？」

あの痛みに背は変えられない。多少怪しまれても仕方がない、と踏ん切り夏葉たちにそう言う。すると意外にも何も聞かれることもなく銀貨を二枚渡される。

「うむ。実は俺たちも賞金獲得のために少し特訓しようということになってな。先に闘技場に帰っていてもらおうと思っていたから都合がいいのだ。一応言っておくが、日が暮れる前に帰ってくるのだぞ。」

「だからあんたは俺の親かっ！そんなの分かってるって」

どうやら運が良かったようだ。これなら怪しまれずに済む、と胸をなでおろして夜は二人と別れ、待ち合わせ場所に向かった。

因みにだが、夏葉が竜だということはハークにばらしていない。後で夏葉に夜が聞いたところ、竜は魔物の一種にカウントされており、もし竜だとばれたらギルドから討伐隊が派遣されて戦闘になってしまふ、だとか。もしばれて人間100人に囲まれたところで負ける気はしない☆、と悪戯な笑みを浮かべて竜本人が言っていたので死ぬことはないと思うが、出来るなら騒ぎは起こしたくない。一応夏葉が炎を操ることが出来るのは魔術だとハークにいつてあるのだが、それが魔術ではないとばれるのも時間の問題だと夜は思っている。

《ふんふんふん♪》

(なんかすつごいご機嫌だな、レン。どうしたんだ?)

《なんでもありませんよ、ご主人様?》

何故か妙にテンションが高い彼女を不思議に思ったが、これ以上何も聞いてはいけないと本能的に察した夜はそれ以上何も言わなかった。

そんなこんなで、昨日の待ち合わせ場所に着く。そこで数分ぼーっと突っ立っていると、

ーぽふぽふぽふ・・・

という不可思議な音が聞こえてきて、それと同時になんとも不思議なことが自分の名前を呼んでいる声が聞こえてきたではないか。

「ヨルさーん!」

そして姿を現したのは、真っ白な猫の着ぐるみを来たフェリスだった。首には鈴がついた赤い首輪が巻いてあり、右耳にはピンクの花がついている。その姿は猫好きの夜にはたまらない。抱きついてもふもふしたい気持ちを抑えて、彼女の頭の上にぽんと手を置いてふわふわするだけに留めておいた。

「あっ、ちょっと・・・恥ずかしいです／＼／＼／」

「猫は反則でしょ。もうちょっとだけ、な？」

「・・・分かりました／＼／＼／ちょっとだけ、ですよ？」

―ふわふわふわふわ・・・

「はいっ、もう終わりですっ／＼／／」

「ええー。もうちょっとだけ「だめですっ！」

着ぐるみを被っていて今どんな表情をしているかは分からないが、きつと顔を真っ赤にしていることだろう。彼女は両手を上げて夜の手から逃れると、距離を取ってから猫の頭をスポッと取ってしまった。その途端に夜の興味は薄れ、先ほどまで柔らかな表情だったのを元に戻し、きっぱりと撫でるのを止める。

「あ・・・。」

「どうした？」

すると彼女は少し残念そうな顔をして、夜に聞かれると首を横に振って、

「な、なんでもないです！じゃあ昼食を食べにいきましょう！！」

と顔が真っ赤なのを隠すように、また猫の頭を被って先に歩いてい

ってしまう。夜は挙動不審な行動をするフェリスを見て首を傾げたあと、遅れたらはぐれてしまいそうだったので小走りで追っていった。

（・・・それにしてもなんでいつも着ぐるみ着てんだ？単純に考えて顔を隠す為・・・だよな？でもあれじゃあ逆に自分から此処ですって言うてるようなもんだと思うんだが・・・謎だ・・・）

後姿の白猫を見つめながらあれこれ考えているうちに、彼女のおススメだという一軒のこじんまりとした店に着く。それも街道からのすごい逸れたところにあり、普通に探索していたら見つからないような場所だ。これも追っ手にばれないように、だろうか。

「此処です。このお店のランチがものすごくおいしいんです！！さ、早く入りましょう！」

ーチリンチリン

「いらっしやい、フェリスちゃん。あら、連れかい？珍しいね。まあゆっくりしてって」

「こんにちはおばさん。いつものランチを2つお願いします！」

恰幅のいいおばさんが二人を出迎えてくれた。フェリスがメニューを頼むと元気よくあいよっ、という返事が帰ってきて、店の裏に料理を作りに入っていく。それを眺めながら、夜はフェリスが選んだ窓際のテーブルに向かい合って座った。

とても落ち着ける雰囲気はこの店をお気に入りだというフェリスの気持ちも分からはないな、と夜は無意識に肩の力を抜いて窓の外を見ていた。

「そういえばさ、フェリス。どうしてまた武闘大会になんて出ようと思ったわけ？」

ふと疑問に思ったことを口に出してみたただけであって深い意味は何もなかったのだが、目の前の彼女は困ったように眉を寄せて苦笑する。それを見た夜は一瞬驚いたように目を見開き、やっぱり、と首を横に振って苦笑し違う話に替えるのだった。

「飯食べ終わったら何するんだ？」

「闘技場に行って登録してこなくてはいけないんです。で、そのときあまり顔を知られるとまずいので、ヨルさんには悪いんですが闘技場にいるときはこの仮面をつけてもらってもいいですか？」

と申し訳なさそうな顔で鞆から出したのは、二対の仮面だった。どちらも目だけを隠す仮面であったが、ひとつは全体的に白で右の目の下の部分に赤い模様が入っているもの。もうひとつは黒で左目の下に青い模様が入っているもの。どちらも何処か異様な雰囲気漂わせている。そして夜に渡されたのは黒い方の仮面である。その仮面を手にとってみると氷のように冷たく、無機質な感じが伝わってきた。

「この二つの仮面は対なんです。私がつけるほうは激情の仮面、ヨルさんが手に持っているのは冷酷の仮面という“魔具”です。こっちの激情の仮面をつけるとつけた人は感情が大きく昂り、所謂興奮状態になります。冷酷の仮面をつけた人は感情を抑制され何も感じなくなるといわれています。」

「・・・いわれて、います？」

「はい。まだ試したことがないので実際はどうなるか分かりません。」

「え・・・？」

仮面をテーブルの上に戻す夜。しかしそれをまたフェリスに握らせる。

「大丈夫ですっ！これは国宝級の“魔具”ですから言い伝えどおりになるはずですよ！！」

何処からその自信がきているのか、自信満々に言うその姿からは嘘を言っているようにはみえない。それに、だ。

（もしかしたらこの仮面のおかげで敵に相対しても体が震えないで済むかもしれないな・・・。）

感情が抑制される、というのがどうゆう意味の抑制なのか実際につけてみないと分からないが、それでこのトラウマ的なものを改善できるのならいいのだが。

「それにフードマントを被れば完璧です！」

「ただの怪しい集団じゃねえか！！」

思わずその姿を想像して突っ込んでしまった夜だったが、一瞬悲しそうな表情をした彼女を放っておくことは出来なかった。

「大丈夫。ちゃんとその時になったらつけるから心配すんな。」

「あ、ありがとうございます！それにヨルさん自身は気づいていないようですが、その黒髪黒目は結構目立つんです。」

「そうなのか？」

「はい。多分一度その色を見たら誰も忘れないと思います。とても珍しいですから。」

夜は納得しづらいような顔で自分の前髪を掴む。

地球では当たり前のように存在している髪色目色がこの世界では珍しいことに多少驚く。こちらからしてみれば、夏葉の赤い髪とかティオの銀色の髪とかの方が驚いた。それがこちらの世界では当たり前なこと、何か形容しがたい感情を覚え、難しそうに眉を顰めていたときだった。

「はい、お待ちどうさま。ランチセットだよ。」

「あ、来ましたよ！ヨルさん。」

先ほどの恰幅のよいおばさんが来て、テーブルにほかほかと湯気が出ている料理を並べていく。温かい笑顔を浮かべてごゆっくり、という言葉をかけると、おばさんは別のお客のところに注文を受けに行った。

「うまそうだなー」

「じゃあ早速食べましょう！」

目を瞑ってお祈りをしてからスプーンを手にとってコンソメスープを飲むフェリスを見て、夜もいただきます、と小さな声で言ってから食べ始める。因みにランチセットの内容は、コンソメスープ、焼きたての胡桃パン、野菜サラダ、魚のムニエルとデザート（桃っぱい）果物だ。

「すごいうまいな。」

「ですよー！私、ここのお料理が一番だと思います。因みにですが、日によってメニューが微妙に違ってくるんですよ？昨日はじゃがいものポタージュとジャンクダックの素焼きでしたし。」

口にムニエルを入れる。

「へえー・・・って・・・ごほっ!!げほげほっ」

そしてむせてしまい慌ててコンソメスープを飲む夜。それに驚いたフェリスも持っていたスプーンを落としてしまう。

「ど、どうしたんですか!? 大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫。ちょっとびっくりしたただだから気にしないでくれ・・・ごほっ。」

「そうですか? ならいいんですけど・・・」

心配な表情でこちらを見ってくるフェリスに申し訳なく思いながら、今度は気を取り直してムニエルに再度手をつけ始める。そして頭の中にずっとジャンクダックの名前がぐるぐる回っていた。

(ジャンクダック・・・あれ食用だったのか・・・ってかこの間俺、唐揚げっぽいやつ食べなかったっけか?・・・いやいやいや、考えるな考えるな)

《因みにご主人様? 今食していらっしゃる魚ですが、それも淡水域に生息している体長2m弱のフレッシユフィツシユっていう魔物ですよ?》

ーがしゅんッ

「・・・。。。」

「・・・大丈夫ですか・・・? ヨルさん、なんか顔色が悪いようですよけど・・・」

「・・・大丈夫。食えればいいんだ食えれば・・・」

怪訝な目を向けてくるフェリスに苦笑いをして誤魔化しながら、考
えることをやめて味はとてもおいしかったのできちんと最後まで完
食した夜だった。

第13話 終わり

第14話 耳つきのフードによる寂しい人の為の狂詩曲（ラブソディー）（前編）

お気に入りに登録して下さいの方々、ここまで読んで下さった方々、改めて感謝の気持ちを込めて、ありがとうございます！！

出来れば一言でもいいので感想や、こうしたほうが良いところなどご指導して下さいと嬉しいです^^

第14話 耳つきのフードによる寂しい人の為の狂詩曲（ラプソディー）

『本番はそうはいきませんが、仮面が嫌でしたらフードマントだけでも被ってください。』

（そう。仮面はつけていない。ただフードマントを被っているだけだ。・・・なのに・・・なのに・・・）

「なんでこんなに目立ってんだ!?（一応小声）」

「何ででしょう・・・? フードを被っている人、結構いると思うんですが・・・（小声）」

頭の上にクエスチョンマークを三つほど浮かべて、フェリスは首をかわいらしく捻った。その隣で眉を顰めている夜。

二人は昼食を取った後、すぐに闘技場に向かったわけではなく途中人影の少ない路地に入って、フェリスに手渡しされたフードマント（因みにフェリスのは白、夜のは黒）を被って顔を隠すようにして此处、闘技場にまで歩いてきた。・・・はずだったのだが、二人は思いつきり目立っていた。道行く人全てが、二人が近くを通るたびに振り向いてくるのだ。フードを被っている人が珍しいわけでもないのに、何故このような現状に陥っているのか、夜にはちっとも分からない。

そんな彼の横でちょっと嬉しそうに彼女は話す。

「あ、後もう少しで受付の順番、回ってきますね。それにしても、このフードマント、かわいいですよね!（小声）」

「そうだなー・・・ってはい!?（途中から叫び声）」

夜は此処に来るまで、顔がばれないほうが良いと彼女が言っていたので、顔を上げずに地面だけを見て歩いてきたが、今の彼女の意味深な発言を聞いて思わず顔を上げて、彼女のフードに目を向けた。すると、彼女のフードにはかわいいうさみみがちょこんと立っているではないか。そしておまけといわんばかりに、彼女のマントの方にはうさぎのまん丸尻尾。とってもラブリーです？

「……………って待てよ。（もはや普通の声）」

そしてはたと気がついてしまった。もしや自分のにも何かついていないのではないか、と。そしてその推測は当たる。

「ヨルさんの猫耳もなかなかかわいいですよ？尻尾もいい具合にたれていてそのやる気のなさがGoodです！（こちらも普通の声に）」

条件反射でスツと頭に被っているフードに手を伸ばす。なにか尖ったものに出会う。そして両端に何か針金のようなものも三本ずつ生えていた。そして後ろ。尻の少し上の部分に何か細長いものがぶら下がっているのが分かった。一瞬夜の動きが止まる。それから思いつきり突っ込んだ。

「これじゃあ目立つに決まってんだろぅがコンチクショウ！！（悲痛の叫び）」

悲しさが羞恥心を上回り、夜はずううんとした重い雰囲気を纏わりその場で泣きたくなる気持ち堪えるので精一杯だった。しかしフェリスは違う。寧ろ幸せいっぱいです♪というふうに頬をほんのり赤く染め、目を輝かせて自分のフードについている耳を触っている。これではつきりした。

あの着ぐるみは絶対彼女の趣味だということが。

背後に暗い色の縦の線が何本か入っている夜が今にも倒れそうなきだった。

「順番がやっと回ってきました。ヨルさん、行きますよ!」

受付の順番が回ってきたようで、フェリスに腕をものすごい力で掴まれてまるで人形のように引きずられていく。もう抵抗する気力すら失せてしまったようだ。

「えっと、一応確認しておきますがペアの部参加者ですね?」

「はい、そうです。」

分かりました、と言って受付の人はこちらに羽ペンと紙を渡してくる。

「それにお二人のお名前、チーム名をお書き下さい。」

因みにこの紙に書くのは勿論偽名だ。顔を隠しているのに名前ではれてしまつては意味がなくなつてしまう。それも路地裏で確認しておいた。因みにフェリスはモルゲン、夜はナハトという偽名だ。モルゲンはドイツ語で朝、ナハトは夜を表す言葉だ。チーム名は聞かれるとは思っていなかったなので決めていなかったが、まあ彼女が適当に書いてくれるだろう、と特に気にしていなかった夜だったが、それを後に後悔することになる。しかしそれはもう少し先のこと。

「はい。承りました。あなたたちの番号は561番です。明日、朝9時にまたこの場所へとお集まり下さい。因みにお部屋の番号もそれと同じ561番になります。食事は朝と夜のみ出ます。細かいル

ールなどはこちらの紙をご参照下さい。」

四つ折に畳まれた紙と、この隣に隣接して建てられている宿の部屋の鍵も渡され、受付は難なく終わった。

夏葉とハークが受付に行ったときには大会のルールを受付の人が説明してくれた、といていたが説明してはもらえなかった。それはおそらく後が沢山いるからだろう。ペアの部は飛び入り参加OKといっても結局それは大会が始まるまでのことであって、明日から大会が始まる為か、受付にはすごい人が並んでいたのだ。それでもここまで早く来れたのは、受付がいくつもの数に分かれていてはけが良いおかげだろう。

二人は闘技場から出て隣接している宿屋に向かい、部屋に入ってからフードマントを脱いだ。因みに部屋は大分夏葉たちの部屋と離れていたの鉢合わせする、ということはずなだろう。

「・・・やっと・・・やっと脱げた・・・」

「なんですすぐ脱いじやったんですか？かわいかったのに・・・」

「あはははははは・・・はあ。」

（もう疲れた・・・羞恥心で今すぐ死ねる・・・というか今すぐ死にたい・・・）

部屋の中にあるベットにぐてゝうつ伏せに寝転がり、夜は精神的な疲れを癒していた。フェリスはというとそのフードマントが余程お気に入りなのか、まだ被っている。因みに、その下には勿論白猫の着ぐるみを着ている。よく受付の人は一ミリも顔の筋肉を動かさず受付できたなあ、と感服する。あれを見て動じないなんてあの何者！？ってかんじだ。

（俺だったら間違いなく即顔が引き攣る。もしくは距離を置く）

「夕食は今から大体あと二時間ぐらい後ですね。場所は1階の大食堂です。もし眠いんでしたらその時間に起こしてあげます？」

流石に部屋では着ぐるみを着ているのは疲れるのか、フェリスは猫の頭を取って夜が寝転がっていないもうひとつのベッドの方に置く。

「あ、俺は別のところに宿泊場所があるから大丈夫。今からそっちに戻ろうと思ってたし。」

上半身を起こして乱れた髪を軽く整える。

（それに流石に若い男女がふたりきり、というのもなんだかな。）

すると彼女は少し焦ったようにこちらに歩いてくる。

「えっ・・・此処で別にいいじゃないですか！」

「いや、戻るのが遅いとあいづらに迷惑かけるし、悪いな。ちゃんと明日、此処に来るから。」

フェリスが少し顔を赤くして言うのを聞いて、内心驚きながら夜はベッドから立ち上がる。もしかしたら彼女はこの状況をいまいち理解出来ていないのかもしれない。どう考えたって男女がふたりきりで部屋に泊まるのはまずい。外面的にも、精神的にも。

寂しそうな顔をするフェリスの頭の上に手をぽんと置くと、夜は部屋から出て行った。

「・・・別に、此処でいいじゃないですか・・・。私は・・・二人つきりだって気にしないのに・・・」

残されたフェリスはそうポツリと呟いて、フードマントを取ってベツトの上に置いた。

ーガチャ

「ただいまーって・・・まだ帰ってきてないか。」

夕食までまだ二時間ある。それまで特にすることも、しなくてはいけないこともない。風呂に入るには時間がまだ早すぎる。此処には暇つぶしするものがない。せめて何か本があれば暇つぶしにはなったのかもしれないが、この部屋にあるものといったらベットとテーブルにちよつとだけ高級感を味わえるソファーのみ。さしてやることもないときにするということといったら、ひとつしか選択肢はなかった。

「・・・寝るか。」

結局この結論に至り、夏葉たちが帰ってくるまで夜は昼の疲れを癒すように寝ていた。



ーガチャ

ドアが開く音がして夜は目が覚めた。どうやら二人が帰ってきたようだ。

「おかえりー」

「また寝てたのー？ いいよなーヨルは暢気で。」

「あんた・・・どうしたんだその格好？」

二人がこの部屋に入ってくると同時に何か焦げ臭さを感じたのだ。ふと視線を二人に向けてみると、夏葉は別れる前と全く同じ格好だが、ハークの格好は以前と違ってぼろぼろになっていた。所々焼け焦げている場所がある。どうやら焦げ臭さの原因はハークの服にあ

ったようだ。

「ふむ・・・少しやりすぎたか？」

夏葉は全く反省していない口調で言う。一体どんな特訓をしたらこのようになるのか。ハークだって風の魔法が使えて、決して弱いわけではないだろうに。しかし夜はふと親友が竜だったことを思い出してひとりで納得したようだ。

「時間的にもう夕食の時間だからいくぞ。」

「えっ・・・ちょっとだけ休みを・・・」「少年よ」はい！！すみません！今すぐ行きます！！」

（本当に、夏葉こいつに何やったんだ！？）

夏葉がちよっと声を出すだけでびびったように体を震わすハークは、生まれたばかりの小動物を髣髴とさせる。一体こんな時間までどんな特訓をしたのか、夜は気になったもののハークはとてもじゃないが怯えきっていて教えてくれそうになかった。

（何を取るかな・・・この唐揚げ、うまそうだな・・・ってこれはたしかジャンクダック。・・・いやっ、考えるな！生きる為には仕方がないんだ！！）

夕食は大食堂でバイキング形式で行われる。流石に大会ともなると

すごい人数で、その大人数を全て収納することができるとこの大食堂は驚くほど大きかった。今日の朝、ここに来たときも三人で驚いていたのを思い出し、夜は頭の中の葛藤を忘れる為に広い空間に視線を向けた。

（それにしてもこの数。三日で本当に大会、終わんのか？到底終わるようには思えないんだが・・・）

まあ、とりあえず今は飯だとそのことを忘れてハークたちが座っている席へ戻る。因みにこれで夜がおかわりしにくるのは5回目だ。実は今日の昼食、おいしかったのだが如何せん、夜にとっては量が少なすぎた。その反動で、このバイキングでは腹いっぱいになるまで食べるんだとか。

「うげえ・・・まだそんなに食べんの！？おれもう無理・・・」

「いや別に合わせて食べなくてもいいんだぞ？」

ハークはもう既にダウン。おかわり2回目で腹十分目になったようだ。まあ二回目はほとんどデザートを食べていたようなものだった気がしたが。

「うむ。俺たちが食べてるからといって少年まで食べることはないのだ。思う存分休むがいい。」

「それさつき部屋の中でいってやれよ。」

夏葉も夜に劣らずおかわり6回目だ。これでは他の人の分まで食い尽くしてしまわないか心配だ、とテーブルに頬をつけながらハークは目を瞑っている。二人がこれほどまで食べているのを見ると、自分まで食べているような気がして気持ち悪くなってしまいうらしい。

「で、特訓はどうだったんだ？」

ミートスパゲティを口に運ぶ。夏葉は口の中に入っているものを飲み込んでから言った。

「ふっふっふ・・・完璧だ☆このお兄さんの脳内辞書に不可能の三文字は存在しないのだ！明日は必ず上位に食い込むつもりでいるかな。そんでなければこれからが危ぶまれるのだ。」

ここまで自信満々に言う夏葉だ。相当な練習を積んだんだろう。

（・・・こりゃ明日は混戦だな・・・というかこいつらに当たらなければいいが・・・）

そうは言ってられない。勝ち進んでいけば最終的には当たる運命にある。それでもなるべくは当たりたくないものだ、と夜は内心苦笑する。

「夜、あまり食べると明日に響くぞ。観客席で倒れられても助けにいけないのだからな」

「その言葉、そのままあんたにお返ししますよっ」

でも確かに夏葉が言うことには一理ある。

（これで終わりにするか・・・。さて、デザートは何があるんだ？）

「まだ食うんかいッ!!」

ハークに突っ込まれたが、気にせずデザートコーナーへ行く夜だった。

《ご主人様！明日は久しぶりに召喚してもらえますよね？》

自室にて。

この部屋は基本的に二人部屋なので、ベットは必然的に二つに限られてくる。夜は明日本当なら大会に参加しないことになっているので、明日参加する夏葉とハークにベットを譲り、夜自身はその中央にあるソファアーへと寝転がっていた。風呂も入り終わりそこで心地良さそうに目を閉じていた夜だったが、レーヴァテインの嬉しそうな声で目が覚める。

（あー・・・場合によるかな。でもレンの力は借りることになると思うから、そんな時はよろしくな？）

《はいっ！！頑張ります！！》

（ああ。じゃ、おやすみ）

《おやすみなさい、ご主人様！》

スツと鈴を転がしたような声が頭の中から消えていく。それを区切りに夜も、明日に備えて眠りについたのだった。



―パサッ

タオルをかける。

窓の外は真っ暗で、そこに潜む何かを想像させるからフェリスはあまり好きにはなれなかった。

だけど、昨日は違った。

昨日はとても楽しくて、わくわくしていて、寂しくなくて、怖くなかった。気持ちも、普段は感じたことのない感じ・・・ふわふわしていて、とても心地よかった。でも、今は違う。広い部屋にひとりつきり。ランプはつけてる。でも、何処か寂しくて、怖くて・・・。

頭まで被るようにタオルを上まで引き上げて、フェリスはぎゅっと目を閉じる。

（・・・大丈夫、です。怖くない。ひとりでも大丈夫。怖くない、怖くない・・・）

震える体を押さえ込むように、タオルに包まってフェリスはゆつくりと眠りにつく。

話 終わり

第15話 狂気の兆しによる仮面の為の序曲（オーバチュア）（前書き）

以前の話と間が結構開いてしまいました；；申し訳ありませんm（

）m

地震の影響でこの通り、更新が不定期になりがちです。

やっとのことで第15話更新です。

間が開いてしまったので、一応前回のあらすじを・・・

フェリスと昼食を取った後、闘技場に来て変に視線を感じながらも登録する二人。その後、夜は疲れを癒す為に自分の部屋に戻り眠りについていたが、特訓をしていたという二人が帰ってきたときの音で目が覚める。ハークの服が焼き焦げていたのを不思議に思いながら、三人は食堂に向かい夕食を取る。部屋に戻り、明日のために早く寝てしまった二人の後を追うように夜も眠りにつく。それと同時、フェリスは恐怖や不安を胸に眠りにつくのだった。

第15話 狂気の兆しによる仮面の為の序曲（オーバチュア）

ーントントン

「フェリ・・・じゃなかった。モル、いるか？」

大会当日。

早めに朝食を食べた後、夏葉とハークは45分も前に集合場所へ向かっていった。二人がこんな早く部屋を出たのは、おそらくそのまま直接集合場所に行くのではなくて、何処かで体を動かす為だろう。その為、思ったより早くフェリスの部屋に来ることが出来た。彼女にこの部屋に何時ごろに来る、と昨日伝え忘れてしまったのを少し後悔しながらノックをして声をかける。すると、数秒後このドア壊れるんじゃないか？というほどの勢いでドアが開いた。後少身体を引くのが遅かったら、間違いなくドアの餌食となっていただろう。

「ヨルさんっ!!」

「（あつぶねえ・・・）おはよう。」

引き攣る頬をなんとか抑えながら挨拶をする。これを天然でやっているというんだから彼女は本当にある意味すごい。もし当たっていたら、を想像してしまい一瞬動きを止めてしまったものの首を振って忘れ、元気に挨拶を返すフェリスの後に続いて部屋の中に入る。

「おはようございます！別に断りを入れなくても・・・。ここは二人の部屋なんですから。」

流石に今日は大会当日の為か着ぐるみは着ていないようだ。薄ピン

ク色の短めのワンピースを着て、その下には黒いスパッツを穿いている。靴は動きやすそうな焦げ茶色のブーツで、以前髪を結んでいたリボンはワンピースに合わせてピンクで、とても彼女の雰囲気に合わせている。

奥に行くとテーブルの上に綺麗に畳まれたフードマントと二対の仮面が置いてあるのが見えた。フェリスは満面の笑みを浮かべながら、黒いフードマントと仮面を手にとって夜に手渡しする。

「はい、ヨルさん。」

「あ、さんきゅー。」

何の抵抗もなくフードマントを被る彼女は何処かひどく勇ましかった。

（・・・これは仕方がないんだ・・・。三日間だけ。そう、たった三日間だけだ。）

「・・・？ヨルさん？」

「（ええいッこうなったらヤケだ！）何でもない。大丈夫だ。」

今から戦うことを考えるとなるべく動きやすいほうがいい。そう考えた夜は普段着ているコートを脱いで、黒いTシャツ姿になってからフードマントを被る。そして勿論その肩にあった黒猫のぬいぐるみもコートと一緒にソファに置く。そして手に残っている黒い仮面に胡乱な目を向けた。

冷たい感触のその仮面からは、相変わらず冷たく無機質な雰囲気を感じ取れる。まるで暗闇に閉じ込められた氷のようだ。

少し力を入れて握る。すると、目元にある青い模様が怪しく揺らめいたような気がした。

「あの・・・。」

「あ、ああ。大丈夫。早く行かないと遅れるな。行こう」

フェリスが心配してくれているのが手に取るように分かり、夜はなんでもないような表情で笑って彼女の頭を軽く叩く。それから彼女が部屋のドアを開けて出るのを合図に、二人同時に仮面をつけた。

その瞬間、夜の思考は真っ黒に、そして氷のように冷たく染まっていった。



「ふむ……。どうやら個人の部とペアの部は同時に行うようだな。」

「はい。闘技場を二つに分けてやるそうです。おれたちが行くほう
は正面から見て右側のエリアになります。これ、間違って反対のエ
リアに行っちゃったりするやつとかいるかもしれませんね。」

夏葉とハークは10分前にこの集合場所である受付場に来た。10
分前、ということもあって大体のペアは集まっている。ペアの部
の参加者が集まっている所為かとても人数が多く、一步も動けない状
況で、この状態がずっと続いたらストレスが溜まって喧嘩でも起き
そうな雰囲気だ。

「しかしこの人数だと……。最初は混戦になりそうだな。」

夏葉は面白そうに唇を吊り上げる。それを見て、ハークは背中にて得
体の知れない悪寒が走り、少しだけ夏葉から距離を取った。

（何で混戦になりそうとか言って楽しそうに笑ってんの!? 絶対ま
たなんかある……。気をつけないと……。）

ハークは身の危険を感じて腰に挿してある短剣をぎゅっと握り締め
て、そう心の中で呟いた。

『今からペアの部、武闘大会を開催します! 参加者は正面から見て
右側のエリアへお進み下さい。』

無属性魔術で拡張された女性の声が聞こえてくる。すると今まで騒がしかったこの場が一気にしんと静かになり、開催が宣言された途端に雄たけびを上げる者を始めとしてまた騒がしくなった。その声に従って此処に集まっていた参加者はぞろぞろと闘技場へ移っていく。

夏葉も例外でなく、それを聞いた途端、寧猛な笑みを浮かべてその波についていく。竜の血が騒ぐのか、唇が吊り上ったときに見えた牙はとても鋭く、何処か危ない雰囲気を漂わせていた。

全員が移動し終わると、またさっきと同じ女性の声が聞こえてくる。

『このエリアはまた7つに分けてあります。1～99の番号の方は1のところへ、100～199の番号の方は2のところへ、200～299の番号の方は3のところへ、300～399の番号の方は4のところへ、400～499の方は5のところへ、500～599の番号の方は6のところへ、600～699の番号の方は7のところへ移動してください。ルールはいたって簡単で、そのエリアから出ないで最後まで立っていた2ペアのみ、次のステージへ進むことが出来ます。因みに、ペアの片方が倒れても失格となりますので、ご注意下さい。ですから次のステージに進めるのは合計14ペア、ということになりますね。』

闘技場には観客席が沢山設けられているが、一日目はこのような形式で戦う為か観客はあまり見られなかった。夏葉とハークは地面に白い文字で5と書いてある場所へ移動する。

「ふむ。やはりそういう形式の試合になるのだな。俺たちは481番だから、5のエリアか。」

「・・・これ残るのってかなり難しくないですか？」

ハークが心なしか顔を青くして周りを見回しながら怖気味に聞い

た。しかしそれとは真反対の、好戦的な雰囲気の中、夏葉は何言ってるんだ？というふうに縦に割れた瞳孔をハークに向ける。その人間とは思えない瞳を見て、ハークは息を飲んだ。

「難しいからこそ盛り上がるのではないか。・・・久しぶりに思いっきりやれそうだな。最近雑魚しか相手にしていなかったのだ。色々溜まっているのだ。」

夏葉の周りの温度が上昇していく。ハークは何か危ないものを感じ、夏葉から一定の距離を取る。それに応えるように周りの参加者たちも武器を手にとって、雰囲気を一変させる。ハークも短剣を手にとって構えた。

『移動は終わったようですね。それでは、試合開始!!』

そして試合開始の合図になった。

「ギャンッ、ドゴンッ」「うわあああああああッ!!」

「!？」

合図とほぼ同時に、隣のエリア6からものすごい音と悲鳴、そして土煙が上がった。一瞬誰もが動きを止めてそこに視線を向ける。しばらくすると土煙が晴れてきて、二人分の人影が浮かび上がってきた。ハークはそこに意識を集中させる。

「あはははははははっ!! ひれ伏せ! 愚民共! 私の前に跪け!!」
死屍累々の頂点に立っているのは、うさみみがついている可愛いフードマントを被っている、背丈と声からして少女のようであった。

その少女は血に濡れた身の丈ほどの大剣を握っていて、下に倒れている敗者の背をグリグリと踏みつけながら、恍惚の表情で笑っていたのだ。

その姿を見て、ハークは背筋にぞくつと寒気を感じた。そしてそれと同時に、ああ、あのエリアじゃなくて良かった・・・と顔を真っ青にして、彼女の近くに立っているもうひとりの方に目を向ける。そこにはその彼女の隣で同じような耳つきのフードマントを被っている、その少女とペアなのだろう人物が氷のように冷たい雰囲気纏って立っていた。そして彼の腕に自分の腕を絡めるようにして、頬を赤く染めながら彼女は楽しそうに笑う。

「あはっ！あははははっ！あぁっ・・・もっと遊びたかったのに・・・ねえ、ナハト。私たち、もう此処に居る意味がないわ。帰りましょう？明日は二人で一緒に遊べるわ、きつと。ね？」

彼女に腕を引かれる彼は、何の反応もせずに唯彼女にされるがままに連れて行かれる。その際、彼女は大剣を地につけてガリガリと地面を削っていた。余程その大剣の重さがあるのだろう。それを軽々と持ち上げて振り回していた彼女には驚かされる。

『エリア6、通過ペアは523番と561番。』

審判は今気がついたように慌てて右手を挙げながら宣言する。

その宣言を聞いて、少女の大剣から免れたペアがいたことにハークは驚いた。先程はあのペアに気を取られていて全く視界に入っていなかったが、比較的背の高い青年と、ちょうどハークぐらいの年の少年がそこに無傷とはいえないものの立っていたのだ。青年が少年を庇ったのか、腕から血を流している。その流血している腕を涙目をしながら治癒魔術をかけて治している少年。

（よく残れたなあ……。あの人、結構強かったりするのかも。）

感心してうんうんと首を縦に動かしていると、急に襟首を掴まれてぐいっと強引に後ろに引っ張られた。その直後、目の前を剣の切っ先が通っていく。ハークは驚き危うく叫びそうになってしまおうが、それは後ろから感じた威圧に圧されて口を噤んだ。

「何をぼけっとしているのだ少年。焼かれなくてはきちんとして自分の身は自分で守れ」

強引にハークを引っ張った張本人は縦に割れた瞳孔をハークに向けて、片手に炎を浮かべながら唇を吊り上げる。その姿はまさに鬼だった。あの地獄のほうはまだマシだと思える訓練を思い出したハークは一気に体勢を立て直すと、短剣を顔の前にまで上げて風の魔術を唱え始めた。

「敵を搔っ切れ！ウィンドファンク風の牙！」

不可視の風で作られた八匹の狼に、夏葉が威力を調節した炎をぶつけて狼に炎を纏わせる。それは二人の周りにいた参加者たちを巻き込んで加速していく。先程剣を振ってきた男にも狼が襲いかかり、防御が間に合わずに炎に焼かれ風で傷をつけられていき、最終的には倒れて気絶してしまった。

風で煽られて巨大化していく炎を纏う狼は周りをどんどんと喰らい尽くしていく。夏葉は襲い掛かってくる相手を炎を纏った鉄のナックルをつけた拳一撃で沈めていった。

『エリア5、通過ペア402番と481番!』

気がつけば終わっていた。周りを見回すと、倒れているどの人にも殴られて焼け焦げた後がくつきりついている。いわずもがな、夏葉がその元凶だろう。夏葉はというと、あれだけ動きまくって・・・訂正殴りまくっていたのに息ひとつ乱していることなく、つまらなそうな表情でハークから少し離れた場所に立っている。これはほとんど夏葉のおかげで生き残れたようなものだ。

(本当にこの人が味方で良かった・・・)

心底そう思うハークであった。

「ん? 面白いえばヨルはどうしたんだろう?」

「ふむ・・・あいつは今日、この都市にある図書館にいてある調べものがしたい、と夜まで帰ってこないようだ。」

「そうなんですか。」

ハークは少し寂しい気持ちになったが、首を振ってその気持ちを振り払い平気なふうを装った。しかし、夜が調べたいものって一体何なのだろうか。

(うーん・・・ヨルもこの人もまだ合って間もないけど、謎が多すぎる・・・。)

そう内心首を捻って目の前に立っている青年と、今は此処に居ないもうひとりの青年に距離感を感じて、ハークは言いも知れない感情に眉を寄せた。



気がついたらフェリスの部屋に居て、彼女が自分の目の前に立って
いてその手には黒い仮面が握られていた。

「・・・ヨル、さん？」

何かを怯えるように、彼女は小さく呟くように夜の名前を呼ぶ。そ
んな彼女に、大丈夫だよ、と夜は彼女の頭に手をぽんと軽く乗せた。

「どうしたんだ？フェリス？」

するとみるみるうちに顔を真っ赤にして、

「こ、子供じゃないんですからそんな猫なで声出さなくてもっ／＼／＼別に何でもありません！」

と頬を大きく膨らませて、拗ねたような口調で言う。夜は何故彼女が急に怒り出したのか分からず、首を傾げて彼女の頭をぐりぐり撫でながら聞く。

「何が不服だったんだ？」

「その聞き方が不服なんですっ。もうっ、心配して損しました！もうヨルさんのことは心配しませんっ」

「だからなんで怒ってるんだ？俺なんかやった？」

「別にもういいですっ。・・・／＼／＼それからいい加減頭、放してください！髪の毛がぐしゃぐしゃになっちゃうじゃないですか！」

「別に減るもんじゃないし・・・駄目です！！」はいはい。」

夜が手をぱっと離すと、少しだけ悲しそうな顔をやっぱりして、その顔を隠すように俯きながら乱れた髪の毛を手ぐしで直すのだった。そんな彼女を見て微笑んでいた夜だったが、此処に来るまでの記憶が曖昧なことに疑問を覚えて、何かを考えるように目を側める。フェリスが、今は壁に立て掛けてある大剣を恐るべき馬鹿力で振り回して敵をなぎ倒したところまではなんとか覚えている。しかしそこから段々と記憶が曖昧になってきているような気がする。

「フェリス。あんた、あの仮面をつけている間って覚えているか？」

夜は何か参考になるかと思って聞いてみたが、フェリスは申し訳な

さそうに苦笑いして、こう言ったのだった。

「あ、ごめんなさい。私、実は普段もそうなんですけど、戦闘しているときの記憶がさっぱり抜け落ちているんです。」

「・・・何だって？」

「実は自分でもよくわかっていないんです。なんで記憶が抜け落ちているのか・・・。うーん・・・謎です。」

こめかみに両手の人差し指を立てて難しそうな表情を浮かべるフェリス。その仕草はともかわいらしいが、何も情報が得られなかったほうに落胆して夜は肩を落とした。それから苦笑しながら、フードマントを脱いでいつも着ているコートを羽織って肩に猫のぬいぐるみに乗せる。

「そっか。じゃ、俺行くから。また明日な。」

一応口実とはいえ、夏葉たちに図書館に行って調べものをしてくると言った手前、ここで姿を見られると色々とまずいのだ。それに、調べたいことがあるのは本当だ。

「あ、あのー!!」

急にフェリスが大きな声を出して、この部屋から出て行こうとする夜を呼び止めた。彼女の片手は夜のコートに巻いてある水色の布を掴んでいる。

「何？」

それに引かれるように振り返って首を傾げる。しかしなかなか彼女は言い出そうとはせずに、俯いてしばらく何かを呟いていたが、突

然何かを決心した目をして顔を上げた。

「あの！一緒に・・・一緒にお祭りを見て回りませんか？」

その頬は真っ赤に染まっていて、心なしか目も潤んでいる。その姿を見て心を震わせない男がいるだろうか、いやいないッ。(反語)
この顔を視界に入れることがなければ断ることが出来ていただろう。しかしもう時既に遅し。

—ぎゅっ

「・・・分かったよ。一緒に行こう」

「！あ、ありがとうございます！！すっごく嬉しいですっ！！」

顔を太陽のように輝かす彼女を見て、断らなくて良かったなあと心の中で呟きながら夜は微笑む。こんなことで彼女が笑ってくれるのなら、図書館はまた後でもいい。どうせ辻褄合わせの用事だ。取りあえず今日は彼女と一緒に祭りを楽しもう。

「じゃあ早速行くか。ちょうど腹も減ってきたところだしな」

フェリスは未だ手に持っていた仮面を激情の仮面が乗っているテールの上に置いて、何処から出したのか青い鳥の羽根つきフードマントを出して慣れた手つきで被ると、

「はいっ！」

と元気よく返事してほとんど無意識に夜の手を取って繋いで引っ張りながら、部屋から楽しそう口を緩ませて青い羽根を羽ばたかせるように外に出て行った。

話
終
わ
り

第
1
5

第16話 季節はずれのアイスキャンディーによる青い鳥の為の嬉遊曲（ディヴ

私事ですが、だんだんライフラインが復旧してきました；；

後は水道のみです・・・早く水の恵みを・・・コホン・・・見苦し

いところをすみませんm（　　）m

第16話更新です！！

闘技場の外は、闘技場内以上に賑やかだった。闘技場から一步外に出れば道の脇に屋台を出しているおばさんに食べていけないか、と声をかけられ、地に座って店を広げているおじさんに買っていかないか、と手招きをされる。その道の真ん中で、片手に花の入ったかごを抱えてくるくる踊っている数人の少女たちも見られる。まさにお祭り騒ぎであった。

そのお祭り騒ぎの中をフードを被った変わった二人組みが歩いていた。1人は青空のような清しい青色のフードで、背中に鳥の羽根がついているかわいらしいフードを被っていて、もう1人は黒っぽいフードを被って、肩にファンシー漂う黒猫のぬいぐるみを乗せている。言わずもがな、フェリスと夜だ。

そんな二人の前に目の覚めるような赤と黄色の服を着た男が一人現れた。

「はいっ。かわいいお嬢ちゃん、風船をどうぞ！」

「あっ・・・」

真っ白に肌に白粉を塗りたくって、右目の下に水色の涙マーク。そして丸くて赤い鼻がチャームポイント（？）のピエロがフェリスにハートの形の風船を差し出す。しかし彼女は風船を貰うのが恥ずかしいのかなか受け取ろうとせずに、夜の顔を窺うように下から覗き込んだ。夜は何故彼女がこちらを向いたのか分らず、首を軽く傾げる。

「貰わないのか？ピンクで似合うと思うんだが・・・」

その言葉にフェリスは一瞬顔を真っ赤にして、頭の中で夜の台詞後半部分をエコーさせる。それから火照る頬を冷やすようにパタパタと片手で頬を軽く叩きながら、空いているもう片方の手で風船を受け取った。

「そ、そうですか！？じゃあ貰います！！」

「かわいいね〜お譲ちゃん。カップル？」

ピエロが茶化すように、にやつと唇を歪ませて聞く。するとフェリスはぼふつと頭から湯気を出して、斜め後ろに立って辺りを物珍しそうに見回している夜の表情を盗み見ながら、両手を顔の前でぶんと横に振る。

「ち、違いますっ！！彼は私のただの友達です！！」

フェリスの反応を楽しむようにピエロはわざとらしく、

「へえ〜」

と相槌を打って、彼女の手の中で揺れるピンクの風船を眺めていた。その反応に怒ったのか、頬をかわいく膨らませて違うんです〜っ！と先程に増して両手を振り回すフェリス。すると、フェリスが顔を真っ赤にして騒いでいるのに気がついた夜が彼女に声をかけた。どうやら周りに気を取られていて、今までのフェリスとピエロの会話を全く聞いていなかったようだ。

「フェリス？」

「ヨ、ヨルさん！！！！／／／あ、・・・は、早く昼食を食べにいきましょう！」

彼が会話を聞いていなかったことに安心したが、でも少し残念そう眉を下げてフェリスはこの場から早く抜け出そうと、夜の腕を毎度の事ながら馬鹿力で掴んで引っ張っていく。そんな二人にピエロはにこやかな笑顔を向けて、

「お幸せに」

と風船を持っていない方の手を高く上げて振っていた。

「フェリス」

「な、何ですか？ ヨルさん」

「痛いよ」

「そ、そうなんですか。」

「だから痛いって・・・」

「はい。」

—めきよめきよめきよ・・・

「ぎぶぎぶぎぶ！！めきめきなら良いけどめきよめきよは危険だ！

」

「！！あっ！すみません！！」

やっと腕を放してくれたフェリスだったが、彼女はフードで顔を隠すように俯いて、手元にある風船の紐をぐるぐると人差し指に巻きつけていた。

「どうしたんだ？あのピエロに何か意地悪でもされたのか？」

俯いたフェリスの顔を屈んで下から覗き込む。彼女の顔は水で薄めた絵の具の赤で塗ったように真っ赤に染まっていて、夜に見られた羞恥でさらに真っ赤に染まっていく。比喩表現ではなく、言葉通り彼女の顔は茹蛸みたいに真っ赤だった。

（・・・もしかして熱でもあるのか？）

―ピタッ

「ひゃっ／＼／＼ヨ、ヨルさん！？」

普段から冷え性でいつでも氷のように冷たくなっている手を、夜は本人の承諾なしに額に乗せる。急に冷たい手で顔を触られたフェリスは驚いて一瞬頭を動かしてしまいが、火照った頭にはとても気持ち良く、その後は大人しく動かないでいた。というより、彼女は額を触られている緊張で動けなかったようだ。

数秒後、夜は手を彼女の額から離す。フェリスは小さく声を漏らし寂しように眉を寄せて、名残を惜しむように今まで夜に触られていた額に両手をつけた。

「熱・・・があるわけじゃなさそうだな。でも汗はかいてないし・・・そこで休憩するか？」

「あ・・・いえ、大丈夫です！それよりお腹が空きました。早く昼食を食べましょう！私、屋台とかで買って食べ歩きとかしてみたいんです！！」

顔をぱあっと輝かせて楽しそうに笑う彼女を見て、夜は大丈夫と判

断したのか、

「よしっ、じゃあ食べ歩き屋台巡りでもするか！」

と微笑んで、道に沿って歩き出す。フェリスも普段どおりに戻って、夜の少し前を風船を揺らしながら歩く。

そんな彼女の笑顔が眩しくて夜は目を側めて彼女の後姿を眺めていたが、一瞬漆黒の瞳に闇より深く暗い影が差し、歩みが止まる。

そして唇が三日月型に歪んだ。まるで何かを嘲笑うかのように。

「……………」

《…………ご主人様？》

レーヴァテインの鈴を転がしたような声が頭の中に響くと同時にその表情は無表情になり、それから元のように瞳に光が差す。

「…………レン？どうかしたか？」

《彼女、先に行ってしまいますよ？》

レーヴァテインの声で我に返り、顔を上げると太陽の光が目差し込んで眩しく目を側めた。それから夜は微笑んでレーヴァテインに礼を言う。

「あ、ありがとな、レン。」

《いえいえ、これくらい当たり前です！》

（・・・疲れてんのか？・・・っと、フェリスを見失っちゃおう。）

今、一瞬自分が何をやっていたのか忘れそうになって、眉間を人差し指で押しながら考えていたが、フェリスとの距離が相当開いてしまっていたのに気がつき、急いで走り寄っていった。

「これすごくおいしいですっ！！アイスクャンディーなんてもの、初めて食べました！ジュースを氷属性魔術で凍らせて食べる、なんて考え付かなかったです。」

昼食の前にアイスを食べるのもどうかと思った夜だったが、フェリスのあの顔を見てしまったら買わずにはいられなくなってしまったのだ。

フェリスは屋台でこのアイスクャンディーを見つけた途端、そこに走り寄って目をきらきらと輝かせ、顔の前で両手を組みながらそれを宝物かなんかを見つけたときのようにずっと見つめていたのだった。

買って正解だった。夜は口にグレープフルーツ（かもしれない果物の）味のアイスクャンディーを口に銜えながら内心安堵していた。

（それにしても、アイスクャンディーを初めて食べたって・・・これってこの世界ではつい最近出来たものなのか？）

フェリスが大事に少しずつ食べているのに目を向ける。それはとても微笑ましい光景だったりするのだが、少しだけひっかかったのだ。

もしこれがつい最近出来たものなら、この屋台に行列が出来ていたっておかしくないのではないだろうか。実際には列は出来ていたものの子供が2、3人並んでいたくらいで行列と言うほどではない。それによく辺りを見てみると、アイスキャンディーを売っている屋台は少なくない。

「私にも氷属性魔術が使えたらジュースがあればいつでもこれが食べられたのに……」

とても残念そうに手元にある後残り少ないアイスキャンディーを見つめて呟く。そんな彼女の頭を何故か無性に撫でたくなって、アイスキャンディーを持っていない方の手を彼女の頭の上にぼんと乗せる。

「また食べたいんならまた並べばいいだろう？」

「……はい！そうですねっ！！……シャリツ……おいしい、です？」

（……まあいつか。）

ーシャリツ

口の中に冷たく甘い、そしてほんのり苦味が広がる。

「……って、ぶはっ！」

それを舌で転がしながら溶かしていると、二人が通ってきた方向でここから10mほど先にとっても見覚えがある紅を見つけて危うく口の中の物を噴出してしまいそうになり、フェリスに背を向けて慌てて口を押さえる。そしてそれを無理やり喉の奥に押し込んで、見間

違いだと信じてもう一度そちらに目を向けた。

「ふーむ・・・おいしそうな肉だがちょっと高いのだ。この祭りの熱気に乗じて普段の値段の2、3倍の値段で売りつける商売魂は見事と言うべきか。」

「ってあんまりそれ大声で言わないで下さい！？・・・じゃああっちの方にある屋台を見てから決めましょうよ。」

「うむ。そうするか。」

あの人を最大限見下したような独特の喋り方は間違いなくアイツだ。そしてアイツの脇には焦げ茶色の髪を持っている少年もいる。幸い、お祭り騒ぎで人が溢れかえっている為、こちらはあの二人の視界に入っていないようだ。

（何故夏とハークが此処に・・・いや、まあ別に居たっておかしくないわけなんだが、それにしてもタイミング悪すぎだろ！？）

大方あの二人も此処に昼飯を食べに来たのだろう。夏葉のことだ。肉一個ぐらいじゃ腹がいっぱいにならん☆とか言って屋台巡りでもしていたのではないのだろうか。

（・・・ってアイツ等こっちに来る！？）

《ご主人様、その道をもう少し行っただころに路地があるようです。そこに隠れては？》

（レンツ、ありがとっ）

「フェリスッ！悪い！ちょっと一緒に来てくれ！！」

「えっ？ちょ、ちょっとヨルさん！？一体急にどうしたんですか？

／／／／

夜に急に片手を握られたフェリスは顔を赤くしながら聞か、

「話は後！」

とものすごい速さで駆け出した夜に着いていくのが精一杯で、それ以上口を開くことが出来なかった。先ほどまで立ってアイスクャンディーを食べていた位置から本当に少し進んだところに建物と建物の間が見つかり、夜はそこに入りフェリスを引っ張り込んで壁に押し付けてから、外を窺う。

「・・・あ、あの・・・／／／／ヨル、さん・・・？」

「しっ。少しだけ静かにしててくれ」

夜の必死さが伝わったのかフェリスは一瞬驚いた顔をした後に、こくと首を縦に振った。

それから数分後。

「・・・ふはぁ・・・行ったか。」

夜は一気に緊張が解れて目の前にある壁に額をつけ、息を盛大に吐いた。もう信じられないくらいに心臓がばくばくと音を鳴らしている。あの時、もし気がつかずにあそこにいたら間違いないあの二人に見つかっていただろう。

（あー・・・ほんとに焦った・・・。フェリスには悪いことしたな・・・。って・・・）

下に目を向ける。

「あの・・・／＼／＼／」

そこには成り行きとはいえ、（猛スピードで走ってきた為）服が乱れ、息が切れて顔を真っ赤にしている少女を壁に押し付けている青年と、（何故か）目を潤ませてその青年を上目使いで見上げている少女、という非常に道徳的に良くない図が出来上がっていた。

因みに建物と建物の幅は1mもない。そして人目に付きづらい場所。

誰がどう見たって青年が可憐な少女を襲っているところにしか見えない。
ヘンタイ

（一体俺は何をやってるんだああああああああああつ！！！
！？しかも何でフェリス涙目！？）

「ヨルさん・・・あの、私・・・／＼／＼／」

「フェリス！悪かった！！ついこんなところに・・・あんたを、その、お、押し付けて・・・」

謝る前にその体勢をどうにかしろ。

夏葉とハークがこの場にいたら間違はなくそう突っ込んでいただろう。

「あのっ／＼／＼／それは別にいいんです・・・寧ろ嬉しかった、です・・・／＼／＼／」

「えっ？」

フェリスの台詞の後半部分が聞こえずに聞き返したが、顔を真っ赤にして首を横にぶんぶん勢いよく振る。

「あ、いえ／＼／＼なんでもありませんっ。それより・・・」

彼女が目を向けたのは手元にある一本の棒だった。そこに本来ならアイスキャンディーが刺さっていたはずなのだが、走ってくる途中に落としてしまったのだ。その棒をじっと見つめながら目をうるうるさせて、悲しそうに言うフェリス。

「・・・せっかくヨルさんに買ってもらったのに、落としてしまいました・・・。とてもおいしかったんですっ！なのに・・・ごめんなさいっ」

そして涙目のまま顔を俯かせる。自己嫌悪に陥って半分魂が抜けていた夜だったが、それを聞いて半分出かかっていた魂が戻り、素っ頓狂な声を上げて目を点にしてフェリスを見つめる。

「・・・へ？」

そして確認するように聞き返した。

「あの、フェリスは、このアイスを落としちゃったから悲しくて泣きそうになってるってことなのか？」

「そうです！さっきから言おうと思っていたのですがなかなかなか言い出せなくて・・・本当にごめんなさいっ」

つまりだ。

（涙目になっているのはアイスを落とした為であって、間接的には俺の所為だが、路地裏に入り込んで押し付けた所為でも、この場の雰囲気流された所為でもない・・・と。）

「・・・っはぁ・・・」

夜は今度こそ体中の力が抜けたようにぐったりと壁に背中を預け、安堵の表情を浮かべた。それからずっと棒を見つめて涙目になっている彼女の手から棒を取って注意をこちらに向け、彼女の悲しそうな顔を見て苦笑する。

「走って喉が渴いたな。アイスでも食べるか、フェリス」

すると先ほどまでの悲しい表情は何処いったんだ、という風に顔を輝かせるフェリス。しかしまたすぐに表情を曇らせて呟くように言う。

「それは悪いです・・・。私が落としてしまったのに。」

「いいや、俺が急にフェリスを引っ張ったのが悪い。だからそのお詫びだ。ほら、早く行こう？まだ昼飯も食べてないんだ。」

「・・・でも・・・」

「いいから。それにパートナーに遠慮してちゃ駄目だろ？な、フェリス」

少しの間黙っていたフェリスだったが、夜が先ほど彼女の手から取った棒を彼女の手の中にまた戻すと、

「・・・そうですね。ヨルさん、アイス食べに行きましょう！」

その棒を握って、その路地から出て楽しそうに笑った。その笑顔につられて夜も微笑み、路地から出ると先ほどこのアイスクャンディーを買ったところに向かって歩き出す。

「因みにだが、このアイスの棒に当たりと書いてあったらもう一本タダでもらえるんだ。こんな風にな」

フェリスは唐突に目の前に出された木の棒を見つめる。夜が食べていたアイスクャンディーの棒の先には、“C o n g r a t u l a t i o n s ! ! ” と赤い文字で書かれていた。



―ガチャッ

「今日はどうしても楽しかったです!! ヨルさん。私の我侘を聴いてくださって本当にありがとうございます!!」

闘技場に隣接している宿屋のフェリスの部屋にて。

部屋の中は窓から差す夕日に照らされオレンジ色に輝いていた。

「俺も久しぶりに楽しかった。フェリスと一緒に祭りを見れて良かったよ。」

明日の武闘大会に響かないように、と少し早めに帰ってきたのだが、フェリスはもう少し祭りを見て回りたかったようだ。夕日に照らされている所為か、夜には彼女の表情が少し寂しげに見えた。彼女の手には、本当だったらアイスをもう一本タダで貰えるはずの当たりつき棒が握られている。実は、あの後あの屋台に行って交換しようと思っていた夜だったのだが、フェリスがとても大事そうにその棒を持っていたのを見て、その棒を使わずにアイスクャンディ―を買ったのだ。そのことを知って、最初フェリスは慌ててその棒を屋台に持って行ってお金を返してもらおうとしていたのだが、それを夜が止めて今度のときのために取っという、と彼女に買ったアイスクャンディ―を渡したのだ。

「あの、この後の夕食、一緒に食堂に行きませんか？」

フェリスが青いフードを脱いでソファアの上にかける。それから夜の目を見つめた。しかし夜は苦笑して彼女の頭を一回ぽんと軽く叩くと、申し訳なさそうに眉を寄せた。

「あー、悪いな。夜はちよつと用事があってな・・・また明日、な。」

「・・・あつ・・・そうですか。ごめんなさい、また、明日、です！！」

しゅん、と顔を少しだけ暗くした後、気がついたように無理やり笑顔を作って手を振るフェリス。そんな彼女を見て胸が少し痛んだが、明日以降は大会関係で忙しくなる、と聞いたのできちんとお互いに休んだほうがいいだろう。

寂しそうに笑うフェリスに手を振り返して、夜は部屋を後にした。本来ならこのまま部屋に戻らずに図書館に行つて調べ物をするべきなのだろうが、如何せん、今日一日でどっぷりと疲れが溜まった所為かものすごく眠い。今なら立ちながら寝れる勢いだ。いや、比喻なんかではなく、言葉通りに。

（・・・あー・・・くそ眠い・・・。ちゃんと部屋までたどり着けるか・・・？・・・いつその事フェリスの部屋に戻って入れてもらうか・・・いやいやいや、それだけはいかん。）

一瞬思考が変な方へ傾いたものの、まだ理性が保っていたので方向を正すことが出来た。しかし眠気は一向になくなることはなく、そればかりかどんどん強くなってきた。これは、ただ疲れた、という理由だけでは説明できないほど異常の眠気であった。

ードンッ

近くにあった部屋のドアに思わず体を傾けて大きな音を出してしまう。その音に気がついたのか、中にいたその部屋の住人がドアを開けた。しかしそのときにはもう、夜はぐっすり眠ってしまっていたのだった。

「・・・誰この人？」

その部屋の住人の小さな呟きだけが静かな廊下に響いた。

第16話 終わり

第17話 黒の悪夢による始まりの為の狂想曲（カプリチオ）（前書き）

前話の最後に出てきた「・・・誰この人」って言った人の視点から
始まります。

第17話 黒の悪夢による始まりの為の狂想曲（カプリチオ）

「ねえ、兄ちゃん……。ドアの前に人が倒れてるっ!!」

先ほど、ドアをすごい勢いで叩く音が外から聞こえてきた。

その音の原因が気になってしまった金髪に碧眼を持つとてもかわいらしい顔つきをしている少年は、兄にドアを開けるのを止められたのにも関わらずにドアノブを捻って内側に扉を引いた。すると、ゴンツととても痛そうな音とともに黒髪の青年が倒れてきたのだ。それに驚いた少年は目を大きく見開いて、部屋にあるソファで何の本かは分からないが分厚い辞書みたいなものを読んでいる兄に半ば悲鳴じみた声を上げる。

「……。先ほどの音はそいつが原因か……。捨て置け。」

しかしその少年の兄は深緑の瞳に黒髪の青年を視界に一瞬入れたかと思うとまた辞書みたいな本に視線を戻し、冷酷な台詞を淡々と吐いた。

「えっ……。でも……。この人びよりきかもしれないよ？だってこんなところに倒れてるんだよ？もしかしたら重いびよりきかもしれない……」

「……。顔色は」

「良いよ？」

「……。息は」

「……。規則正しい寝息」

「表情は」

「すっごく幸せそう。」

「捨て置け。」

「兄ちゃんっ！！！」

結局最後にたどり着く結論はどれも同じらしい。

少年はぷーっと頬を膨らませると腕まくりをして、ドアの所で倒れている青年の脇に腕を入れるとそのままずりずりと部屋へ引きずっていく。そんな弟の姿を本から視線を離して見ると、兄は金色の髪を揺らしてふうつとため息をつき、辞書みたいな本を埃を撒き散らすように勢いよく閉じた。



・・・あれ・・・おかしいな。この世界に、響は居ないはずなのに・・・でも、金髪に碧眼はアイツの・・・

「あつ、兄ちゃん！この人、目が覚めたみたい！良かった〜・・・なんか死人みたいにぐっすり寝てるから本当に死んでるのかと思った・・・」

「・・・・・・・・・・。って・・・・・・・・」

数秒、寝ぼけ眼で居たものの、何か違和感を感じて勢いよく上半身を起こして周りを見回す。

目の前には何処の天使だ金髪碧眼の美少年がいて、ちょうど夜の上からずり落ちてしまったタオルをかけ直してくれているところだった。夜はいまいち状況把握が出来ずに首を捻っていたのだが、ふとこの部屋に見覚えを感じる。

「闘技場に隣接してる、宿の部屋？・・・だよな」

「うん、そうだよ。君、ぼく達の部屋の前に倒れてたんだ。気分はどう？」

ぼそつと言った独り言に律儀に答えてくれたのは、タオルをかけ直してくれた見目麗しい少年だった。

（・・・全然響には似てないな・・・。ただ髪と目の色が同じっただけで）

「？どうかした？もしかして具合でも悪いの？」

「いや、大丈夫だ。心配してくれてありがとな。えっと・・・」

「あ、ぼくの名前はシーリィ。で、ソファアに座っているのが兄ちゃんのヴェクス。よろしくね！」

輝かしいほどの笑顔を見せながら手を差し出してくるシーリィという少年。夜は一瞬その笑顔に何処か見覚えを感じながらも、差し出してきた手を握る。それを嬉しそうに握り返してぶんぶん振り回す少年を夜は驚いたように見つめて、やっぱり何処も弟きょうには似てないな、と苦笑した。そして相手が名乗ってくれたのだから、自分も名乗らなくてはいけないなと思い名乗ろうとしたときだった。

「俺は「誰も貴様の名前なぞ聞いていない。目が覚めたのならさっさと此処から去れ。」

先ほどの少年の紹介ではたしか、ヴェクスと呼ばれていた深緑の切れ長の瞳を持つ青年が夜の言葉を掻き消すように言葉を放つ。夜は少年から視線を、ソファアに座って分厚い本を片手で持って読んでいる青年に移した。その時目に付いたのが、服の袖から少しだけ見える腕に巻かれた包帯だった。

「兄ちゃんっ！そんな言い方は良くないよ！ごめんね。兄ちゃんっ
ていつもこうなんだ。あまり気にしないでね！」

再びシーリィに視線を戻し、夜は気にしてない、と笑う。その笑みを見て安心したのか、シーリィは困ったように寄せていた眉を元に戻して笑顔を浮かべた。それからテーブルの上に置いてあったクロワッサン二つとマスカット（つばい果物）、水が入ったコップをお盆に乗せて、夜が占領しているベットにまで運んでくる。

「はいっ。もう大食堂の朝食の時間が終わっちゃったから、これ。」

ちょっと少ないかもしれないけど食べて！」

「ありがとう。とても助かる。」

夜はお言葉に甘えてシーリィからお盆を受け取る。喉が渴いていたのでコップを手に取り、それを口に運ぶ。

「うん！君はゆっくり食べて。ぼく達はこれから大会に出る為に闘技場に行かないといけないんだ。今はその集合時間の10分前だからもうそろそろ向かわないとね、兄ちゃん」

ヴェクスからの返事はないが特に気にしてないらしく、少年は支度を始める。いそいそと準備をしている少年を何気なく眺めながら水を飲む。

「ふーん・・・ゴクッ、ゴクッ・・・って今なんて言った？」

「えっと・・・集合時間の10分前だからそろそろ行かないと間に合わないよって。どうかした？」

不思議そうに首を傾げるシーリィ。夜は彼の言葉の意味を頭の中で理解していくに比例して顔が真っ青に染まっていった。そして何かをぼそっと呟く。

「・・・え？ねえ、君、本当は具合が悪いんじゃないの？大丈夫？」

顔を真っ青にしているのを具合が悪いのではないかと心配したシーリィが夜の顔を覗き込む。

「・・・大丈夫だ。」

「あっ、もしかして遠慮してご飯が食べられない、とか？別にこれはお金払って買ってきたわけじゃないから大丈夫だよ！それに、遠

慮なんてしないでいいよ！」

「あ、ああ。」

（って俺こんなことしてる場合じゃねえッ！早くフェリスんどこ行かないと・・・）

シーリィが気を使ってくれているのに良心が圧されてついつい返事をしてしまった夜だったが、実際ここでのんびり朝食を食べている場合ではない。フェリスに迷惑はかけたくない。

「あー、気を使ってくれているところ本当に悪いんだが、俺もちょっと急ぎで行かないといけないところがあつてな。ベット貸してくれてありがとな、シーリィ。」

ベットの下に丁寧に揃えて置いてあるブーツを履いて、夜はテーブルまで歩いて行ってお盆を置く。

「あ、そうなんだ。用事があるんならしょうがないよね。じゃあ部屋の外まで一緒に行こうよ。どうせ今からばく達も出るからさ。」

見るからに不機嫌オーラを撒き散らしているヴェクスを横目で見ながら、夜は首を縦に振って部屋から出て行くシーリィの後に続く。ヴェクスは壁に立てかけてあった二本の長剣を腰のベルトに挿してから部屋から出てくる。その部屋の扉には523と書いてあった。

ーガチャッ

ヴェクスが鍵を扉に挿しているとき、こちらに走って向かってきている人影が見えた。その人影はどう見ても体の大きさに合っていない大剣を背中に背負って、うさみみがついているフードを被っている

小柄な人影だった。

「に、兄ちゃんっ」

その姿を見たシーリィは目を大きく見開いて、ヴェクスのおりに隠れてぶるぶると震えだす。ヴェクスもシーリィの声を聞いてその姿を目に捉えると、先程の倍以上に視線を鋭くしてその人影を睨みつけた。まるで何かを恐れているような二人の行動を疑問に思った夜は首を捻る。

「・・・一体どうしたんだ？」

「危険な奴なんだ！あ、あいつは昨日、兄ちゃんの腕を斬った。しかも剣一振りでぼく達以外を戦闘不能にした・・・。」

（だから腕に包帯を巻いていたのか・・・。）

そんなすごい奴がどんな人なのか見てみたい、と夜は二人が警戒して見つめている先に目を向ける。しかしその姿にものすごい見覚えがあつて、夜は

「へ?。」

と素っ頓狂な声で小さく呟いた。

（あれって・・・どう見たって、フェリス、だよな・・・？）

「兄ちゃん、あいつこっちに向かってくるよ！君も危ないから兄ちゃんの後ろに居たほうがいいよ!!！」

フードと仮面で顔が隠してあつて表情はよく見えないが、あれは間

違いなくフェリスだ。彼女の手には夜の黒いフードマントと仮面が握られている。

夜は悪いことをしたなと苦笑する。おそらく時間になっても部屋に来なかったのも、フェリスは心配して探してくれていたのだろう。それにしても・・・

（フェリスが、危険な奴、ねえ……。多分記憶が曖昧なところで何かあったんだろうけど、フェリスがそんなことするはずないしな・・・）

夜が首を傾げていると、こちらまで歩いてきたフェリスが急に無言で抱きついてくる。

「ちよっ／＼／＼何やってんだ？」

いきなり抱きつかれて驚き顔を真っ赤にした夜は、慌ててフェリスを離そうとしたが強い力で掴まれているため離すことが出来なかった。夜は戸惑いを隠せずに眉を寄せる。顔を夜の胸に押し付けているフェリスの顔が見えなかったのも彼女が何を考えているのか分からなかったのだ。

「君！！大丈夫！？刺されたりしてない！？」

「・・・刺す？私がナハトにそんなことするはずないじゃない。ナハト以外ならいざ知れずナハトに私が剣を向けるなんて、有り得ないわ。」

シーリィに答えたのは夜ではなく、夜に抱きついていいるフェリスだった。普段と全く違う話し方に、行動に違和感を覚え、ここにいるのが本当にフェリスなのかと夜は考えずにはいられなかった。

「あー・・・えっとモル、恥ずかしいんだが。」

「ふふっ。これはナハトが部屋に来なかった罰よ。」

妖艶に笑ったフェリスは顔を上げる。仮面の奥から彼女の澄み切った瞳が覗き、夜の目をじっと見つめる。そして片腕を首に回して、もう片方の手の人差し指を夜の唇の上に優しく乗せた。そんな彼女の行動にドキッとしながらも表面上は冷静を装い、夜は軽く笑う。

「それは悪かったな。つい道端で寝てしまったらしくてな。気がついたらもう朝だったんだ。おかげで昨日の夕飯も今日の朝飯も食いつばぐれて腹ペコだ」

「今日はそんなことより楽しいことが待っているわ。だって人を斬れるんですもの。」

フェリスは楽しそうに笑うと、夜の首に回した方の手がフードマントを持っていて、それを後ろからふわっと被せられる。そして、もう片方の手が持っている黒い仮面を唇から滑らせるように被せた。その瞬間、夜の顔から笑みが消え、何もかも拒絶するような冷たい雰囲気纏う。この場にシーリイとヴェクスなど最初から居なかったように視界から外し、抱きついていているフェリスの腕からすると抜けて、闘技場に向かって歩き出した。そんな夜を恍惚とした表情で見て、フェリスは自分の腕を夜の左腕に絡ませると彼に寄りかかるように首を預ける。

「君・・・昨日こいつの脇にいた人、だったの？ねえ！」

シーリイが叫ぶように夜の背中に問いかける。しかし先程までならこの問いに答えてくれていたかもしれない夜の声が少年の耳に届くことはなかった。

二人が見えなくなるまでそこに立ち尽くしていたシーリイだった

が、唐突に口を開く。

「・・・兄ちゃん。確か今日の試合って、昨日の試合で同じエリアで残ったペアどうしの試合だね・・・？」

ヴェクスが首を縦に振ったのが、後ろからでも分かった。

「やっぱり・・・あの黒髪の人とも戦わないと、駄目・・・だね・・・。」

「・・・行くぞ。」

「・・・うん。」



『さあさあ！！！！お待たせしました！レディース&ジェントルメェン！！！！大会二日目、やっと俺の順番だぜえええ！！司会を担当するジーンだああああ！！よおろしくうう！！！！』

武闘大会二日目は昨日とは全く別世界だった。闘技場の観客席には溢れんばかりの観客でいっぱい、真面目なのは最初だけ、超ハイハイテンションの司会者がこの場を盛り上がらせて、闘技場内はまだ試合が始まっていないにも関わらず熱気で溢れかえっていた。

『それではああああ最初の試合、早速いってみようぜ！！エリア1で生き残った2ペアを紹介するぜえええええ！！先ずは東側！11番、サンリア・ツイオペアだああああああ！！そして西側、87番！！クラック・バルゴペアああああああ！！心の準備は出来てるかああああい！？出来てなくても試合は始まっちまうぜ！それじゃあいくぜ！第一試合、開始いいいい！！！！』

こうして二日目、最初の試合の火蓋が切られた。



「人間の祭りってのはこうも騒がしいものなのか？」

「そうですね。大体毎年こんなかんじですよ。それよりアシユテカ様は一体何用得こんな辺鄙な国に来たのですか？」

眼下では人と人が最強を決めるためにお互いの武器を交えているのが見えた。それを馬鹿にしたような冷たい瞳で見下し、アシユテカは嘲笑うように唇を吊り上げる。

「・・・王様への手土産、だな。」

「・・・？は、はぁ。」

「別に特別な意味はない。そのままの意味だ。」

「余計訳が分からなくなるんですけど・・・。」

「気にするな。お前には関係のないことだ。・・・とにかくお前は引き続きこの国に潜伏してくれ、との上からの命令だ」

「上からって・・・アシュテカ様の上って王しかいらっしやらないじゃないですか。」

「まあ、そうだな。細かい事は気にするな。禿げるぞ。・・・そろそろ俺は行く。」

「縁起でもないこと言わないで下さい・・・最近気にしているんですから・・・。気をつけて下さい、アシュテカ様」

「ああ。じゃあ次は育毛に効くという薬草でも土産に持ってきてやろう。ではな」

背中から漆黒の翼を出し、アシュテカは部下をからかってから“王様の手土産”の為に何処かに飛び去っていった。その場に残された部下はそつと自分の頭の上に手を乗せて、

「・・・はあ・・・。」

と悲しげにため息をついて、地面から100mはあろうかという塔の上から飛び降りる。それから何事もなかったように再び人間に紛れ、一匹の魔物が溶け込んでいった。

終わり

第17話

第18話 剣の行く末によるモノクロの為の二重奏曲（デュエット）（前書き）

遅くなってしまうましたm（　）m

ライフラインが全て復活してから5日経ちました。まだ水は薄茶色ですがなんとか生きていけてます^^;

ですが、今度は原発の問題が・・・（…|;）一体これからどうなるのでしょうか……。愚痴を零してしまっすみません;;;

第18話更新です！

第18話 剣の行く末によるモノクロの為の二重奏曲（デュエット）

時間はもう既に正午を過ぎ、ちょうど日が傾いてきた頃。夜たちが
出るようになっていた第6試合が始まるうとしていた。

正面から見て右側には、杖を構える天使のような少年、シーリーイ
と、二つの剣を交差して構えている深緑の瞳を持つ青年、ヴェクス
は空気まで切り裂いてしまいそうなほどの殺気を出している。そし
て正面から見て左側には、フードを被った性別も特定できない二人
組み。1人は身の丈を軽く超えている大剣を両手で軽々しく持ち構
えていたが、もう1人は何の武器も構えずにただ突っ立っているだ
けだった。どう見てもやる気があるようには見えない。それでもそ
の二人組みに相對する少年と青年は油断しているどころか寧ろ必要
以上に相手を警戒していた。

『いよいよ今日の試合も残すところ後2つ!!盛り上がっていかう
ぜええええ!!!エリア6で生き残ったのはこの2ペアだああああ
あ!!!東側、523番のヴェクス&シーリーイペアああああああ
あ!!!それに対して西側は561番!モルゲン&ナハトペアだあ
あああ!!!気合は十分かああいお二方!!!!それじゃあいくぜ!
!第6試合!レディイイイ、GO!!!!!!』

試合開始を合図に、ヴェクスとフェリスが先行して飛び出した。フ
ェリスは大剣を扱っている所為かヴェクスの方が幾分動きが早く、
フェリスは大剣を振るった時にはもう既に彼は彼女の背後に移動し
ていた。

—ガキヤツ

勢い余って地面にフェリスの大剣がめり込む。その隙をヴェクスが見逃すはなかった。背後に回ったヴェクスは、一瞬動きが止まった彼女のがら空きの背中に双剣を振るう。そのときに振り返ったフェリスは笑みを浮かべていた。その笑みにぞっとしながらも最後まで双剣を振り切ろうとする。

「うふふっ、甘いわ」

「!!」

フェリスは地面にめり込んだ大剣を抜くことをせずに、そのまま前にステップを踏み移動する。その為ヴェクスの剣は空を切り、体勢を崩されたヴェクスは整えないまま、その勢いで前を走っているフェリスに追撃を加えようと膝のばねを使って彼女を追う。フェリスが向かっている先は、杖を構えて魔術を唱えているシーリーがいる。

「シーリーイのところには行かせんっ」

視線を鋭くさせて地を蹴り、一瞬でフェリスに追いつく。そのまま剣を前に突き出すが、後ろが見えているはずがないフェリスはその攻撃が来るのが分かっていたかのように、スッと左に上半身だけを傾けて避けた。

「いくよ! アクア エッジ 水の刃!!」

杖の先で水色に輝いている アクアマリン 藍玉から出た水が刃の形になってフェリスを襲う。しかしそれすら予想していたかのように後ろに飛んで避けた。

「あっ!?!」

「シーリー！避けろ！！」

―ヒュッ、パリィッ

そしてその避けた姿勢で懷から短剣を一本取り出し、それをシーリーに向かって投げる。それを杖で受け止めたのだったが、短剣が偶然にも杖についていた宝石に当たり綺麗に真っ二つに割れてしまった。

「あっ、杖が！！」

「杖がなければ魔術は使えないのでしょうか？ふふっ。あははははっ！！後はあなただけよ！！」

―ガキンッ

大剣と双剣がぶつかり合う。しかし大剣の重みは半端なく、ヴェクスが受け止められたのは双剣を微妙にずらして衝撃を軽減することが出来たからだろう。

「・・・くっ」

「あはははははっ！このままひれ伏せッ！そして地面に沈めっ！」

正面で向かい合う二人。仮面の裏に見える澄み切った瞳は、深緑の鋭い殺気に満ちた視線を捉えながらも余裕で満ちていた。ほんのり色付く桜色の唇は楽しそうに笑っていて楽しんでいる雰囲気さえ漂っている。しかし一瞬ピクッと眉を動かすと、優勢だったのにも関わらずフェリスは剣を引き、後ろへバツと引き下がる。

スプラッシュ
「水滴！！」

フェリスの行動とほぼ同時にシーリイの声が聞こえてきて、先ほどもで居た真下から水がものすごい勢いで吹き上がってきた。もし当たっていたら無事では済まなかっただろう。

「避けた！？何で！？」

「シーリイ！！驚いている暇はない。」

先ほどフェリスはシーリイの要であった杖を破壊した。普通だったらこれで魔術師は魔術が使えなくなるはず。しかしシーリイは元から魔力量が高かった為に要なしでも魔術が使えたのだ。それが相手にとって予想外のことであったならばさっきの攻撃を見切るのは相当難しい・・・はずなのに何故彼女は避けることが出来たのか。

「う、うん！分かった！」

取りあえず今は戦いに集中するべきだ。兄の言うとおりだ、とシーリイは頭の中で魔術を構成し始めるが、そのとき視界にチラッと黒いフードが映った。

（・・・試合が始まってから、まだ一回も動いてない。一体何をしてるんだろう・・・魔力を練っている様子もないから詠唱しているわけでもない。・・・って今は構成に集中しないとっ！！）

シーリイの足元に水色に輝く陣が浮かび上がる。

シーリイが魔術を構成しているとき、フェリスとヴェクスは再び刃を交えていた。ヴェクスはフェリスの大剣を正面から受け止めることをなるべく避ける為に、素早く動き大剣の短所である動きの重さを利用してフェリスを端に追い込んでいく。

「・・・成る程。ふふっ」

「何がおかしい？」

追い詰められているのは彼女なのに。笑っていた。

眉根を顰めて鋭い眼光を緩めずに相手を見据える。しかし彼女の意図は何も見えてこなかった。ヴェクスは攻撃の手を緩めずにフェリスを追い込んでいく。

―キイン、ガキインツ

（・・・くっ・・・重いっ。だがコイツ、何を考えている・・・？）

「何を考えていても貴方には関係のないこと。だって、貴方は此処で終わるんですからッ!!」

「兄ちゃん!! 避けて! 水の王者よ! 氷の王女よ! その冷たい手を結び、目の敵を永遠に屠れ!! 氷結洪水!!」
フラッドオフアイス

フェリスの言葉に重なるように、シーリイの綺麗な声が魔術の詠唱となって高らかにその場に響く。そしてその魔術が発動する瞬間、今まで動かなかった夜が動いた。

日の光に反射して輝く銀色の剣がいきなり夜の手の中に現れ、黒い残像を残して魔術が発動する瞬間を狙って夜は剣を振るう。

―パンツ

「!!? えっ？」

シーリイの間の抜けた声が聞こえる。

何かが割れるような耳を劈く音と共に、発動するはずだった魔術は黄緑色に輝く粒子となって消失した。

―ガキインッ

「余所見は禁物、ですわッ!!」

「!!しまった!」

「兄ちゃん!!」

一瞬動きを止めてしまったヴェクスの隙をついてフェリスは思いっきり大剣を振るったのだ。その為、油断していたヴェクスは間一髪でフェリスの剣を受け止めて折れてしまった剣と一緒に場外に吹き飛ばされる。

『試合、終了オオオオオ!! 561番!!』

―ワアアアアアアアアアアアアアアア!!

終了が告げられた瞬間、観客席から盛大な歓声が上がった。それとほぼ同時に場外に飛ばされてしまったヴェクスの下へ走り出すシーリー。

「兄ちゃん!!」

「ゴホッ・・・すまない・・・油断した」

折られてしまった二本の長剣と共に、上半身を起こして悔しそうに顔を俯かせているヴェクスがぼそつと呟く。シーリーは涙目になりながら首を横にぶんぶん振って、

「また怪我させちゃった・・・えぐっ、ごめんなさい、兄ちゃん・・・」

と半泣きで先ほど大剣で勢いよく殴られた横腹の上に両手を置くと、無詠唱の水属性魔術で治療していく。そのとき本部から治療係りの白い服を着た魔術師が2、3名やってくるが、治療はこれで間に合っている、とヴェクスが言って追い返す。魔術師たちもシーリーの手際の良さを見て大丈夫だと判断したらしく素直に帰っていった。

「もう大丈夫だ。・・・立てるか？」

「うん。ぐすつ・・・だい、じょうぶ。・・・あの、兄ちゃ「行くぞ。」

「・・・うん！」

立ち上がって闘技場を見回す。

もう先ほどまで此処に居た二人組みは何処にも見当たらなかった。

「・・・シーリー？」

「あつ、ううん！なんでもない！！」

ヴェクスが動こうとしない弟に声をかけ、それで我に返ったシーリーは何かを払うように首を横に振って、兄の後を追っていった。



「アイツのことだ。おそらく眠気に負けて何処かで寝てしまったのだろう。夜は基本的何処でも寝られるある意味うらやましい体質の持ち主なのだ。今日辺りひよっこり部屋に帰っているだろう。」

観客席の一番後ろに、目が覚めるような紅い髪を持つ青年と焦げ茶色の髪を持つ爽やかな雰囲気少年が並んで座っていた。

「いくら自分たちの試合が終わって取りあえず今日はもうやることないからって、のんびり観客席で試合観戦してていいんですか？・・
・ヨル大丈夫なのかな・・・」

「大丈夫だ。そこら辺で野垂れ死ぬなんてことは・・・ないとは言いきれんが、いや寧ろその可能性は十分に有り得るかもしれんが、もう今日の試合はあと一試合だけだ。もし探すとしてもこれを見終わってからのだ。」

ハークは思いつきため息をついて、横に座っているパートナーを

呆れた目で見つめる。そして心の中でふと呟いた。

（何であの二人って仲良いんだろ……。本当に親友なのか？）

「・・・ふむ。何か言いたげな視線だな。なんだ少年？」

絶妙なタイミングで夏葉がハークに視線を寄越す。ハークは驚いて心臓をばくばくさせながらも平静を装って、

「な、なんでもないです。」

と視線を逸らした。すると夏葉はまたふむ、と頷いてグラウンドに視線を戻す。

（この人エスパーかッ！！）

内心そう叫び、この空気をどうにかする為にハークは違う話題へと話を繋げる。今の心の声ももしかしたら夏葉には聞こえていたかもしれない。

「それにしても、先ほどの試合、すごかったですね。」

「うむ。・・・。」

「どうかしました？」

「いや、なんでもない。先ほどの試合、あの二人組みが少し気になっ
つてな」

一瞬紅の瞳を側めて何かを考えていた夏葉は、ハークの声で我に戻る。それから先ほどの試合を思い出しているように何処遠くを見つめ、夏葉はそう言った。

「そうですね。あれ、一体何が起こったのか・・・」

（・・・なんかあの光、前に一度見たことあったような・・・あれ？でもそれって・・・）

二人して難しそうに眉を顰めていると、次の試合の始まりをハイテンションな司会が告げるのが聞こえてきて、二人して同時に顔を上げる。

「始まったようだな。さて、どちらのペアが勝つのやら。」

（・・・あれの光って前に要をヨルと見に行ったときに見たものだよな。・・・でもあんな剣は持ってなかったし、違うか。うーん・・・
・取りあえず試合を観戦するのに集中しよ）

夏葉は先ほどまで難しい表情をしていたものの、試合が始まるとそちらに集中していたようだが、ハークは何かが引っかかり気持ち悪いまま試合を観戦する羽目になった。

今度は気がついたらフェリスの部屋の前だった。

仮面もフードも被っておらず、いつの間に着替えたのか普段の格好に戻っていた。肩にもご丁寧に猫のぬいぐるみが乗っかっている。そして、この場にフェリスがいないのが不思議だった。

（・・・今度は一体何があったのか・・・。ってか今更だが、あの仮面、もしかしてすごく危険な物なんじゃ・・・）

つけている間だけ意識が飛んでいる。これでは仮面を被っている間、自分が何をやっていったのか全くわからない。そしてその記憶が飛んでいる間何をやっていたか唯一聞ける相手は、普段から戦闘時は記憶がぶっ飛んでいるという。

（いや、取りあえず明日までだ。フェリスと約束したんだ。・・・それにしても、またか。）

昨日とは比べ物にならないくらいの睡魔が襲ってくる。今日こそは

部屋にたどり着く。そう決めて歩き出したはいいものの、

「・・・やっぱ、無理・・・か」

体が大きく傾く。

ーゴンッ

何かデジャビュを感じながらも意識は深く沈み、それと同時に瞼が閉じられた。

終わり

第19話 紅茶の誘いによる堕天使の為の夢想曲（トロイメライ）（前書き）

いよいよ第2章も後半部分に入ってきました！
第19話更新です。

第19話 紅茶の誘いによる墮天使の為の夢想曲（トロイメライ）

「・・・ねえ、兄ちゃん「捨て置け」早っ!!」

試合には負けてしまったものの、明後日の朝までこの部屋を使っても良いことになっている。シーリーとヴェクスの二人は闘技場から宿にある自分たちの部屋へと、体を休める為に戻ってきたのだが、

（何故こいつがまた此処にいる!?!）

というヴェクスの心の叫びからお察しのとおり、その部屋の前には死人よろしくぐっすり寝ている試合の相手であった黒髪の青年もとい夜がいた。その寝顔がなんとも幸せそうで、シーリーはその寝顔にやられたのかもう部屋の中に入れる気満々であるのが顔色からして窺える。

「・・・兄ちゃん、この人はばく達を傷つけたりしなかったよ? それに今朝みたいな嫌な雰囲気もないし・・・。だめ・・・?」

「・・・はあ。好きにしろ。」

「やったあ!! ありがとう兄ちゃん!」

捨て猫か何かを拾ってきたときのような表情をして懇願してくる弟には敵わないのか、ヴェクスは深いため息をついて鍵を挿してドアを開けた。

「・・・重いだろう。オレが運ぶ。」

寝ている青年を子供1人で運ぶのは難しい。昨日もシーリーはこ

の青年を運ぶのにたしか15分程かかっていた。

「あ、うん！ありがとう！じゃあぼくは先に入って紅茶でも注いでおくね。いつも通りアールグレイでいいよね」

無言で首を縦に振るヴェクスを見て、うん分かった！と返事をする
と部屋の中に入っていった。弟が部屋の中に入るのを見届けてから、
嫌々自分の足元に転がっている青年に胡乱な視線を向ける。

「・・・はあ。」

（何故オレがこんなことを・・・。）

本当に心の底からため息を吐いて、ヴェクスは青年の襟首を片手で
掴んだ。



『……ま、ごしゅ……ご主人様!!』

(誰、だ……?)

目の前に細身で体中を包帯のように白い布をグルグルと洋服代わりに巻きつけている、毛先が黒の銀髪の少女と、全体的に白い服に身を包んでいる黒髪を持つ長身痩躯の青年とが抱き合っているのが見えた。少女は大粒の水晶のように綺麗な涙を流しながら嬉しそうに微笑んでいて、青年も無表情ではあるものの満更ではないようで少しばかり表情が柔らかく見える。

しかしそれよりも目に付いたのは、青年の背中にある堕天使のような黒い二対の羽根だった。その羽根がある所為か常に青年の周りには黒い羽根が浮かんでいる。青年は本当に注意して見ないと分からないような微笑をして、少女の頭を大事なものに触るようにゆっくりと撫でる。

『レン……久しぶりだな。前世ぶりか?』

レン、と呼ばれた少女が顔を上げる。

『はい。またご主人様に会えるなんて思ってもいませんでした・・・あの時ご主人様はたしかに・・・』

『・・・たしかに死んだ。だが、魂は不変だ。だからこうして再びお前に会うことが出来た・・・』

懐かしむように目を側める青年のその姿は、何処か寂しげである一種の儚さを感じる。青年の銀色の瞳は少女の髪色によく似ている、と夜は思った。

（レンと同じ名前・・・。たしかに、レンがもし人の姿をとったらこんなかんじかもな。それに心なしか声も、似てる・・・）

『そうです。ですが・・・。』

少女は先ほどまではすごく嬉しそうな表情をしていたのに、その表情に曇りが生じる。青年も先ほどまでであったわずかな笑みが嘘のように消え失せる。

『この期に及んでまだ神は干渉してくるか。今こうしてお前と会えたのも皮肉にも神のおかげというわけだ。・・・巻き込まれた青年も、哀れだな。』

『・・・・・・・・。 “ご主人様” はいい人です。私を必要としてくれている。』

目線を青年から外して下に下ろす少女。

『分かっている。最早俺とその “ご主人様” は運命共同体^{アイツ}。見捨てる、なんてことはしない。そいつも、・・・俺と同じ神の被害者なんだ。・・・まあレンを苛めていたりしていたら体奪って意識消してやるつもりでいたんだが・・・』

『ご、ご主人様っ！』

『・・・冗談だ。・・・これからそいつがどう出るか。それで当然俺の考えも変わってくる。』

青年は急に横を振り向いて夜のほうに銀色の猫目を向ける。夜は何故かその瞳から目が離せなかった。その数秒間、まるで息をしていないような感覚に陥り、その青年が目をまた少女に戻すと、夜は知らず知らずのうちに止めていた息を思いつきり吐いた。

『・・・そいつをよろしく頼む。レン』

『はい、ご主人様。言われなくても、私は永遠に“ご主人様”とご主人様の隣に居ます。それこそ魂が果てるまで・・・』

青年が悲しそうに一瞬笑って、少女の柔らかな髪をその白く長い指で梳かす。少女は気持ち良さそうに目を瞑って、祈るように手を組んだ。

『・・・魂は果てることはない。・・・永遠に。』

『それでも、それでも私は魂が果てるまで貴方様のお傍にいます。』
『変わらないな・・・全然。・・・そろそろ目を覚ます頃だな。じやあまたな、レン。・・・またな、・・・青年^{オレ}。』

（・・・あの少女は・・・それにあの青年も・・・何処か見覚えがあるような・・・）

「あつ、おはよー!!」

「……ん? たしかあんたは……」

いつぞやの金髪碧眼の少年が太陽よろしく眩しい笑顔を浮かべていた。この見覚えのある景色^{へや}。そしてソファアの上にいかにもここはオレの部屋だと言わんばかりにどっかりと座って、妙な殺気を出している深緑色の瞳の青年。

「……もしかして、俺また倒れてた?」

「うん!」

につこり笑顔で肯定するシーリィ。それを見て夜は、うわー……やっちゃったよ的な表情を浮かべてから頭をガツと勢いよくベツトにつくまで下げた。

「悪いな。本ッ当に悪いっ。また同じところで眠気に負けるとは……不覚……」

夜の頭上には黒い線が何本かと黒い火の玉がずうううんと揺れていた。言葉使いの変わり方からいって相当落ち込んでいるようだ。それからふらりとベツトから降りて立ち上がり、靴を履くと出口に向かう。

「もうこの部屋の前にだけは倒れないようにするから。本当に悪かったな……お詫びはまた今度させてくれ……」

「えっ!? ちょ、ちよつと!! 待ってよ!」

ゆらりと幽霊みたいに揺れながらこの部屋から出て行こうとする夜の正面に回って引き止めようとするシーリィ。

「別に迷惑なんかじゃないよ!!大丈夫!それにえっと、ナハト君?はいい人だしぼく達きつと仲良くなれると思うんだ!それに喉渴いてるんじゃない?コッチに来て一緒に紅茶でも飲もうよ!」

それから夜の腕をぐいぐい引つ張ってテーブルまで引つ張る。そんな必死なシーリイを見て断れなくなってしまった夜は苦笑しながら、じゃあお言葉に甘えて、とテーブルの椅子に座る。嬉しそうに紅茶を注いでいる彼は本当の天使のように見えた。それに比べて真正面のソファーに座っている妙な殺気を出している青年は、地獄の使者のような形相浮かべていてとてもじゃないが怖くて話しかけられない。

ーコトツ

「はい、どうぞ。」

「あ、ありがとな。」

木で作られたカップに注がれた紅茶はほどよい苦味がおいしく、とても体が温まる。ヴェクスもシーリイから紅茶を受け取ると、読んでいた本を閉じて飲み始める。

因みに窓から見える空はまだ薄暗く、日が昇ってくるまでもう少し時間がありそうだ。

「そういえばあんたって武闘大会に参加してんだよな?昨日の試合はどうだったんだ?」

ーゴフツ

夜の隣に椅子を置いて座ったシーリイはその言葉を聞いて、心底不思議そうにきょとんと首を傾げる。ソファーで紅茶を飲んでいた

ヴェクスは、何故か口の中に入っていた紅茶を危うく噴出しそうになっていた。

「えっと・・・昨日、試合で戦った・・・よね？」

（・・・もしかして、これってまずった！？振っちゃいけない話題だった！？）

二人の反応からして、おそらく昨日の試合の相手はこの二人だったのだ。仮面をつけている間は記憶がぶっ飛んでいる為、よく考えてみれば昨日の試合で誰と戦ってどっちが勝ったのか、とかすごい大事なことを夜は覚えていない。

（・・・というかどうかやってフェリスは一昨日の試合に勝ったことを知ったんだ？）

これが今一番の謎だった。

「そ、そうだったよな。あはははははは・・・」

「・・・ナハト君って・・・」

思わず乾いた笑いを浮かべてしまった夜は、視線を逸らすように紅茶に手を伸ばしてゴクッゴクッと全て飲み干してしまう。

「あ、それからナハトって名前なんだが、それは偽名。本当は夜っというんだ。出来れば偽名じゃないほうで呼んでくれた方が嬉しい。」

飲み干したカップをテーブルに置く。

シーリーイは何故かすごい嬉しそうな表情をして、テーブルから身

を乗り出す勢いで手を差し出してきた。

「うん！！ヨル君！これからよろしくっ！！」

多少その勢いに驚きながらも夜はその手を握り返す。

「ねえ、どうせならこの後一緒に朝食食べに行こうよ！！ね、いいよね！兄ちゃん！」

「・・・好きにしろ」

紅茶が入っていたカップをテーブルに置いて立ち上がるヴェクス。どうやら今から大食堂に向かうらしい。そしてこの手を繋いだまま朝食にまで連れて行かれるっぽい。

（・・・食堂で夏とかにばったり出くわしたりしたら説教かまされそうだな・・・まあ、こんな早い時間帯に来ねえか。）

「じゃあ行こ！ヨル君！」

「・・・まあいいか。」

―バタンツ

―バタンツ

「あっ！！ヨルさん！」

「フェリス？」

ちょうど部屋から出たときに向かい側の部屋のドアが開き、フェリスとばったり出くわしたのだった。今日も今日とて顔を隠すために、茶色の犬耳がついているフードマントを被っている。勿論クルンと丸まった尻尾もきちんといっている。

「おはよう。」

「おはようです！ってそうじゃなくて、昨日部屋で気づいたらヨルさんがいなくなっていてびっくりしたんです！一体試合の後何処に行っていたんですか？心配したんですよ！？」

フードの下から覗く透き通った瞳は夜の目をがっしり捉えていて、口は少し尖がっていた。どうやら彼女は怒っているらしい。その怒っている（のかもしれない）顔はとってもかわいかったのでもう少し見ていたかったが、心配させてしまったことについては謝らなければいけない。

「ごめんな。今度アイス奢るから許してくれないか？」

アイスという単語を耳に入れた瞬間、フェリスは今まで怒っていたのを一瞬にして忘れてしまったかのようにパアアアっと瞳を輝かせる。

「そ、その約束、忘れないで下さいね！絶対ですよ！」

「はいはい、絶対忘れないと天地神明にかけて誓います」

ふざけて左手を兵士みたいに額につけて言う。それを見て楽しそうに笑っているフェリスはさっきの倍かわいかった。

「じゃあな。今日はちゃんと時間までには部屋に行くから・・・悪かったな、シーリーイ。行こうか」

「あ、あの、今から朝食食べに行くんですよね？よろしければ私も一緒にしてもよろしいでしょうか？」

—ぐいっ

フェリスの呼び止めるときの癖なのか、それともこの水色の布が好きなのか、彼女の右手はその布へと伸びている。そしてフードの下から上目使い。

（・・・断れるわけが、ない！！）

「シーリーイ、フェリスもいいか？」

「勿論！！皆で食べたほうがご飯がおいしくなるしね！じゃあ早く行こう！！」

「ありがとうございます！」

シーリーイは笑顔でフェリスの手も繋ぐと一気に下に下る階段まで二人を引っ張って走っていった。ヴェクスもその後ろから歩いて三人の後を歩いていたが、フェリスのことを鋭い視線で睨み、何処か警戒しているようだった。

大食堂にて。

「どれにしようかな・・・ヨル君は何が好きなの？」

「基本的何でも食べられるが、特に好きなものといえば・・・甘いものだな。」

「なんか意外だね。でもぼくも甘いものは大好きだよ！ケーキとかクッキーとか」

朝食のメニューはあまりこつてりとしたものではなく、サンドイッチや野菜サラダ、果物などが主流に置いてある。夜はたまごのサンドイッチを自分の皿に置く。

「じゃあ今度、時間があつたらお詫びにクッキーでも焼くか。」
「えっ、いいの!? ありがとう!! ぼくね、チョコ味が特に好きなんだ!」

(・・・そうなんだろうな・・・。皿の上にあるの全部チョコレートシロップかかってるし・・・)

シーリーイの皿に乗せてあるサンドイッチとかサラダなど、全てのものにチョコレートシロップがかかっている。本当ならばこのチョコレートシロップはデザートコーナーにあるホットケーキにかけるものとして置いてあつたはずなのだが。

フェリスも流石にそれは驚いたのか、シーリーイがサラダにチョコレートシロップを大量にかけているときは頬が引き攣っていた。傍から見ていて面白い光景ではあつたが。

「じゃ、じゃあクッキーもチョコ味にしておくな。」

「うん! ヨル君もチョコレートシロップ、サラダにかけてみるとすつごくおいしいよ?」

「それは遠慮しておく。」

「えゝ・・・おいしいのに・・・」

そんな会話をしている傍らで、フェリスは後ろから夜の背中を見つめながらなにやら独り言を呟いていた。

「・・・夜さんは甘いものがお好きなんですネ。よしっ」
「何がよしっ、なんだ? フェリス。」

「ヨルさんっ!? あ、いえ! なんでもありません!! 私、もうテーブルに戻ってますね!」

顔を真っ赤にしてそう叫ぶように言うと、フェリスはテーブルまで走って行ってしまった。

「・・・皿にサラダしか乗せてなかったよな・・・」

「きつと少食なんだよ!」

（・・・そうなのか・・・? この間一緒に昼飯食ったとき、結構普通に食べていたよな・・・?）

あれは少食というレベルの少なさではなかったような気がする。

まあいいか、と夜は並べられている料理にまた視線を戻す。視界に魚のムニエルが入ったが、あれが魔物からとった肉、なんてことは勿論一切考えない。あれはただの魚。そう、ただの白身魚。

「・・・取りあえず一通り取ったしテーブルに戻るか。」

「ヨル君ってすごいっぱい食べるんだね!」

まるでウェイトレスのように片手で二枚の皿を持ち、合計四枚の皿を運んでいる夜を見ながら、シーリーは皿の上のものにチョコレートシロップをかけまくる。どうやらまだかけたりないらしい。

「ああ。たくさん食べないと、昼までもたないんだ。」

「ぼくも、毎日チョコレート食べないとたないよ。同じだね!」

（これは同じなのか!?!）

「あつ、シロップなくなっちゃった。じゃあぼくもテーブルに戻る

うっと」

テーブルに向かうシーリイの後姿を見ながら、同じなのかと頭の中でぐるぐる考えているといつの間にかテーブルについていた。夜はテーブルに皿を四枚置いて、フェリスの隣に座る。

「フェリス、それじゃあ足りないだろ？これ食べるか？」

もう既にサラダを食べ終わってしまったフェリスの皿の上に盛ってきた皿を一枚置く。

「いいんですか？」

「ああ。また取ってくればいいだけだし。」

「ありがとうございます！ではお言葉に甘えて」

やはり腹は満たされていなかったようだ。サンドイッチを口に運んでおいしそうにもふもふと食べる姿は小動物を髣髴とさせる。その横顔を見ただけで癒される、と夜は少しの間だけフェリスの横顔を眺めてから、皿の上のたまごサンドイッチに手をつけた。

終わり

第19話

第20話 朝の光による試合の為の接続曲（メドレー）（前書き）

相変わらず余震は続く一方でチキンな自分は怖くてトイレも長く
入れません・・・orz 早く収まって欲しいです；；

第20話更新しました！

第20話 朝の光による試合の為の接続曲（メドレー）

―ガタツ

「私、デザート取りに行ってきますけど、ヨルさんは何か持ってきて欲しい食べ物あります？」

「俺も一緒に行く。持ってきてもらうのはなんだか悪いしな。」

椅子を引いて、皿を片手に持ちながら立ち上がる。フェリスも夜の後に続いて料理を取りに歩いていった。

「・・・シーリィ。」

「ん？もぐもぐ・・・ごくっ。何、兄ちゃん？」

大食堂に来て一回も喋らなかったヴェクスがフォークを皿の上に置いて、シーリィの方に深緑の瞳を向ける。シーリィは首を傾げながら聞き返した。

「あのフード、何処かで見覚えがないか？」

ヴェクスの視線の先には、夜と一緒に楽しそうに料理を選んでいるフェリスの姿があった。フェリスは変わったデザインの茶色いフードマントを被っている。彼女が動いたびに一緒に揺れ動く、あの先っぽだけが白く染まっている尻尾はともかわいらしい。

シーリィは彼女に目を向けながら、チョコレートシロップがたっぷりかかっているミニトマトにフォークをプスツと刺す。

「あの尻尾と犬耳、すっごいかわいいよね！あれぼくも欲しいなあ・

・・」

―パクッ

口の中でもごもごとミニトマトを転がしている能天気なシーリイを一瞬うらやましく思いながら、ヴェクスは弟に気づかれないようにため息をついてフェリスに鋭い視線を向けた。

（・・・シーリイが気づいていないならあまり下手に言わないほうがいい。・・・それにしてもあのヨル、とかいう青年はまるでトラブルメーカーだな。アイツが近くに居るだけで懸念が倍增する・・・）

そしてフェリスの隣にいる夜に、疲れ果ててしまったような雰囲気の間を向ける。そんな兄を見つめて、シーリイは何が面白かったのかクスッと面白そうに笑う。そしてその笑い声を聞いて怪訝な表情をしたヴェクスは、瞳にシーリイを映した。

「兄ちゃんも、なんだかんだ言って結構ヨル君のこと認めてたりするよね。」

「何を言うかと思えば・・・」

呆れたようにため息をついて、先ほど皿の上に置いたフォークを手に取りサラダに突き刺す。

「だって兄ちゃんさ、もし本当にヨル君のこと嫌ってたなら、ぼくがどんなに頼んでも2回目は部屋に入れたりしなかったでしょ？それに今が典型的な例だけど、兄ちゃん、フェリスちゃんのこと嫌いな？兄ちゃん、嫌いな人がいると絶対口を開かないもんね。」

サラダを口に入れるのも忘れて、ぽかんとシーリーイの顔を見つめるヴェクス。それから気まずいのか視線を逸らして、眉間を人差し指で押さえた。

「やっぱそうでしょ？ 兄ちゃんのことなんかお見通しなんだからね！」

自慢げに胸を反らしてえっへん、と笑うシーリーイ。ヴェクスは気を取り直すようにサラダを口に運んで入れた。そこへ夜とフェリスが帰ってくる。

「あ、おかえり！ じゃあぼくもデザートにチョコレートでも取ってこようかな」

「ってまだチョコレート食べたりないのか!？」

夜は驚いてつい突っ込んでしまったが、椅子から立ち上がりながらシーリーイは夜が持っている4枚の皿に盛られた料理を見て言う。

「それはヨル君もでしょ？ じゃあ行ってくるね！」

いってらっしゃい、とフェリスは皿をテーブルに置いて手を振る。それから椅子に座って、苺ケーキにきらきらと輝く目を向けながら苺にフォークを刺して、パクツとおいしそうに食べる。

「フェリスは苺が好きなのか？」

「はぐはぐ・・・ごくっ、苺も好きですよ。でも一番はアイスです！ アイスはこの世で1番おいしい食べ物です!!」

頬に手を当てて、以前食べたアイスを頭に思い浮かべてうっとりするフェリスを面白そうに眺めながら、夜は口の中に入っているウイ

ンナーを飲み込んで相槌を打った。それから、無言でコーヒーを飲んでるヴェクスをチラッと見る。なんとなくだが夜は、ヴェクスがフェリスを警戒しているような雰囲気を感じ取っていたのだ。

「・・・ヨルさん？どうかしました？」

「いや、何でもない。それよりフェリス、そのケーキ少しだけ食べてみてもいいか？」

フェリスが、料理を食べずにボーっとしていたのを不思議に思っ
て聞いてきたのを苦笑しながら首を横に振って、誤魔化すようにフェリスが今食べているケーキを指差した。

「あ、いいですよ。」

「じゃあいただきます。」

フォークでケーキを少しだけ分けて口に放り込む。それから数秒間、黙って咀嚼しゴクンッと飲み込んだ後、幸せな表情をして、

「・・・うまい。」

と周りにピンクの花を咲かせながら呟く。それを見たフェリスは顔を真っ赤にしながら、胸の上で手を組んで、夜の幸せそうな顔を眺めていた。そこへシーリーイがチョコレートシロップを、原型が何か分からなくなるまでかけた食べ物が乗っている皿を持って帰ってくる。

「ただいま」

シーリーイの声で我に返った夜は、お帰りと返事をする。それから喉が渴いたな、と炭酸水が入っているコップに手を伸ばし、飲もう

と口に含んだときだった。

「あっ、そういえばヨル君、なんかさっきそこで君の親友だって人と会ったから、ほら。」

「うむ。案内ごくろう少年。夜、久しぶりだな。」

—ごふっ

「げっほ、ごほっ・・・」

炭酸特有の喉をせりあがるかんじを感じると共に、口の中に含んだ飲み物をもれなくコップの中へ全て返却した。外に噴出さなかっただけマシだろう。

「だ、大丈夫!？」

「ヨルさん!？」

咳き込む夜の背中をフェリスが叩いていると、収まったのかため息をついて、嫌々顔を上げる夜。そこには目が覚めるような紅い髪を持つ青年、夏葉とその隣で目を大きく見開いて驚いている少年、ハークがいた。

「ヨル!! 今まで何処にいたんだよ? 心配したんだからなっ!!」

そして夜の脇まで歩いてきて、腕を組んで顔を真っ赤にしながら叫ぶ。そんなハークの頭に手を乗つけて、

「悪かったな。心配かけて・・・ハーク。」

と苦笑しながら謝る夜。

「別に、ヨルが2日間帰ってこなくたっておれは平気だったんだけどな！／＼／＼／」

「はいはい。ハーク王子様はお優しいございますねー」

「ば、馬鹿にすんなっ！ヨルの臆病野郎^{チキン}！！」

「なんっ「夜、お前図書館に調べ物に行く、と言ってたな？」」

場の空気が凍った。

夏葉のニコリとも笑っていない絶対零度の瞳と、夜のあー面倒なのが来た的な雰囲気 of 瞳がシーリーリの頭上でぶつかる。シーリーリにとってはいいい迷惑だ。そしてその沈黙をかき消すように口を開いたのは夜だった。

「言ったが？」

「それだけだったと俺は記憶しているのだが？そのまま2日間帰ってこない、なんて言ってなかったよな・・・？」

（・・・まずい・・・。夏のあの無表情、見るのは何年ぶりだ？これ以上怒らせたら絶対まずい・・・）

夏葉の背後から凄まじい量のどす黒い、何かおどろおどろしいものが見えるのは自分だけなのだろうか、と夜は頬をひくつと引き攣らせる。一步、一步とこちらに歩いてくる夏葉には絶対に捕まるな！と本能がそう告げていた。夜の顔が夏葉との距離が縮むにつれて青白くなっていく。

「わ、悪かったって。だからそれ以上こっちに来るな触るな近づくな！なんだその手に持つてる縄っぽいものは！？待て、夏、早まるな！俺には輝く明るい未来が待っているんだ！」

「問答無用☆大人しくお縄につくのだこの不良野郎ッ！」

「誰が不良だッ！あんただけには言われたくないっ！」

―タッ

本能に身を任せ、夜は夏葉の縄から逃れるためにそこから思いっきり飛んだ。

（・・・って予想に反して飛びすぎたッ）

今夜たちが座っていた場所から食堂の入り口まで約10m。そこまで飛ぶ気はなかったものの、つい勢いだけで入り口付近に綺麗にストツと着地してしまう。最初こそ驚いて固まっていたが、夜はハツと気がつくのと、夏葉が動き出す前に、と急いで何処かに走っていつてしまった。余程夏葉が怖いらしい。

「・・・ふっふっふっ・・・俺から逃げられると思うな。お前の行動などお見通しなのだっ！！仏の顔も三度まで。一回ならともかく三回目は許さんっ」

残された夏葉は急に俯いて不気味な笑い声をその静まり返った食堂に響かすと、獰猛な牙を口からのぞかせてその場から飛び上がり、入り口まで一気に移動する。それから罵詈雑言を吐きながら夜の後を人間とは思えない速さで走っていった。

「「「・・・。」」」

まるで嵐が去っていった後の静けさがこの食堂を支配すること数秒、何もなかったかのように食堂はまた騒がしさに包まれた。話題はさきほどの騒ぎについてがほとんどなのだろう。

そしてその一部始終を1番近くで見ていた4人は、各々違う表情を浮かべていた。

（・・・ああ、せっかくヨルさんと一緒に食事でしたのに・・・この後会える、といっても戦闘時は記憶がないわけですし・・・。もう少し隣でお話していたかった・・・）

フェリスは憂鬱そうに小さくため息をつきながら、残っているケーキをもそもそと食べている。フェリスの場合、最初に夜と会ったときにもう既に先ほどのようなジャンプを見ていたので、驚きはしなかったようだ。それともただ単に彼女の神経が図太いだけなのか。

「ってこんなところでボーっとしてる場合じゃ・・・せっかくヨルを見つけたのに、あの人はッ」

本当に疲れた顔をしてハークは人目を気にせずに半ば自暴自棄になりながら叫びつつ、二人を追う為に転移魔術を展開して、その場から一瞬で風のように消え去った。

因みに転移魔術はそう簡単には使うことが出来ない超高度な魔術だ。それを知ってか知らないのか、簡単に使うあの少年は一体何者なのだろうか、とシーリーイは珍しく真剣な表情をしていた。そしてその脇で重そうに頭を抱えているヴェクスを、誰でもいいから優しく慰めてあげて欲しい。

（・・・疲れた。）



(・・・なんとか夏を撒いてフェリスの部屋の前までたどり着いたが・・・)

肝心の部屋の鍵を所持している彼女が帰ってきていなかった。結構な時間食堂に居たのもうそろそろ帰ってきてもおかしくない頃だと、そこで待つことにした夜は周りを警戒するように見回す。すると、その行動を不思議に思ったレーヴァテインが声をかけてきた。

《ご主人様？ 一体何をそんなに警戒していらっしゃるんですか？》

（あ、ああ、レンか。あの馬鹿夏が俺の居場所を嗅ぎ付けて、ここにやってくる前に逃げるためだ。）

《あの方は古代竜エンシェントドラゴンですからね。竜は基本的、知能が人間のそれを上回っていますから逃げるのは大変だと思いますけど・・・》

暗にレーヴァテインは自分に“諦めろ”と言っているのだから。しかし俺は諦めない、と左拳を作って顔の前まで持ち上げる。

（大変でも何でも俺は絶対に逃げ切らなくてはいけないんだ。あれに捕まったら間違いなくデットエンドだ。）

《大丈夫ですっ！！私がご主人様には指一本触れさせません！もし指一本でも触れたらいかに魔物の頂点である竜だとしても（マナレベルに）分解しますっ「それはやめてくれッ！」

かわいい声でそんな物騒なことを言わないで欲しい。思わず声を出して叫んでしまった夜は慌てて辺りを窺う。それから人の気配がないと分かって、息を思いつき吐いた。

ただ、レーヴァテインが夜を思ってくれているのはよく伝わってくる。そんな思いがくすぐったくて夜は苦笑しながら、でも少し嬉しそうに、

（・・・ありがとな。レン）

と、そっと呟いた。

《はい・・・／／／／》

彼女もとても嬉しそうに返事をする。それを、温かい気持ちで聞い

ていた夜だったが、ふと気がついたようにレンにある質問をした。

（そういえば、レン。俺が試合のときにつけてるあの仮面について何か知ってるか？）

《あの、対の仮面の形をした魔具のことですよね？》

夜が縦に首を振る。

《あれは彼女が言っていた通り、感情をコントロールする為の魔具です。激情の仮面は感情が昂り、冷酷の仮面は感情が抑制されます。特に危険性はないので大丈夫ですよ。》

（あれをつけてる間だけ記憶が飛んだりするのも危険じゃないのか？）

すると彼女が首を傾げるような雰囲気と共に、声が聞こえてくる。

《記憶が飛ぶ・・・ですか？あの魔具にはそんな特性ないと思ったんですが・・・。じゃあ仮面をつけている間のことは覚えていらっしやらないんですか？》

（ああ・・・レンが言ったことだし嘘だとは思えない。だとするとそれとも何か別の原因があるのか・・・？因みにあれをつけた後に眠くなるってのは・・・）

《ないです。》

きっぱりとしたレーヴァテインの声が頭の中に響く。

では何故、昨日も一昨日もあの体験したことのない強烈な眠気に襲

われたのか。仮面をつけている間だけ記憶がないのか。余計訳が分からなくなってしまうた夜が唸りながら頭を抱えていると、後ろから優しく肩を叩かれる。

「ヨルさん？」

気がついて振り向くと、食堂から帰ってきたフェリスに、シーリイとヴェクスがそこに居た。

「フェリス。ごめんな、先に帰ってきちゃって。」

「いえ、気にしないで下さい。それより、待っていて下さったんですよね？今すぐ鍵開けますから！」

フェリスは本当に気にしていない様子で、寧ろすごい輝く笑顔で部屋に迎え入れてくれた。心なしか頬が少しだけ赤く染まっていた。それに疑問を覚えながら、シーリイの方に向き直る夜。

「シーリイも悪かったな。」

「ううん、だいじょーぶ！それより今日の試合、見に行くからね！頑張って勝ってね！そしたら何処かでパーティーやろうよ！」

「・・・そうだな。応援頼んだ！」

シーリイと夜はお互いにグッと親指を立てて笑い合う。それからヴェクスが嫌味っぽく鼻で笑いながら部屋に入っていた。

「了解ッ！！じゃーねー」

「・・・まあ精々頑張るんだな」

―ボタンッ

「・・・ふう・・・疲れた・・・」

夜はソファーに寄りかかるように座り、ぐてーっと寝転がる。捕まったらデットエンド追いかけてこ（注　良い子も悪い子も、遊び盛りな子も真似をしてはいけません）をして相当精神的に消耗したようだ。

「ふふっ、ヨルさん、今からのほうがもっと大変ですよ？」

犬耳つきのフードマントを脱いで、きちんとたたみベツトに置いたフェリスは、試合のときに被る仮面とフードマントを持ってくる。

「・・・ただ戦っている間記憶がぶっ飛んでるから何がどう大変なのかいまいち分からないんだがな。」

「それは私も同じです。それよりも、今日で決まります・・・全て・・・ヨルさん、精一杯頑張って優勝しましょう！！」

一瞬影を落としたフェリスの表情を見て、夜は目を側めたが、その後すぐにいつも通りの笑顔に戻った彼女を見た夜は微笑んで、

「おう！」

とフェリスの頭に手をぽんつと置いた。

話
終
わ
り

第
2
0

第21話 白の夏による熱狂の為の武勲詩（ロラン）（前書き）

お気に入り登録して下さった方々、感想を書いて下さった方、評価して下さった方々、だめだめでチキンな作者が書いている小説を読んでも下さっている方々、本っ当にありがとうございますm（
し m

最近お気に入り件数がどんどん増えてとても嬉しいです^^

第21話更新です！

第21話 白の夏による熱狂の為の武勲詩（ロラン）

農国祭、最終日。

都市は朝から祭りの熱気に包まれていた。その熱気を中心部分にあるのは、強者が集い、強さを競う場所、闘技場であった。

『ではどのペアもクジを引きましたね？それでは試合の組み合わせをここに張り出しておきますので、必ず確認して下さい。また、第1試合に組み込まれているペアの方たちはこの後すぐに試合が始まりますので、準備しておいて下さい。』

「・・・っておれたち、第1試合ですか!？」

「ふむ。そのようだな。」

夏葉の手の中にはBと書かれた木の棒が握られていた。張り出された紙には第1試合、A対Bと書いてある。因みに全部で7ペアなので、運が良い1ペアだけはシード枠が与えられる。残念ながら夏葉たちはシード枠ではなかったらしい。

「行くぞ、少年。」

「えっ？相手は確認しなくてもいいんですか？もしかしたらあのフールドの人たちかもしれないし」

「安心するのだ。そいつらと当たるのはこの試合に勝ってからだ」「全然安心出来ないんですけど!？」「気にするな。あんまり煩いと、焼くぞ?」

「すみませんでしたッ!!」

夏葉は朝から機嫌が猛烈に悪かった。何故なら先ほど此処に来る前

に、食堂で二日ぶりに会った夏葉の親友、基夜に逃げられてしまったからだ。その所為か、先ほどから夏葉付近の温度が夏のように急激に上昇しているように思える。

夏葉の後ろにいいかもしれない黒い何かを見て身の危険を感じ取ったハークは、即座に頭を下げて夏葉に謝ったのだった。



『さあさあさあさあ！！！！お待たせしたぜっ 大会三日目、第1試合が始まるぜえええええええ！！！！』

ーワアアアアアアアアアアアアアア！！！！

『これから第1試合で戦う2ペアを紹介するぜッ！！まず東側、何より力っ、力自慢の2人組み！！コンビ、『ハッスル野郎』のザンガとグエイラだああああああ！！！！そして西側は今大会に珍しい子供二人だけでここまで勝ち抜いてきた奇跡のチルドレンペア！
ホワイトサマー『白い夏』のナツとハークウウウウウッ！！！！』

「・・・ふむ。殴り甲斐がありそうだな。」

緊張？なにそれ？という具合に夏葉は楽しそうに唇を歪ませて、筋骨隆々な相手を寧猛に切れ上がった紅い瞳で観察していた。その横で短剣を構えているハークは、夏葉とは違った意識を相手に集中させている。

司会が紹介した通り、夏葉たちの相手はどちらもものすごい身体つきをしていた。筋肉が隆々としていて、剣で斬りつけてもそう簡単に傷がつきそうにない硬さを持っている。その自慢の筋肉を見せびらかすように、上半身には防具を何もつけていなかった。余程の自信があるのだろう。

「殴り甲斐って・・・あの筋肉、ただ殴っただけでは簡単に傷つきそうにないですよ？まあこの短剣でも傷つくかどうか分からないですけど・・・」

自分が構えている短剣に目を向けた瞬間、光が反射して眩しく目を瞑ってしまう。それから目を開けて、相手から来るプレッシャーに対抗するように気を引き締める。そして相手を睨むように鋭い視線

を向けた。

「あんなものは突き詰めればただの肉の塊なのだ。」

「なかなか言ってくれるじゃねえか！ああ！？そんなひよろっこい体でなんで此処までこれたんだかな。ガッハハハハッ」

夏葉側から見て右側に立っている男が大笑いをしながら、片手で持っているでかい斧を肩の上に持ち上げた。そしてもう1人の男もモーニングスターを構え、戦闘体勢に入る。

「子供が粹がってんじゃねえぞ。これからまだ先が長いのに、こんなところで再起不能になるなんて・・・哀れだな」

「再起不能になるのはお前ら雑魚どもだろう？・・・ふむ。そんなことも分からないお前らの方が哀れだな。まあ雑魚は雑魚らしく一瞬で沈んでもらおう」

ふっ、と鼻で相手を笑って夏葉はナツクルに炎を纏わせる。

「なんかすごい挑発してるしッ！？いいんですか！？そんなことして・・・」

慌てたハークは此処が闘技場のど真ん中であることも忘れて叫ぶが、夏葉はそんなこと知るか、といった飄々とした表情でポキッポキッと首を鳴らす。どうやらもうやる気、いや殺る気満々のようだ。

（・・・絶対今日の朝の怒り、ぶつけるつもりだ・・・絶対）

隣からものすごい量の殺気を感じて、顔面蒼白になりながらハークも戦闘体勢に入る。

『両者、口喧嘩じゃなくてそろそろ拳で語っていかうぜええええ
!!!!!! それじゃあ行くぜ!!!!!! 第1試合、開始iiiiiiiiiiiiッ!
!!』

―ヒュッ、バキッガキャッ

「な!?! ガハッ!!」

「グハッ!!... な、なんだと...?」

「ふむ。やっぱ雑魚だったか。あまりにつまらなさすぎて怒りが収
まってしまったではないか」

―バタッ、バタッ

試合が始まって数秒、夏葉の姿が一瞬ぶれて見えなくなったかと思
うと、いつの間にかもとの定位置に戻っていた。そして、それと同
時に先ほどまでであったプレッシャーがなくなるとともにずううん
という低い音がしたかと思うと、眼前の男二人が一瞬にして地に伏し
た。

「ええええええええ!!?! ちょ、ちょっと!! 何してるんですか!
? おれの出番が全くないじゃないですか!!」

（（突っ込む所違うだろっ!!?!?））

観客席にいる全ての観客の声が見事にシンクロした瞬間だった。

『おおおおおと!!!!!! これはすごい!!!!!! なんと、試合始まってか
ら数秒も経たないうちに大男二人を一瞬にして伸してしまったああ
ああああ!! 圧倒的!!!!!! 勝者、ホワイトサマー『白い夏』のナツ&ハークペアだ
ああああああああ!!!!!!』

—ワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

司会が勝者を告げるとともに割れんばかりの歓声が闘技場に響く。何もせずに終わってしまったハークは短剣を仕舞い込み、呆れたように半眼で夏葉を睨んだ。

「もうあれで怒りは収まったんでしょう？ 次の試合はこんな一瞬で終わらせるなんてこと、しないで下さい！ おれだって力試ししたいんですから。」

「うむ。おそらく次の試合では少なくとも一瞬で終わる、なんてことはないだろう」

「・・・あのフードの二人ですね。でもあのフードが勝ち上がってくるか分かりませんよ?」

「ふむ。」

夏葉はそれ以上は何も喋らずに、控え室に帰っていった。

「あの、怪我とか全然してないし、控え室に行く必要ないんじゃない？」

控え室には次の試合に出る予定の人たちの集合場所であつて、試合が終わった人は控え室に戻ってくる必要はないはず、とハークは不思議に思いながら夏葉のあとをついていく。

—ガチャツ

「もうそろそろ第2試合が始まります。CとDのクジを引いたペアの方々は試合場に来てください。」

係りの女性が入り口から入って声をかけてからまた外へ出て行った。次の試合に出るペア、つまりCとDのクジを引いたペアが動き出す。先ほどまで椅子に座って話していた仲が良い男女の二人組み、それから壁に寄りかかっていたフードの二人組みは夏葉たちと入れ替えに外へ出て行く。

「……………」

夏葉の隣をフード二人組みが通り過ぎるその瞬間、夏葉の瞳は側められ、気をつけなければ分からないほどの殺気を飛ばす。それに気がついたのか、背が低い方のフードは、

「ふふっ」

と可愛らしい声で笑い、隣を歩いている背が高いほうのフードの腕に自分の腕を絡ませながら歩いていった。

「……………」

「どうかしました？」

歩みを止めた夏葉が気になって声をかけるハーク。すると、夏葉はふむ、とだけ答えると控え室にはもう用がない、とでもいう風にさっさと出て行ってしまった。後に残されたハークは訳が分からず、不思議そうに首を傾げながら出て行く。

「次の試合、見なくていいんですか？」

どうやら今夏葉が向かっているのは観客席ではなく、自分たちの部屋ようだ。今からおそらく次の試合に当たるだろう相手が出る試合が始まるというのに、何故見に行かないのだろうか。ハークはそう思って眉を顰める。

「少年は観客席に行っても良いぞ。俺は疲れたのだ。部屋に戻って少し寝る。」

「疲れたって・・・あれで疲れたとは思えないんですけど・・・。」

「うむ。集合時間になったら控え室に行く。」

「了解です。」

ハークは内心ため息をつきながら、もと来た道を引き返していった。ハークが視界から消えるまで見送った夏葉は、紅い目を閉じるとその場から一瞬で姿を消した。

「おいっ、ユシル！お前はあの後ろにただ突っ立ってるだけの黒い奴を狙え！！」

「OK！じゃあ援護よろしくね！行くわよ！」

ユシルと呼ばれた女性は長剣を片手に、夜の方を狙って飛び出す。どうやら女性が前衛で、男性が後衛のようだ。

第2試合、夜たちの相手であるこの二人は昨日の試合で夜たちの試合を観戦していた。その試合で戦力分析をして二人で考えた作戦は、“後ろにただ突っ立っている奴を集中狙い”であった。二人にはフェリスが戦えない（あくまで予測）夜を守っているのではないかと考えたのだ。しかし、そこでフェリスが邪魔になってくる。ユシルの役割はフェリスの攻撃を掻い潜って、夜を撃破すること。ユシルは威力よりスピードに秀でている。それを自分で知っているのので、彼女はフェリスの攻撃を掻い潜れると確信して向かっていく。

「ふふっ」

「笑っていられるのも今のうちよ！モルゲンさん！！」

フェリスの大剣が大きく前に突き出される。その瞬間、彼女は後ろ

に避けることはせず、逆に前に進みフェリスの攻撃を避けた。

「抜けた!!」

「そのまま行け! ユシル! 火よ飛べ! 火球!!」
ファイヤーボール

男が突き出した杖の上に、その名の通り火球が三つ姿を現し、動きを止める為にフェリスの方へものすごい勢いで飛んでいく。

（行ける!! これで、私たちの勝利は確実!!）

「・・・なんてことは思わないほうがいい。」

「え!？」

何かを相手が呟いたが、ユシルには聞こえなかった。しかし、そんなことは勝利の前には些細なこと、と言わんばかりに表情を元に戻し、思い切り剣を振り下ろした。剣は吸い込まれていくように黒いフードに突き刺さっていく。

ドゴッ、ドゴドゴッ

それと同時に火球が地面に着弾し、鈍い音とともに地面が焦げ砕ける。それを余裕の表情で上に飛び、避けるフェリスの表情はパートナーの危機だというのに、何故か楽しそうに笑っていた。その笑みを視界に捉えた男は背筋に悪寒を感じ、黒いフードに剣を突き刺しているパートナーに目を向ける。

（勝った!!）

確かな剣が刺さる感触とともに、ユシルは勝利を確信した。

「え？」

—ドゴ
オツ

確信した瞬間、視界が反転する。一瞬何が起きたのか分からず、黒いフードの方へ目を向ける。先ほどまで自分の手の中にあったはずの長剣が相手の左手に収まっていて、何かを蹴った後のように右足を高く上げていた。

「かはつ」

「ユシル!!!」

男の悲鳴じみた叫び声が聞こえる。それで彼女はやっと気がついた。

（私が、あの人に蹴られて、場外に吹き飛ばされたんだ……）

黒いフードの右足がゆっくり下がる。飛ばされる寸前、彼女は仮面の奥にある無機質な漆黒の瞳と目が合い、今まで感じたことのない底知れぬ恐怖を覚えた。

ユシルが地に体を打ち付けて気絶すると同時に、毎度おなじみハイテンションの司会が試合終了を告げる。

『試合終了おおおおお!! 勝者、『ラヴリーうさにゃん』のモ
ルゲン&ナハトペアあああああ!!!!』

—ワアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

「ユシルツ！！」

彼女の元へ治療係の魔術師とパートナーの男が駆け寄る。魔術師が

言うには彼女の命に別状はないようだ。それを聞いて彼は気が抜け
てはあ、とため息を吐く。それから何かを考え込むように男は黙り
こくって、気絶している彼女を視界に映していた。

その頃夏葉は試合が良く見える、ある高い場所に立って試合を眺め
ていた。夏葉の瞳は、出口に向かって歩いているフード二人組みに
向いている。

（・・・たしかにあの剣は黒フードに突き刺さっていた。しかし、
次の瞬間にはあいつの左手の中に収まっていた。・・・次の試合、
本気でいかなければやばそうだな。）

紅い瞳の中にある瞳孔が縦に切れ上がる。鋭く獐猛な牙を口からは
み出させるように、彼は唇を三日月型に歪ませた。

「ふむ。次は楽しめそうだ」

その日の空には火の粉が舞っていたという。

第22話 金の月下による独りぼちな姫君の為の幻想曲（ファンタジア）（前

第22話はちょっと長いので前編と後編に分けました。

楽しんでもらえますと幸いです^^;

第22話更新です！

第22話 金の月下による独りぼちな姫君の為の幻想曲（ファンタジア）前

「アグリキュル国、国王の娘、フェリンシア・テルカ・レーゼリア様を誘拐した大罪で、お前を捕縛する！！」

「・・・は？」

―ガシャンッ

「つていやいやいや、ガシャンて・・・俺かよ！？誘拐なんてしてねえし・・・大体姫様なんてそんなお偉い人、こんなところにいるわけない・・・だろ・・・？」

手首を鎖で縛られた夜の視線の先には、涙目になってこちらを見つめているフェリス。彼女のその表情を見て、何か嫌な予感が駆け巡る。

周りの兵士等によってフードを外された彼女の蜂蜜色の髪は、蒼穹の空には眩しい太陽の光に照らされて、美しい金色に光り輝いていた。その神々しい光に一瞬魅入られて、漆黒の瞳を側めてしまう。

「・・・まさか、あんた・・・」

彼女の意を決した瞳を見て、その時夜は確信した。

「私は・・・」



「何処行ってたんですか！？もう集合時間過ぎてるじゃないですか！！！」

「ふむ。しかしまだ試合は始まっていないではないか。」

「そういう問題では・・・もういいです・・・（この人に何言っても無駄だ・・・）」

試合前からもう既に疲れきった表情を浮かべて、ハークはこっそりと滂沱の涙を流す。そこへ係りの女性が来て、試合が終わったことを告げる。

「……いよいよですね。」

「うむ。今回は楽しめそうだが、少年」

グッとナックルを握るように持って、その鉄の感触を確かめるように手を開いたり閉じたりしている夏葉。それからハークの方へ振り向いて、行くぞと目配せをする。

「油断大敵ですからね。今後の生活費がかかっているんですから」

その目配せに返事してハークは黄緑色の瞳を夏葉に合わせると、生意気な笑みを浮かべてから試合場に向かって歩き出した。

『まだまだ盛り上がって行こうぜ!!!! 第4試合!!!! 早速ペアを紹介するぜええええ!!!! 東側は第1試合で圧倒的な力を見せ付けて一瞬で見事に大男二人を撃沈させた拳を持つ野郎! ナツ&ハークの
ホワイトサマー『白い夏』だあああああ!!!! そして西側!!!! 常にフードと仮面で顔を隠している謎の二人!!!! 噂では白は女! 黒は野郎らしいぜ!!!! 今回はどんな戦いっぷりを見せてくれるのか!? 『ラヴリーうさちゃん』のモルゲン&ナハトペアああああ!!!!!!』

ーワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!

『観客席も盛り上がってきたようだ!!!! それじゃあこの調子でどんどん行こうぜ!!!! 第4試合、開始イイイイイイッ!!!!!!』

「風よ、掻っ切れ！風の牙！！」
ウインドファンク

司会が試合開始を告げる。先手必勝、とでも言わんばかりにハークは片手を前に突き出して、風で出来た不可視の狼を3匹放つ。その狼と一緒に夏葉もナツクルに炎を纏わせて、敵陣に突っ込んでいった。

ーゴウツ

炎が空気を燃やす音がフェリスの耳の真横を掠める。間一髪で頭をその反対方向に傾けたフェリスは、下から大剣をブンツとすごい勢いで振り上げるが、身軽な夏葉は余裕でその剣を身を振ってかわした。

狼はフェリスの横を通り抜け、夜へ牙を剥く。しかしそれは彼の手中に現れた黒銀の剣杖によって一瞬で無に返される。

「何処からあんな剣が・・・もう一回！行け！風の牙！！」
ウインドファンク

狼が再び夜に向かうが、またもや剣一振りで跡形もなくなってしまふ。ハークは舌打ちをしつつ、腰から短剣を抜いて構え、夜に向かって走り出す。魔術が相手に効かないのではないかと考えたハークは遠距離戦から接近戦へと変えたようだ。

「モル、右斜め下。次、左」

「ふふっ、分かっているわ」

その時、抑揚のない無機質な声がフェリスに告げる。その瞬間、フェリスの右斜め下から炎が吹き上がる。それをステップを踏んで避け、左側から猛スピードで迫ってきた拳を大剣で横に薙ぎ弾く。

「ふむ・・・避けたか」

拳を避けられた夏葉はそう呟いて一旦距離を取り、拳を構えなおす。

（・・・攻撃が読まれたか？ふむ・・・ポーカーフェイスは得意な方だったんだが・・・）

「・・・右斜め後ろ、上少し右寄り」

「なっ！！？」

短剣を持ち構えたことによって近距離戦に変えたように見えたハークだったが、無詠唱で魔術を構成して風属性魔術をフェリスに打ち込んだ。しかしその打ち込もうとした角度を見事黒フードに当てられ、目を大きく見開いて相手を見つめる。しかしフードと仮面に隠れていて、表情を読み取ることは出来ない。

「少年、ぼけっとしている暇などないぞ」

「・・・っ分かってます！！」

「全然分かってない・・・分かってないわ。ね？ナハト」

風の刃がフェリスを襲うが、最初から襲ってくる場所が分かっている為慌てる必要はない。最小限の動きで避ける。

ハークは夏葉に背筋が凍るような視線を向けられ、一瞬表情を固まらせる。それから短剣を構えなおすと、夜に向かって走り出す。

（・・・というかなんっでいつもあんな怖い目を向けてくんだよ！？あんな目、ヨルには絶対向けなくせに！！）

内心涙目になりながら、相手に向かっていったハークだったが、相手が剣を持っていないほうの手をスッと上げるのを見て一瞬動きを

止める。そして相手が何かを呟いた。

「・・・風ウインドの、刃フランク」

風で出来た不可視の狼が相手の周りに、黒いフードをはためかせながら何処からともなく6匹現れる。それは先ほどまでハークが使っていた風属性魔術だった。

「・・・おれと、同じ魔術・・・!!? 何で!？」

一斉にハークに襲い掛かる。至近距離からの攻撃だったので、ハークは避けられる術がなく腕を交差させて防御の姿勢をとる。

―ドォオンッ

「油断大敵。そう言ったのは、お前だろうか? 少年」

しかし狼は6匹全て、爆発音とともに一瞬で消える。ハークと黒フードの間には拳を空に突き出している夏葉が立っていた。

―パサッ

間近で起きた爆発の影響で爆風がフードを煽り、風に揺られた漆黒の髪が姿を現す。

「その髪色・・・もしかし「よそ見している暇があるのかしら?」

―ガキヤッ、ガキッ

大剣とナツクルがぶつかり合う。その真下で頭を抱えてなんとか危

機を回避したハークは、心臓バックバク状態で夏葉の後ろへ非難する。そして、夏葉たちの後ろでフードを被りなおしている相手を見据えて、頭に浮かんできたある人物と比較して観察する。黒髪を持っている人はかなり珍しく、ハークはその色を持っている人物は1人しか思い当たらない。

（・・・だけど性格違いすぎだし、まず戦闘から逃げないヨルなんて有り得ない）

「少年！考え事はするな！」

「あっ、はい！」

「貴方こそ他人を気遣っていいのかしら？ふふっ」

―ガキインッ、ガッ、ガキッ

妖艶な笑みを浮かべたフェリスはどんどん力で圧して、夏葉を端まで追い詰めていく。しかし端まであと数歩というところまで来た時、夏葉は真上に大きく跳び、フェリスの背後に一瞬で移動する。それを知ってかすぐ後ろに振り向き、大剣を盾にして夏葉の拳を受け止める。攻撃を受け止められた夏葉はそのままそこに力を加え続けた。

―ミシッ

「!!」

剣にひびが入るのを感じたフェリスは、拳の軌道をずらして衝撃を分散させる。そこから体ごと横にずらし、体勢を整える為に一旦遠くに引き距離を置いた。

ように見えた。

フラッドオブアイス
「氷結洪水」

ーゴオオオオオオオオオオオオ

渦卷いた雪と地面から吹き出る水が一斉に夏葉に覆いかぶさる。観客席にまで吹いた冷たい風は、近くに立っていたハークの服を一瞬にして凍らせてしまうほどの冷気を纏っていた。

先ほどフェリスは引いたように見えたが、実はこの魔術が発動する場所まで相手を誘導するのが彼女の役目だったのだ。そしてそれは見事成功し、夏葉は魔術の渦に飲み込まれる。

「！！最上級の水・氷属性魔術・・・」

この魔術が発動している間は、この場所はまるで極寒と化していた。観客席でさえ息が凍える程寒いの、その寒さの原因である中心部にいる夏葉。誰もが試合終了を確信したときだった。

ーゴウツ

渦の中から熱風が吹き荒れたかと思うと、次の瞬間。炎の渦が雪の渦と重なるように現れ、ドンツという爆発とともに魔術が相殺される。数秒後土煙が晴れ、その場にあった雪の渦と炎の渦は跡形もなく消え去ってしまったのだった。

ーワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

その相殺した本人は、余裕綽々の不敵な笑みを浮かべてそこに立っていた。その姿には傷ひとつついていない。

「・・・ふう・・・ちょっと危なかったのだ。さて、続きをやる
ではないか」

やる気も失せることなく、常人が触れてしまったら怖気ついってしまう
ような殺気も健在のようだ。そして再び走り出す。

「少年、援護を頼む」

「はい！！風よ唸れ！サイクロン竜巻！！」

因みに、竜巻は風属性魔術の上級。決してこれほど簡単に短縮詠唱
で構成出来る魔術ではないことをここに記しておく。

その名の通り、風が渦を巻いてフェリスに襲い掛かる。竜巻は内側
に引き込む力が働いている為、迂闊に動いて避けると巻き込まれる
可能性があると考えたフェリスは、地に根を張るように足に力を入
れ、全力で思いつき大剣を振るった。

ーヴンッ

すると剣圧に圧された竜巻はいとも簡単に霧散する。しかし、その
時夏葉は既にフェリスの横を通り抜け、夜の元へたどり着いていた。
先ほどのお返し、と言わんばかりにナックルにこれでもかというほ
ど大きな炎を纏わせて、相手の顔面に向かって拳を突き出す。夜は
頭を後ろに少しだけ傾けて避け、先ほどの攻撃と同時に右脇腹に向
かって放たれていたもう片方の拳も、布が巻かれた剣杖で防ぐ。

「気づいていたか。ふむ、なかなかやるな」

「・・・」

感心したように呟く夏葉。それから剣杖で防がれた拳を一度引き、
無詠唱で相手の足元の地面から炎を噴出させる。しかしそれも剣杖

一振りで霧散させてしまう。そして剣が振られたその隙を夏葉が見逃すはずがなく、先ほど顔面に突き出した拳の軌道を変えて、下から上に向かって顎に振る。

―ガッ

姿勢を低くして避けようとしたもののもう既に頭を後ろに傾けていた為、その拳はカツツと仮面に掠ってしまう。そう、ほんの少し掠っただけ。しかし、恐るべき竜の腕力。そのたったひと掠りで仮面が真っ二つに綺麗に割れた。もしもう少し避けるのが遅かったら、頭も綺麗に真っ二つに割れていたことだろう。

二つに割れた仮面が地に落ちる。その瞬間、夏葉の目が大きく見開かれた。

「!?!? お前は・・・「遅い」

夏葉の動きが止まったそのとき、夜は無機質な漆黒の瞳で相手を見据えてそう呟き、相手の腹に掌底を放つ。夏葉はその時上手く後ろに跳んだ為体への衝撃は少なく済んだが、その眼前に居る相手が思いもよらぬ人物だったため、夏葉の瞳は見開かれたままであった。

「・・・夜。お前が何故此処に・・・」

返事はない。

その代わり、無機質な視線と剣杖を向けられる。その無表情も剣も、明らかに親友に向けるべきものではない。数秒間、沈黙が両者を包む。

「・・・・・・・・ふっ」

するとしばらくの間無言だった夏葉が急に笑い出す。それから目を閉じ、また開ける。不敵な、寧猛な笑みを浮かべて炎を纏った拳を構えた。

「どうやら寝惚けているようだな親友^{ヨル}よ。俺がお前を起こしてやろう」

縦に切れ上がる瞳孔。それから膨れ上がるような殺気とともに夏葉は拳を振りぬいた。

わり

第22話 金の月下による独りぼちな姫君の為の幻想曲（ファンタジア）（後

お待たせしました；

後編ですへへ

第22話 金の月下による独りぼちな姫君の為の幻想曲（ファンタジア）（後

（・・・で？これなんていう危機的状况！？何で夏が本氣の目で攻撃してきてんだ！？）

そして何故自分は剣を夏葉に向けて構えているのか。もう何もかもが分からず、頭の中は軽い混乱状態に陥っていた。その時、頭にリンツと鈴のような声が響く。

《ご主人様！避けて下さい！！》

「！！」

ーゴォツ

レーヴァテインのおかげで間一髪、横にステップを踏んで夏葉の拳を避ける夜。頬すれすれを通っていった炎が熱く、避けたにも関わらずチリツという微かな痛みを感じた。取りあえず相手もこれ以上攻撃してくる気がないらしく、距離を取って一息つく暇くらいはありそうだ。

（・・・ふー・・・ありがとな、レン。）

《いえ。それにしても、意識がお戻りになられたのですね！》

（ああ。で、説明してもらってもいいか？こうなるまでの経緯を）

汗を拭うようにして先ほど掠った部分をさする。急に動いた所為なのか、それとも炎が掠ったからなのか、その部分だけが熱を持つ

ているように感じた。

《あ、はいっ》

ーガキヤッ、ガキインッ、ガガガガガッ

「あはっ、あははははははっ！！ひれ伏せ！！」

「ちよっ、やめっ、やめろおッ！！死ぬって！！しかもなんか怖ひ
！？」

視界の端で、豹変したフェリスが持ち前の馬鹿力で振り回す大剣を、
間一髪で避けているハークを映しながら夜は成る程、と呟いた。

（・・・もう弁解のしようがない、と。・・・まあ、そりゃ夏が怒
るわけだ・・・絶対説明しろって後で迫られるよなあ・・・）

《ッ！！ご主人様、来ます！！》

「ふむ。そちらから来ないのならこっちから行くぞ！」

レーヴァテインの声と夏葉の声が被り、風を切る音とともに拳が迫
る。それを後ろにステップを踏んで避け、もう片方の拳が届く前に
3mほど距離を取るために後ろに跳ぶ。しかし夏葉は追撃をかける
ためにその場から弾丸のように飛び出し、炎を纏った拳を左右同時
に振るった。

ーガッ、ギインッ

（あ、あつぶねえ・・・危うく左右から挟まれて丸焦げサンドにされる場所だった・・・）

左手にはレーヴァテイン。そしていつの間にか右手には、以前武器屋で夏葉にもらった短剣が握られていた。

（さんきゅー、レン。ってか絶対あいつ今の殺る気だったッ）

内心、俺心臓バクバクです、といわんばかりに息切れを起こしている。そして今は戦闘に集中していて気づいていないが、もし冷静になって今の自分の状況をきちんと把握していたのなら、観客に見られている緊張でこんなには動けなかったことだろう。

《はい／＼／＼あ、ご主人様、落ち着いて下さい。ご主人様なら相手が竜だって、今の時点でもなんとか勝てるはずです。先ほどまで記憶がなくても、体がその動きを覚えているはずです。よく思い出してください》

（なんとかって・・・至極曖昧だな。まあフェリスの為にも負けるわけにはいかないよな。というか、夏に負けるのはプライドが許してくれなさそうだ）

拳を防いだ剣杖と短剣を横に薙いで払い、リーチが恐ろしく長いレーヴァテインで相手を牽制する。

「というか夏！あんたさっきから態と気づかないふりしてんだろ！俺ちゃんと意識ありますけどおッ！！」

ーブンツ

瞬間移動でもしたのか、というほど素早く夜の後ろに回りこみ、後頭部を狙われたのに感覚的に気がついた夜は寸でのところで避ける。因みに当たってたら間違いないく即死です、はい。だって避けたときに掠った髪の毛がパラッて、鋏で切ったときみたいに落ちたんだものッ（泣）

「人が話してる最中に拳握んな！！しかも今の本気だったろ！？」

「ははっ、馬鹿言うな夜。一遍殴られろ。」

「お前は鬼か！？」

会話終了と同時に夏葉の浮かべていた笑みがスッと消える。どうやら夏葉はマジ切れ状態のようだ。こんな状態のときは放っておくに限る。というか打つ手なし。

（それに、このままじゃ確実に俺、こいつに殺される！！）

先ほどから徐々に髪の毛が焦げてきている気がするのは、決して気の所為ではない。そして角に追い詰められている気がするのもおそらく間違いない。さらにだんだん頬に掠るようになってきたのも勘違いではないのだろう。

ーチリツ

「ツ・・・」

《ご主人様！！》

もろに当たったわけではないものの、少し掠るだけでも焼け付くような痛みが頬を襲う。剣で防ぐ隙を与えず、夏葉の拳は一切の容赦なく迫ってくる。夜の今のような状態のことをピンチというのだろう。

（・・・仮面被ってたときの俺は一体どうやってこんなのと戦ってたんだ！？レンはリーチが長すぎて接近してくる相手に上手く当てることが出来ない。短剣なら辛うじて振れるがその隙がない。・・・かといって合成獣^{キメラ}を出すのは何かやばいような気がするな・・・）

レーヴァテインが持っている能力の1つ。剣杖で斬ってマナレベルに分解したものは生物無生物問わずに召喚することが可能になる。先ほど突然夜の右手に現れた短剣は、予めレーヴァテインでマナレベルに分解してあったから、何もないところから短剣を出したように見えたのだ。そして以前、マナレベルに分解した合成獣^{キメラ}も勿論召喚することは可能だ。しかしそれを今此処でやってしまったら、恐らく良くないことが起こる。本来、召喚術などというものは、在ってないようなものなのだ。その召喚術が存在していて、尚且つ恐ろしい魔物や魔獣までも召喚出来てしまうと世間に知られてしまった場合。夜には間違いなく良くない、少なくとも幸せにはなれない未来が待ち構えていることだろう。

（・・・と言っても、このまま追い詰められてたら意味ないんだがな・・・）

「ちよっ・・・もういい加減にしてッ！！というか助けて下さいよ！！おれがその黒フード相手にしますから！」

「断る。俺は此処で夜を一発殴らないと気が済まないのだ」

「まだ朝のことで怒ってるんですか？・・・ってヨル！？その黒フードが！？」

此処から少し離れたところで、必死にフェリスの攻撃を避けているハークは素っ頓狂な声を上げる。どうやら黒いフードが夜だと気がついていなかったようだ。大剣を避けるのに精一杯でそんなことに構っていられる余裕など、全くといって良いほどハークにはなかったのだろう。

「よっ、朝ぶりだな、ハーク」

一瞬視線をハークに移して笑みを浮かべながら、短剣を持っているほうの手を振る。

「ふむ、まだそんな余裕があったのだな。ならそろそろ本気を出すとするか」

「待て夏！ 思いとどまれ！ それ以上本気出されても俺が困る！ とうかさっきまでの本気じゃなかったのか！？」

「10分の1も出していないな」この鬼畜野郎ッ！！（少々泣き声）

「

一瞬隙があった夏葉の拳をなんとか短剣で受け止め、それを力の限り思いっきり跳ね返して距離を取る。

《やはりそうでしたか。》

レーヴァテインの深刻な雰囲気漂う声が頭に響いてくる。

（・・・つまりその心は？）

《もしあの方が本気を出していましたら、拳一振りでここの地面パツクリ割れます？》

「・・・さて、行くぞ。夜」

「俺の死因は生まれたときから老衰と決まっているんだッ。三十六系逃げるに如かず！」

これは戦略的撤退だ、と夏葉から逃げようと後ろを向いたときだった。

「きゃあっ!？」

「フェリスッ!？」

何処から湧いて出てきたのか、真っ白な鎧に真っ赤なマントをつけている青年が、フェリスの仮面を取って空いているもう片方の手で、彼女の手首を握っていた。それはフェリスの馬鹿力でも逃れることが出来ないほどの強い力だった。

そしてその青年とフェリスの周りを、同じような装備の兵士十人が囲う。

「皆さん、落ち着いてください!! 神聖な大会中、申し訳ありません! どうか、この聖騎士、グランディア・カーリーナの名に免じて、お許しいただきたい!」

フェリスの手首を握っている青年が、この闘技場全域に聞こえるように、でも怒鳴り声でもなく、寧ろ清清しく感じるような声音で叫んだ。すると、観客席が騒然となる。

「あの方はあの有名な聖騎士、グランディア様じゃないか!」

「何故、グランディア様がこんなところに!？」

「ああ／＼／＼なんて綺麗な水色の瞳なんでしょう・・・」

「太陽に輝く金髪もまるであれ自体が太陽のようだ・・・」

「グランディア様!! グランディア様!!」

「・・・あの騎士、どうやら有名なようだな」

「えっ? 知らないんですか!? グランディア様のこと」

「ああ。ハークは知ってるのか?」

夜と夏葉は、興奮して目をキラキラと輝かせているハークを眺めながら、興味なさそうに聞く。すると、待ってましたと言わんばかりに体を乗り出して熱く語る。

「グランディア様は、この国の第一皇女の護衛をしている聖騎士なんだ。あの通り美系で、そして勿論強く、剣で敵う人はおそらくこの国にはいないと思う。女性にも男性にも人気で、国民の憧れの的なんだ! 勿論おれも憧れてるうちの一人なんだけど・・・なんてこんなところに・・・? 普段は皇女の護衛で滅多に外に出たりしないって聞いてただけだな」

不思議そうに首を傾げて、試合場のど真ん中に立っている青年、グランディアを見つめるハーク。

夜はふーん、と呟いて怪訝な表情で青年を眺める。しかしどうしてもその青年を好きになれそうになかった。

「取りあえずその“グランディア様”とやら。フェリスの手、離してくれ。」

短剣とレーヴァテインを消し、青年とフェリスに向かってゆっくり歩き出す。すると、二人を囲んでいる兵士十人のうち二人がこちらに走ってきて、威嚇するように剣をこちらに向けてくる。どうやら答えはNOのようだ。

「黙れこの大罪人！」

青年が視線を鋭くこちらに向け、フェリスを夜から守るように肩を抱き寄せる。フェリスは抵抗していたが、やはり男性の力に少女は勝てないのか、振り払うことが出来なかった。

「・・・大罪人？誰が？」

何か嫌な予感がした。

とてつもなく、嫌な予感が。

そしてその予感は見事命中する。

「アグリキュル国、国王の娘、フェリンシア・テルカ・レーゼリア様を誘拐した大罪で、お前を捕縛する！！」

「・・・は？」

ーガシャンッ

「つていやいやいや、ガシャンて・・・俺かよ！？誘拐なんてしてねえし・・・大体姫様なんてそんなお偉い人、こんなところにいるわけない・・・だろ・・・？」

手首を鎖で縛られた夜の視線の先には、涙目になってこちらを見つめているフェリス。彼女のその表情を見て、何か嫌な予感が駆け巡る。

周りの兵士等によってフードを外された彼女の蜂蜜色の髪は、蒼穹の空には眩しい太陽の光に照らされて、美しい金色に光り輝いていた。その神々しい光に一瞬魅入られて、漆黒の瞳を側めてしまう。

「・・・まさか、あんた・・・」

彼女の意を決した瞳を見て、その時夜は確信した。

「私は・・・アグリキュル国第一皇女、フェリンシア・テルカ・レーゼリアスです。・・・ヨルさん、今まで黙っていて、ごめんなさいっ・・・ひっく・・・」

フェリス、いやフェリンシアの透明な涙が彼女の頬をつたう。夜はその涙と何か他の物も一緒に、零れ落ちてしまったような気がした。

第22話 　　く後編く終わり

第22話 金の月下による独りぼちな姫君の為の幻想曲（ファンタジア）（後

感想を書いてもらえますと、今ならもれなく作者が大喜びして咽び泣きます。

そして評価してもらえますと、作者は地震の恐怖をひと時忘れて、楽しい時間を過ごすことができます（殴

昨夜も大きな地震がありました、今日も午後の授業中、震度5強の地震がありました；；

もう本当に怖いです・・・orz

第23話 金色の旋律による響しき姫の為の合奏協奏曲（コンチェルト・グロッツ

大変遅くなってしまって申し訳ありませんm（　　）m
間が開いてしまったので、あらすじを・・・

とうとう夏葉・ハークのペアと夜たちは相對する。途中、夏葉の拳をくらって仮面が割れて、黒フードが夜だと夏葉たちは気づく。とまあ、ハプニングがあったものの順調に試合は進んでいたが、急にフェリスの叫び声が聞こえたかと思うと、民衆に愛されている聖騎士グランディアが現れる。そして彼に夜は大罪人だと告げられる。身に覚えのない罪を被らされた夜だったが、フェリスがこの国の姫だとグランディアに告げられる。フェリスは今まで隠していてごめんなさい、と涙を流した。

第23話更新です！

第23話 金色の旋律による響しき姫の為の合奏協奏曲（コンチェルトーグロツ

（・・・ちよつと待て）

「入れ」

勿論心の中でタンマをしても兵士に聞こえるわけもなく、ぐいっと背中を乱暴に押される。しかし夜は体を硬直させたまま、そこから石のように一步も動こうとしない。

（・・・待て待て待て）

「早く入れ！ぼさつとするな！この大罪人めが！！」

そんな夜にイラついたのか、今度は本気で背中を殴られる。正直言ってすごく痛い。下手したら痣でもできているのではないか、というくらいに。流石に殴られて立っていられる強い足腰は持っていないので、先ほどもで石のようだったのが嘘のように、ふらっと倒れて冷たい灰色の地面に顔をつけた。

（本気で待ってくれ！！）

「まったく・・・大人しくしてろよ！まあここから脱獄できるとは思えねえがな」

ーキイイイ、ガシャンツ・・・カチャカチャ

片手で鍵を弄る音と、カツカツと此処から出口に向かって歩いている兵士の足音が響く。そしてやがてその音も聞こえなくなり、土の

においと冷たい感触を体中で感じながら深いため息をついた。

目の前には地面と同じ灰色の壁。背後には黒い鉄棒が何十本もこの硬い地面に刺さっている、所謂鉄格子。それから右端に簡易トイレと、その反対側に薄汚いタオルが敷いてある。恐らくこれがベットの代わりなんだろう。（どう見てもベットには見えないが。）心なしか、そのタオルから嫌な臭いがぷんぷん漂ってきて、先ほどから鼻を刺激していたのはこれか、と夜はなるべくそのタオルから離れるように鉄格子に寄りかかった。

（・・・俺の人生、何処で間違ったんだ！？）

呆然と心の中で呟く。

何故自分がこんなところにいるのか、未だに理解できない。というか、牢獄に放り込まれたなんて理解したくもない。普通に生活していたらこんなものを拝む羽目にならなかったはずなのに、一体全体どうしてこんなことになってしまったのか。

（闘技場で人生の終わりを告げられた後のお話でありやりますが、夏葉とハークも共犯者と疑われたものの、なんとか誤解を解くことには成功した。しかし俺の誤解は解けることなく、寧ろ半ば強制的に鎖を手首に巻かれたまま引っ張られ、フェリンシア“様”とも話す機会はないまま牢獄直行コース逝き決定。弁解する余地も与えられない。なんて世知辛い世の中なんだ。・・・とまあこの国の第一皇女で在らせられるフェリンシア“様”はお涙をお流しになられたまま、あのいけ好かないグランディアという聖騎士様に連れて行かれてしまったのであった。そうして今、俺は此処に居る。嗚呼、何故俺は此処に存在しているんだろうか・・・）

《あの、ご主人様？大丈夫ですか？》

鬱になりすぎて地面にめり込んでしまおうかと考えていた夜を留まらせたのは、鈴のように軽やかな響きの声を持つレーヴァテインだった。どうやら1人で事後をぶつぶつと話していたのがいけなかったらしい。

その綺麗な声は、今の夜にとっては救いの女神様の声に等しかった。

「・・・レン」

呼ぶ声に応えて黄緑色の粒子の収束とともに、フツと何処からか夜の左手にレーヴァテインが現れる。たしかな剣杖の重みをその手に感じ、白い布が重力に逆らって夜を包むように浮いている。その所為か精神的に少し落ち着いた気がして、夜の表情は僅かに和らぐ。

《そんな顔、しないでください。こんなところ、すぐに出ましょう！私がこんな鉄の棒なんてすぐに分解しますから！！ね？ご主人様・・・元気出してください！》

（・・・ありがとな。レンのおかげで元気出た）

自分を慰めるように白い布が優しく揺れたのを見て、夜はレンに向かって微笑んだ。すると彼女は白い布をパタパタと動かして、嬉しそうな声が響く。

《そうですか！良かった、です／＼／＼ご主人様の役に立てて・・・》

（・・・そっか。じゃあ、行くか！）

そんな彼女が可愛く思えてきて、もし彼女が人だったら頭を撫でていたのかもしれない。そして右拳を高く突き上げて気合を入れると

夜は立ち上がり、服についた埃を払うようにコートを軽く叩く。余程牢屋が汚いのか、少し此処に居ただけだったのに埃がもわもわとたったのには驚いた。

「うおっ!？」

（なんだこの異常な汚さは・・・こんなどこに何日も居座ってられるかっての!!! さてはこの牢屋、俺を病気で殺す気か!？）

《ふふっ、そうですよね。では、行きましょう! ご主人様》

レーヴァテインの綺麗な笑い声と一緒に、夜は彼女を鉄格子に向かって思いっきり振るった。

—キンキンッ、パンッ

鉄と鉄がぶつかる妙に耳に響く音が聞こえた直後に、マナに分解される乾いた破裂音が牢屋に響く。そして夜の目の前には鉄格子など最初から存在していなかったように、開けた空間が広がっていた。

—ジャラッ

「あ、なんか剣杖振りづらいなあ、とか思ってたら鎖消すの忘れてた・・・。レン、頼む」

《はい!》

軽快な音と同時に手を塞いでいた鎖が鉄格子と同じように綺麗に消える。今度こそ、と息巻いて夜は気合を入れ直すために伸びをして、牢屋を後にした。

「・・・俺が助けに来るまでもなかったようだな。まあこんなところで燻ぶってられては困るしな・・・くくっ」

夜が放り込まれていた牢屋の向かい側には先客が居た。腰まで流れる漆黒の髪に、狂気を含んだ銀色の瞳。

「・・・青年が牢屋に放り込まれた、なんて報告出来ないな。下手したらアイツ、無表情でこの国消しそう・・・いや、絶対消す。まあこの国がどうなるうが俺にはどうでもいいことだが、取りあえずは様子見か・・・」

何が面白いのか、狂気的笑みを浮かべる。それから体全体を覆うように着ている黒いマントをバサッとはためかせると、闇に溶け込むように消えていった。



「・・・姫様。もういい加減機嫌をお直し下さい。たしかにあの時お手首を強く握ってしまったのは申し訳ないと思っています」

「はっはっはっ、フェリンシア。こうグランディアも言っているのだから許してあげなさい。」

玉座に座っている50過ぎぐらいの男性が柔和な笑みを浮かべながら、先ほどからずっと俯いているフェリンシアを宥める。彼女の横にはさも当たり前のように、グランディアが立っていた。

ここはアグリキュル国国王の居城である。

「それにしてもあの大罪人め・・・姫様を誘拐するなんて許せん。即死刑に処すべきです」

グランディアは冷酷にそう言い放つ。彼の額には青筋が浮いていて、相当怒っている様子が見て取れる。しかし、その言葉を聞いた瞬間、

今まで顔を俯けて何も喋ろうとしなかったフェリンシアがバツと顔を上げて、悲痛の表情で叫んだ。

「っ！？違います！！グランディア！あの方は私を誘拐などしていません！！城から勝手に抜け出したのはこの私です！！死刑なんて言語道断！早くあの方を牢獄から出してください！！」

格好は闘技場に居たときと違って、ライトグリーンのドレスを着ていた。国王と謁見する前に無理やり侍女たちに着替えさせられたのだ。やはり姫の気質を生まれながらにして持っているのか、その服装はよく似合っている。

「姫様！？何をおっしゃるのですか？あの大罪人は貴女を誘拐「だから違うと言っているのです！！あの方を大罪人と呼ぶのはこの私が許しません！」

「まあまあ。双方落ち着きなさい。」

王独特の声音がその場に響き、二人とも一瞬で口を閉ざして王の表情を窺った。

「フェリンシア、目撃証言があるのだ。お前らしき人物が、あの黒髪の青年に壁に押し付けられ襲われていたところをある人物が目撃しておったのだ。」

「！！」

（あの時・・・アイスを落としてしまったときのこと・・・！！でもあれは・・・）

「誤解です！！今すぐに彼を解放「そうはいかないのだ」・・・え？」

フェリンシアの言葉に被せるように、重い口を開いて静かに王は言った。彼女の間の抜けた声が無駄に高い天井に響く。そして荘厳な雰囲気の声が告げた。

「あの者は見せしめとして公開死刑に処す。」

彼女は時が止まった気がした。

震える体を無理やり押さえつけるように腕に力を込めて、フェリンシアは今にも出そうな涙を堪えて叫ぶ。

「！！？何故ですか！？彼は何も悪くないのに！！お父様は私の言うことが信じられないのですか！？彼は無実です！！」

「最近居城内で不穏な空気が流れている。お前には知らせていなかったが、最近この城に賊が入り込んだのだ。人が殺されたり、何かを盗られた形跡は皆無だったのだが、その賊が何をしにきたのかは定かではない。そして騎士たちに追わたのだが捕縛することが出来なかった。その賊が入り込んだのはちょうどお前が城からいなくなった日の夜だった。」

父が何を言いたいのかわからずに、フェリンシアは眉を顰めて首を傾げる。王の意図がいまいち掴めなかったのだ。

「その日の夜、賊を見つけ出すために目撃証言を聞きまわっていた部下が、その賊の姿を見たものが数人いた、という報告をしてきた。その数人の証言の中で、必ず一致していたものがあったのだ。その賊の特徴は“漆黒の髪”だったそうだ。」

「！！」

蒼穹の瞳が大きく見開かれると同時にフェリンシアの息を呑む音が、

一瞬静寂に包まれた謁見場に響いた。

「・・・漆黒の髪を持つ人間などそうそこら辺にいるわけではない。漆黒は闇を暗示し、あまり縁起の良い色ではない。一部の宗教では漆黒の髪を持つものを崇める危険な思想を持つところがあるみたいだが、この国ではまず漆黒の髪を持っている人間はそう存在しないだろう。いくら人が集まる祭りの期間中だったとしても、そう何人もの漆黒の髪を持つものが現れるとは思えんだ。」

「・・・ですがっ！！あの方は間違いない違います！！あの方はそんなことをする人ではありません！！とても優しい人です！」

「フェリンシア。もしあの青年が無実だとしても、あの青年はこの事件の見せしめに処刑する。お前がなんと言おうともこれは決定事項だ。それに、もしお前が城の外に出るといふ愚行をしていなければ、あの青年が捕まることはなかったのではないか？お前はこの国の第一皇女だ。姫、という自覚を持って普通に生活していれば、このような事態にはならなかったのではないか？」

無慈悲な王の言葉が暗に“フェリンシア、お前が悪いのだ”と攻め立てているように聞こえた。フェリンシアの瞳から涙が零れ落ちる。

「・・・分かったらしばらくの間自室にいなさい。お前は自覚がなさすぎる。・・・グランディア、お前の部下にフェリンシアを見張るように言うっておけ」

「はっ。・・・では姫様・・・」

グランディアは彼女の片手を握る。その時、グランディアは違和感を覚えた。そして何故かものすごい悪寒を感じた。

「はいっ！嬉しいわ！グランディア様がお手をお繋いで下さりやがりますなんてっ。フェリスあまりの気持ち悪さに感激ですわ！（棒

読み」

「んな!!?」

耳元で聞こえてきたのはフェリンシアの声ではなく、地を這うような恐ろしい響きの声音を持つ青年の声だった。そしてそれに伴い、グランディアが握っていたのはその青年の片手。そして真正面には、口を三日月形に歪ませているのにも関わらず、目は冷え切っている笑顔を浮かべた漆黒の髪を持つ青年の顔があった。

「っ!!? ヨルさん!!」

「よっ、フェリス。さっきぶり。そしてグランディア様もさっきぶり。ついでに国王様、お初にお目にかかります。そしてよくも無実の俺を罪人扱いして下さりやがりましたね?」

「なっ!! 国王様になんて無礼な!! それに手を放せ!」

— ジャキッ

グランディアは剣を抜いて、本気で夜の手を切り落とそうかと構える。それを見た夜はぱっと手を離し、バックステップをしてグランディアから距離を取った。

「姫様、私の後ろに隠れて・・・って!?!」

「ヨルさん!!」

「お、おい! フェリス!?!」

グランディアが顔には似合わない素っ頓狂な声を上げた。何故ならフェリンシアが夜の名前を叫んだかと思うと人目を気にすることなく、夜に駆け寄り思いっきり抱きついたからだ。

夜はあまりに急過ぎて赤面しつつも微笑しながら、勢い余って飛び込んできたフェリンシアを両手で受け止める。

「ヨルさん、ごめんなさいっ！私がいけなかった」「はいストップ。」

無理やりフェリンシアの言葉を遮り、きよんとしている彼女に夜は聞いた。

「フェリス。俺と一緒に旅しないか？」

「・・・え？」

きっと彼女にとって予想外の台詞だったに違いない。この夜の言葉を聞いたフェリスは、一瞬何を言われたのか分からないような顔で首を傾げたのだから。そんな彼女の反応に笑いながら、夜はもう一度、繰り返した。

「お城脱出のご案内ですお姫様。もう一度しか言わないからよく聞け。・・・どうか俺と一緒に旅をして下さいませんか？」

敬語もへったくれもない言葉遣いを先ほどからしていた所為か、敬語とタメ語が混ざっている。しかし今そんなことは二人にとってどうでもよく、その台詞の内容が大事だった。

フェリンシアはやっと理解することが出来たのか、驚きを隠せない表情で夜の顔を見上げる。夜は言った直後に恥ずかしくなったのか、顔を真っ赤にして明後日の方向を向いていた。

「・・・ふふっ。」

そんな夜が面白くて、フェリンシアはつい笑みを零してしまう。

「・・・何笑ってんだ。行くのか、行かないのか？」

不機嫌そうにフェリンシアにそう呟くといきなり真面目な表情になり、夜は正面に顔を向きなおして彼女の瞳を見つめた。

「・・・こちらこそ、よろしくお願いしま「グランディア!あの青年を今すぐ捕らえろ!それから他の兵は一体何をしているのだ!」」

フェリンシアの台詞が王の怒鳴り声によって掻き消される。その瞬間、夜は頭の中で何かが切れた音がした。夜の高らかな笑い声が気味悪いくらいにその場によく響く。

「あっはっはっはっは・・・人を馬鹿にするのもいい加減にしろよこのハゲくそオヤジ!!俺は無実だっつーの!!しかも可愛い姫様が決意表明してるってのにその台詞掻き消すなんて親のすることじやねえだろ!!」

(・・・か、可愛い・・・／／／／)

もう1人も頭のどこかにあるスイッチがONになってしまったようで、頬を赤く染めながら隣でブチ切れている夜を見つめていた。

「ああー・・・なんか意味もなく苛々する・・・。レン」

《はい!さっきのあれですね?》

「ああ、さっきのあれだ」

《了解です!》

「・・・?」

フェリンシアが不思議そうな表情を浮かべて、独り言を呟いている夜に目を向ける。そんな彼女の目線に気がついたのか、夜は彼女に視線を合わせるとニヤツと悪戯な笑みを浮かべた。その瞬間、グランディアと国王が悲鳴とも似つかない声を上げる。

「な、なんだこれは!？」

「鉄、の棒・・・？」

国王とグランディアは何処から現れたのか、ぐにやりと曲がった黒い鉄の棒に身を拘束されていた。

「因みに鉄格子をアレンジしてみたんだが・・・他の兵たちも気に入ってくれた。国王様も気に入って下さったようで嬉しい。」

とても嬉しいようには聞こえない棒読みで、夜は黒い笑みを浮かべる。

「じゃ、気分も晴れたことですし、そろそろお暇しますか、姫様？」

「はいっ！」

「・・・この国の姫様、もらってくぞ。」

「ひゃっ／＼／＼／」

いつかの時のようにフェリンシアをひょいっと持ち上げてお姫様抱っこする。思わず驚いてしまった彼女だったが、以前のように顔を俯かせずに夜の首に腕を回して、笑顔で嬉しそうに笑った。その笑顔が眩しくて夜は一瞬目を側めるが、そんな彼女が可愛くて緩む頬を押さえることは出来なかった。

「フェリス、行くぞ？」

「はい！」

窓を開けると城から出る為にそこからフワッと飛び降り、約100mある高さから地面に着地する。そこには夏葉とハークがいた。ハークは呆れた表情を浮かべて、上から落ちてくる夜たちを見ていた。

―タンッ

「無事に脱出成功？・・・か？」

「ねえ、ヨルって本当に人間？あんな高いところから落ちて軽く着地って・・・」

あり得ないものをみたような表情で、ぼそっと呟く。しかしそんなハークの独り言に付き合っている暇はない。

「それより早くこの国から出るぞ。兵が追ってくる。夏、話は逃げてからにしてくれ」

「ふむ。分かっている。もうルートは確保してある。行くぞ」

「流石夏。頼りがいがある」

「ふっ、このくらい当たり前なのだ」

偉そうに反り返っている夏葉を殴りたい気持ちはあったが、今はそんなことをしている暇はない、と夜はその場から駆け出した夏葉を追って走り出す。ハークも置いていかれないように、と風属性魔術で風を纏い、夏葉たちの人外の速さにどうにかついていく。

「・・・ヨルさん。あの、ありがとうございます」

顔を赤くして風に靡く髪を押さえつけながら、フェリンシアはそう呟いた。それに気がついたのか気がつかないのか、夜は、ん？と聞

き返す。

「あ、いえ。なんでもありませんっ！あの、これからよろしく願
いします！・・・ヨ、ヨル」

「ん、ああ。よろしくな、フェリス！」

第23話

終わり

第23話 金色の旋律による響しき姫の為の合奏協奏曲（コンチェルトーグロツ

一応これで第2章は終わりです。

ここまで読んで下さった方々には感謝してもしきれません…;

これからどうぞよろしく願いますm（　　）m

次は間奏曲をはさんで第3章に入っていきます^^

金色の奏でた旋律による姫の為の間奏曲（インテルメッツォ）へ？〈（前書き）

前回の投稿から大分間が空いてしまいましたorz
また元のペースに戻るよう努力はしていきますm（m

金色の奏でた旋律による姫の為の間奏曲（インテルメッツォ）へ？〈

「・・・ここまでくれば取りあえずは一安心・・・か？」

「ふむ。おそらく大丈夫だろう。だが念のため休んだら即出発したほうが良い。」

夏葉の言葉に首を縦に振る。

あれからなんとか都市を抜け、追っ手を撒きつつ来た姿を隠せる森の中で休憩中である。夜と夏葉はまだまだいけるようであったが、ハークの速度が目に見えて落ちていくのに気がつき、取りあえず休憩を取ろうということになったのだ。

ずっと夜にお姫様抱っこされていたフェリスは疲れている様子は皆無で、森が珍しいのかキョロキョロと楽しそうに周りを見回している。今まであまり城の外に出たことがなかった彼女にとって、外にあるものは何から何まで珍しいのだろう。

適当に場所を取って円を描くように座る。夜が城で騒動を起こしている間に、夏葉とハークが水や食料を用意しておいてくれたのは大いに助かった。今もエネルギー補給のためにハークは固形栄養食をもそもそと不味そうに食べている。此処で焚き火を起こすことが出来ていたなら、夜が固形栄養食をアレンジしてスープなどにして食べる事が出来たのだが、煙が立つと居場所が特定されてしまう故我慢してそのまま食している。

「で、夜。弁解の余地はないと思うのだが・・・？」

夜が珍しそうに周りを見回しているフェリスを面白そうに眺めていると、対角線上にいる親友に鋭い目線を向けられた。どうやら忘れ

ていなかったようだ。

内心舌打ちしながらもそれに答えた。

「・・・悪かった。内緒で闘技場に出てたのは謝る。」

「俺が聞きたいのはそれじゃない。何故今まで戦えるのを隠していたのか、ということだ。」

不穏な空気が流れているのを肌で感じ取ったのか、フェリスは不思議そうな表情をしてこちらに戻ってくる。

「?・・・どうしたんですか?」

「いや、なんでもない。気にしないでまだそこら辺探索していいぞ?」

「・・・私、迷惑ですか?」

そういう意味で言ったわけではなかった。しかし彼女は何を勘違いしているのか、上目遣いで眉根を寄せて寂しそうに唇を噛んでいる。彼女のそんな顔を見てしまってから“あっちに行け”とは言えなかった。だって可愛すぎる。

「・・・全ッ然迷惑じゃない。別に此处に居てもいい。」

夜がそう言うと、彼女は顔をぱあああつと輝かせて彼の隣に腰を下ろす。内心ため息をつきながら、夏葉に視線を向けて先ほどの話を続けた。

「今まで戦えなかったのは本当だ。嘘じゃない。ただ今回があの魔具があったから戦えたんだ。」

「・・・魔具、だど?」

その言葉に反応したのは夏葉だけでなく、固形栄養食を不味そうに食べていたハークも目を見開いてこちらの話に耳を傾ける。

「あ、私が貸した魔具のことですか？」

「ああ。あの魔具はフェリスがつけていた仮面と対になっているんだっただよな？」

確認するようにフェリスに問うと、肯定するように縦に首を振る。

「俺がつけていた仮面は感情を抑制する。だから戦うことが出来たんだ。あれがなければ俺は戦えない。」

「・・・ふむ。つまり、言外に“あの仮面がないからこれからも俺は戦闘には参加しない”ということなのだな？」

「まあ、そう取ってもらって構わない。それから闘技場に居たのは、フェリスに頼まれた・・・いや脅された？ いや脅迫されたから・・・か？」

「ヨル！！誤解するようなこと言わないで下さい！！別に脅迫なんてしていませんっ！！！」

顔を真っ赤にしてぶんぶんものすごい勢いで首を横に振って、違えますアピールをするフェリス。実は態と言い直したのだが、夜は言いなおした甲斐があったと面白そうに彼女を眺めて薄っすらと笑みを浮かべていた。

今ので一気に場の雰囲気が壊れてしまったような気がして、ハークは当事者でないのについて聞こえない程度にため息をついてしまう。

「成る程。・・・まあ戦闘になったら俺と少年でなんとかなるからいいだろう。それから、今度勝手に何処かにふらりといなくなったら・・・分かってるな・・・？」

「・・・いえす、さー」

今度こそ命はないと思え。

そう台詞の中に含まれているものを感じ取った夜は、背中に冷や汗をかきながらも震える左手を額につけて返事をした。

「そういえばさ、ヨル。あのチーム名何一体？」

話の区切りがついたのを見計らって、ふとハークは聞く。

しかし聞かれた本人はその質問の意図が掴めずに首を傾げた。そしてそのとき、夜は何か良からぬ予感が頭を過ぎっていくのを感じ、その源だと思われる夏葉に恐る恐る目を向ける。

「たしかにあのチーム名はない。・・・たしか、“ラヴリーうさにゃん”・・・だったか？」

超フレッシュな笑顔で言いやがりました。

「待て夏。なんだ、そのファンシー溢れる乙女チック全開の言葉は・・・」

「あっ！それ私たちのチーム名じゃないですか！」

（お前の仕業かフェリスよッ！！）

「本当は“ラヴリーねこぴょん”と迷ったんですけど、やっぱりそっちで正解でした。とっても可愛い名前ですよね！」

（迷うところそこじゃないだろ！？フェリス！！）

完全に石化している夜を、ニヤニヤと黒い笑みを浮かべて夏葉は言う。

「乙女な趣味に走ることは悪ではない。夜よ。この茨の道を選んだのなら最後まで突き進め。そして極めろ」

「えっ!? この名前ってヨルが決めたの!?」

その言葉に反応するハーク。その表情は単純に驚いているだけ、というわけではなく微妙に苦笑いも含まれていた。

（違うんだハーク。俺は何も聞いていない・・・!!）

「ふふっ。とっても可愛いでしょう? 私と夜さんの（フードの形の）合作なんですよ!」

「待てフェリス! 合作じゃないだろ!？」

フェリスは何故か嬉しそうに話す。そして言葉が足りない。即間違いに突っ込む夜だったが、その素早さがかえって首を絞めることになる。夏葉とハークには、夜が必死で真実を隠そうとしているようにしか見えないのだから。

「ふむ。合作とは・・・なかなかやるな。」

「合作・・・どこら辺がそうなの?」

「僭越ながら“ラヴリー”と“うさ”は私ですが、“にゃん”はヨルです。」

何故笑顔で言う!？

（だから言葉が足りない!!）

このままではどんどん坂から転がり落ちていくように誤解が深まっていくばかりだ。フェリスはこれを素でやっているのだろう。邪気

は一切感じないのだから。

そろそろしい。

夜はそう思いながらも、自分抜きにしてどんどん広がっていく（主にフェリスが原因）誤解を解くのに精一杯で、いつも肩に乗せている猫のぬいぐるみが一緒にくすくすと笑っていたことなど知る由もなかった。



「……ふん……で？」

この世界の何処かにある、ある大きな城の中で、ある一人の少年とある一人の青年が話していた。少年の方は闇に紛れていて、どういう容姿をしているか分からないが、青年の方は漆黒の長い髪を腰まで下ろしていて、その銀色の瞳には狂気の色を映していた。その青年はとても楽しそうに、台座に座っている少年に話す。

それに対して青年の話を聞いている少年の瞳は剣呑な光を宿し、誰がどう見ても彼の機嫌が悪いのは目に見えて明らかだった。

「もしかなくても城から出れなくていらしてるのか？」

「……アシュテカが“彼”のことを楽しそうに語るから、なんかむかついてきちゃった。」

台詞からして軽そうに聞こえるが、実際ものすごい威圧が少年から出ているのをアシュテカは微笑を浮かべて受け流す。

「大丈夫だ。ちゃんと約束は守っている。」

「知ってる。……それからデイリースイ呼び戻して。」

「ん？デイリースイか？そういうえばアイツ頭を気にしてたな……呼び戻してどうするんだ？」

デイリースイとはアグリキュル国に潜伏しているアシュテカの部下の1人だ。“彼”をちょこつと見に行ったときついでに会いに行つたのだが、冗談で言った“はげるぞ”という一言は彼にとっては冗談では済まないようでもものすごく気にしていたのを覚えている。

「取りあえず呼び戻して。」

「了解。」

内心苦笑いをして殺気をおかしながらも、アシュテカは背中に意識を集中させて背中から漆黒の羽根をバサツと出す。

これ以上ここに留まっていたらその殺気に捌り殺されてしまいそうだと危機感を少なからず感じながらも、狂気のおみを浮かべながらコツコツと足音を立てて窓辺に近づく。

「・・・それから、“彼”に接触してきて。」

不機嫌な少年から出た予想外の台詞に、普段表情をあまり崩さないアシュテカは驚いて目を大きく見開き振り返った。その勢いで艶やかな黒髪が風に靡くようにふわりと浮く。

「勘違いしないでね。接触、といっても触っていいわけじゃないからね。」

「心得ている。接触の仕方は？」

「特になし。ただ話してくるだけでいいよ。それとなく周りのことを聞いてくるのも忘れないで」

それは至極難題だ。

会って間もない存在にそう簡単に教えてくれることではないのだから。

「時間制限はミリイナが迎えに行くまで。」

「・・・人間相手に戦争でも起こす気か？」

時間制限を設けるのは何故？と言外に問う。

「まさか。ただもう少しで研究が完成しそうだから早めに帰ってき

て欲しい。ただそれだけ。」

「・・・了解。」

これ以上何を聞いても少年は何も教えてはくれないだろう。そう思ったアシユテカは窓を開けるとそこから飛び降りる。それから漆黒の羽根を羽ばたかせて海に向かって恐ろしい速度で飛んでいた。

開け放たれた窓を閉めようとはせず、少年はその窓から見える景色を碧眼に写す。その瞳は何かを睨んでいるように鋭く側められ、空の向こうにある何かを見つめていた。

「気分でも悪いのですか？」

ふと気がつけば普段は研究室に居て、滅多に見かけることのないリシーナがいつの間にか入り口に立っていた。彼女が入ってきたことによって窓には霜が張り付き、息を吐けば白い、まるで極寒の地に居るかのように寒くなる。彼女が立っている場所には氷の花が綺麗に咲いていた。

肌は雪のように白く、下手すれば血が通っていないんじゃないかと思えるほど真っ白である。唇も血色の悪い紫色で、肩につくかつかないか微妙な長さの髪は色素が薄い水色で、前髪は後ろ髪同様パツツンと一直線に切られている。服は裸の上に白衣一枚、という扇情的な格好をしているものの、白衣は彼女の冷氣に当てられぱりに凍っていて、一種の防具のようなものになっていた。

「リシーナ、お疲れ様。研究はどう？」

窓の外から視線を外し、にっこりと笑みを浮かべる。先ほどまでの彼の表情がまるで嘘のような表情だった。

「まあまあといったところですよ。あともう少しで完成しそうですねすが。」

冷たい響きを持つ彼女の声音は抑揚のない平坦な台詞を並べる。これが彼女の普通なので少年は特別気にすることなく話す。

「そう。じゃあ頑張って完成させてね。で？此処に来た用件は？」

「研究に必要なものがなくなったので取りに行く許可を取りたくて。」

「そっか。じゃあいいよ。大陸渡るんでしょ？」

「はい。では行ってきます。研究室には助手がいますから」

彼女は軽くお辞儀をすると、踵を返して少年の前から最初からそこに居なかったかのように一瞬で姿を消す。

「・・・・・・」

少年は再び外に視線を向ける。

その青い瞳は此処にはない何かを焼ききるような勢いで虚空をただ見つめていた。

r
E
N
D

A
n
s
w
e

金色の奏でた旋律による姫の為の間奏曲（インテルメッツォ）へ？〈（後書き）

次回から第3章が始まります。

いよいよアシユテカたちもとうとう動き始めます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5134q/>

自分と竜と仮想世界

2011年5月17日06時24分発行